西野田遺跡発掘調査報告
（第１・２・３次調査）

2009（平成21）年３月

三重県埋蔵文化財センター

Ｂ区調査区周辺（北西から）

ＳＢ106･107（東から）

ＳＦ61（西から）

ＳＫ45土層断面（東から）

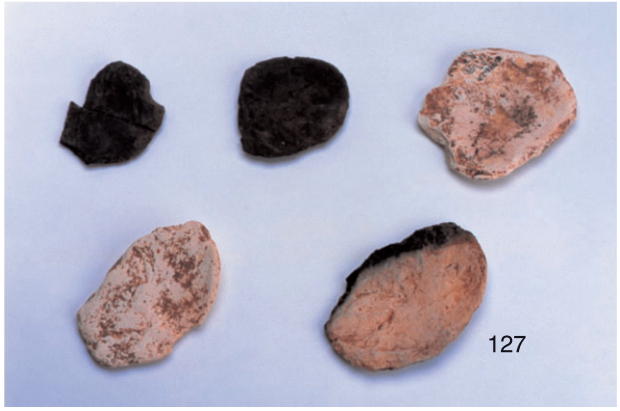
Ｉ・Ｊ・Ｋ区調査区全景（北西から）

ＳＸ136遺物出土状況（東から）

ＳＢ127（北東から）

ＳＢ185（南から）

焼成破裂土器片（外面）



焼成破裂土器片（内面）

奥壁の拡大

焼土塊（泥の付着面）

ＳＦ61出土遺物１

焼土塊（植物痕付着面）

110

113

111

122

112(a)

112(b)

131(外)

131(内)

ＳＦ61出土遺物２

120(a)

120(b)

128

134(内)

134(外)

134・136(底)

135(外)

135(内)

ＳＦ61出土遺物３

序

本書で報告する西野田遺跡は、松阪市嬉野に位置し、中村川流域の独立丘陵上に立地しています。丘陵上や下に広がる平野は人々の生活の場として長らく利用され、縄文時代以降の遺跡が多数存在しています。これらの遺跡は、我々の祖先が辿った長い歴史のほんの１コマを表しているに過ぎないかもしれません。しかし、この１コマの積み重ねが歴史であり、どれ１つ欠くことのできない、かけがえの無い歴史遺産と言えます。

今回報告するのは、松阪市に所在する西野田遺跡の発掘調査の記録です。本書が、郷土に残された貴重な歴史遺産を未来に伝える一助となれば幸いと存じます。なお、末筆ながら、現地調査や報告書作成に際し、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた多くの関係者の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

2009（平成21）年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は三重県松阪市嬉野下之庄町ほかに所在する西野田遺跡（第１～３次調査）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は三重県科学技術振興センター畜産研究部施設整備事業に伴って行われたものであり、調査にかかる費用は三重県科学技術振興センターが負担した。なお、三重県科学技術振興センター畜産研究部は平成20年度の組織改編に伴って三重県農水商工部畜産研究所となっているが、本報告中では基本的に調査時の旧称を用いている。

3　現地での調査は三重県埋蔵文化財センターが主体となって行い、平成17年度に第１次調査、平成18年度に第２次調査、平成19年度に第３次調査を行った。発掘調査を行った面積は、第１次調査2,693㎡、第２次調査1,756㎡、第３次調査4,150㎡、合計8,599㎡である。

4　発掘調査は三重県教育委員会を調査主体とし、下記の体制で実施した。

（第１次調査）

調査担当　三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰグループ

主査：辻本泰宏、主事：柴山圭子

調査作業受託者　株式会社昴工房

（第２次調査）

調査担当　三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課

技師：石井智大、臨時技術補助員：川崎志乃

調査作業受託者　安西工業株式会社

（第３次調査）

調査担当　三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課

主事：柴山圭子・前野謙一、臨時技術補助員：酒井巳紀子

調査作業受託者　安西工業株式会社

5　本書の執筆分担は目次に示している。全体の編集は小濵学が行った。

6　現地における発掘調査や整理作業、そして本報告書の作成にあたっては、地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、科学技術振興センター畜産研究部（現・農水商工部畜産研究所）にご協力をいただいた。記して感謝いたしたい。

7　本書で報告した西野田遺跡第１次～第３次発掘調査に関する調査記録および出土遺物などは、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

凡　　例

1　本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「大仰」、松阪市発行の1:2,500都市計画図などの地図類を用いている。

2　本書で示す方位はすべて世界測地系にもとづく座標北を用いている。

3　本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）1998『新版標準土色帖』（21版）日本色研事業株式会社に拠る。

4　本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。
ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＸ：墓　ＳＦ：土師器焼成坑
ＳＡ：柱列　ＳＺ：落ち込み・性格不明遺構　pit：柱穴・ピット

5　本書で用いる各種用語については、執筆者間である程度の統一を図っている。ただし、統一を図りきれなかった一部の用語については各執筆者の裁量によるものとした。

6　遺構図中のアミで示した部分は被熱している部分である。また、遺構断面図中の斜線部分は地山を示している。

7　遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としているが、石製品・金属製品など一部の小型遺物については、1/2や1/3としている。これらの縮尺は図中スケールにて明示している。

8　遺物観察表の凡例については、観察表の冒頭に記載している。

9　写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺物写真の縮尺は不同である。

本文目次

第１章　前　言……（柴山圭子）……　1

第２章　位置と歴史的環境……（前野謙一）……　5

第３章　調査方法と基本層序・土器の分類……（石井智大）……　9

第４章　第１次調査……（柴山圭子）……　19

第５章　第２次調査……（石井智大）……　36

第６章　第３次調査……（柴山圭子・前野謙一・小濵　学）……　75

第７章　西野田遺跡における自然科学分析……132

第８章　結　語……（石井智大・川崎志乃）……145

図版目次

第１図　遺跡位置図…… 8
第２図　調査区位置図…… 10
第３図　グリッド割図…… 12
第４図　基本層序土層断面模式図…… 13
第５図　旧地形復元図…… 14
第６図　杯・椀・皿類分類図…… 16
第７図　Ａ区遺構平面図…… 20
第８図　Ｂ区遺構平面紙割図…… 21
第９図　Ｂ区遺構平面図１…… 22
第10図　Ｂ区遺構平面図２…… 23
第11図　ＳＨ34平面図・断面図 …… 24
第12図　ＳＨ35平面図・断面図 …… 25
第13図　ＳＢ36・37平面図・断面図…… 26
第14図　ＳＢ30平面図・断面図 …… 27
第15図　ア区遺構平面紙割図及び遺構平面図１…… 28
第16図　ア区遺構平面図２…… 29
第17図　ア区遺構平面図３…… 30
第18図　Ｂ区出土遺物実測図１…… 31
第19図　Ｂ区出土遺物実測図２…… 32
第20図　ア区出土遺物実測図…… 34
第21図　Ｃ区遺構平面図…… 37・38
第22図　ＳＨ48・62平面図・断面図…… 41
第23図　ＳＢ63・65平面図・断面図…… 42
第24図　ＳＢ64平面図・断面図 …… 43
第25図　ＳＫ45・46・50・77・79平面図・断面図 …… 45
第26図　ＳＫ38・44・51～57平面図・断面図 …… 47
第27図　ＳＫ58～60，ＳＤ47・78，ＳＺ49平面図・断面図…… 49
第28図　ＳＦ61平面図・断面図 …… 50
第29図　ＳＦ61遺物出土状況図…… 51
第30図　ＳＦ61破片分布図…… 51
第31図　ＳＨ48・62，ＳＢ63出土遺物実測図…… 52
第32図　ＳＫ45・46・77・79出土遺物実測図 …… 53
第33図　ＳＫ44・50・54・55・58・59出土遺物実測図 …… 54
第34図　ＳＦ61出土遺物実測図…… 55
第35図　Ｃ区ピット・包含層等出土遺物実測図 …… 56
第36図　コ区遺構平面図…… 59・60
第37図　イ～エ・キ・ク区遺構平面図…… 61
第38図　ＳＨ74，ＳＢ40・69・75・76，ＳＡ39平面図・断面図…… 62
第39図　ＳＫ41・42・67・68・71～73・80平面図・断面図…… 63
第40図　ＳＫ70・81～84平面図・断面図…… 64
第41図　ＳＤ66，ＳＺ43平面図・断面図…… 65
第42図　ＳＨ74，ＳＢ40・75・76，ＳＡ39出土遺物実測図…… 66
第43図　ＳＫ42・67・68・70～73・80出土遺物実測図…… 68
第44図　ＳＤ66出土遺物実測図１…… 69
第45図　ＳＤ66出土遺物実測図２…… 70
第46図　コ区ピット出土遺物実測図…… 71
第47図　ウ・エ・コ区包含層等出土遺物実測図…… 72
第48図　Ｅ区遺構平面図…… 76
第49図　ＳＢ187平面図・断面図…… 77
第50図　Ｇ・Ｈ区遺構平面図１ …… 78
第51図　Ｇ・Ｈ区遺構平面図２ …… 79
第52図　ＳＨ92平面図・断面図 …… 80
第53図　ＳＢ95平面図・断面図 …… 81
第54図　ＳＢ97平面図・断面図 …… 82
第55図　Ｇ・Ｈ区出土遺物実測図 …… 84
第56図　Ｉ・Ｊ・Ｋ区遺構平面図…… 85・86
第57図　ＳＨ120平面図・断面図…… 88
第58図　ＳＨ139平面図・断面図…… 89
第59図　ＳＢ157平面図・断面図…… 90
第60図　ＳＢ156平面図 …… 91
第61図　ＳＢ156断面図 …… 92
第62図　ＳＫ142平面図・断面図…… 93
第63図　ＳＸ136平面図・断面図…… 94
第64図　ＳＨ166・175～177平面図・断面図 …… 95
第65図　ＳＢ179平面図・断面図…… 96
第66図　ＳＢ185・186平面図・断面図…… 97
第67図　ＳＫ167・168・174平面図・断面図…… 98
第68図　ＳＫ178・180平面図・断面図…… 99
第69図　ＳＫ142出土遺物実測図 …… 101
第70図　ＳＫ121・142・146・150，ＳＨ120・139出土遺物実測図 …… 102
第71図　ＳＫ143・154，ＳＨ159，ＳＢ156・157，ＳＸ136，ピット，遺構外出土遺物実測図…… 104
第72図　ＳＢ179・185・186，ＳＨ166・177出土遺物実測図 …… 105
第73図　ＳＫ167出土遺物実測図１ …… 106
第74図　ＳＫ167出土遺物実測図２ …… 107
第75図　ＳＫ170・171・174・178・180，ピット出土遺物実測図 …… 108
第76図　Ｋ区包含層等出土遺物実測図…… 109
第77図　セ区遺構平面図…… 111
第78図　ＳＢ169平面図・断面図…… 113
第79図　ＳＢ173平面図・断面図…… 114

第80図　ＳＫ163～165，ＳＢ169，ピット，
セ区包含層出土遺物実測図…… 115
第81図　Ｆ区遺構平面図…… 116
第82図　シ区遺構平面図…… 117
第83図　ＳＨ85，ＳＫ101平面図・断面図 …… 118
第84図　ＳＢ91，ＳＡ90，ＳＫ86，ＳＺ87平面図・断面図…… 119
第85図　ＳＨ85，ＳＫ101，ピット出土遺物実測図 …… 120
第86図　ＳＺ87，ピット出土遺物実測図 …… 121
第87図　Ｌ区遺構平面図１…… 122
第88図　Ｌ区遺構平面図２…… 123
第89図　ＳＨ131～133，ＳＫ161平面図・断面図 …… 125
第90図　ＳＢ119・126平面図・断面図…… 126
第91図　ＳＢ127・135平面図・断面図…… 127
第92図　ＳＫ114・118・129・130・134平面図・断面図…… 128
第93図　ＳＢ126，ＳＨ131，ＳＫ114・115・125・128・130・134，
ＳＤ116，ピット，包含層等出土遺物実測図 …… 130
第94図　西野田遺跡における植物珪酸体分析結果…… 135
第95図　鉄滓No.2切断面のXRF分析チャート …… 140
第96図　Fe-0系平衡状態図…… 143
第97図　鍛造剥片3層分離型模式図 …… 143
第98図　主要遺構配置図…… 147
第99図　掘立柱建物規模…… 148
第100図　土師器焼成坑ＳＦ61炭化材出土状況図 …… 153
第101図　土師器焼成坑ＳＦ61炭化材の計測値分布 …… 154
第102図　マキ属の計測値分布 …… 154
第103図　土師器焼成坑ＳＦ61出土土器の器種分類図 …… 155
第104図　土師器焼成坑ＳＦ61出土土器の法量分布 …… 155
第105図　土師器焼成坑ＳＦ61出土土器の器種組成 …… 155
第106図　焼成破裂土器片の破裂パターン …… 157
第107図　焼成破裂土器片の数量 …… 159
第108図　土坑ＳＫ45試料採取地点図 …… 160

写真図版目次

巻頭写真図版１　Ｂ区調査区周辺（北西から）
ＳＢ106・107（東から）
巻頭写真図版２　ＳＦ61（西から）　ＳＫ45土層断面（東から）
巻頭写真図版３　Ｉ・Ｊ・Ｋ区調査区全景（北西から）
ＳＸ136遺物出土状況（東から）
巻頭写真図版４　ＳＢ127（北東から）　ＳＢ185（南から）
巻頭写真図版５　ＳＦ61出土遺物1
巻頭写真図版６　ＳＦ61出土遺物2
巻頭写真図版７　ＳＦ61出土遺物3
写真図版１　Ａ区調査前（南東から）
Ａ区全景（西から）…… 196
写真図版２　Ｂ区調査前（東から）
Ｂ区全景（東から）…… 197
写真図版３　Ｂ区西半全景（北から）
ＳＨ34（西から）…… 198
写真図版４　ＳＢ36（東から）　ＳＢ37（東から）…… 199
写真図版５　ＳＺ31（南西から）　ア区調査前（北西から）… 200
写真図版６　ア区北半全景（北から）　出土遺物１…… 201
写真図版７　出土遺物２…… 202
写真図版８　Ｃ区北半全景（西から）
Ｃ区南半全景（西から）…… 203
写真図版９　ＳＨ48（南から）　ＳＨ62（南から）…… 204
写真図版10　ＳＢ63（南から）　ＳＢ64（南から）…… 205
写真図版11　ＳＢ65（東から）　ＳＫ45（東から）…… 206
写真図版12　ＳＫ46（南から）　ＳＫ53土層断面（東から）
ＳＫ55土層断面（北から）　ＳＫ56土層断面（南から）
C-y14pit2遺物出土状況（西から）…… 207
写真図版13　ＳＦ61遺物出土状況１，２（西から）
ＳＦ61北隅部炭化材検出状況１，２（南から）
…… 208
写真図版14　コ区西半全景（東から）　ＳＢ75（北から）
ＳＢ76（東から）　ＳＨ74（北から）
ＳＢ40・69（東から）　ＳＤ66（北から）…… 209
写真図版15　ＳＫ71（北から）ＳＫ73遺物出土状況（南から）
現地説明会風景　イ区全景（東から）
ウ区全景（西から）…… 210
写真図版16　出土遺物１…… 211
写真図版17　出土遺物２…… 212
写真図版18　出土遺物３…… 213
写真図版19　出土遺物４…… 214
写真図版20　出土遺物５…… 215
写真図版21　出土遺物６…… 216
写真図版22　出土遺物７…… 217
写真図版23　第３次調査調査前（東から）
第３次調査調査前（西から）…… 218
写真図版24　Ｅ区全景（東から）
Ｇ区全景（西から）…… 219
写真図版25　Ｈ区全景（東から）
ＳＨ92（北西から）…… 220
写真図版26　ＳＢ95（東から）　ＳＢ97（西から）…… 221

写真図版27　Ｉ・Ｊ・Ｋ区遠景(北西から)
Ｉ区全景(北から)　ＳＨ139(南から)　…… 222
写真図版28　ＳＨ120(西から)　ＳＢ156(北東から)…… 223
写真図版29　ＳＢ157(南から)　Ｋ区全景(北から)　…… 224
写真図版30　ＳＨ166(南から)　ＳＢ179(北から)…… 225
写真図版31　ＳＢ185(南から)
セ区全景，ＳＢ169(西から)…… 226
写真図版32　Ｆ区全景(西から)
シ区全景(北から)…… 227
写真図版33　ＳＨ85貼床検出状況(西から)
ＳＨ85竈(西から)…… 228
写真図版34　ＳＢ91(西から)　ＳＡ90(東から)…… 229
写真図版35　Ｌ区全景(西から)　ＳＨ133(東から)　…… 230
写真図版36　ＳＨ131(東から)　ＳＢ119(東から)…… 231
写真図版37　ＳＢ126(西から)　ＳＢ135(東から)…… 232
写真図版38　ＳＢ127(北西から)　ＳＢ127(北東から)…… 233
写真図版39　出土遺物１…… 234
写真図版40　出土遺物２…… 235
写真図版41　出土遺物３…… 236
写真図版42　出土遺物４…… 237
写真図版43　出土遺物５…… 238
写真図版44　出土遺物６…… 239
写真図版45　出土遺物７…… 240
写真図版46　出土遺物８…… 241
写真図版47　西野田遺跡の炭化材Ⅰ…… 242
写真図版48　西野田遺跡の炭化材Ⅱ…… 243
写真図版49　西野田遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)
…… 244
写真図版50　西野田遺跡の人骨…… 245
写真図版51　鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果 …… 246

表　目　次

第１表　西野田遺跡における樹種同定結果…… 133
第２表　西野田遺跡における植物珪酸体分析結果…… 136
第３表　鉄滓切断面XRF測定条件 …… 140
第４表　鉄滓切断面のXRF測定結果 …… 140
第５表　供試材の履歴と調査項目…… 141
第６表　供試材の化学組成…… 141
第７表　出土遺物の調査結果のまとめ…… 141
第８表　定量分析値…… 143
第９表　掘立柱建物一覧表…… 150
第10表　土師器焼成坑ＳＦ61関連自然科学分析一覧表…… 152
第11表　土師器焼成坑ＳＦ61出土炭化材一覧表…… 153
第12表　土師器焼成にかかる植物質資源と復原手段…… 154
第13表　ＳＦ61出土土器観察表…… 158
第14表　第１次調査遺構一覧表１…… 165
第15表　第１次調査遺構一覧表２…… 166
第16表　第２次調査遺構一覧表１…… 167
第17表　第２次調査遺構一覧表２…… 168
第18表　第３次調査遺構一覧表１…… 169
第19表　第３次調査遺構一覧表２…… 170
第20表　第３次調査遺構一覧表３…… 171
第21表　第３次調査遺構一覧表４…… 172
第22表　第１次調査遺物観察表１…… 173
第23表　第１次調査遺物観察表２…… 174
第24表　第１次調査遺物観察表３…… 175
第25表　第２次調査遺物観察表１…… 176
第26表　第２次調査遺物観察表２…… 177
第27表　第２次調査遺物観察表３…… 178
第28表　第２次調査遺物観察表４…… 179
第29表　第２次調査遺物観察表５…… 180
第30表　第２次調査遺物観察表６…… 181
第31表　第２次調査遺物観察表７…… 182
第32表　第３次調査遺物観察表１…… 183
第33表　第３次調査遺物観察表２…… 184
第34表　第３次調査遺物観察表３…… 185
第35表　第３次調査遺物観察表４…… 186
第36表　第３次調査遺物観察表５…… 187
第37表　第３次調査遺物観察表６…… 188
第38表　第３次調査遺物観察表７…… 189
第39表　第３次調査遺物観察表８…… 190
第40表　第３次調査遺物観察表９…… 191
第41表　第３次調査遺物観察表10…… 192
第42表　第３次調査遺物観察表11…… 193
第43表　第３次調査遺物観察表12…… 194

第１章　前　　言

第１節　調査の経緯

①調査の契機

三重県松阪市嬉野町に所在する三重県科学技術振興センター畜産研究部は、昭和18年に津市から現在の場所に移転したものである。移転当時は「三重県種蓄場」という名称であったが、それから幾度かの改称を経て、また内部の組織改変もあわせて行いながら現在に至っている。敷地面積は約33.4haにも及ぶ。この畜産研究部の畜舎が旧式となり、老朽化により業務効率が悪化し、研究に支障をきたすことから、現地での縮小整備を行い、研究活動の効率化・省力化を図ることを目的に、平成16年度に施設整備事業が計画された。

当地およびその周辺は､周知の下之庄東方遺跡（遺跡番号ｂ13）・西野田遺跡（遺跡番号ｂ249）・嬉野遺跡（遺跡番号ｂ11）にあたっていることから、工事に先立って、事業地内に存在すると思われる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、まず事業地にあたる約413,300㎡について範囲確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確定することとなった。これを受けて、平成16・17年度の２ヵ年にわたり、ほぼ全域で範囲確認調査を行ない、約118,350㎡の要本調査範囲を確定した。このうち、施設の基礎や水道管などの工事のため、破壊を免れない箇所について、平成17～19年度に事業計画にあわせて順次、本発掘調査を行なうこととなった。

なお、範囲確認調査以前には下之庄東方遺跡および西野田遺跡は、ひとまとまりの大きな範囲として認識されていたが、調査の結果、畜産研究部の施設内に小さな谷筋が入っており、そこで２遺跡が分かれることが判明した。今回報告する調査区のうち、Ａ地区が下之庄東方遺跡範囲に該当するが、ここでは西野田遺跡Ａ地区として報告している。

また、同事業で約600㎡の本発掘調査が工事の都合で残っているが、これについては平成21年度に「下之庄東方遺跡」として調査を行なう予定である。

②法的措置

当遺跡発掘調査にかかる文化財保護法（以下、「法」）関係の諸通知は、以下により行っている。

第１次調査

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長あて）
　平成17年６月20日付け、科総第186号（県知事通知）
・法第99条第１項（県教育長あて）
　平成17年６月21日付け、教埋第109号
・遺失物法による文化財発見・届出通知（松阪警察署長あて）
　平成17年10月６日付け、教委第12-４-22号（県教育長通知）

第２次調査

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長あて）
　平成18年４月14日付け、科総第14号（県知事通知）
・法第99条第１項（県教育長あて）
　平成18年６月６日付け、教埋第109号
・遺失物法による文化財発見・届出通知（松阪警察署長あて）
　平成19年１月９日付け、教委第12-４-19号（県教育長通知）

第３次調査

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長あて）
　平成19年４月17日付け、科総第10号（県知事通知）
・法第99条第１項（県教育長あて）
　平成19年５月28日付け、教埋第77号
・遺失物法による文化財発見・届出通知（松阪警察署長あて）
　平成19年10月１日付け、教委第12-４-５号（県教

育長通知）

第２節　調査の経過

①調査期間と体制

３ヵ年にわたる発掘調査は、以下のように行なっている。

第１次調査

調査期間：平成17年６月20日～同年９月５日

調査面積：2,693㎡

調査区：Ａ・Ｂ・ア地区

調査記録受託業者：昴工房株式会社

第２次調査

調査期間：平成18年６月５日～同年11月２日

調査面積：1,756㎡

調査区：Ｃ・Ｄ・イ～サ地区

調査記録受託業者：安西工業株式会社

第３次調査

調査期間：平成19年５月８日～同年９月26日

調査面積：4,150㎡

調査区：Ｅ～Ｌ・シ～セ地区

調査記録受託業者：安西工業株式会社

いずれの調査においても、現地に入る前に事業部局である三重県科学技術振興センター畜産研究部および調査記録受託業者、三重県埋蔵文化財センターの３者で現地協議を行ない、調査範囲の確認をした後、調査前風景の写真撮影や調査区の設定などの作業を行なった。

建物部分や水道管敷設部の調査のため、調査区は数ヶ所に及ぶ。工事の進捗上、引渡しを急ぐ箇所から順次調査を実施した。

表土の掘削は重機により行った。包含層混入遺物が少なかったため、ほぼ地山面まで掘り下げている。その後の遺構検出・遺構掘削は人力で行った。詳細な調査方法は第３章第２節で記述しているので、参照されたい。

掘削終了後、平面図や土層断面図、必要に応じて個別遺構図などを作成し、各調査区の完掘状況写真を撮影した。

現地調査の概略は、以下の調査日誌（抄）を参照されたい。

②調査日誌（抄）

第１次調査（平成17年）

第１次調査は、２班体制で行なったため、調査日誌は各々１冊ずつ、計２冊ある。ここでは、それらをまとめて掲載する。

６月15日　全調査区（Ａ・Ｂ・ア区）の調査前写真撮影を行う。

６月27日　Ａ区表土掘削開始。

６月28日　ア区表土掘削開始。

７月５日　Ａ区遺構検出開始。溝やピットなどを確認。遺物少ない。

７月６日　ア区遺構検出開始。撹乱が非常に多い。そのなかで、溝や土坑など確認。

７月８日　Ａ区全景写真撮影。土層断面図実測。

７月14日　Ａ区調査終了。Ｂ区表土掘削開始。

７月20日　ア区ＳＨ15掘削後、写真撮影。

７月22日　ア区南半部の全景写真撮影。

７月27日　遺構検出・掘削。道路状遺構と思われるＳＺ101（仮番号）などを確認する。

７月29日　ア区南半部埋め戻し。

８月１日　ア区北半部表土掘削開始。

８月４日　ラジコンヘリによるＡ区の写真撮影。

８月５日　Ａ区埋め戻し。

８月８日　Ａ区畜産研究部に引渡し。Ｂ区西側部分の全景写真撮影。

８月９日　Ｂ区ラジコンヘリによる写真撮影。

８月23日　Ｂ区西側箇所、ラジコンヘリによる写真撮影。ア区北半部の全景写真撮影。

８月29日　Ｂ区調査終了。なお、Ｂ区については埋め戻しは行わずに引き渡す。

８月30日　ア区埋め戻し。

８月31日　Ｂ区畜産研究部に引渡し完了。

９月５日　ア区畜産研究部に引渡し。

第２次調査（平成18年）

６月27日　Ｄ区表土掘削開始。既設管など撹乱が多い。

６月30日　Ｄ区表土掘削終了。遺構・遺物とも確認

できなかった。

7月13日　D区平面図・土層断面図など実測終了。

7月19日　C区表土掘削開始。

7月31日　C区表土掘削と併行して、包含層掘削・遺構検出開始。土器焼成坑を確認。検出状況写真撮影後、北側拡張する。

8月1日　D区埋め戻し終了。C区表土掘削中、竪穴住居も確認。

8月16日　C区遺構検出。SH48、SB49検出。重複関係から、SH48のほうが新しい。

8月24日　C区SF61の遺物出土状況を4×5判、35㎜で撮影（タワー1段）。

9月8日　C区全景撮影。

9月9日　現地説明会を開催。97名の参加を得た。

9月22日　C区補足調査、平面図作成と併行して、コ区の表土掘削開始。

9月26日　コ区遺構検出。径80㎝前後のピットを数基確認。掘立柱建物になる可能性大きい。

10月3日　コ区掘削終了部分の写真撮影（タワー3段）。

10月13日　コ区遺構検出。いくつか大きな遺構が重複している箇所あり。突帯文土器出土する。

10月19日　コ区全景写真撮影。

10月25日　C・コ区埋め戻し。

第3次調査（平成19年）

第3次調査は、2班体制で行なったため、調査日誌が各々に1冊ずつ、計2冊ある。ここではそれらをまとめて掲載する。

5月15日　調査前写真撮影（タワー3段）。

5月28日　E区表土掘削開始。撹乱多い。ピットなどを確認。

5月29日　F・ス区表土掘削開始。掘立柱建物や竪穴住居などを確認。

5月31日　シ区表土掘削。

6月6日　ス区東から全景写真撮影（タワー1段）。

6月8日　E区全景写真撮影（タワー1・3段）。

6月11日　G区表土掘削開始。

6月12日　F区SH85の貼床検出状況など撮影。

6月13日　H区表土掘削開始。南東側は既設管など、撹乱多い。

6月20日　F・シ区全景写真撮影（タワー3段）。G区南東で検出したSB97はH区に続く模様。

6月27日　E・ス区埋め戻し。

7月5日　L区表土掘削開始。H区のトレンチ部を35㎜で全景写真撮影。

7月9日　L区表土掘削と併行して、北側部分から遺構検出・掘削を行う。

7月17日　台風4号の影響で現場水没。

7月19日　L区北西箇所の写真撮影（タワー2・3段）。G・H区SB97の全体像を確認するため、G・H区の境界部を重機で掘削。

7月20日　L区南西箇所写真撮影（タワー3段）。

7月23日　I・J区表土掘削開始。竪穴住居など確認。畜産研究部にE～H、シ・ス区引渡しを行う。

7月25日　I・J区に続いて、K区の表土掘削も開始する。

7月26日　L区北東箇所写真撮影（タワー1・3段）。

7月27日　セ区の表土掘削。

7月30日　L区南東隅でSB126・127などを確認。SB127は布掘の掘立柱建物である可能性が高い。J区SK121からの出土遺物、相対的に多い。

8月1日　J区でSX136を検出・掘削。人骨1体分を確認。

8月3日　I区SK142を掘削。出土遺物多い。

8月9日　K区遺構検出開始。竪穴住居などを確認。

8月13日　セ区遺構検出。掘立柱建物や土坑など確認。

8月15日　セ区全景写真撮影（タワー1段）。

8月16日　猛暑日続く。気温40℃近い。J区SX136写真撮影。

8月17日　K区で確認したSB179の東端がI区のSK140・141・153であることを改めて確認した。

8月21日　I・J・K区、スカイマスターによる全景写真撮影を行う。個別遺構についてはタ

ワー使用。

８月31日　Ｉ・Ｊ・Ｋ、セ区調査終了。

９月10日　畜産研究部に現地引渡し。

第３節　整理作業の方法

①調査記録類

発掘調査にかかる記録類は、次数ごとに調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。また、第１次・第３次調査は２班体制で調査を行ったため、調査日誌は各２冊ある。遺構カードについては、基本的に調査区名で分冊しており、各次数で複数冊存在する。これらは所定の番号を付与し、当センターの専用収蔵庫に保管している。

また、第２・３次調査にかかる骨同定など外部に委託した自然科学分析結果についても、同様の記録類として保管している。

②遺物類

発掘調査で出土した遺物は、各調査担当者が報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測作業などを行った。未掲載遺物については袋詰めにし、整理箱に収納した後に専用収蔵庫へ収蔵した。

実測図が完成した遺物は、平成18～20年度に報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保管している。

報告書用に作成した版下類やトレース図については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物のなかで主なものについては、６×９判（ブローニー）および４×５判で写真撮影を行い、アルバムに整理し保管している。

（柴山圭子）

第２章　位置と歴史的環境

第１節　地理的環境

西野田遺跡は、三重県中部の松阪市（旧一志郡嬉野町）に所在し、雲出川支流である中村川右岸の丘陵上に立地する古代の遺跡である。現在は、三重県農水商工部畜産研究所の建物・および研究施設である。旧嬉野町は、平成17年１月１日に、松阪市・三雲町・飯高町・飯南町の１市４町と合併して、松阪市となった。三重県の中部の地勢は、西に布引山地・高見山地・紀伊山地が南北に連なり、東は伊勢平野と伊勢湾が広がる。西高東低の様相を呈しており、雲出川・櫛田川・宮川などの河川が東流し、伊勢湾に注ぐ。

西野田遺跡のある松阪市嬉野は、標高798ｍの高須峰を最高峰として、矢頭山・髭山・観音岳・後山・鉢ヶ峰など800ｍ以下の松阪山地に囲まれており、東部に向かって徐々に平地となる地形である。その中央を、西南から東北にかけて、高須峰に源を発する中村川が、大小合わせて13の支流と合流しながら縦断している。西野田遺跡の北西約500ｍを流れる下流にさしかかった中村川は、一時北へと進路を変えている。更には、一級河川である雲出川に合流し伊勢湾へと注ぐ。また、西野田遺跡の南東約1.5㎞の三渡川も、東に流れ伊勢湾へと注いでいる。西野田遺跡の北側と西側は、ゆるやかな段丘面を下り、中村川と雲出川を氾濫原とする平野が広がる。東側は西野田遺跡の隣接地比高数ｍ以下の段丘崖が見られるが、その後ゆるやかな段丘面を保ち、更に東へと向かうと雲出川を氾濫原とする平野が広がる。南側は段丘平坦面が500ｍ程続いた後、三渡川などによる緩やかな扇状地面となる。嬉野町の段丘は更新世後期（約14万年前～約１万年前）になると、ほぼ現在地形に近い状態となる。また平野は完新世（約１万年前～現在）になると、雲出川や中村川も現在の様相を示すようになり、堆積作用がさかんになった。このような地形に囲まれた西野田遺跡は、やや独立的な丘陵上の標高約23ｍに位置している。[(1)]

西野田遺跡の丘陵裾の東側には、古くから畿内と伊勢とを結ぶ重要な交通路の「初瀬街道」が通り、現在の近鉄大阪線に沿うような形で存在している。初瀬街道は、伊勢街道から分岐する松阪市六軒町から青山峠を越え、名張を経て初瀬（奈良県桜井市）へと到り、その全長は十四里十七町（約57㎞）である。また青山峠とは別の枝道の１つとして、伊賀市阿保から霧生を通り布引峠を通り津市白山町川口へと至る道も利用されていたようである。ともあれ飛鳥時代には、大和と伊勢神宮を結ぶ伊勢路の北路であり、奈良時代以降も、奈良と伊勢を結ぶ幹線道路であった。壬申の乱の際、大海人皇子が名張に至った道であり、斎王が伊勢へと赴いた道とも考えられている。平安時代以降は平安京から鈴鹿峠を越えて伊勢別街道を、中世においては北畠氏の城下町である津市美杉町多気の伊勢本街道が利用されるようになった。そのため初瀬街道は一時衰退した。しかし江戸中期から明治初期にかけて、比較的平坦な初瀬街道は、再び参宮街道として利用され、「伊勢音頭」に歌われているように最も賑わった街道である。[(2)]

第２節　歴史的環境

西野田遺跡周辺は遺跡が密集している。そこで縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥･奈良･平安時代、中世、近世と分類して簡単に述べておきたい。[(3)]

１　縄文時代

西野田遺跡（１）の西側にある下之庄東方遺跡（２）では、縄文時代早期から晩期に至る遺物が出土している。中村川右岸の天白遺跡（３）では、後期から晩期初頭にかけての川原石で構築された配石遺構群が見つかった。中村川左岸の蛇亀橋遺跡（４）では、４基の土器棺墓と晩期の竪穴住居２棟が検出された。

２　弥生時代

筋違遺跡（５）では、前期の畠と水田跡が確認され、

当時の中村川流域の生業の様相を示すものとして注目されている。下之庄東方遺跡では、中期から後期の竪穴住居と40基以上の方形周溝墓が確認されている。天白遺跡でも中期から後期の方形周溝墓が検出された。小谷赤坂遺跡（６）では後期の竪穴住居が、清水谷遺跡（７）では後期の竪穴住居が検出された。また、貝蔵遺跡（８）・片部遺跡（９）では、後期から古墳時代前期の流路や竪穴住居・掘立柱建物が確認されている。弥生時代の中村川流域では、前期から後期にかけて継続的に生活をしていた様子がうかがえる。

３　古墳時代

中村川流域は、前期の前方後方墳が集中する地域として注目されている。中村川左岸の筒野古墳（10）からは三角縁神獣鏡が２面出土している。中村川右岸の西山古墳（11）・庵ノ門古墳（12）・錆山古墳（13）・向山古墳(14)も有力者の墓と想定される。その後は、天花寺丘陵や中郷地域を中心に小規模な古墳が築造される。また、西野田遺跡南側には、谷古墳群（15）がある。古墳時代の住居としては、下之庄東方遺跡、更には伊勢湾よりの標高３～５ｍ前後の西肥留遺跡(16)・雲出島貫遺跡（17）・宮ノ腰遺跡（18）で確認されている。

４　飛鳥・奈良・平安時代

西野田遺跡にかかわりが深い古代の遺跡について、特徴的な内容を記していく。

中村川流域は飛鳥時代後期から奈良時代前期にかけて短期的にいくつかの寺院が造営されたと想定されている。西野田遺跡南側の嬉野廃寺（19）では、複弁七葉線鋸歯文をもつ瓦が出土したとされている。一志廃寺（20）では、旧嬉野町道建設に伴う発掘調査が行われ、奈良時代の竪穴住居が２棟検出された。また、軒丸瓦や平瓦が出土している。上野廃寺（21）では、平成元年に大谷川河川改修による発掘調査が行われおり、四脚門と考えられる基壇上の高まりや排水施設が検出された。また、複弁七葉線鋸歯文・単弁五葉の軒丸瓦、重弧文軒平瓦が出土している。また、奈良時代前期の掘立柱建物が１棟検出された[4]。天華寺廃寺（22）では、昭和54・55年に県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、金堂・塔跡が検出されており、伽藍配置が分かる寺院として注目されている。また、塑像・磚仏等の遺物や、単弁八葉・複弁八葉・複弁七葉線鋸歯文の軒丸瓦、偏行唐草文・重弧文の軒平瓦が出土している[5]。中谷廃寺（23）では、昭和62・63年の詳細分布調査により、基壇状の高まりを確認した。また、平瓦・重圏文軒丸瓦が出土している。八太廃寺（24）では、心礎石が確認されおり七堂伽藍が完備されていたとされている[6]。また、複弁八葉蓮華文軒丸瓦と単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。高野廃寺（25）では、単弁七葉・単弁八葉・複弁七葉・複弁八葉の軒丸瓦や重孤文・唐草文の軒平瓦が出土している。

辻垣内瓦窯跡群（26）では、飛鳥時代と考えられる２個体の鴟尾がほぼ完形で出土した[7]。天花寺北瀬古遺跡（27）では飛鳥時代の土師器焼成坑[8]、上尾戸土窯跡群（28）では奈良時代の須恵器窯跡を確認した[9]。その他には、小野瓦窯群（29）・天花寺瓦窯（30）がある。これらの遺跡は、中村川流域の古代寺院造営と深く関わりがあると考えられる。

一志廃寺付近には「郡一（こおりいち）」という小字がある。また、古墳時代前期の流路や古代の掘立柱建物を確認した堀田遺跡[10]（31）の地には、かつて「郡一（こおりいち）神社」が存在していた[11]。これらの遺跡の北側には、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物が３棟と平安時代後期の掘立柱建物を８棟検出した平生遺跡[12](32)や、500点以上の暗文土師器が出土し、奈良・平安時代の掘立柱建物が25棟検出された片野遺跡[13]（33）がある。また愛知県一宮市八王子遺跡で出土した暗文土師器の一部が一志郡産である可能性が指摘されている[14]。これらの遺跡の遺構の特徴として、検出された掘立柱建物の棟数が竪穴住居よりも多い。この地は、一志郡衙の可能性も含め、古代の中枢地であったと考えられている。

下之庄東方遺跡では、古代の掘立柱建物が23棟検出された。上野垣内遺跡（34）では、奈良時代後期から平安時代前期にかけての住居跡が37棟検出された[15]。焼野遺跡（35）では、飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居が９棟、奈良時代の掘立柱建物が４棟検出された。天保遺跡（36）では、飛鳥時代から平安時代にかけての竪穴住居が９棟、奈良時代から平安時代の掘立柱建物が４棟検出された。その他、堀之内遺跡（37）では奈良時代の竪穴住居が３棟、中尾遺

跡（38）では奈良時代の掘立柱建物が３棟[16]、田村西瀬古遺跡（39）では奈良時代の掘立柱建物が３棟検出された[17]。これらの遺跡は川沿いに多く中村川流域も貴重な水資源となっていたようである。

５　中世

鎌倉時代から室町時代においては、雲出島貫遺跡や宮ノ腰遺跡では、堀を持つ居館跡が確認されている。また、室町時代から戦国時代にかけての中村川流域は、約230年の間、南伊勢の大名である北畠氏との関係が密接であった地域である。中世城館としては、阿坂城（40）・森本城（41）・釜生田城（42）・滝之川城（43）・八田城（44）・天花寺城（45）などが造営されている。しかし、永禄12年（1569年）織田信長の次男信雄（後の北畠具豊）が北畠氏の養子となることで和睦したことにより、中村川流域も織田信長の勢力下におかれることとなった。また、1576年（天正４年）には、信長の命により、第８代伊勢国司北畠具教が三瀬谷で殺害される。この後、従来の北畠氏の勢力が衰退していくことになる[18]。

６　近世

近世においての中村川流域は、津・和歌山・久居藩の３つの藩が入り組んでいた場所であった。西野田遺跡の西側の中村川右岸には、新畑・野新田など中・近世の開発にかかわっている地名が残っている。東側の丘陵裾には須加神社があり、寛延年頃（1748～1751年）の『宗国史』に権現、『三国地誌』に権現祠とあり、須加権現と称されている。また『五鈴遺響』によると、須加神社は、享保年中（1716～1736年）、和歌山藩によって高一石の免除地を認められている[19]。

（前野謙一）

註

（１）嬉野町『嬉野史自然編』2004

（２）三重県教育委員会『初瀬街道･伊勢本街道･和歌山街道』1982

（３）歴史的環境については以下の文献を参考にした。

松阪市『嬉野史考古編』2006、嬉野町『嬉野町史』1986、嬉野町『嬉野町遺跡地図平成11年暫定版』1999、一志町・嬉野町遺跡調査会『一之郡の考古学』1989、一志町『一志町史上巻』1981

（４）嬉野町教育委員会『上野廃寺発掘調査報告』嬉野町埋蔵文化財調査報告８　1995

（５）一志町・嬉野町遺跡調査会『天華寺山』1991、三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』三重県埋蔵文化財調査報告259　2005

（６）一志町教育委員会『班光寺跡』一志町埋蔵文化財報告15・16　1991

（７）嬉野町教育委員会『辻垣内瓦窯跡群』嬉野町埋蔵文化財調査報告3　1988

（８）三重県埋蔵文化財センター『天花寺北瀬古遺跡（第１次）・薬師寺北裏遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告180-１　1999

（９）嬉野町教育委員会『上尾戸窯跡群・まんじゅう山古墳群』嬉野町埋蔵文化財調査報告16集　2002

(10) 三重県埋蔵文化財センター『堀田（第６次調査)』三重県埋蔵文化財調査報告261　2005

(11) 伊藤裕偉「ふたつのこおりいち」『斎宮歴史博物館研究紀要11』　斎宮歴史博物館　2002

(12) 嬉野町教育委員会『平生遺跡発掘調査報告』嬉野町埋蔵文化財調査報告１　1976

(13) 一志町教育委員会『片野遺跡発掘調査報告Ⅳ』一志町埋蔵文化財報告21・23　2002

(14) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター『八王子遺跡考察編』　2001

(15) 三重県埋蔵文化財センター『昭和54度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告43　1980

(16) 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告第３分冊１・４・６・７』三重県埋蔵文化財調査報告87-7･10･12･13　1991

(17) 三重県埋蔵文化財センター『田村西瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告179　1999

(18) 藤田達夫編『伊勢国司北畠氏の研究』吉川弘文館　2004

(19) 平松令三監修『日本歴史地名大系24三重県の地名』平凡社　1983

1．西野田遺跡	2．下之庄東方遺跡	3．天白遺跡	4．蛇亀橋遺跡	5．筋違遺跡	6．小谷赤坂遺跡
7．清水谷遺跡	8．貝蔵遺跡	9．片部遺跡	10．筒野古墳	11．西山古墳	12．庵ノ門古墳
13．錆山古墳	14．向山古墳	15．谷古墳群	16．西肥留遺跡	17．雲出島貫遺跡	18．宮ノ腰遺跡
19．嬉野廃寺	20．一志廃寺	21．上野廃寺	22．天華寺廃寺	23．中谷廃寺	24．八太廃寺
25．高野廃寺	26．辻垣内瓦窯跡群	27．天花寺北瀬古遺跡	28．上尾戸土窯跡群	29．小野瓦窯群	30．天花寺瓦窯
31．堀田遺跡	32．平生遺跡	33．片野遺跡	34．上野垣内遺跡	35．焼野遺跡	36．天保遺跡
37．堀之内遺跡	38．中尾遺跡	39．田村西瀬古遺跡	40．阿坂城	41．森本城	42．釜生田城
43．滝之川城	44．八田城	45．天花寺城			

■= 前方後方墳　　○= 古代寺院跡　　□= 中世城館跡

第１図　遺跡位置図(1:50,000)〔国土地理院『大仰』『松阪港』(1:25,000)より〕

第３章　調査方法と基本層序・土器の分類

第１節　調査区の位置と名称

①調査区の設定

調査区は、基本的に建物を建築する場所および、それらの建物に付属する配管を敷設する場所を対象として設けている。

畜産研究部施設整備事業では、平成18年度に畜産研究部敷地の北西部に当たる部分に大家畜舎を新設する工事が行われることとなり、第１次調査では主にその地区を中心に調査を行うこととなった。

第２次調査では、第１次調査より東側に位置する鶏舎建設が予定されている地区と、畜産研究部本館裏および南側通路沿いの配管敷設箇所について調査を行うこととなり、当該箇所に調査区を設けた。

なお、第２次調査と並行して小規模な配管や集水枡の設置に伴う調査を行っている。こうした調査においても遺構・遺物が検出されているため、これらの小規模な調査区についても第２次調査に含め、個別の調査区名称を与えている。

第３次調査は３次数にわたる調査の中でも最も広い面積を調査することとなった。調査区は、第２次調査で調査を行った鶏舎建設予定地の残りの部分や、その西側に位置する中小家畜作業棟および豚舎建設が予定されている地区の建物建設予定箇所を中心に設定した。また、これらの建物建設に伴う配管敷設箇所についても調査区を設定している。

②調査区の呼称

調査区の呼称は、第１次から第３次調査まで通して付している。第１次調査ではＡ・Ｂ区とア区、第２次調査ではＣ・Ｄ区とイ～サ区、第３次調査ではＥ～Ｌ区とシ～セ区を設けて調査を行った。

アルファベットの名称を付した調査区は、建物建設予定地などで調査区が一定程度の広さを持ち、グリッド設定が遺跡全体を覆うように設定した地区割に沿って行うことができた調査区である。このグリッド設定及び地区割りについては次節で詳しく述べる。

一方、片仮名の名称を付した調査区は、配管敷設部などのために調査区の幅が狭かったり、先に述べたように第２次調査時に行った集水枡設置部などの局所的な調査などであるために、グリッド設定が地区割に沿って行うことができなかった、もしくはグリッド設定を行わなかった調査区である。

以上に述べた調査区の位置および名称は、すべて第２・３図に示している。

第２節　調査の方法

①大地区・グリッドの設定

西野田遺跡の調査は、当初から数次にわたって行う計画であった。そのため、第１次調査時に、次年度以降の調査区との位置関係を分かりやすくするために西野田遺跡の大部分を対象として大地区を設定した（第３図）。

この大地区は一辺が100ｍで、軸の方位は国土座標の南北軸と一致している。大地区の呼称はアルファベット大文字で表している。第１次調査ではＡ～Ｃの大地区を設けたが、第２次調査ではＡ～Ｃの大地区の外側にも調査区が設定されることとなったため、新たにＤ～Ｒの大地区を追加で設定した。ただし、Ａ～Ｅの大地区を挟んで南北に新たな大地区を設ける必要があったため、南側にＦ～Ｊ、北側にＭ～Ｑの大地区を設けることとなった。Ｋ・Ｌについては、調査過程において一時大地区名称に混乱が生じ、それを解消するために欠番となっている。

大地区の内部をさらに４×４ｍの大きさに細分し、これをグリッドとした。各グリッドには西から東へ向かってａから順にアルファベットを、北から南へ向かって１から順に数字をふり、このアルファ

第２図　調査区位置図(1:3,500)

ベットと数字の組み合わせによって各グリッド名を表した。本報告で特定のグリッドを示す場合は、そのグリッドが存在する大地区名のアルファベットを頭に付している（例：A-a1）。

ただし、前節でも述べたように、片仮名の名称を付した調査区については、調査区の幅や面積の問題からこのグリッドの適用が難しかったため、グリッド設定を行っていないか、あるいは各調査区独自のグリッド設定を行っている。イ～ケ・サ区についてはグリッドを設定しなかった。調査区独自のグリッド設定を行った調査区はア・コ・シ～セ区である。

特にコ区については調査区の長さがかなり長く、独自に設定したグリッドに西から順にアルファベット小文字を付していったが、文字数が足りないために、西から100mごとに３区分しそれぞれに大地区と同じようにアルファベット大文字の地区名を付すこととなった。そのため、グリッドの表記方法はＡ～Ｌ区と類似した表記となっているが、これらの調査区のグリッド設定とは全く異なったグリッド設定である。

②掘削・記録作業

現地調査における掘削作業は、まず表土・造成土等を重機で除去することから始めた。調査区内にコンクリート建造物が残存している場合には、それらの除去作業も同時に進めていった。

表土・造成土等を除去した後、グリッドを設定した調査区については調査区内にグリッドを示すためのグリッド杭を設置し、その後に包含層を人力で除去し、遺構の検出作業を行った。遺構検出後には遺構同士の重複状況などを遺構カードに記録し、その後に各遺構を人力で順次掘削していった。

遺構掘削終了後には調査区全景写真の撮影を行った。広い調査区の全景写真撮影に際しては、タワーを用いた。全景写真撮影後、調査区全体の1/20平面図を作成していった。

なお、土層断面や個別遺構などに関する図面作成・写真撮影などの作業は調査の進行に合わせて随時行っている。

③遺構番号の付与

西野田遺跡の調査では、第１次から第３次までのすべての調査において検出された遺構に、遺構の種類にかかわらず通し番号で１から順に遺構番号を付与している。ただし、整理作業の段階で遺構の番号等に変動があることも予想されたため、各調査次数で用いた遺構番号の間に若干の余裕を持たせた。たとえば、第２次調査では調査時に43以降の番号を使用し、80までの番号を遺構に付与したが、第３次調査では82～84までの番号を用いず、85以降の番号を使用している。[1]

遺構を表記する時には、遺構番号の前に、例言で示したようにＳＫ、ＳＤなど遺構の種類ごとの略称を付している。

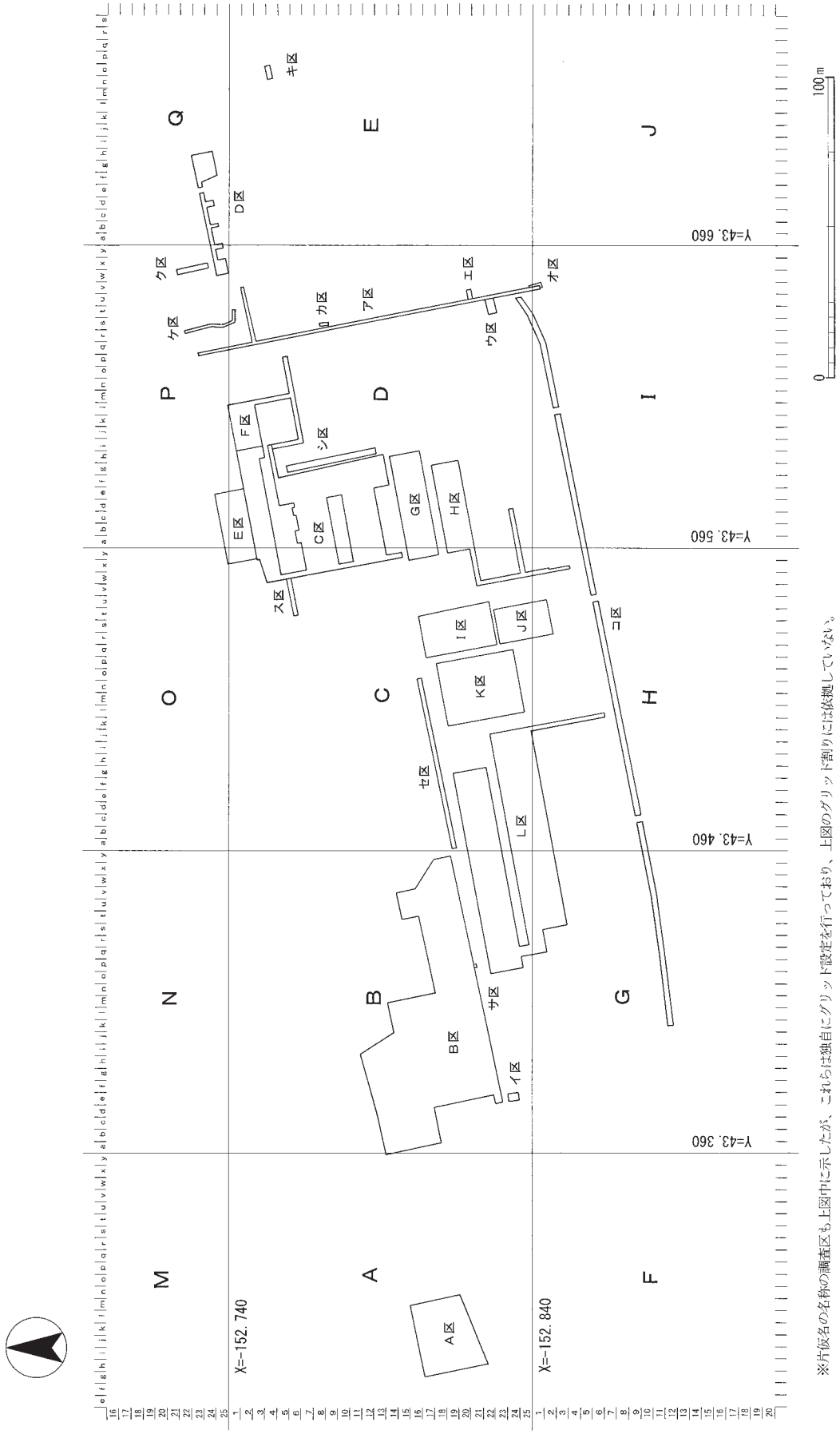
ピットについては、遺物が出土したものや掘立柱建物を構成する柱穴などについてのみ、個別に遺構番号を付与している。ピットの遺構番号はグリッドごとに１から順に付与しており、表記する時にはグリッド名の後にpitを頭に付けた番号を連ねている（例：A-a1pit １）。

第３節　基本層序

①基本層序

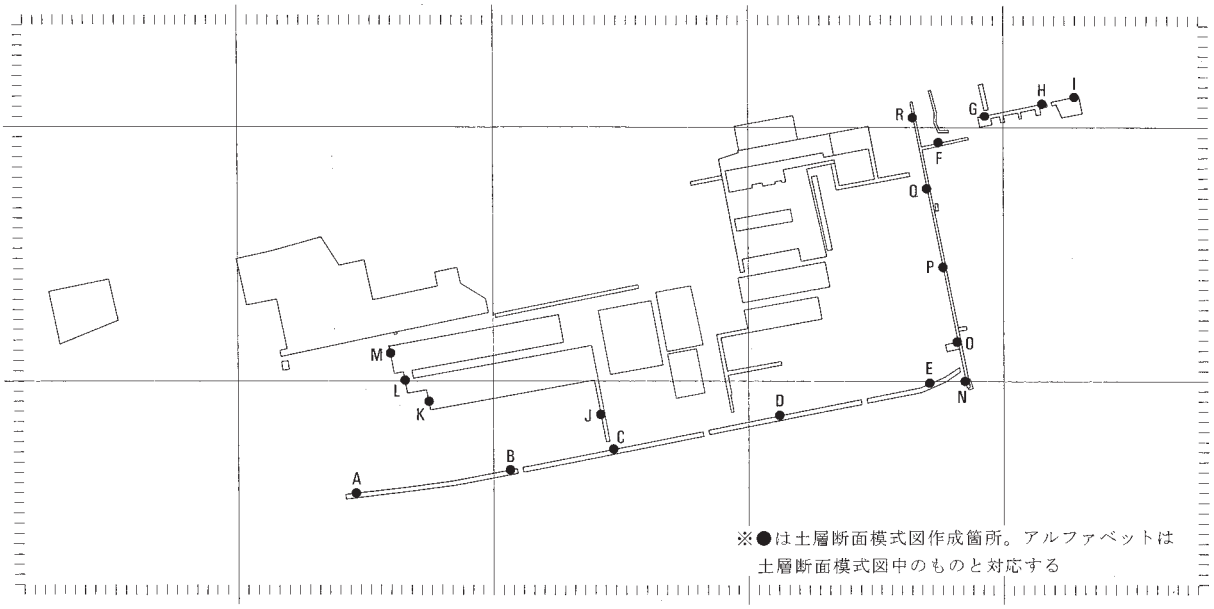
西野田遺跡は台地上に位置しており、そのため古代以降の堆積層は概して薄く、近世～近代の耕作や造成などにより削平・撹乱を被っている場所も多い。また、３次にわたる調査で調査区の配置も複雑なものとなっているため、各調査区の土層断面図すべてを図示することは難しい。そこで、西野田遺跡全体の土層堆積状況を簡潔に示すため、土層断面模式図を作成した（第４図）。以下、この土層断面模式図に基づいて西野田遺跡における基本層序について述べていきたい。

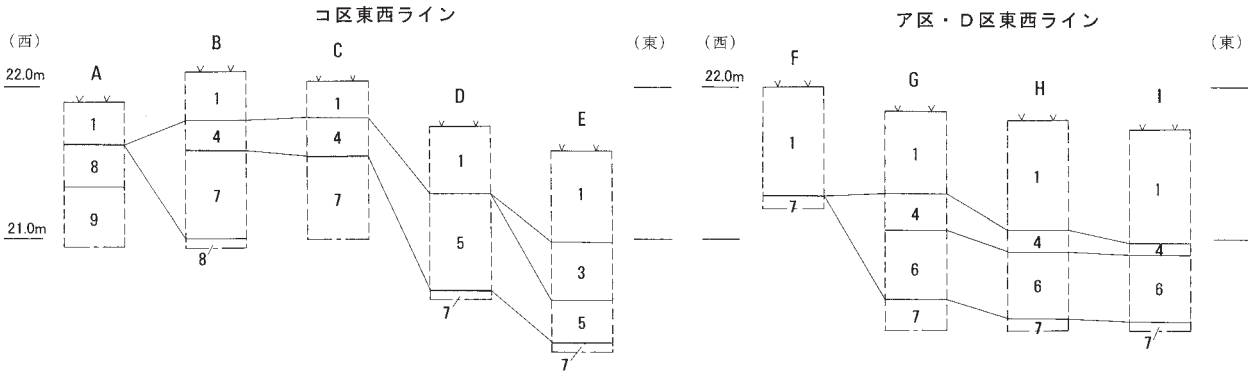
各地点において地山となっているのは基本的に黄褐色系の粘質土（７層）であり、その上に遺物包含層（４～６層）の堆積が確認できる。遺物包含層は黒褐色系の粘質土であり、ほとんどは小さな地山ブロックを含むことから耕作などによって撹拌を受けている土層であると考えられる。Ｄ区では、造成土



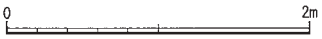
※片仮名の名称の調査区も上図中に示したが、これらは独自にグリッド設定を行っており、上図のグリッド割りには依拠していない。

第３図　グリッド割図(1:2,000)





※土層断面模式図中の太線は遺構検出面を示す



1　表土・造成土
2　10YR4/3暗褐色粘質土（耕作土？）
3　10YR［明度4/～5/、彩度/2～/6］灰黄褐・黄褐色粘質土、
　10YR［明度4/～6/、彩度/3］にぶい黄褐・にぶい黄橙色粘質土ブロック多く含む（造成土）
4　10YR［明度2/～3/、彩度/1～/3］黒・黒褐・暗褐色粘質土、
　細かい10YR5/4にぶい黄褐色粘質土ブロック含む（包含層・耕作土）
5　10YR［明度3/、彩度/1～/3］黒褐・暗褐色粘質土（包含層・無撹拌）
6　10YR［明度4/～5/、彩度/3］にぶい黄褐色粘質土、径１～２㎝の礫少量含む（包含層に相当？・無撹拌）
7　10YR［明度5/～6/、彩度/2～/6］灰黄褐・にぶい黄褐・黄褐・にぶい黄橙色粘質土（地山）
8　10YR［明度6/～7/、彩度/4］にぶい黄橙・にぶい黄褐色砂質土、径３～10㎝の礫多く含む（地山）
9　10YR7/3にぶい黄橙色粗砂、径３～５㎝の礫多く含む（地山）

第４図　基本層序土層断面模式図(1:50)

の下に耕作土と思われる黒褐色系の土層（４層）が認められ、さらにその下にはこの黒褐色系土層から黄褐色系を呈する地山へと漸移的に変化していくような土層（６層）が認められた。同じような状況はコ区東部でも認められる（D・E地点）。他の地点ではほぼ地山直上に遺物包含層が堆積していたが、地山の遺物包含層と接する部分は６層のように黒褐色系土から黄褐色系土へと漸移的に変化するような様相を見せており、本来はD区のように黒褐色系の表土から黄褐色系の地山へと徐々に移行していくような堆積状況であったものが、地山直上まで耕作等による撹拌を受けて遺物包含層が形成されたものと考えられる。

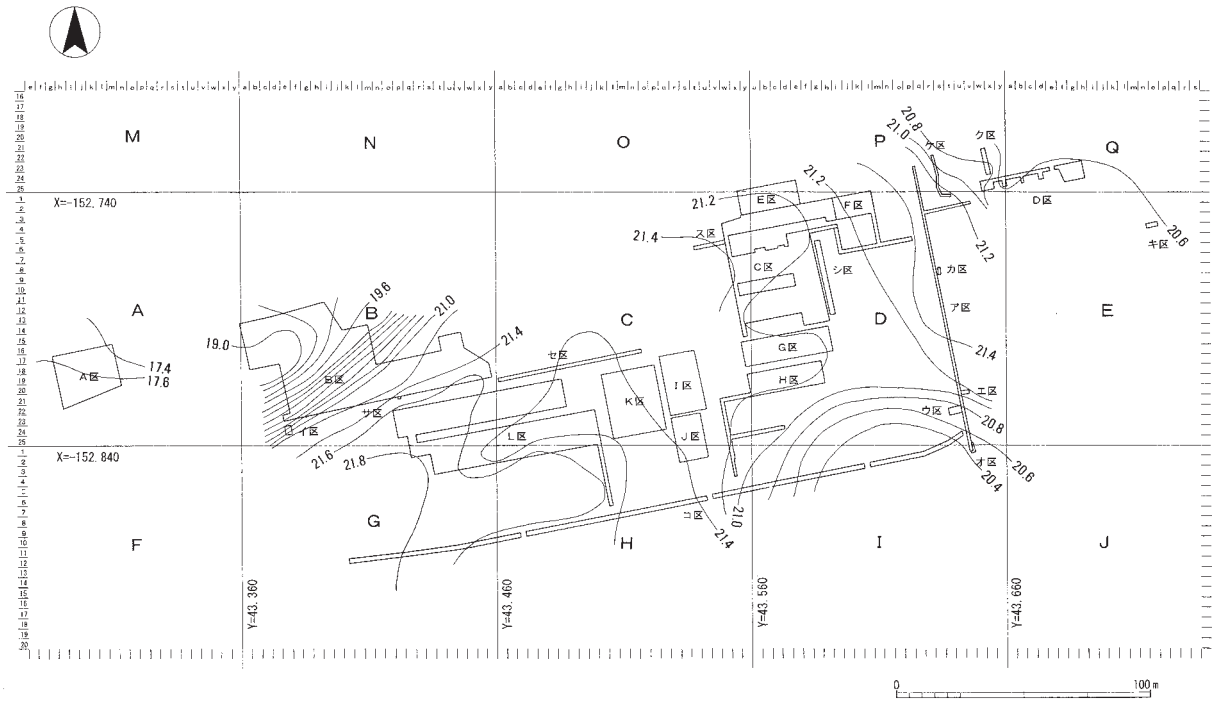
遺構は、遺物包含層と地山との間の漸移層の下部で検出されている。ただし、堆積状況が漸移的であるために、遺構が掘り込まれている面を明確にすることが難しく、また遺構のラインも明瞭に確認できないことなどの理由から、調査時には漸移層が消え、明確に地山となった面を遺構検出面としている。

以上のような土層堆積の様相は、基本的に西野田遺跡全体にわたって共通している。ただ、やや土層堆積の状況が異なるのは、西野田遺跡の西側部分である。コ区西部（A地点）では、粗粒砂に大型の礫が多量に含まれる層が地山として認められる（８・９層）。東へ行くにしたがって、この砂礫層はC区などで地山となっている黄褐色系土層（７層）の下へ徐々に潜り込んでいくことが、コ区やL区の調査から判明した。したがって、黄褐色系土層の下に砂礫層が存在しており、その堆積状況は水平ではなく、西から東へ向かって斜堆積となっていることが推定される。このことは、西野田遺跡が存在する丘陵の形成要因を考える上で重要であろう。この砂礫層は締まりが悪く軟弱であり、堆積した時期はそれほど古くないものと想定される。

②旧地形

西野田遺跡が存在する畜産研究部とその周辺では、現状ではそれほど起伏が認められない。

しかしながら発掘調査においては、部分的に包含層が分厚く、遺構が現地表よりかなり低い位置で検出された場所が認められた。ア区南端部や、コ区東部などであるが、これらの状況からみて、古代においては当該丘陵上にある程度地形の起伏があったことが推察される。この点は遺構の分布状況などを考える上でも重要であるため、調査区の土層断面などから読み取れる遺構検出面の標高などの情報をもとに、西野田遺跡周辺の旧地形を大雑把に復元した（第５図）[2]。



第５図　旧地形復元図(1:3,500)

コ区の西部では、遺構検出面が標高21.8mほどで、C区やK区などに比べてやや高い。それにもかかわらず、コ区の西部で検出された掘立柱建物の柱穴がかなり浅いことを鑑みれば、コ区西部付近では、元々の地形は現在よりもさらに30㎝程度は高かった可能性があろう。今回の調査地の中では、過去に最も地形的に高い場所であったと思われる。コ区の土層断面からみても、西側から東側へと緩やかに落ち込んでいく様子が窺われる。基本層序の項で述べたように、地山の堆積自体が東西へ斜堆積しているものと推定されるため、元々の地形もやや東へ向かって傾斜していたと考えられる。

また、前述のようにア区南端部やコ区東部においては地形的にもともと落ち込んでいたと考えられる場所が認められた。周辺の地形に目を向けると、畜産研究部南側に存在する段丘崖から北にむかって入り込む谷が存在している。現在では、この谷は畜産研究部南側に広がる畑地までしかのびておらず、畜産研究部付近では地表面で地形的な落ち込みは明確には確認できない。ただし、この谷を谷奥へ向かって延長すると、ア区南部からコ区東部付近へと向かっていく。このことから考えれば、古代にはこの谷がさらに奥までのびていたものと推定できよう。コ区東部では分厚い包含層の堆積が見られるが、この包含層は人為的な整地などによるものとは考えにくいことから、この谷は古代から近世にかけて徐々に埋没していき、結果として現在のようにやや南へ退行したものと推定される。加えて近代以降の造成によって、畜産研究部付近では谷の存在した痕跡は完全に消されてしまったものと想定されよう。

この谷の北側のD区付近にも、やや南側に入り込む落ち込みが存在したことが推定できる。こうした情報を総合すると、西野田遺跡が存在する東西に延びる丘陵は、南から入り込む谷と、北側に存在する落ち込みによって、地形的に東西に区分されるような状況であった可能性が高い。

このほか、B区では北へ向かって下る急激な傾斜が認められるが、現在の地形でもB区からE区やク区の北側にかけてのラインから急激に北側へ落ちる段丘崖の存在が認められる。この段丘崖はB区から南西へと延びており、コ区西端からは100mほど西へいったところで段丘崖となっている。

第4節　杯・皿・椀類の分類

西野田遺跡から出土した須恵器・土師器は、飛鳥時代から奈良時代前期にかけてのものがほとんどである[3]。これらの須恵器・土師器の器種組成においては、杯・椀・皿などの供膳具の割合が大きな割合を占めている。しかしながら、一口に杯や皿といっても、その中には多様な形態のものが存在している。したがって、ここでは杯・椀・皿等の供膳具について器形や調整などに基づいた分類を行い、本報告中におけるこれらの供膳具類の記述における便を図っておきたい[4]。

①分類の方法

分類に際しては、これまでに提示されている都城における各分類を参照し、基本的にこれに従っている[5]。

ただし、土師器については、西野田遺跡近辺でいわゆる畿内系土師器が生産されていた可能性が高く[6]、そのためか、都城出土の土師器と共通する特徴を持ちながらも、細部ではやや異なった特徴を示す個体もある。また、西野田遺跡の他にも天花寺北瀬古遺跡[7]で土師器焼成坑が確認されており、当該地域内で畿内系土師器以外の土器の生産を行っていることも確実であり、こうした在地で生産された地域色が認められるような土器を都城における分類と完全に対照させることは難しい。

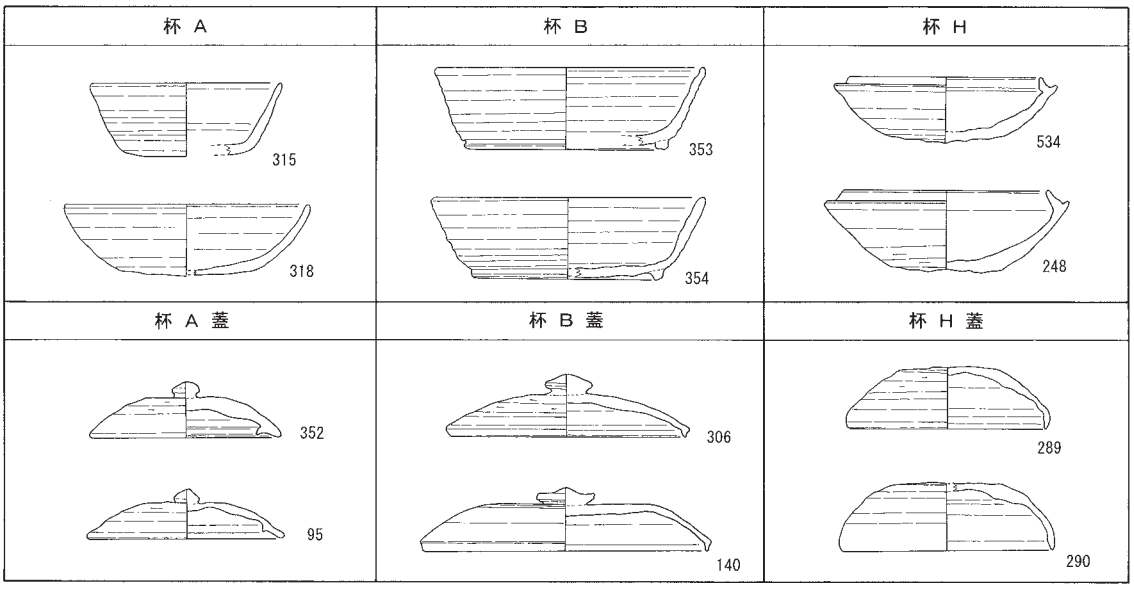
こうした事情のため、都城分類で一般的に理解されている各分類の内容と、本報告での各分類の内容とに一部差異が出てきている部分もあると思われる。そこで、本報告で行った分類の内容についてやや詳細に述べることで、その差異についてもある程度明確になるようにしておきたい。

②分類

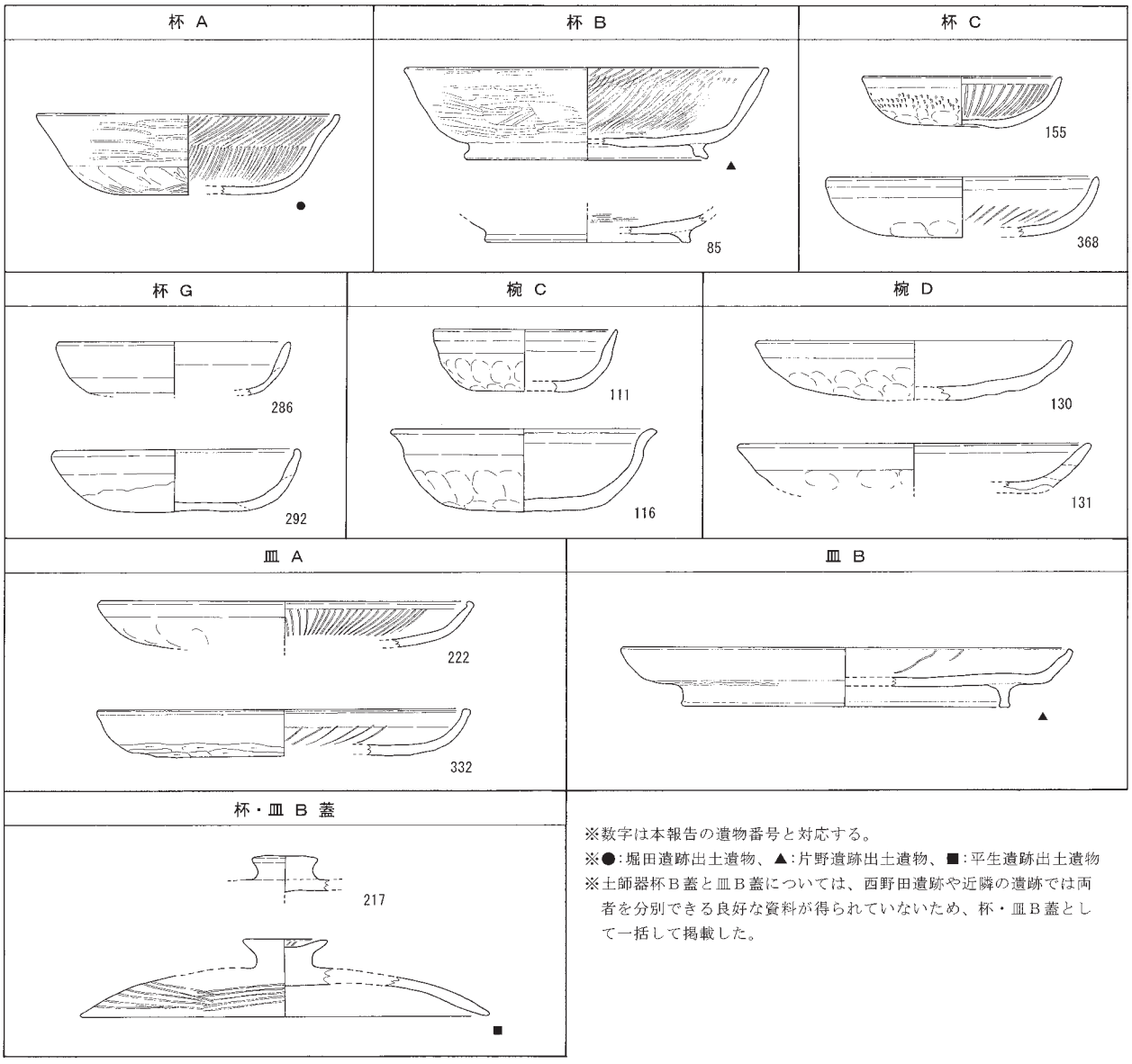
須恵器（第6図）

杯A：高台を持たない杯[8]。底部は基本的に平底で底部と体部との境に屈曲があるが、丸底に近く底部

須恵器



土師器



※数字は本報告の遺物番号と対応する。
※●:堀田遺跡出土遺物、▲:片野遺跡出土遺物、■:平生遺跡出土遺物
※土師器杯B蓋と皿B蓋については、西野田遺跡や近隣の遺跡では両者を分別できる良好な資料が得られていないため、杯・皿B蓋として一括して掲載した。

第6図　杯·椀·皿類分類図(1:4)

と体部との境が連続的であるものもある。前者の底部は基本的にヘラ切り無調整であり、後者の底部には回転ヘラケズリによる調整が認められるものもある。

杯Ｂ：高台を持つ杯。底部は平底で底部と体部との境に明瞭な屈曲を持つ。

杯Ｈ：丸底の体部に受け部とたちあがりを持つなど、古墳時代の杯身と同様の形態を持つ。底部外面に回転ヘラケズリによる調整を行うものと、ヘラ切り無調整のものとがある。

杯Ａ蓋：杯Ａの蓋[9]。口縁内部にかえりを持ち、宝珠つまみが付く。

杯Ｂ蓋：杯Ｂの蓋。口縁端部を下方へ屈曲させる。宝珠つまみや扁平なつまみが付く。

杯Ｈ蓋：杯Ｈの蓋。古墳時代の杯蓋と同様の形態を持つ[10]。天井部外面に回転ヘラケズリによる調整を行うものと、ヘラ切り無調整のものとがある。

土師器（第６図[11]）

杯Ａ：高台を持たない平底の杯。底部と体部の境は明瞭に屈曲する。口縁部はやや内弯し、口縁端部は内側に肥厚する。基本的に内面には暗文を施す。赤褐色系の色調を呈するものが多い。

杯Ｂ：高台を持つ杯。基本的な特徴は杯Ａと共通する。

杯Ｃ：小さな平底あるいは緩やかな丸底で、底部と体部の境は連続的で明瞭には屈曲しない。口縁端部には内側に傾斜する面が付けられているものが多い。内面に放射状暗文を施すものが多い。外面調整は基本的に口縁部付近をヨコナデするのみで体部及び底部には成形時のユビナデやユビオサエの痕跡が残る。ただし、一部にミガキやヘラケズリを施すものも見られる。

杯Ｇ：平底で、底部と体部との境は比較的明瞭に屈曲する。杯Ａに似るが、口縁部はあまり内弯せず、口縁端部も丸く収めるものが多い。外面調整は基本的に粗雑なナデであり、粘土接合痕を残したままのものも見られる[12]。暗文は施さない。明黄褐色系の色調を呈するものが多い。

椀Ｃ：小さな平底あるいは丸底で、底部と体部の境は連続的で明瞭には屈曲しない。外面調整は口縁部付近をヨコナデするのみで、体部及び底部には成形時のユビナデやユビオサエ、あるいは板ナデ状の痕跡が残る。内面はヨコナデで、工具によるナデの痕跡が認められるものもある。口縁部付近のヨコナデにより、口縁部がやや外反気味になるものが多い[13]。

椀Ｄ：基本的な特徴は椀Ｃと共通するが、器高が低く、また口径も大きく、皿状を呈する[14]。

皿Ａ：高台を持たない皿。口縁端部が内側に肥厚するものが多いが、丸く収めるものも目立つ。内面に暗文を施すものも多い。暗文を施すものには赤褐色系の色調のものが多い。

皿Ｂ：高台を持つ皿。基本的な特徴は皿Ａと共通するものが多い。

杯Ｂ蓋：杯Ｂの蓋。つまみが付く。基本的に外面にミガキや暗文を施す。確認できるものでは赤褐色系の色調を呈する。

皿Ｂ蓋：皿Ｂの蓋。基本的な特徴は杯Ｂ蓋と共通する。良好な資料がないこともあり、杯Ｂ蓋との区分は明瞭ではないが、杯Ｂ蓋にくらべて口径の大きいものが相当すると思われる。

註

（１）その後、整理作業段階で第２次調査の遺構としてＳＫ81～84などが新たに設定された。したがって、欠番は解消されている。同様に、第１次調査と第２次調査の遺構番号の間にも38～43までの欠番が存在していたが、ＳＫ38・ＳＡ39・ＳＢ40などの設定により欠番は解消されている。

（２）旧地形の復元には、調査区壁面の土層のほか、遺構平面図に記されたレベルの数値を参考とした。また、調査区が設けられていない範囲については、本調査前に行った範囲確認調査時の情報も参考にしている。

（３）遺物の所属時期及び遺構の所属時期については、土器型式を含め、この註末を参照願いたい。

（４）西野田遺跡出土土器類の中では杯・椀・皿など供膳具が多数を占めることに加え、供膳具以外の器種には全形を復元できる個体も少ない。したがって、ここでは杯・椀・皿とそれに関連する蓋等の器種についてのみ分類を行う。なお、土師器皿Ｂなどは西野田遺跡では確実な例が認めがたいが、全形が復元できなかったり、図化できなかった破片資料の中にこれらに該当する可能性があるものが存在するため、近隣の遺跡から出土した資料を参考にして分類に

加えた。

（５）都城における須恵器・土師器の分類としては、主として以下の文献を参考にしている。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊　1976、奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊　1978、古代の土器研究会『古代の土器１　都城の土器集成』 1992、奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第54冊　1995、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸＶＩ』奈良文化財研究所学報第70冊　2005

（６）樋上昇「八王子遺跡の古代をめぐる諸問題」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集　（財）愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター　2001

（７）三重県埋蔵文化財センター『天花寺北瀬古遺跡（第１次）・薬師寺北裏遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告180-1　1999

（８）都城分類では杯Ｇとされるものも含む。東海地域においては飛鳥時代から奈良時代への過渡期には杯Ｇと杯Ａとの分別が極めて不明瞭であり、混乱を避けるために高台を持たない杯を一括して杯Ａとした。

齊藤孝正「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一様相－篠岡２号窯出土資料を中心として－」『名古屋大学文学部研究論集』107史学36　名古屋大学文学部　1990、城ヶ谷和広「猿投窯岩崎17号窯出土須恵器の検討」『愛知県史研究』第７号　愛知県　2003

（９）都城分類における杯Ａには蓋が伴わないことが一般的であるが、ここでは本報告での分類上の杯Ａに対応する蓋ということで杯Ａ蓋とした。東海地域では、杯Ａのような高台を持たない杯にも蓋が伴う（齊藤孝正1990、城ヶ谷和広2003）。

(10) 基本的に杯Ａの丸底のものと変わらない形態を持つため、判別不能なものは杯Ａに含めている。杯Ａとの判別に際しては、自然釉の付着状況や重ね焼き痕などについても参考にしている。

(11) 西野田遺跡において良好な資料が得られなかった器形については、以下の報告書に掲載されている遺物を第６図に使用している。

三重県埋蔵文化財センター『堀田　第６次調査』三重県埋蔵文化財調査報告261　2005、一志町教育委員会『片野遺跡Ⅳ』一志町埋蔵文化財調査報告21・23　2002、平生遺跡調査団『平生遺跡発掘調査報告』嬉野町埋蔵文化財調査報告１　1976

(12) 斎宮跡における分類の杯Ｇのうち、杯Ａに近い形態のものを特に指している。古墳時代からは系譜が追いにくいものである。

(13) 形態や調整などの特徴から都城分類における椀Ｃに該当させたが、古墳時代からの系譜を引く可能性が高い。斎宮跡出土土師器の分類では杯Ｇに含まれ、古墳時代からの系譜を引くとされている（斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』 2001）。ただし、西野田遺跡ＳＦ61で見られるように、椀Ｃの中でも法量分化が生じていることや、同一製作技法によって皿状の形態のもの（椀Ｄ）が生産されていることなどに、都城における土師器様式との関連性が看取できるのではないかと考え、本報告では椀Ｃとした。

(14) 椀というよりも皿に分類した方がよいとも思われるが、椀Ｃとの製作技法の共通性や器形などから椀Ｄとした。都城分類における椀Ｄの定義とは、外面調整の施し方などの点でやや異なる内容である。

世紀	時代	都城編年
6	古墳	
7	飛鳥	飛鳥Ⅰ 飛鳥Ⅱ 飛鳥Ⅲ 飛鳥Ⅳ 飛鳥Ⅴ/平城Ⅰ
8	奈良	平城Ⅱ 平城Ⅲ 平城Ⅳ 平城Ⅴ 平城Ⅵ 平城Ⅶ
9	平安	

註３の表

第４章　第１次調査

第１節　調査区の位置と概要

①調査区の設定

平成17年度に行なった調査は、建物建築に伴うもの２地区（Ａ・Ｂ区）および配管工事などに伴うもの１地区（ア区）で行なった。調査区および調査区名の設定方法は、第３章第１節に詳細が記載されているので参照されたい。

②調査区の概要

以下、各調査区について、個々に概要を述べる。

Ａ区（第７図）　畜産研究部の敷地西端部に位置する。建物建設に伴って破壊される部分について調査を行なった。

当調査区では、表土・造成土を除去すると、黒色のいわゆる黒ボク土が確認される。この層が包含層に相当すると思われるが、出土遺物量は非常に少なかった。遺構は、黒色土直下の褐色土層上面で検出した。Ａ区は施設内でも低い場所に存在し、現況の標高が約18.1ｍと、ほかの調査区と比較して２～３ｍほどの高低差が確認できる。遺物包含層の堆積が認められたことも含めて考えると、ほかの調査区と比較して遺構の削平は少ないものと思われる。

Ａ区で検出した遺構は非常に少なく、溝や土坑などを疎らに確認した程度である。またピットもいくつか検出したが、いずれも木根および撹乱と思われ、遺物の出土もない。

Ｂ区（第８～10図）　畜産研究部の敷地内西部に位置する。建物建設に伴って破壊される部分について調査を行なった。ただし、構築物や使用中の水道管などを埋設した施設内道路などが存在したため、その部分については、掘削を行えなかった（図中のアミかけ表示箇所）。この他にも、調査区全体を通して埋設管やゴミ穴などの撹乱が非常に多い。明らかに撹乱であると判断できたものについては、基本的に完掘を行わなかった。

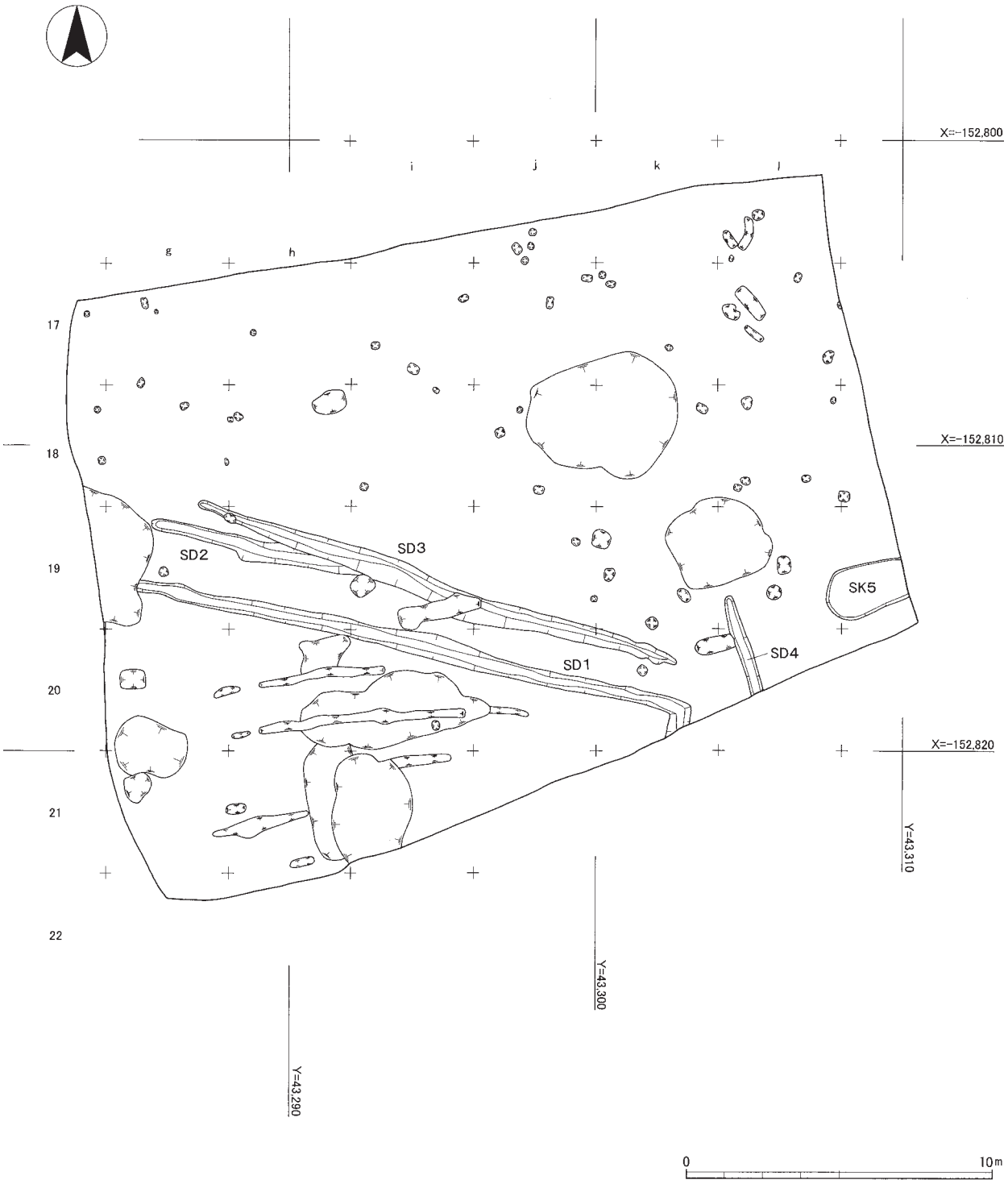
当調査区の東部は、表土・造成土を除去するとすぐに黄橙色土の地山が確認される。竪穴住居や土坑などの遺構を検出したが、いずれも残りが浅く、上層が削平されているものと考えられる。そのうえ、施設内道路であった調査区南側については、道路に敷設した砕石が地山面や遺構埋土に食い込んでいるような状況であった。道路敷設時および使用時にかなりの填圧がなされたものと考えられる。

また西部では、表土・造成土を除去すると、黒色土が堆積しており、その直下褐色土層上面で遺構を検出した。この状況は前述のＡ区の堆積状況と似通っており、遺物包含層と考えられる黒色土にも、ほとんど出土遺物はみられなかった。Ｂ区は西に向かって落ち込む地形である。

Ｂ区では、竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟、そのほか道路遺構や土坑などを検出した。掘立柱建物以外は調査区の東側の段丘上で、掘立柱建物は調査区西側の地形的に低い箇所で確認したものである。

ア区（第15～17図）　畜産研究部本館の西側に位置する。配管工事に伴って破壊される幅約1.2ｍ、延長約134ｍの調査区である。施設内の通行を確保するために、調査区を南北に分けて、南区・北区の順に調査を行なった。調査終了後の全景写真は、北・南の各区で撮影を行なった。ただし、遺構平面図や土層断面図などの図面類は南北に分けずに、ひとつの調査区となるよう作成している。

当調査区は、現況はほぼ平坦であるが、遺構検出面は南にいくほど低くなっている。北側は、表土・造成土を除去すると、黄褐色シルト層上面で遺構が確認できる。ただし、非常に撹乱が多く、調査区幅も狭いため、遺構の全体像がわかるものは少ない。南側は、表土･造成土を除去すると、遺物包含層である暗褐色シルト層が堆積しており、この層直下黄褐色シルト層上面で遺構を確認した。北端部の遺構検出面が標高約21.2ｍであるのに対して、南端では約20.4ｍとかなりの高低差が確認できる。竪穴住居の一部や掘立柱建物の柱穴などが確認でき、Ａ・Ｂ区

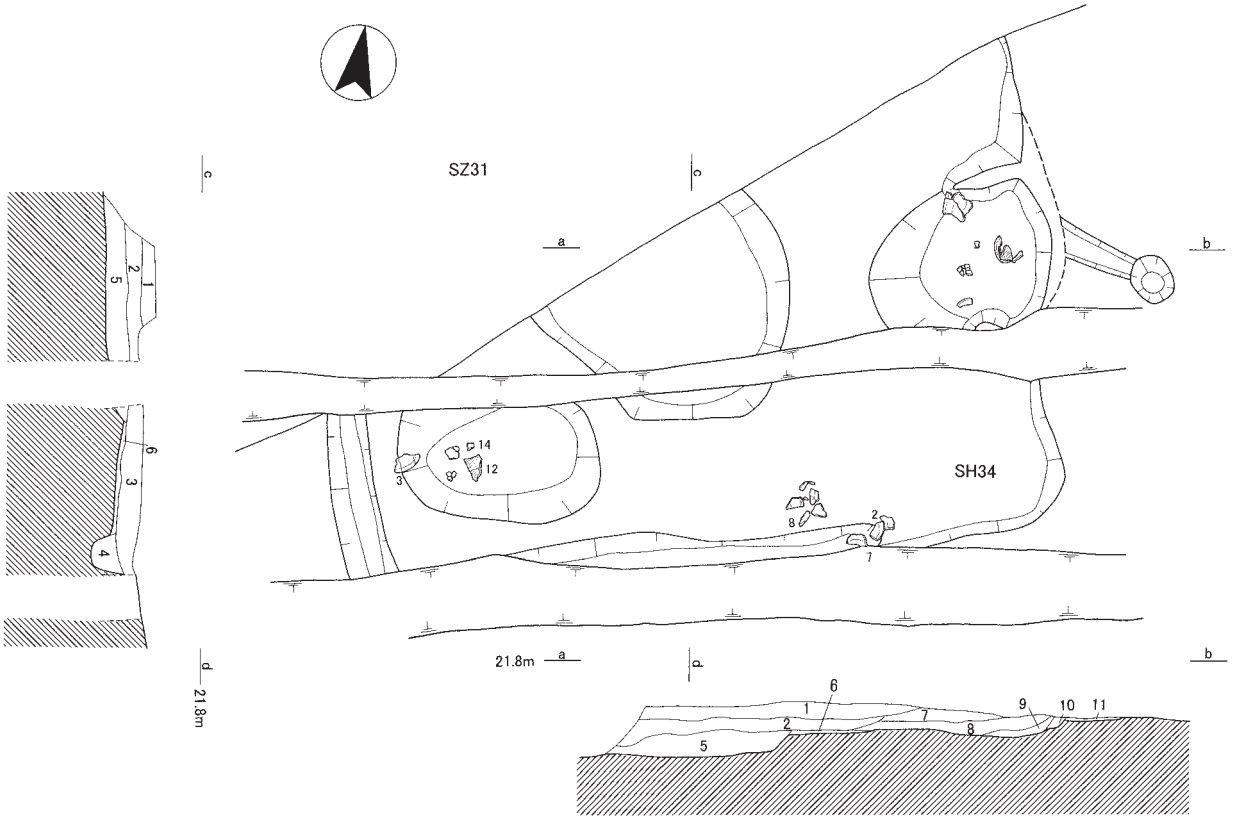


第７図　Ａ区遺構平面図(1:200)

第８図　Ｂ区遺構平面紙割図　※アミかけ部は遺構検出面まで掘削できなかった。斜線部は構築物を表す。

第９図　Ｂ区遺構平面図１(1:200)

第10図　B区遺構平面図２(1:200)



1	10YR4/6	褐色粘質土（地山粒・砂礫混じる）
2	10YR4/4	褐色粘質土（砂礫・焼土ブロック混じる）
3		1層＋2層
4	10YR4/4	褐色粘質土（炭化物・地山ブロック混じる、壁周溝）
5	10YR4/4	褐色粘質土（炭化物混じる、床下土坑）
6	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土（7.5YR7/6橙色土・焼土粒・地山ブロック混じる、貼床）
7	7.5YR4/4	褐色粘質土（焼土ブロック・炭化物混じる）
8	10YR4/6	褐色粘質土（焼土ブロック・炭化物・地山ブロック・砂礫混じる）
9	7.5YR4/6	褐色粘質土（焼土ブロック・炭化物混じる）
10	10YR4/6	褐色粘質土（炭化物・焼土混じる、竈構築土）
11	10YR4/6	褐色粘質土（炭化物・焼土混じる）

0　1m

第11図　ＳＨ34平面図･断面図（1:40）

に比べて相対的に遺構・遺物とも多い。

第２節　Ａ・Ｂ・ア区の調査

①　遺構

ここでは、Ａ・Ｂ・ア区で確認した主な遺構について述べる。個々の遺構の詳細については、後掲の遺構一覧（第14・15表）を参照されたい。

ａ　Ａ区の遺構

Ａ区では、溝を４条、土坑１基などを確認した。Ａ区全体の出土遺物が少なく、遺構からも古代～近世の土師器や陶器の小片が出土しているのみであり、時期比定は困難である。

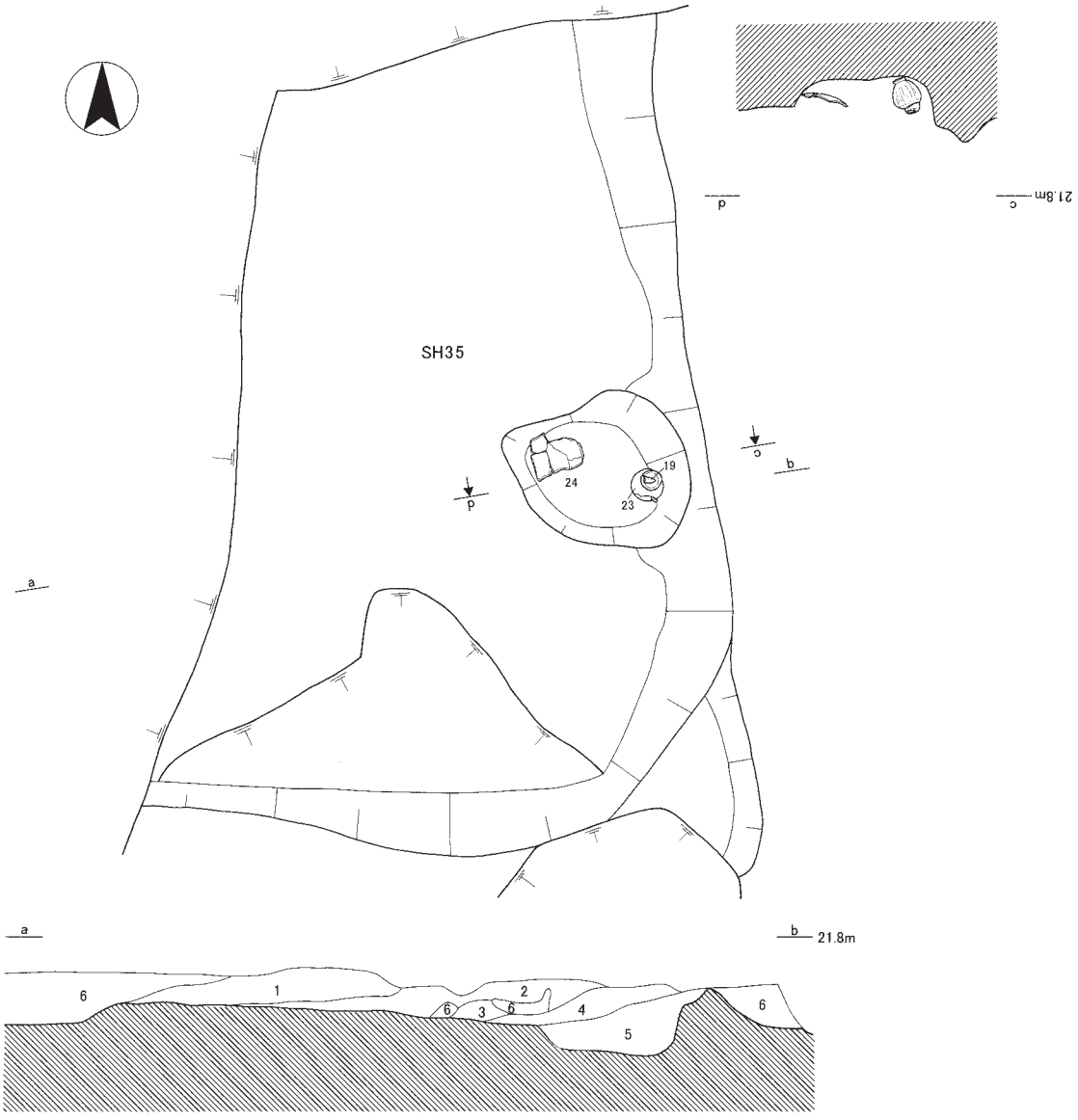
ＳＤ１とＳＤ２～４はほぼ並走しており、道路遺構の側溝になる可能性も考えられる。

ｂ　Ｂ区の遺構

当調査区は標高約18.2～21.8ｍのところに位置し、北西に向かって落ち込んでいる。植栽や以前の建物建設に伴う撹乱、水道管などの埋設管でほとんどの遺構の全部あるいは一部が破壊されている状況であった。

竪穴住居

ＳＨ34（第11図）　Ｂ区の中央南部、B-ｐ20グリッド付近で検出した遺構である。水道管やＳＺ31により１/３ほどが破壊されているが、１辺４ｍ前後の



1	10YR3/4	暗褐色粘質土(黄褐色粘土粒・砂礫混じる)
2	10YR4/6	褐色粘質土(砂礫・地山ブロック・炭化物混じる)
3	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土(明黄褐色粒混じる)
4	10YR4/4	褐色粘質土(地山ブロック・炭化物・焼土混じる)
5	10YR4/6	褐色粘質土(地山ブロック・砂礫・大量焼土ブロック混じる)
6		撹乱

第12図　ＳＨ35平面図･断面図(1:40)

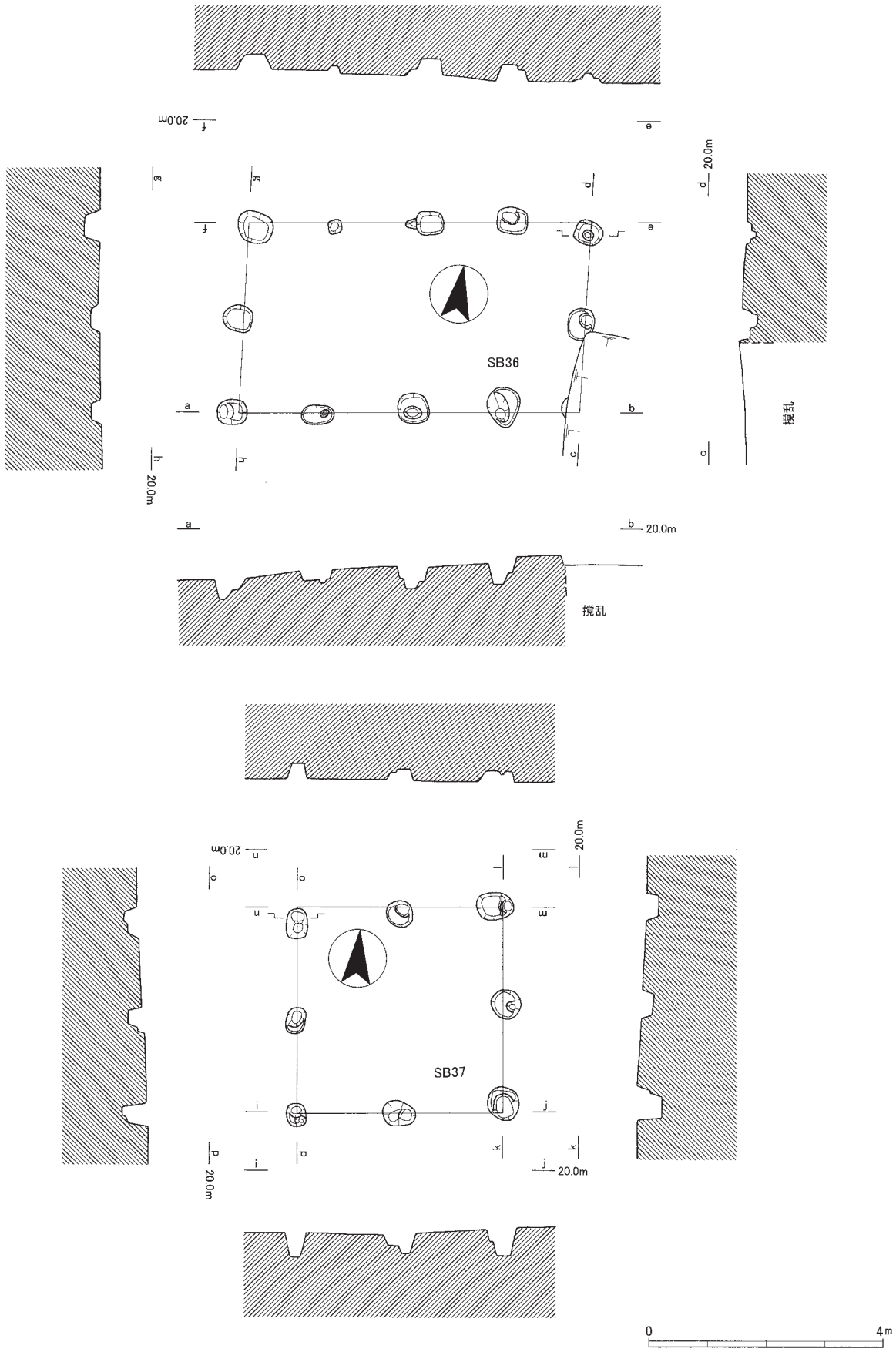
方形の住居になるであろう。検出面からの深さは約11cmである。

東辺のほぼ中央に竈が構築されている。構築土の残りも非常に悪いが、地山に近い土を使用しているようである。また、竈の袖を除去後、径10cmほどの杭穴状のピットが２つ確認できた。竈構築時の袖芯痕である可能性が考えられる。この竈から東に60cmほど離れたところにあるピットまで浅い溝でつながっている。煙道・煙出である可能性も考えられるが、焼土や焼けた面がほとんど確認できず、また上部が削平されているため、決め手にかける。

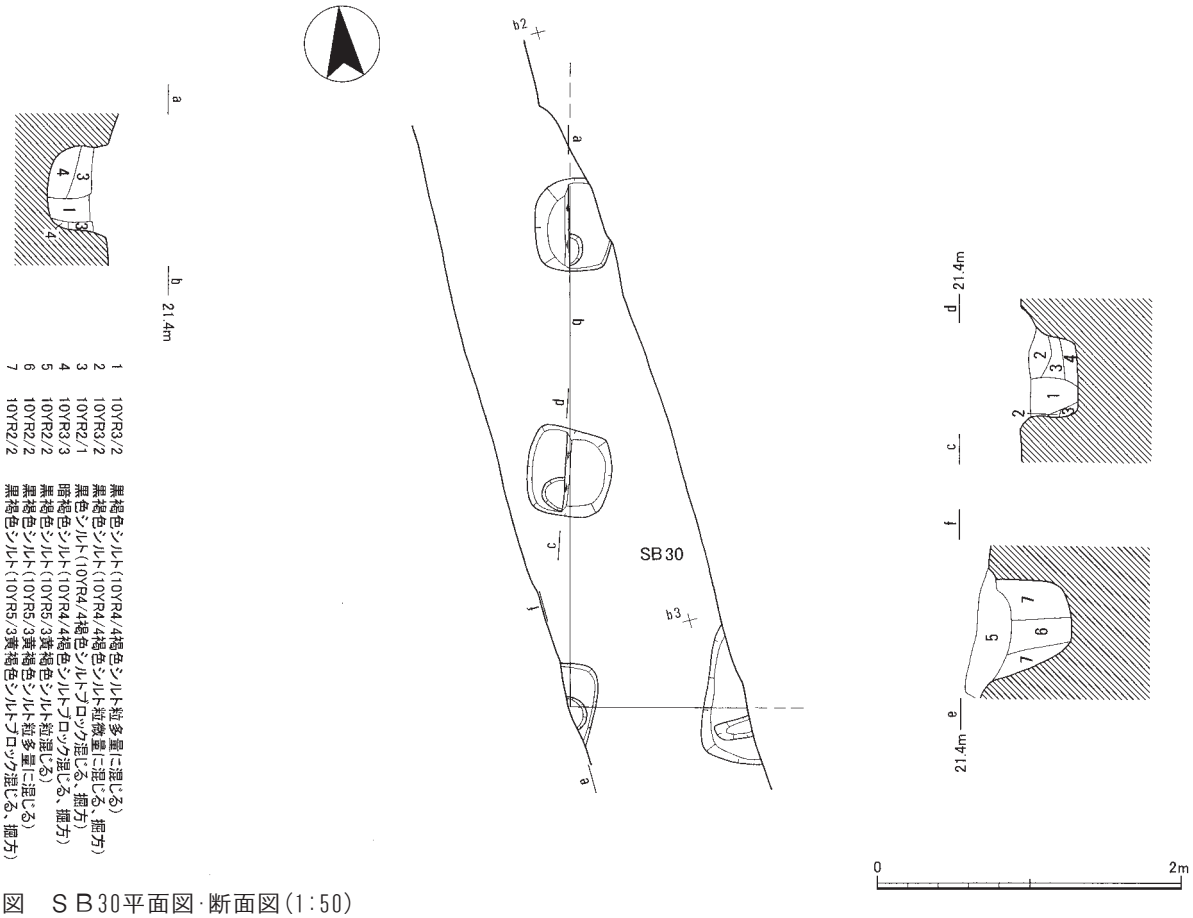
壁周溝は竈の存在する東辺とＳＺ31に破壊された北辺を除く南・西辺で確認できる。主柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。

埋土からは土師器の皿や杯、甕などが出土しており、奈良時代前半期のものであろう。

ＳＨ35（第12図）　Ｂ区の中央、B-ｎ19グリッドで検出した遺構である。植栽や電柱、撹乱などによって半分以上が破壊されているが、１辺３ｍ以上の平面方形であると考えられる。東辺には竈が構築されている。燃焼部は土坑状に窪み、中央には土師器の甕(23) が逆位の状態で、また土師器杯 (19) がその上



第13図　ＳＢ36･37平面図･断面図(1:100)



第14図　ＳＢ30平面図･断面図(1:50)

に同じく逆位の状態で乗せられており、支柱として使用したものと思われる。焼土は確認できたが被熱は弱く、調査当初竈として認識せず掘削してしまった。したがって、袖部など竈の部材をそれとわからず除去してしまった可能性がある。

また、住居の南東部でも焼土塊や少量の被熱部が見られたが、電柱が近接して立っており、半分ほどが撹乱されているため、詳細は不明である。

主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などは確認できなかった。

竈付近で出土した遺物から奈良時代前半期の遺構であると考える。

掘立柱建物

ＳＢ36（第13図）　Ｂ区の西部、B-ｇ18グリッド付近で検出した遺構である。梁行２間、桁行４間の南北軸の建物で、柱穴からみえる平面プランは、長方形に近い平行四辺形である。北を基準とした軸方向はＮ５～10°Ｗである。柱穴の大きさや柱間にばらつきが見られる。柱穴からも周辺からも遺物は全く出土していない。

ＳＢ37（第13図）　Ｂ区の西部、B-ｆ16グリッド付近で検出した遺構である。前述のＳＢ36の北に位置し、軸方向もほぼ同じＮ５°Ｗである。桁行２間、梁行２間、柱間が約1.8mである。柱穴からは全く遺物が出土していないため、時期不明である。

土坑

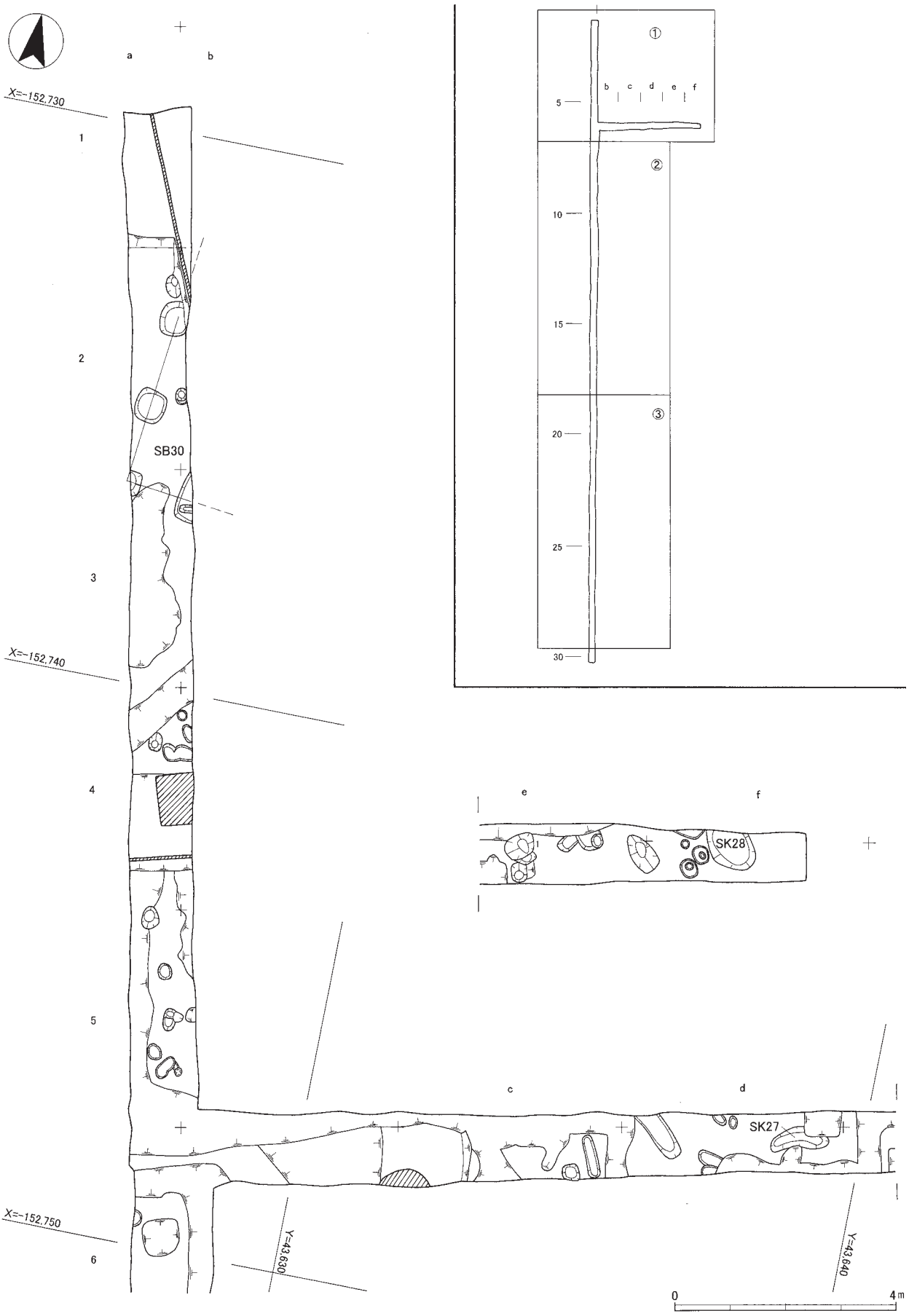
ＳＫ33（第10図）　Ｂ区の東部、B-ｓ18グリッドで検出した遺構である。平面形は不整な方形で、東西辺が約2.2m、南北の最長部で約3.4mである。四隅にピットが確認でき、竪穴状遺構である可能性も考えられる。

出土遺物は少量で、土師器や須恵器の小片が確認できるのみである。断定はできないが、奈良時代のものであろう。

道路状遺構

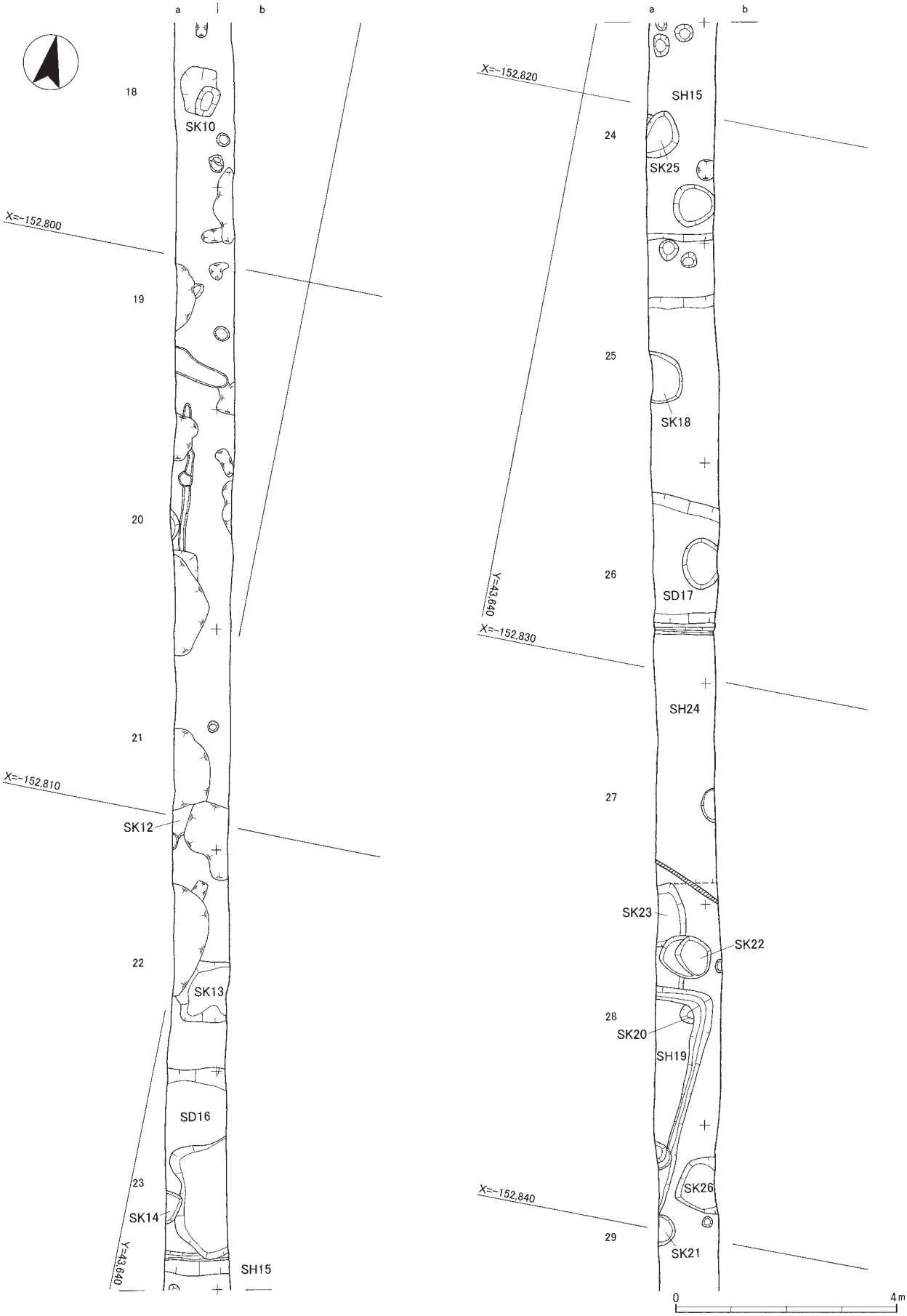
ＳＺ31（第10図）　Ｂ区の南部、B-ｐ19グリッド付近で検出した遺構である。約3.2mの幅で溝状に掘り窪められ、両端に側溝が見られる。溝心々間で約2.2mである。路床面には轍の痕跡が確認できるところもある。道路の軸方向はN35°Ｅである。

路床面上で近世の磁器を使用した加工円盤（27）

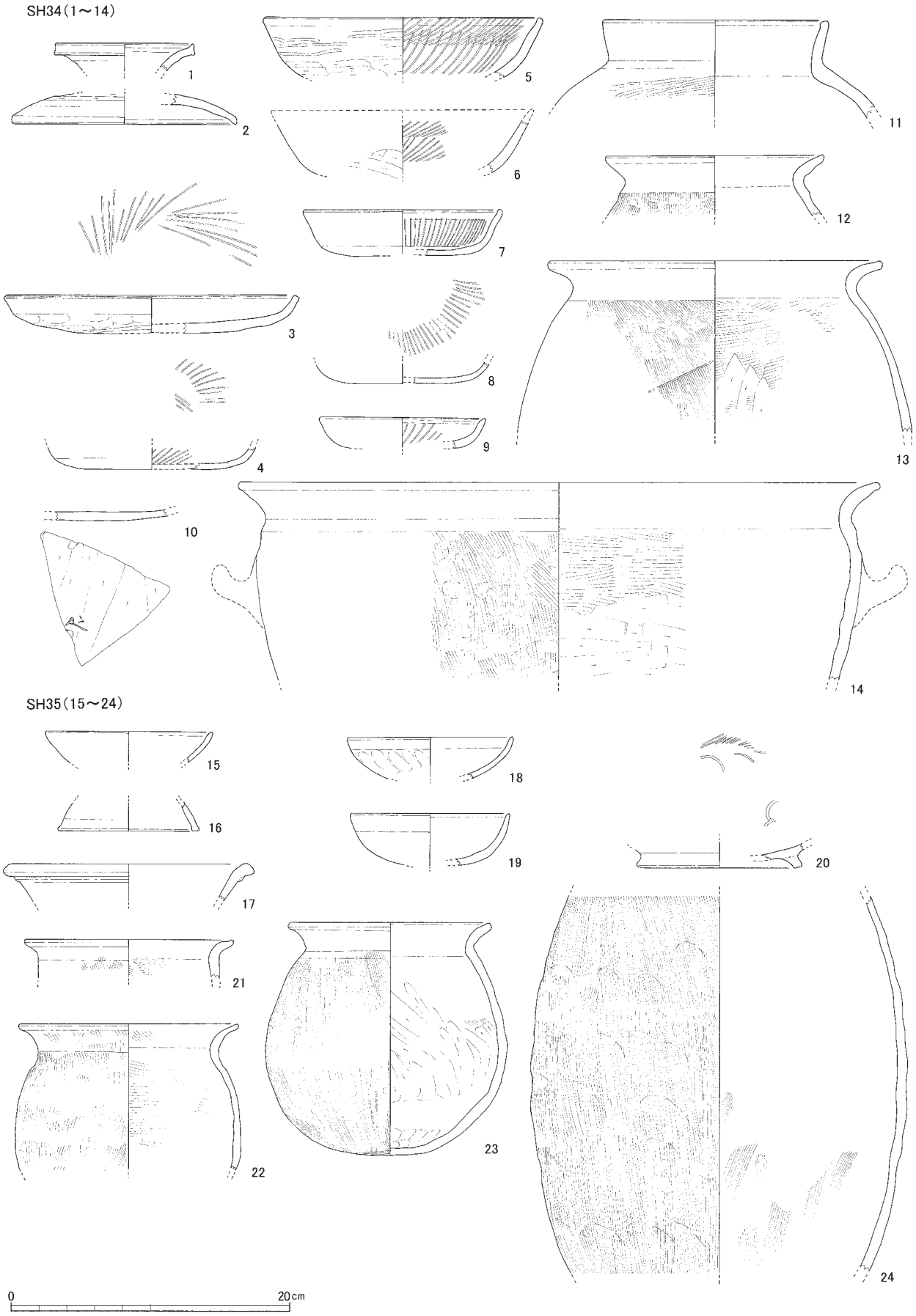


第15図　ア区遺構平面紙割図及び遺構平面図１(1:100)

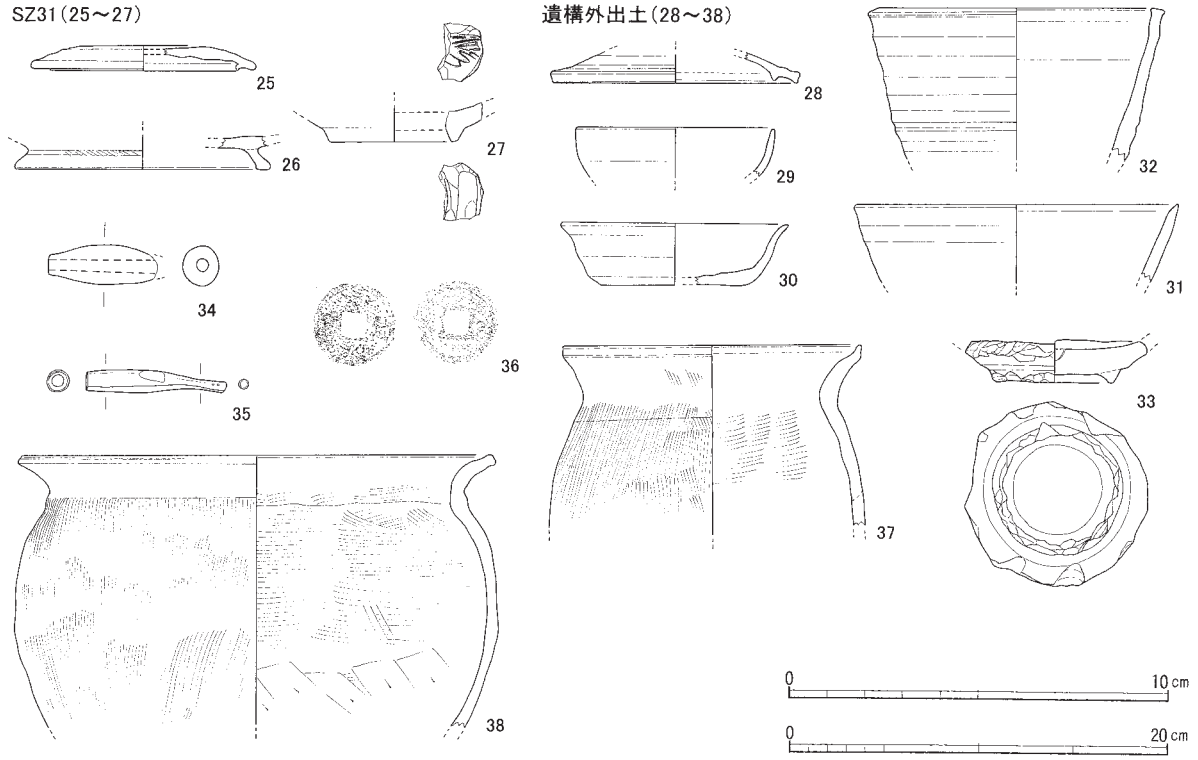
第16図　ア区遺構平面図２(1:100)



第17図　ア区遺構平面図３(1:100)



第18図　B区出土遺物実測図１(1:4)



第19図　Ｂ区出土遺物実測図２(36は1:2,それ以外1:4)

が出土していることから、少なくとも近世まではこの道が使用されていたと考えられる。

ｃ　ア区の遺構

竪穴住居

ＳＨ15（第17図）　ア区の南部、ａ24グリッド付近で検出した遺構である。幅が狭い調査の上、他の遺構とも重複していることから、平面形態は不明であるが、おそらく方形あるいは長方形であろう。調査区内で確認できる規模は長軸4.6m、短軸1.2m以上で、検出面からの深さは約25cmである。

床面には厚さ約５～12cmの硬質部分が見られ、北辺沿いには壁周溝が確認できた。

埋土からは土師器の皿（57）や杯（56）などが出土しており、奈良時代前半の遺構であると考える。

ＳＨ19（第17図）　ア区の南端部、ａ28グリッド付近で検出した遺構である。調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、東辺が4.1m以上、北辺が1.05m以上の隅丸方形になると考えられる。

東辺のほぼ中央に竈が構築されている。燃焼部には硬化した焼面が観察でき、埋土にも多量の焼土粒を含んでいた。また、袖の芯材の痕跡と考えられる杭状のピットをいくつか確認した。

また、幅15～30cmの壁周溝があり、竈の北袖下部分には巡り、南袖下では見つからなかった。

埋土からは土師器の甕（59）などが出土しており、奈良時代の遺構であると考える。

ＳＨ24（第17図）　ア区の南端部、ａ26グリッド付近で検出した遺構である。調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、南北辺が4.5m以上、東西辺が1.05m以上で壁周溝の形からおそらく方形あるいは長方形になると思われる。

住居内施設としては、床面の硬質部と壁周溝が確認できた。

埋土からは土師器の甕（48）や杯（46・47）が出土しており、奈良時代の遺構であると考えられる。

掘立柱建物

ＳＢ30（第15図）　ア区の北端部で検出した遺構である。調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、東西２間以上、南北１間以上、柱間約1.5m、北を基準とした軸方向はＮ６°Ｅである。確認できる柱穴の掘方は長方形で、長辺約80cm、短辺約60cm、柱痕の直径は約６～８cmである。総柱建物かもしれない。南東部の柱穴のみ他と規模が異なることから、建物が調査区の西側に展開することも考え

られる。

柱穴の埋土の観察から、柱の抜き取り痕が確認できる。遺物の出土は、いずれの柱穴でも確認できなかったため、時期は不明である。

②　遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして約19箱である。時期は奈良時代のものが中心である。Ａ区では掲載に値する遺物はなかった。

以下では、主な出土遺物について遺構別に記述する。また、平成16年度に実施した範囲確認調査で出土した遺物についても、今年度の調査の後抽出を行い、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。

なお、遺物個々の詳細については、遺物観察表（第22～24表）を参照されたい。

ａ　Ｂ区の遺物

ＳＨ34出土遺物（第18図１～14）

須恵器（１・２）　１は壺の口縁部、２は杯Ｂ蓋である。つまみが付くものであろうが、天頂部を欠く。

土師器（３～14）　３・10は皿Ａ。３は内面に放射状暗文が見られる。10は内面に炭化物が付着し、外面にヘラ記号が見られる。４～７は杯Ａ。８・９は杯Ｃか。５・６は内面に２段の放射状暗文を施し、外面底部を削る。４・７～９の内面にも１段の放射状暗文が見られる。

11は薬壺か。12・13は甕、14は把手付鍋である。13は外面にヘラ描きが見られ、煤が付着する。

ＳＨ35出土遺物（第18図15～24）

須恵器（15～17）　15は杯か。16は高杯の脚部、17は壺の口縁部である。

土師器（18～24）　18･19は粗製の作りの杯Ｇである。20は高台が付く皿Ｂ。底部片のみであるが、内面に放射状暗文および螺旋状暗文が施された痕跡が確認できる。21～24は甕。21は口縁部が短く外反する。22・23は底部が丸底を呈するもので、24は長胴甕の体部である。

ＳＺ31出土遺物（第19図25～27）

須恵器（25）　杯Ａ蓋である。つまみ部を欠く。

土師器（26）　高台が付く土師器の皿Ｂ。

磁器（27）　染付の磁器を使用した加工円盤である。

遺構外出土遺物（第19図28～38）

須恵器（28～33）　28は杯Ａ蓋の口縁部である。小片であるため、口径が図示したものより大きくなる可能性もある。29は杯Ｇ、30は杯Ａである。31は底部が欠損しているため、杯ＡかＢかは不明。32は練鉢。33は壺の台部を打ち欠いた加工円盤である。

土製品（34）　鈁鐘形を呈した土錘である。

金属製品（35・36）　35は煙管の吸口である。中に木質が残る。36は径が4.5㎝程の『寛永通寶』である。表裏両面とも風化が激しい。

土師器（37・38）　いずれも甕である。

ｂ　ア区の遺物

ＳＤ16出土遺物（第20図39～45）

須恵器（39・40）　39は壺か蓋の口縁部である。ここでは前者として報告した。40は高杯。断面に加工が見られ、煤が付着している。

土師器（41～44）　41は台の付く小形の杯Ｂ。42は甕である。口縁部がゆるく外反し、丸底を呈する。外面に煤、内面に炭化物が付着する。摩滅が激しく調整は不明瞭である。43・44は長胴甕。

土製品（45）　土錘である。長さ約5.5㎝、重さ約14.9ｇのものである。

ＳＨ24出土遺物（第20図46～48）

土師器（46～48）　46･47は杯Ａか。いずれも小片で、調整不明瞭である。48は甕の口縁部。壁周溝内から出土した。

ＳＤ17出土遺物（第20図49・50）

土師器（49・50）　49・50甕である。長胴を呈するものか。50の口縁部外面には煤が付着する。

ＳＫ13出土遺物（第20図51）

須恵器（51）　杯Ｂ蓋である。小破片のため、口縁部は概測。

ＳＫ14出土遺物（第20図52・53）

須恵器（52）　杯Ａである。

土師器（53）　皿Ｂである。高台が付く。内面には螺旋状暗文および放射状暗文が見られる。

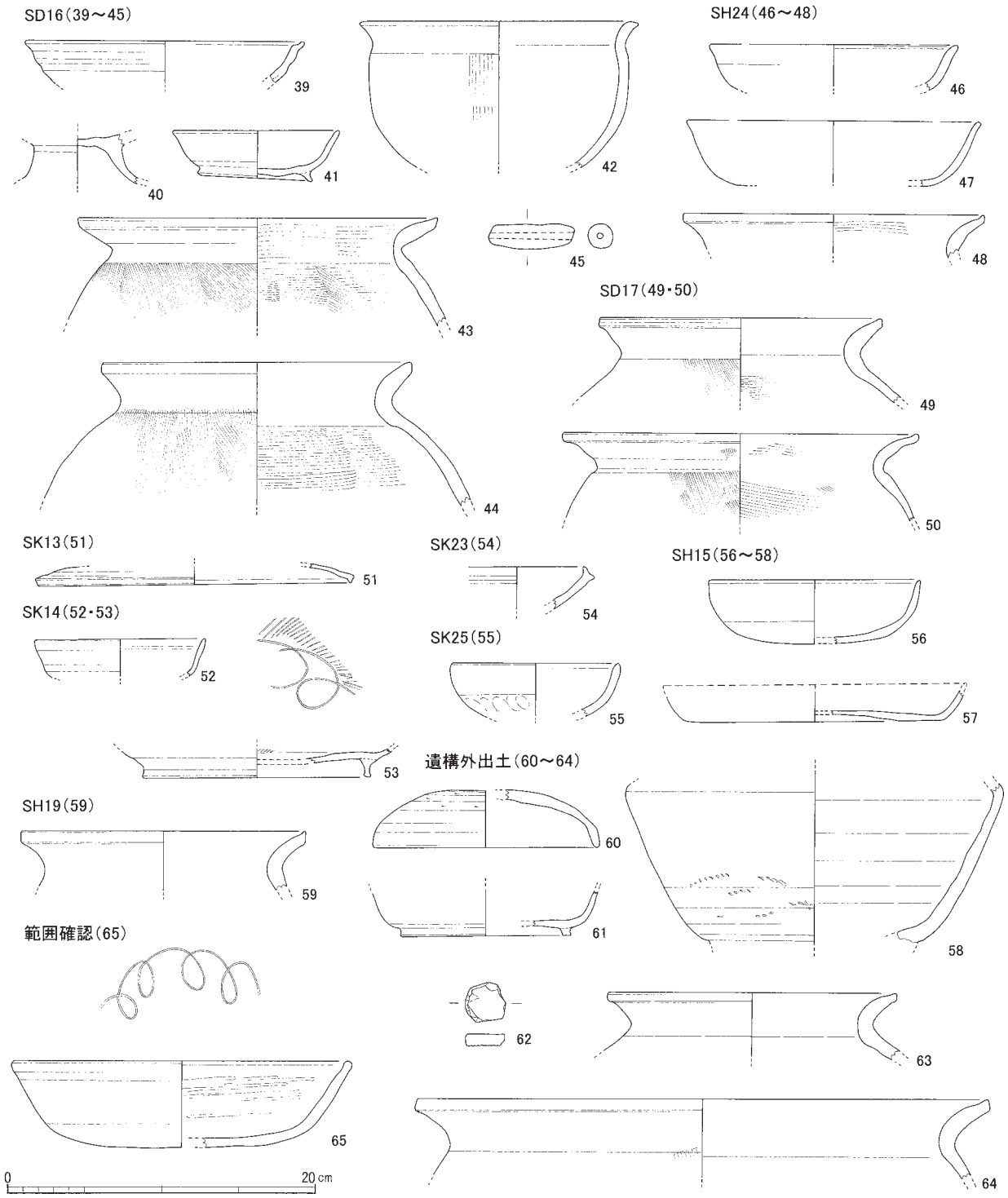
ＳＫ23出土遺物（第20図54）

不明（54）　口縁端部がヨコナデにより内側と外側に肥厚する。

ＳＫ25出土遺物（第20図55）

土師器（55）　杯Ｇである。体部に丸みを持つ。

ＳＨ15出土遺物（第20図56～58）



第20図　ア区出土遺物実測図(1:4)

土師器（56・57） 56は杯Ｇ、57は皿Ａである。内面に暗文があると思われるが、摩滅のため確認できない。

須恵器（58） 壺と思われる。体部片で口縁部と台部を欠く。

ＳＨ19出土遺物（第20図59）

土師器（59） 甕である。口縁部のみであるが、底部は丸底を呈するものと思われる。

遺構外出土遺物（第20図60～64）

須恵器（60・61） 60は杯Ｈ蓋。天頂部にヘラ工具の当たり痕が見られる。撹乱からの出土である。61は杯Ｂ。

陶器（62） 加工円盤である。近世陶器の擂鉢を加工したものである。

土師器（63・64） 63は甕、64は把手付鍋である。

範囲確認調査出土遺物（第20図65）

土師器（65） 杯Ａである。内面に螺旋状暗文が見られる。（柴山圭子）

第５章　第２次調査

第１節　調査区の位置と概要

①調査区の設定

平成18年度に行った第２次調査では、３箇所の調査区を設定して本調査を行っている。また、第２次調査に合わせて、配管工事などによって遺構への影響が想定された部分について、ごく小規模な調査区を９箇所設けて部分的に調査を行っている。

これらの調査区については、第３章でも述べた通り、平成17年度の第１次調査によって設定された調査区の呼称法を引き継ぎ、調査区のグリッドが大地区のグリッド割りに沿って設定されている調査区には、アルファベットの調査区名を付した（C・D区）。また、調査区の形状などを考慮して独自にグリッドの設定を行った調査区に関しては、片仮名の調査区名を付している（イ～サ区）。このうち、本調査として発掘調査を行ったものは、C・D・コ区の３調査区である。

なお、遺構番号についても第１次調査から番号を引き継いでおり、先に調査を行った調査区から順に遺構番号を付与している[(1)]。

以下、これらの調査区について個々に概要を述べていきたい。

②調査区の概要

まず、本調査として発掘調査を行ったC・D・コ区について概要を述べたい。その後に、イ～ケ・サ区について概要を述べていきたい。

C区（第21図）　畜産研究部本館の西側に、鶏舎等の新たな建物の建築に伴って設定した調査区である。建物の建築に伴って破壊を受ける範囲を調査対象としているため、南側のコの字形の調査区と北側の長方形の調査区を基調とし、配管などに伴う細長い調査区がそれに付随するような形となっている。

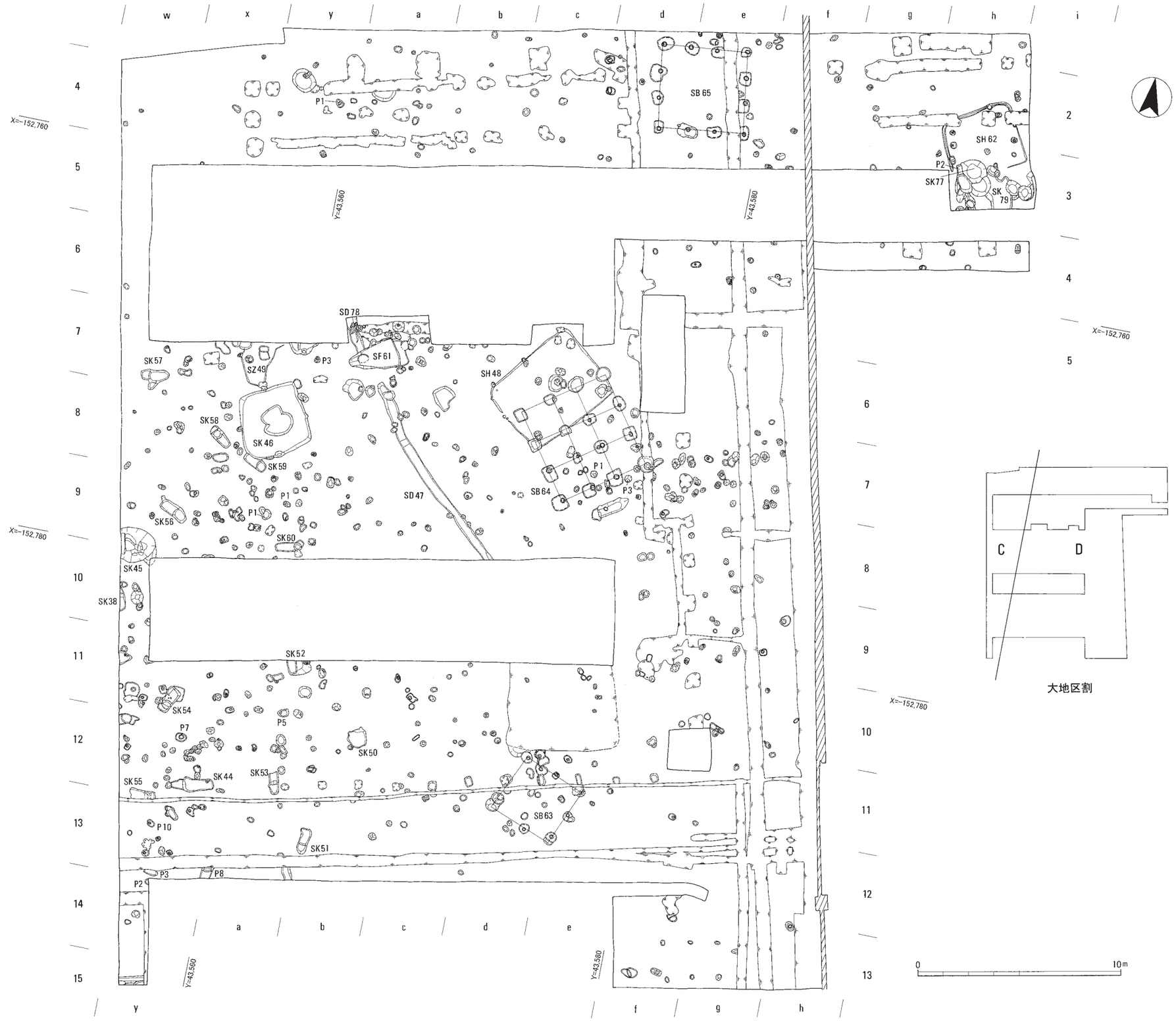
C区では、表土・造成土を除去するとすぐに黄褐色粘質土からなる地山が検出され、遺構はその地山上面で検出された。C区の大部分では包含層の存在は確認できず、調査区東側のごく一部で検出されたのみである。遺構検出面が地表面から比較的浅いことから、旧表土や包含層はほとんどが削平されてしまっているものと考えられる。また、水道などの配管や建物基礎などによって破壊を被っていた部分も多かった。しかしながら、調査区の主要部分については比較的良好に遺構が遺存していた。

C区では多くの遺構が検出された。竪穴住居２棟、掘立柱建物３棟、土師器焼成坑１基のほか、土坑、溝、ピットが多数検出された。土坑の中には小型台形土坑とでも呼ぶべき共通した形態のものが12基含まれており、これらはC区南西部分に集中する傾向がある。また、竪穴住居・掘立柱建物は主に調査区の東側で検出されている。

一方、調査区北西部や南東部では遺構密度が薄い。特に北西部では包含層が遺存しており、遺構面の遺存状況も良好であると考えられるにもかかわらず、ピットもほとんど検出されず、遺物もほとんど出土しなかった。C区は北側の段丘崖近くに位置しており、北西部はこの段丘崖へ向かってやや土地が低くなっていく部分である可能性が高い。

D区　畜産研究部本館の北側に設定した調査区である。配管に伴う工事区域を対象としたため、細長く複雑に枝分かれした形状となった。また、調査区内に電気・水道などの配管が複数通っており、掘削が不可能であった部分も多かった。東西の全長は40mである。

造成土を除去すると、その直下の標高21.0～21.3m付近で厚さ40～50㎝ほどの黒褐色土層を検出した（基本層序４層）。この黒褐色土層の下にはにぶい黄褐色土層（基本層序６層）が堆積しているが、このにぶい黄褐色土層上面でも遺構が検出されなかったため、にぶい黄褐色土も除去し、その下の黄褐色土層（基本層序７層）上面まで掘削を行った。その結果、本調査区では全く遺構が存在しないことが確認された。また、遺物も出土しなかった。



第21図　C区遺構平面図(1:200)

黒褐色土は他の調査区での包含層に相当すると考えられる層であり[(2)]、その下のにぶい黄褐色土層は撹乱を受けていないと考えられるにもかかわらず全く遺構が検出されなかったことから、D区付近には古代においてはほとんど人の手が入っていなかったものと思われる。隣接するク区の調査ではいくつかのピットが確認されているが、やはりD区に近づくほど遺構密度が下がっている。D区付近は第３章第３節でも述べたように、地形的に谷状に落ち込んでいる部分であると考えられ、そのため人間活動があまり活発に行われない地区となっていたものと思われる。

コ区（第36図） 水道管の埋設に伴って設定された調査区である。全長250m、幅２mの細長い調査区である。部分的に既設の配管等により掘削が不可能であった部分もある。

調査区西端付近では、表土下に造成土があり、その直下に砂礫層が確認された。西端付近ではこの砂礫層上に遺構は確認されなかったが、西端より40m付近ではこの砂礫層上に包含層が存在することが確認でき、砂礫層の面で遺構が検出された。この付近の遺構の深さは浅く、かなり削平を受けているものと考えられる。包含層･遺構ともに遺存していなかった調査区西端付近は、造成に伴って削平を受けている可能性がある。

調査区西端付近では遺構検出面が地表下0.3mほどであったのに対し、調査区中央部付近から東にかけては遺構検出面が徐々に深くなっている。調査区東端付近では最も深く、遺構検出面は地表下1.3mとなっている。遺構検出面が深くなっている部分では包含層や旧表土と考えられる土層が顕著に認められ、遺構の遺存状況も良好であった。第３章第３節で述べたように、コ区東端部分付近はもともと谷地形になっており、土地が低かったためと思われる。

コ区では竪穴住居１棟、掘立柱建物４棟のほか、多数の土坑、溝、ピットなどが検出されている。細長い調査区であるために、全体を確認できた遺構は少ないものの、かなり多くの遺構の存在を確認できた。このうち、掘立柱建物は調査区の西側と東端付近にまとまって検出されている。また、土坑の中には竪穴住居である可能性が高いものもいくつか含まれている。

イ区（第37図） 第１次調査Ｂ区の南側に位置する長辺３m、短辺2.5mの調査区である。地表下0.6mほどで遺構面を確認した。

イ区では複数のピットを検出したが、掘立柱建物や柵などを構成するものであるかどうかは不明である。遺物としては、ピットの埋土中や包含層中から土師器の破片などが出土している。

なお、遺構検出面は北側へ行くほど低くなっており、北側へ向けて土地が低くなっているものと思われる。

ウ区（第37図） コ区東端の８mほど北側に設けた長辺５m、短辺３mの調査区である。地表下0.6mほどで遺構面を確認した。

調査区中央部分には大きな撹乱坑が存在しているものの、遺構面の遺存状況は概して良好であり、調査区の東半部分を中心にピットや土坑を複数検出した。遺物も各遺構埋土中や包含層・造成土中から土師器や須恵器の破片が多数出土している。

エ区（第37図） エ区はウ区の東側に集水枡の設置に伴って設定された長辺３m、短辺1.5mの小規模な調査区である。地表下0.6mほどで遺構面を検出した。

遺構としては、ピット３基と浅い落ち込み１基が検出された。ピットのうち大部分を検出できた２基についてはいずれも柱痕が認められ、掘立柱建物の一部ではないかと思われる。

遺物としては、ピットや落ち込みの埋土中から土師器や須恵器の破片が出土している。

オ区 オ区は第１次調査のア区と一部重複する。長さ9.4m、幅1.5mの細長い調査区である。

地表下0.5mほどで地山面を検出した。地山直上まで近代の造成土が堆積しており、包含層などは確認できなかった。大部分がア区と重複しているため、遺構面が遺存している範囲は限られていた。新たに検出した遺構面においても遺構は確認されなかった。

遺物は造成土中から土師器や須恵器の破片が少量出土した。

カ区 畜産研究部本館の南西に位置する。配管に伴う調査であり、長辺２m、短辺１mの狭い調査区である。

調査区内は全体にわたって過去の削平を受けており、遺構面は遺存していなかった。遺物も出土していない。

キ区（第37図） 畜産研究部本館の南東に位置する。配管に伴う調査であり、長辺4.5m、短辺1.5mの狭い調査区である。調査区の北半は既設の配管によって既に削平を被っていたが、南半については削平を免れており、地表下0.6mほどで遺構面を確認し、ピットを１基検出することができた。このピットは径60㎝、深さ40㎝ほどのものであり、柱痕が認められた。遺物は出土していないが、埋土の状況などからみて古代の遺構であると考えられる。掘立柱建物や柵などの一部を構成するものである可能性が高い。

ク区（第37図） Ｄ区の北側に位置する。配管に伴う調査区であり、長さ10m、幅1.2mほどの細長い調査区である。調査区からはピットが複数検出されたが、調査面積が狭いため、掘立柱建物などを構成するものかどうかは不明である。出土遺物としては土師器の小片などが出土している。

なお、調査区南側のＤ区に近い部分では遺構密度が低く、調査区南端付近では遺構を確認できなかった。調査区南端部では調査区北端部より遺構検出面がやや深くなっており、Ｄ区へ向けて徐々に地形が低くなっていくものと思われる。

ケ区 畜産研究部本館の北西に位置する、配管に伴う調査区である。長さ20m、幅0.5mの細長い調査区である。

この調査区では、南半部でＤ区同様に包含層もしくは耕作土と思われる黒褐色土層（基本層序４層）を検出し、その直下で黄褐色粘質土からなる地山を確認した。地山面で遺構は全く検出されなかった。遺物も出土していない。

サ区 第１次調査Ｂ区の南側に位置する、新設された大家畜舎からのびる配管の設置に伴う調査区である。本来は長辺２ｍ、短辺１ｍほどの範囲を掘削する予定であったが、工事設計上の変更などにより長辺１ｍ、短辺0.6mのごく小規模な調査区となった。

地表下0.4mで地山面を検出したものの、遺構・遺物ともに確認されなかった。

第２節　Ｃ区の調査

Ｃ区は、第２次調査で最も多く遺構が検出された調査区である。以下、検出された遺構と遺物について個別に述べていきたい。

①遺構

竪穴住居

ＳＨ48（第22図） ＳＨ48は調査区中央部やや東よりで検出された。平面形は長軸５ｍ、短軸４ｍの長方形である。

北隅では撹乱のため確認できなかったが、他の三隅では柱穴と思われるピットが検出された。中央部付近でも３カ所の柱穴と思われるピットが検出されている。四周には壁周溝がめぐらされており、土層断面の観察から、板状のものが壁周溝内に立てられていた可能性もある（第22図８・10層）。

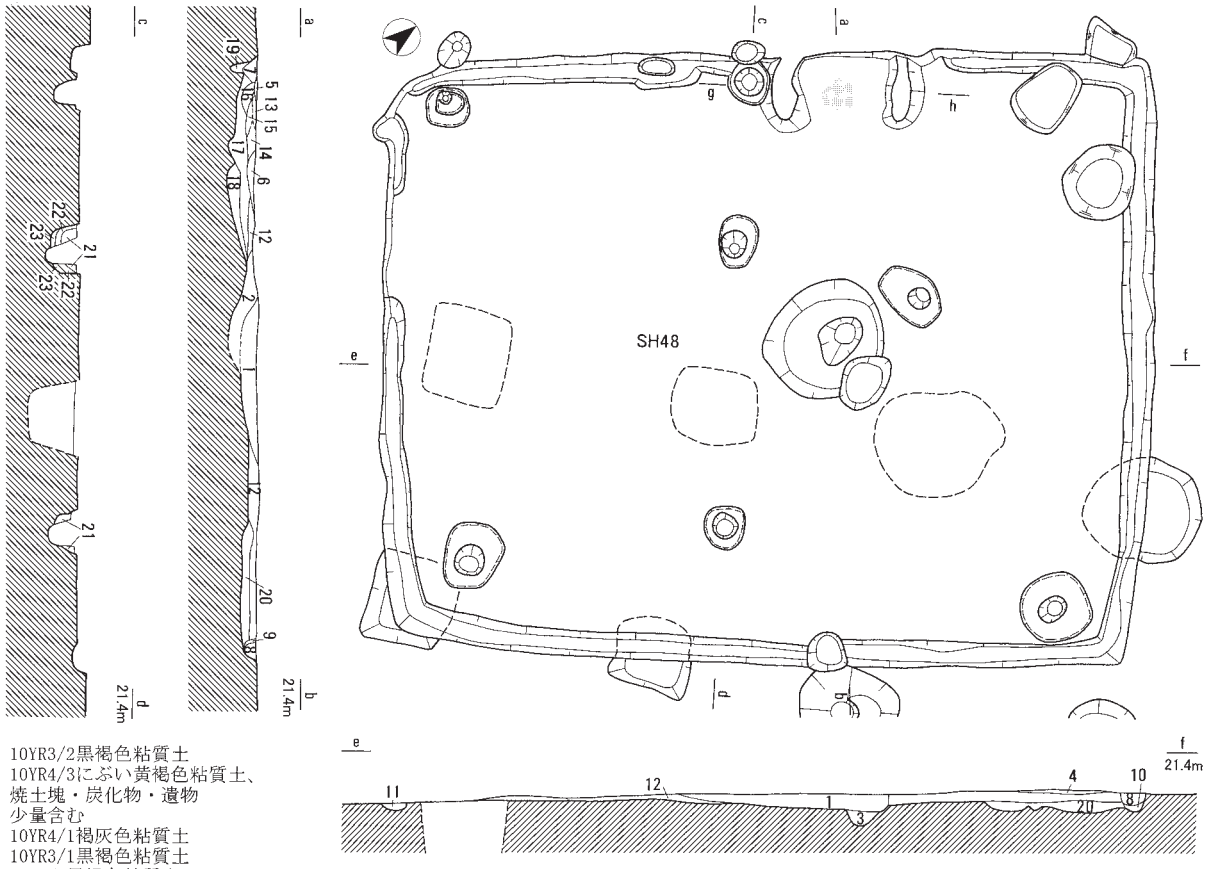
竈は北壁に接して設けられているが、北壁の中央部分よりやや東に寄った位置に作られている。竈はやや粗い砂粒を含む土で構築されており、内部床面の土は赤く焼けている。竈本体は削平によってほぼ失われており、検出されたのは基部のみである。竈を断ち割った結果、竈基部を構成する土層中にも焼土塊や炭化物が含まれており（第22図ｆ層）、竈の作り替えがなされた可能性もある。

この住居は掘立柱建物ＳＢ64の廃絶後、それに重複して作られており、床面にはＳＢ64の柱穴が存在している。ＳＢ64の柱を抜き取るか切るかした後に柱穴を埋め、その後に床面に貼床（第22図20層）を施しているものと思われる。

出土遺物には須恵器、土師器がある。竈近辺からは土師器甕の体部片がまとまって検出されており、竈で使用されていたものと考えられる。出土遺物は飛鳥時代後期～奈良時代前期に属するものと考えられる。

ＳＨ62（第22図） ＳＨ62は調査区北東隅で検出された。一部が調査区外に出ていたため、拡張して調査を行った。

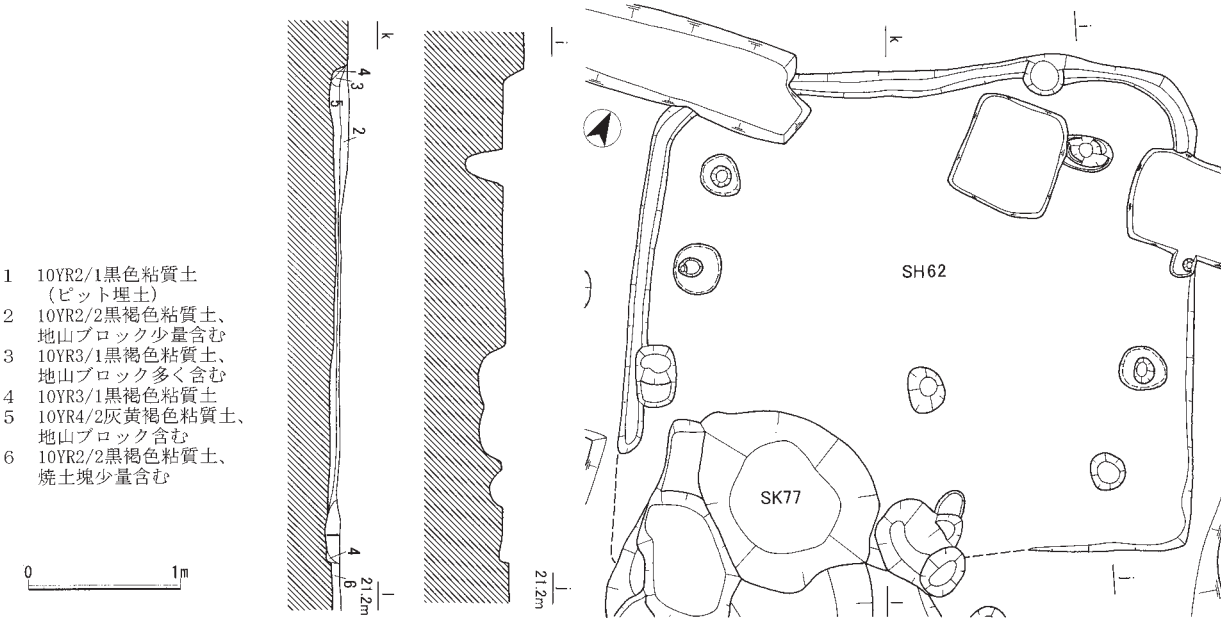
平面形は長軸3.8m、短軸3.3mのほぼ正方形である。削平により、遺存状況はあまり良好ではなかっ



1　10YR3/2黒褐色粘質土
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土、焼土塊・炭化物・遺物少量含む
3　10YR4/1褐灰色粘質土
4　10YR3/1黒褐色粘質土
5　5YR2/1黒褐色粘質土
6　7.5YR3/1黒褐色粘質土
7　5YR3/1黒褐色粘質土
8　10YR3/1黒褐色粘質土
9　10YR4/2灰黄褐色粘質土
10　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む
11　10YR4/2灰黄褐色粘質土
12　10YR5/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック少量含む
13　5YR4/2灰褐色粘質土、焼土塊多く含む
14　7.5YR4/3褐色粘質土、焼土塊・炭化物少量含む
15　5YR4/8赤褐色細砂質土、強く被熱
16　10YR4/3にぶい黄褐色細砂質土、焼土塊少量含む
17　10YR3/3暗褐色粘質土、焼土塊少量含む
18　10YR3/2黒褐色粘質土
19　10YR4/4褐色粘質土
20　10YR4/2灰黄褐色粘質土
21　10YR3/3暗褐色細砂質土
22　10YR4/2灰黄褐色細砂質土、やや粘質
23　10YR4/6褐色粘質土

a　7.5YR3/3暗褐色砂質土、粘土含む
b　10YR4/2灰黄褐色粘質土
c　2.5Y6/4にぶい黄色砂質土（竈袖）
d　2.5Y3/2黒褐色砂質土（竈袖）
e　10YR3/2黒褐色粘質土、焼土塊極少量含む（竈袖）
f　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土、焼土塊・炭化物極少量含む

0　50cm

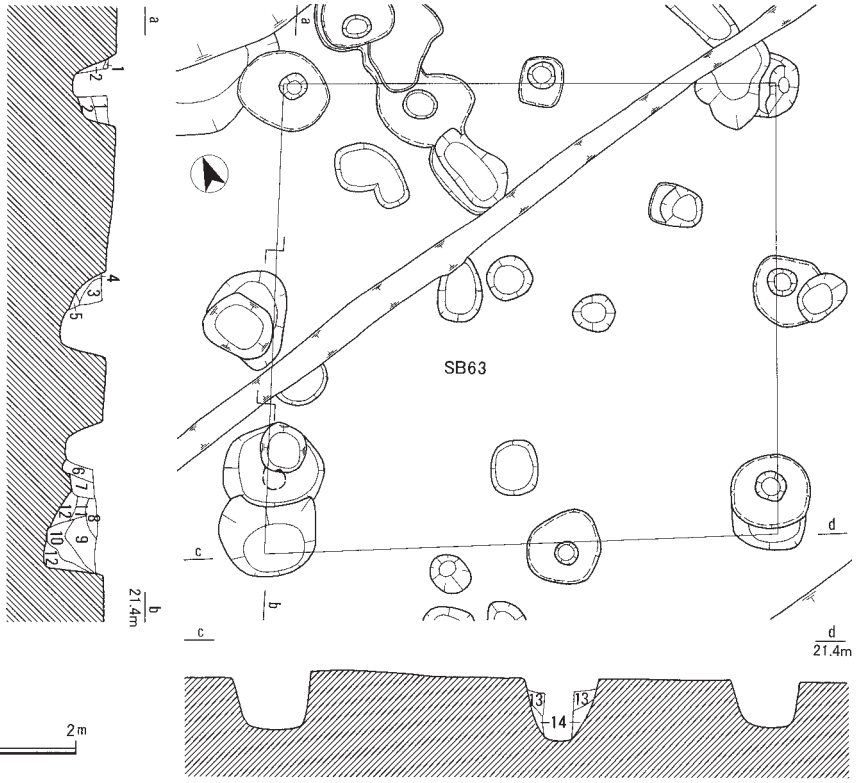


1　10YR2/1黒色粘質土（ピット埋土）
2　10YR2/2黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む
3　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
4　10YR3/1黒褐色粘質土
5　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック含む
6　10YR2/2黒褐色粘質土、焼土塊少量含む

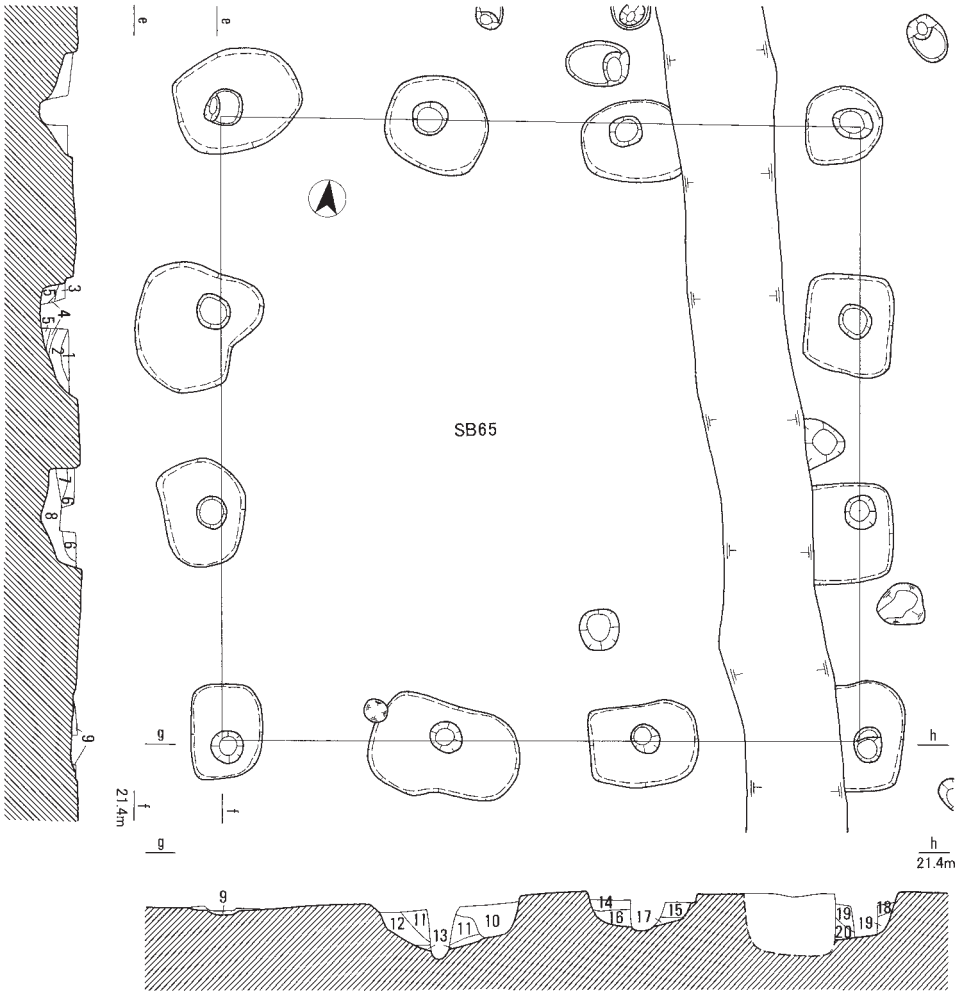
0　1m

第22図　ＳＨ48･62平面図･断面図(1:50,竈断面図のみ1:20)

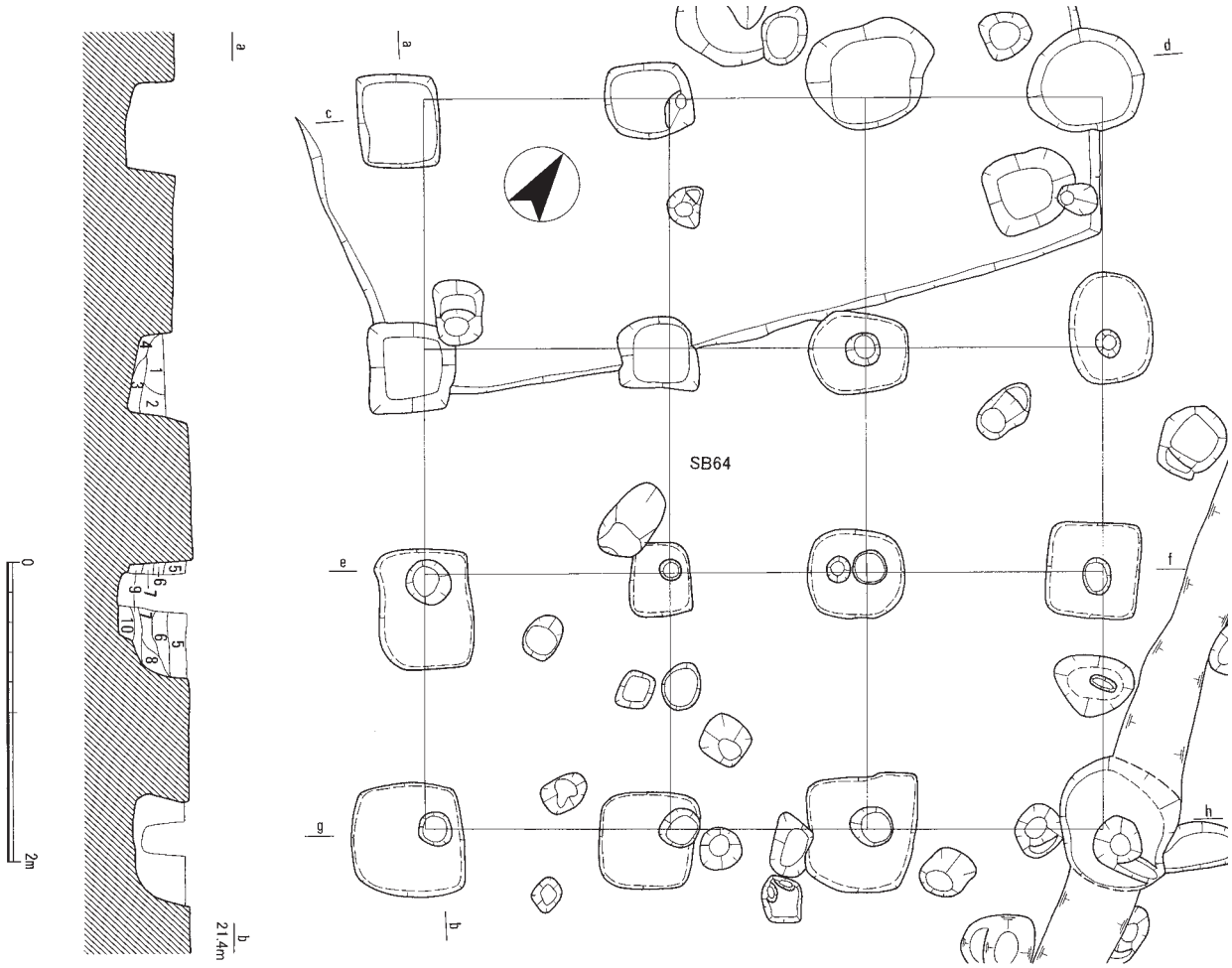
1　10YR3/1黒褐色粘質土
2　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック含む
3　10YR3/1黒褐色粘質土
4　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック含む
5　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
6　10YR2/1黒色粘質土（柱痕？）
7　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む
8　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
9　10YR4/2灰黄褐色粘質土、炭化物・地山ブロック含む
10　10YR3/2黒褐色粘質土
11　10YR3/2黒褐色粘質土
12　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
13　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック含む
14　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土、地山ブロック含む



1　10YR3/3暗褐色粘質土、地山・黒色土ブロック含む（柱抜き取り痕）
2　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む（柱抜き取り痕）
3　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック含む
4　10YR4/6褐色粘質土、10YR3/2黒褐色粘質土含む
5　10YR3/4暗褐色粘質土
6　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
7　10YR4/6褐色粘質土
8　10YR5/6黄褐色粘質土、10YR3/3暗褐色粘質土含む
9　7.5YR4/4褐色粘質土
10　10YR2/2黒褐色粘質土、地山ブロック・10YR3/2黒褐色粘質土含む（柱抜き取り痕）
11　10YR2/1黒色粘質土
12　10YR3/2黒褐色粘質土
13　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
14　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック少量含む
15　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック・10YR2/2黒褐色粘質土含む
16　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック少量含む
17　10YR4/6褐色粘質土、10YR2/2黒褐色粘質土ブロック含む
18　10YR2/2黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む
19　10YR3/1黒褐色粘質土
20　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む



第23図　ＳＢ63･65平面図･断面図(1:50)



1　10YR4/1褐灰色粘質土、地山ブロック含む（柱抜き取り痕？）
2　10YR2/1黒色粘質土
3　10YR3/2黒褐色粘質土
4　10YR5/1褐灰色粘質土、地山ブロック含む
5　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
6　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
7　10YR2/1黒色粘質土
8　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
9　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
10　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック多く含む
11　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む
12　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック含む
13　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
14　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック多く含む
15　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む
16　10YR4/1褐灰色粘質土
17　10YR3/1黒褐色粘質土（柱痕？）
18　10YR2/1黒色粘質土（柱痕？）
19　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック少量含む
20　10YR5/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
21　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック含む
22　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック少量含む
23　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む(柱抜き取り痕)
24　10YR4/1褐灰色粘質土、地山ブロック含む
25　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック少量含む
26　10YR5/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック含む
27　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む
28　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
29　10YR4/1褐灰色粘質土
30　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック少量含む
31　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
32　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック含む
33　10YR4/1褐灰色粘質土（柱痕？）
34　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
35　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
36　10YR5/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
37　10YR2/1黒色粘質土
38　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック少量含む
39　10YR3/1黒褐色粘質土
40　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む
41　10YR3/1黒褐色粘質土
42　10YR4/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
43　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
44　10YR5/2灰黄褐色粘質土
45　10YR5/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
46　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む
47　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
48　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む
49　10YR4/1褐灰色粘質土、地山ブロック多く含む
50　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック多く含む
51　10YR3/3暗褐色粘質土、地山ブロック含む
52　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック多く含む
53　10YR3/2黒褐色粘質土
54　10YR3/3暗褐色粘質土、地山ブロック少量含む

第24図　ＳＢ64平面図･断面図(1:50)

た。

住居内の隅に近い部分では、いくつかの柱穴を確認することができた。四周には壁周溝がめぐらされていたと考えられる。また、床面には貼床が施されている（第22図５層）。

竈は焼土塊の広がりなどから住居の東南部に設けられていたと考えられるが、削平と撹乱によって明確な位置は特定できなかった。

出土遺物としては須恵器、土師器甕がある。いずれも飛鳥時代後期～奈良時代前期に属するものと考えられる。

掘立柱建物

ＳＢ63（第23図） 調査区の南側で検出された桁行２間、梁行２間の側柱建物である。主軸方向はN23°Ｅである。後述のＳＢ64やＳＢ65にくらべ、柱穴は小規模である。南辺の両隅の柱穴はいずれも２つの柱穴がやや南北にずれて重複している。柱痕は北側の柱穴のみに認められ、南辺については改築時にやや北側にずらして柱を建て替えた可能性がある。ただし、その他の部分では複数の柱穴の重複は明確には認められなかった。

柱穴からは土師器が出土しており、甕１点を図化することができた。

ＳＢ64（第24図） 調査区のほぼ中央部で検出された桁行３間、梁行３間の総柱建物である。重複して検出された竪穴住居ＳＨ48は、この掘立柱建物廃絶後に作られている。主軸方向はN34°Ｗである。

このＳＢ64は廃絶時に部分的に柱の抜き取りを受けており、特にＳＨ48と重複する部分についてはほとんどの柱穴で柱痕が確認できず、柱の抜き取りの痕跡が土層断面で確認できる柱穴もあった（第24図）。しかしながら、明瞭に柱痕が確認できた柱穴もあり、ＳＨ48の構築時にはＳＢ64は取り壊されていたものの、一部の柱は残されていたか、もしくは根本で切断されていたものと考えられる。

側柱部分では掘り方が深いしっかりとした柱穴が確認できるが、束柱部分は比較的掘り方が浅く、柱穴自体もやや小型であり、補助的な柱であったことを窺わせる。

柱穴内からは土師器が出土しているが、小片のみで図化できたものはなかった。

ＳＢ65（第23図） 調査区北部で検出された桁行３間、梁行３間の側柱建物である。ＳＢ64と規模の点では共通性が認められるが、主軸方向はＮ６°Ｗでほぼ南北主軸を指向しているものと思われる点がＳＢ64とやや異なっている。また、束柱を持たず、総柱建物とはならない点も異なっている。

この掘立柱建物も柱のいくつかが抜き取られており、抜き取りの痕跡が柱穴の平面形や土層断面によって明瞭に確認できる（第23図）。

柱穴内からは土師器が出土しているが、小片のみで図化できたものはなかった。

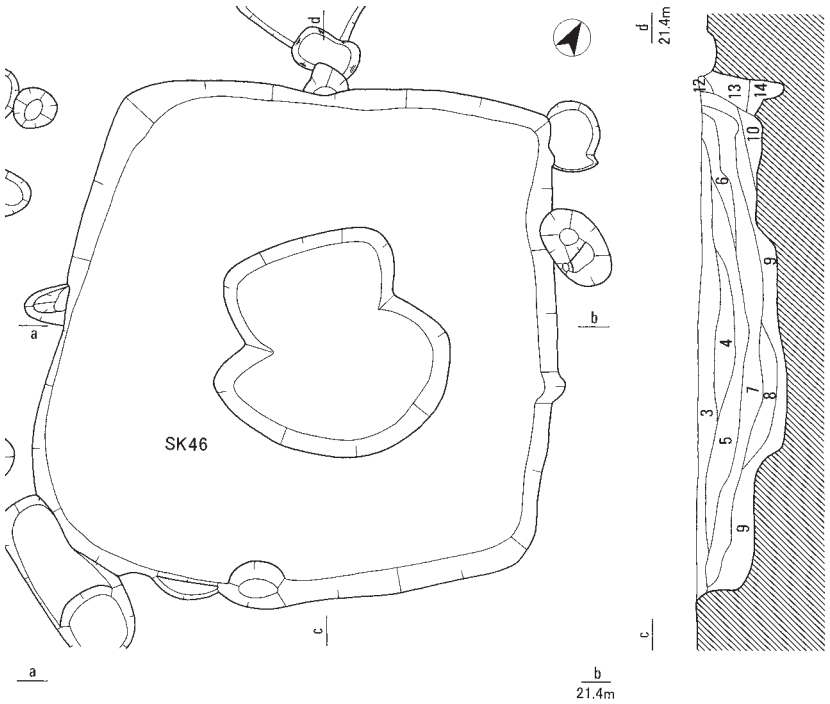
土坑

ＳＫ45（第25図） 調査区西端で検出された、平面形が楕円形をなす大型の土坑である。全体の１/３程度は調査区外へ出ており、全体を調査することはできなかった。深さは1.4mほどと深く、掘削中に調査区西壁となっている部分が崩落する恐れがあったため、西壁部分の下半を段状に掘り残している。

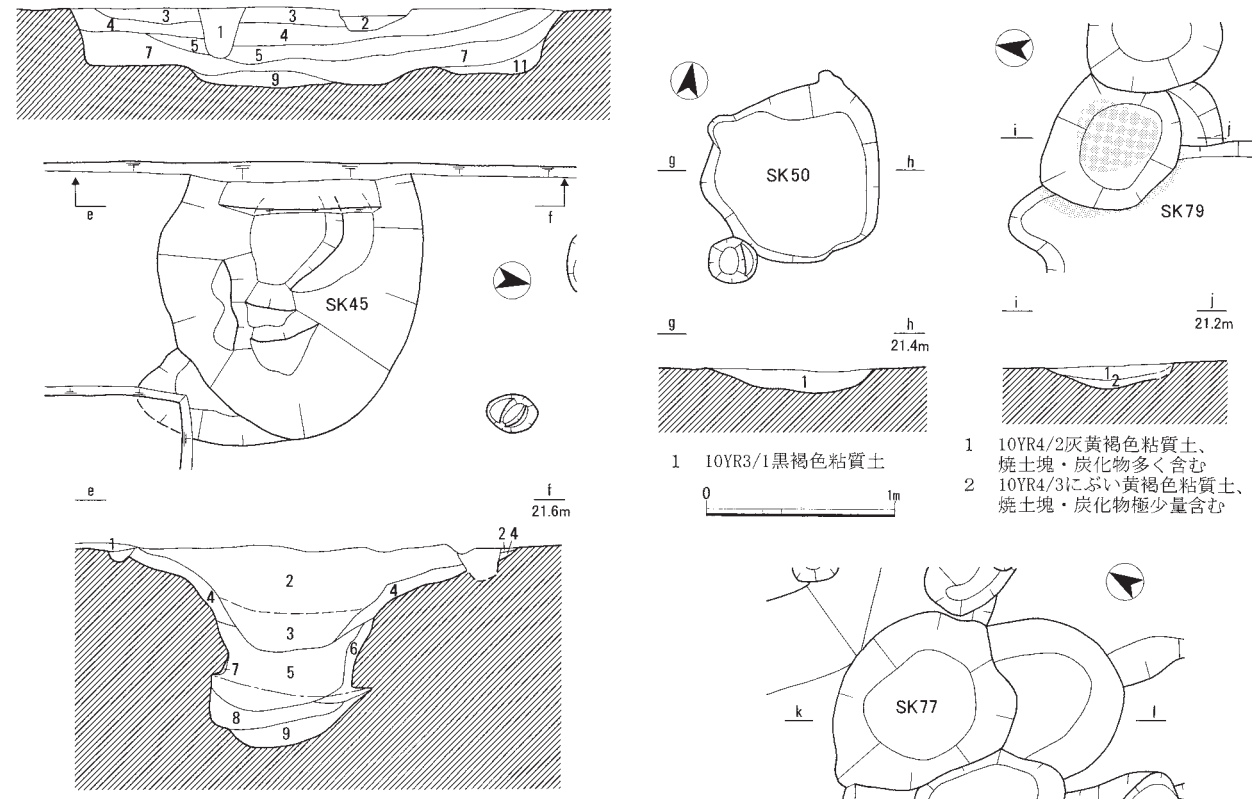
検出面から深さ30cmほどまでは浅い皿状を呈しているが、それより深い部分ではほぼ垂直に掘り込まれており、底面では径約50cmの円形となっている。北壁および東壁には階段状に段が設けられており、掘削などの作業に伴う足場として設けられた可能性がある。

内部に堆積していた土層は大きく３層に分かれる。最下層には地山と同系統の土が厚さ20cmほど堆積していた（８・９層）。その上には主にイネの籾殻に由来する灰白色の均質な灰（第７章自然科学分析参照）が厚さ40cmほど堆積しており（５層）、さらにその上層には黒褐色土（２・３層）が分厚く堆積していた。この遺構は、灰を貯蔵するための土坑と考えられ、最下層の地山由来の土は防湿もしくは床面整形のための置き土である可能性がある。土坑肩部にも灰を含む土層（４層）が認められることから、灰は本来土坑上面いっぱいまで入れられていたと思われ、上層の黒褐色土はＳＫ45が埋没する過程で灰が土圧などで圧縮された結果、徐々に内部へ落ち込んで堆積したものと思われる。

出土遺物としては、須恵器、土師器、土錘、平瓦、鉄製鋤先がある。これらの遺物のほとんどは上層の黒褐色土中から出土した。黒褐色土層下層の黒褐色



1　10YR3/2黒褐色粘質土（ピット埋土）
2　10YR3/1黒褐色粘質土（撹乱）
3　10YR3/2黒褐色細砂質土
4　10YR3/1黒褐色粘質土、細かい地山ブロック多く含む
5　10YR3/2黒褐色粘質土、細かい地山ブロック多く含む
6　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック含む
7　10YR3/3暗褐色粘質土、10YR2/1黒色粘質土・地山ブロック多く含む
8　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土、地山ブロック多く含む
9　10YR2/1黒色粘質土、炭化物・地山ブロック少量含む
10　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック少量含む
11　10YR3/3暗褐色粘質土、地山ブロック非常に多く含む
12　10YR3/1黒褐色粘質土（ピット埋土）
13　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む（ピット埋土）
14　10YR3/2黒褐色粘質土、地山ブロック少量含む



1　10YR3/1黒褐色粘質土

1　10YR4/2灰黄褐色粘質土、焼土塊・炭化物多く含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土、焼土塊・炭化物極少量含む

1　10YR4/6褐色粘質土、10YR3/3暗褐色粘質土ブロック多く含む
2　10YR3/2黒褐色粘質土、炭化物含む、遺物多く含む
3　10YR3/2黒褐色粘質土、遺物多く含む（２層から５層への漸移層）
4　10YR4/1褐灰色粘質土、10YR7/1灰白色ブロック含む
5　10YR7/1灰白色シルト質土、粒子非常に細かい（灰層）
6　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む
7　10YR2/1黒色粘質土
8　10YR5/2灰黄褐色粘質土、地山ブロック含む
9　10YR6/6明黄褐色粘質土、10YR5/2灰黄褐色粘質土ブロック含む

1　10YR3/2黒褐色粘質土、細かい焼土塊多く含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土、焼土塊少量含む
3　7.5YR4/3褐色粘質土、焼土塊少量含む
4　7.5YR3/1黒褐色粘質土、焼土塊含む

第25図　ＳＫ45･46･50･77･79平面図･断面図（ＳＫ45･46･77は1:50，ＳＫ50･79は1:40）

土から灰層への漸移部分（３層）からは土師器や鉄製鋤先などの遺物が出土しているが、純粋に灰のみが堆積している部分（５層）からは遺物は出土していない。なお、最下層の９層中からは須恵器の杯もしくは高杯の破片が出土している。

ＳＫ46（第25図） ＳＫ46は調査区中央部やや西よりで検出された一辺3.4m、深さ0.5mのほぼ正方形の大型の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面には柱穴などは認められないが、中央部には深さ10㎝程度の浅い掘り込みが認められる。

この土坑の埋土はどの層も地山由来の黄褐色粘質土の大きなブロックを大量に含み、人為的に埋め戻されたものと思われる。ほぼ最下層にあたる９層は北側と南側では認められるものの、東側と西側では確認できず、このことから北側と南側から埋め戻しが始められたと考えられる。また、９層が床面中央の掘り込み部分にも入り込んでいることから、床面中央の掘り込み部分には埋め戻された時点では何も存在していなかったものとみられる。

出土遺物には須恵器、土師器がある。規模に反して出土遺物の量は多くなく、図化できた遺物も少数にとどまる。

ＳＫ50（第25図） 調査区の南側で検出された浅い皿状の土坑である。埋土はほぼ１層である。遺物は土師器の細片が少量出土したのみである。

ＳＫ77（第25図） 調査区の北東部で検出された不整形な土坑で、竪穴住居ＳＨ62を一部破壊して掘り込まれている。埋土には焼土が多く含まれていた。出土遺物としては土師器がある。

ＳＫ79（第25図） 調査区の北東部で検出された、不整形な楕円形を呈する土坑である。深さは30㎝ほどと浅い。埋土には多量に焼土を含んでいる。竪穴住居ＳＨ62に接しており、この住居と何らかの関係を持つ施設であった可能性もある。

出土遺物としては土師器が出土している。小片が多く、図化できたものは１点のみであった。

小型台形土坑

ＳＫ38・44・51～60（第26図） Ｃ区では、平面形態が縦長の台形をなす小型の土坑が多数検出された。ＳＫ38・44・51～60の12基が該当するが、これらは平面形態・立面形態・規模・埋土状況などいずれも非常に似通った構造であるため、以下にまとめて概要を記述する。

これらの小型台形土坑は、いずれも長軸１～1.5m、最大幅0.5～0.8mである。深さは最大幅付近が最も深く、幅狭な部分はやや浅くなっており、最も深いＳＫ55で深さ0.5mほどある。側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、幅広となっている部分の壁面はややオーバーハングしているものも多い。

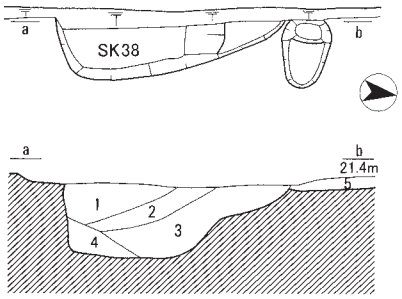
ＳＫ54・59などでは、最も深くなっている部分の床面に径５㎝程度、深さ10㎝程度の細い穴が検出された。ほかのものにもこうした穴が確認されたものがある。[(3)]

これらの小型台形土坑はいずれも一度埋まった後に一部を掘り返しているような状況が窺われる。最初に埋まった時の埋土は地山由来の粘質土ブロックを含んでおり、一定の方向から土が流入したような状況が認められ、人為的に埋められている可能性も考えられる。また、後に掘り返されたような部分の埋土には地山由来の粘質土ブロックが特に顕著に含まれている例が多く（第26図ＳＫ56の２～４層など）、この部分については人為的に埋め戻された可能性が高い。

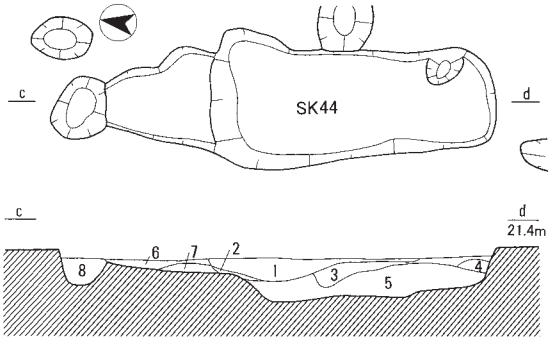
分布にも特徴があり、検出された範囲はＣ区西側のＳＦ61やＳＫ45より南側に限られている。第３次調査のＧ区やＨ区でも検出されているが、南限はＨ区のＳＫ102であり、これらの分布範囲以外では類似する土坑は全く検出されていない。

遺物としては、ＳＫ44・54・55・58・59などから須恵器、土師器などが出土している。いずれも飛鳥時代後期～奈良時代前期に属するものである。遺構同士の重複関係からみれば、ＳＫ59がＳＫ46を切ることや、ＳＫ54が柱穴を切ること、そしてＳＫ38が切っている土層（第26図ＳＫ38の５層）がＳＫ45の上面に堆積する土層（第25図ＳＫ45の１層）であるとみられることなどから、多くは西野田遺跡の存続期間の中でも後半期に形成されたものである可能性が高い。

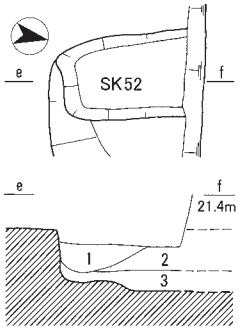
これらの小型台形土坑の性格は不明である。倒木痕とも考えられるが、いずれも平面形態・立面形態・規模が非常に類似すること、埋土に掘り返されたような状況が認められること、主軸方向が一致しない



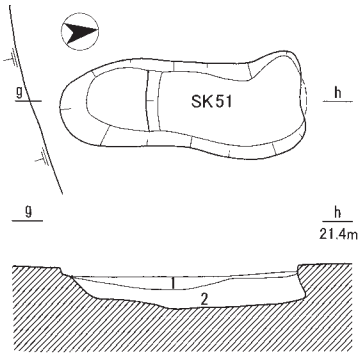
1　10YR6/6明黄褐色粘質土、10YR2/2黒褐色粘質土ブロック含む
2　10YR2/2黒褐色粘質土、10YR4/6褐色砂質土ブロック少量含む
3　10YR2/2黒褐色粘質土、10YR4/6褐色砂質土ブロック含む
4　10YR3/2黒褐色粘質土
5　10YR4/6褐色粘質土、10YR3/3暗褐色粘質土ブロック多く含む



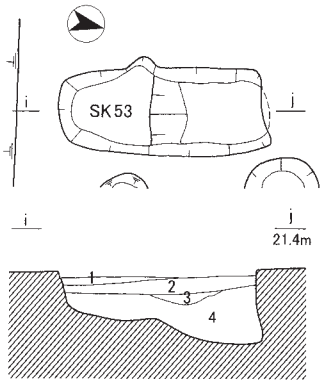
1　10YR2/1黒色細砂質土
2　10YR4/2灰黄褐色細砂質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック含む
3　10YR4/2灰黄褐色細砂質土、10YR6/4にぶい黄橙色粘質土ブロック含む
4　10YR6/6明黄褐色粘質土、10YR4/2灰黄褐色粘質土含む
5　10YR3/1黒褐色細砂質土
6　10YR5/2灰黄褐色粘質土
7　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
8　10YR4/2灰黄褐色細砂質土（ピット埋土）



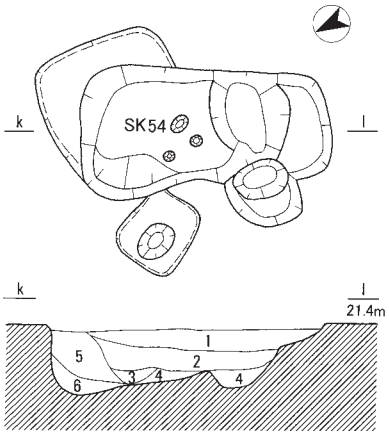
1　10YR4/3にぶい黄褐色細砂質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック含む
2　10YR3/1黒褐色細砂質土、10YR6/6明黄褐色粘質土層状に含む
3　10YR2/1黒色細砂質土



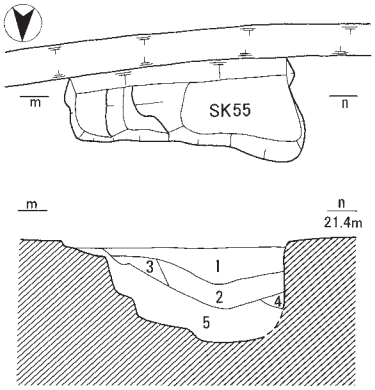
1　10YR4/1褐灰色細砂質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック含む
2　10YR3/2黒褐色細砂質土、10YR5/2灰黄褐色細砂質土ブロック少量含む



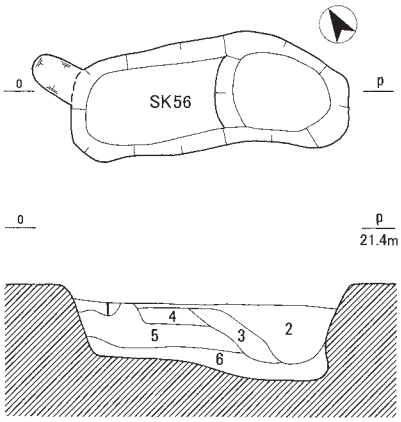
1　10YR5/2灰黄褐色細砂質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック多く含む
2　10YR3/1黒褐色細砂質土
3　10YR4/1褐灰色細砂質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック多く含む
4　10YR3/2黒褐色細砂質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック含む



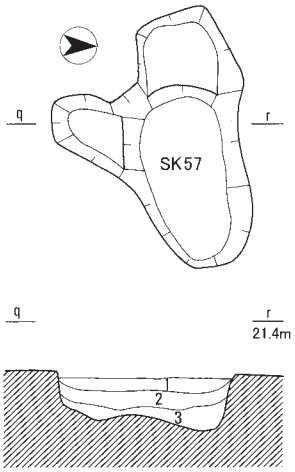
1　10YR3/3暗褐色粘質土
2　10YR3/4暗褐色粘質土、10YR5/6黄褐色粘質土ブロック含む
3　10YR3/2黒褐色粘質土
4　10YR3/1黒褐色粘質土、10YR5/6黄褐色粘質土ブロック多く含む
5　10YR3/1黒褐色粘質土（ピット埋土）
6　10YR3/2黒褐色粘質土、10YR5/6黄褐色粘質土ブロック含む（ピット埋土）



1　10YR5/2灰黄褐色粘質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック多く含む
2　10YR4/2灰黄褐色粘質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック多く含む
3　10YR6/6明黄褐色粘質土
4　10YR5/2灰黄褐色粘質土
5　10YR4/1褐灰色粘質土、10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック含む



1　10YR4/6褐色粘質土（ピット埋土）
2　10YR3/1黒褐色粘質土、10YR4/6褐色粘質土ブロック含む
3　10YR4/6褐色粘質土、10YR3/1黒褐色粘質土層状に含む
4　10YR4/6褐色粘質土
5　10YR3/1黒褐色粘質土、10YR4/6褐色粘質土含む
6　10YR3/1黒褐色粘質土



1　10YR2/1黒色粘質土、10YR4/6褐色粘質土ブロック少量含む
2　10YR2/1黒色粘質土
3　10YR4/6褐色粘質土、10YR2/1黒色粘質土含む

0　2m

第26図　ＳＫ38･44･51～57平面図･断面図(1:40)

こと、第３次調査の成果を踏まえてもＣ区南側部分に集中して存在することなどからみて、倒木痕とは考えにくい。ＳＦ61近辺に分布することから、粘土採掘坑の可能性も考えられるが、当該区域では１ｍ以上掘削しても良質な粘土層に達することはなく、粘土採掘坑の可能性も考えにくい。小型であることや、二次的に掘り返されていることなどからみて墓である可能性も低い。

溝

ＳＤ47（第27図） 調査区のほぼ中央部で検出された南東から北西へと向かってのびる浅い溝である。ＳＦ61のやや南側で途切れている。埋土は１層で、出土遺物も土師器の細片がごく少量出土したにとどまる。そのため、明確な時期は不明であるが、他の遺構との切り合い関係や古代より新しい遺物を含まない点などからみて、他の遺構と同様に飛鳥時代後半～奈良時代前半に属するものと考えられる。

ＳＤ78（第27図） ＳＦ61の北側で検出された溝である。ＳＦ61に壊されている。ごく一部しか検出できなかったが、方向などからみてＳＤ47と連続するものとも考えられる。遺物としては土師器が出土しているが、小片のため図化できたものはなかった。

土師器焼成坑

ＳＦ61（第28～30図） 調査区のほぼ中央部で検出された土師器焼成坑ＳＦ61は、天井部をのぞいてほぼ完全な状態で検出された。平面は二等辺三角形をなし、長さ2.4m、最大幅1.5mである。残存している最も深い部分で40㎝程度を測る。

本体部分は地山を掘り込んで作られており、内面に粘土などを貼った痕跡は認められず、素掘りである。二等辺三角形の底辺部分（以下､前壁と呼称）と、側辺部分（以下、側壁と呼称）はほぼ垂直に立ち上がるが、焼成時に発生する煙を逃がしたと思われる二等辺三角形の頂点にあたる部分（以下、煙出し部と呼称）に向かっては緩やかに浅くなっていっている。

両側壁と前壁の付近には焼け残った薪材が良好に遺存していた。これらの薪材の詳細については第７章・第８章第３節に詳述しているが、いずれも壁に沿うようにきれいに並べられており、薪材同士の重なり合いはほとんどなかった。

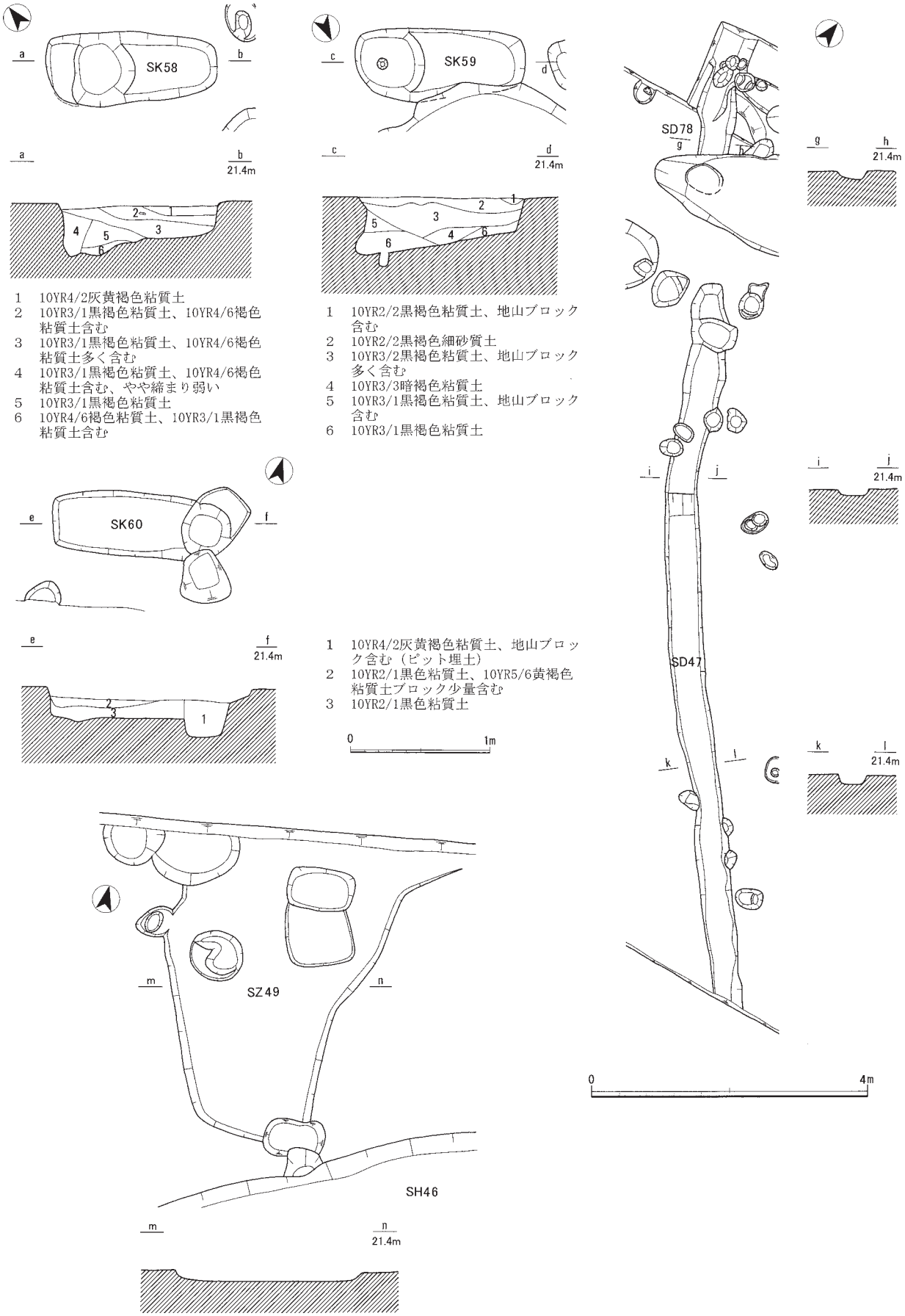
床面・壁面は強く被熱しており、特に壁面が被熱により堅く焼き締まっていた（第28図）。床面の被熱は壁面に比べて弱く、特に薪材が検出された側壁･前壁付近では赤く焼けている部分は少なく、薪材によって熱が遮られたものと思われる[(4)]。また、煙出し部から前壁へ向かって70㎝程度の範囲も被熱が弱く、赤く焼けている部分はほとんど認められなかった。この部分には細かな炭化物が多く堆積しており（７層）、焼成に伴って生じた細かな炭化物が内部の煙や空気の排出に伴って煙出し部に堆積した可能性もある[(5)]。

天井・被覆などの上部構造については、焼成後に製品を取り出す際に取り除かれることや、削平などによって全く遺存していなかったが、埋土中から上部の被覆材の一部と考えられる焼土塊を検出した。これらの焼土塊は壁面や床面にくらべて被熱が弱く、脆い。焼成の悪い土器のような焼け方をしている。部分的に植物繊維の痕跡が残っている個体もあり、被熱時にワラなど植物質のものと接していたものと推定される。ＳＦ61の埋土中にはこうした天井材と思われる焼土塊が多く含まれる部分も認められた（２層）。

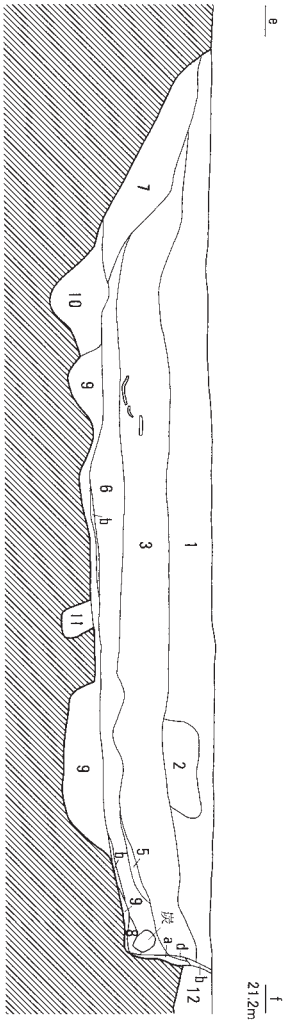
ＳＦ61には拡張や壁面部分の補修・作り替えなどは認められず、焼成に使用された回数は１回ないし、ごく少数回であったものと思われる。

ただし、土層断面の観察によって、床面の被熱層の下に炭化物や焼土粒を含む汚れた暗褐色土層（９層）が、ほぼ床面全体にわたって認められた。９層直下の地山面はかなり凹凸が激しいことから、９層はこの凹凸をなくし、床面を整地するためになされた整地土である可能性がある。床面の被熱層はこの９層が被熱して形成されたものであり、そのためシルト質の粘質土である地山が被熱した側壁部分よりも、焼き締まり方が弱くなったものと考えられる[(6)]。この９層に炭化物や焼土粒が含まれることと、９層下の地山面が激しく凹凸をなすことからは、床面のみ作り替えが行われた可能性も考えられる。

また、ＳＦ61の周囲には焼土の広がりがいくつか認められた。その多くはＳＦ61築造以前の遺構に関係するものと考えられるが、前壁のすぐ外側に存在するピットについては、ＳＦ61から焼土を含んだ土



第27図　ＳＫ58～60，ＳＤ47･78，ＳＺ49平面図･断面図(1:40，ＳＤ47･78は1:80)

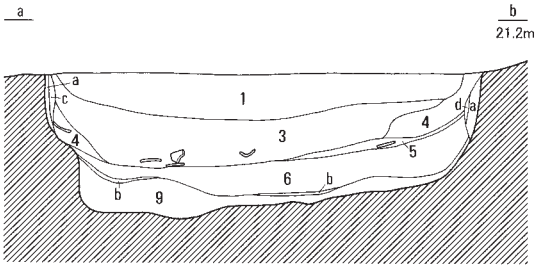


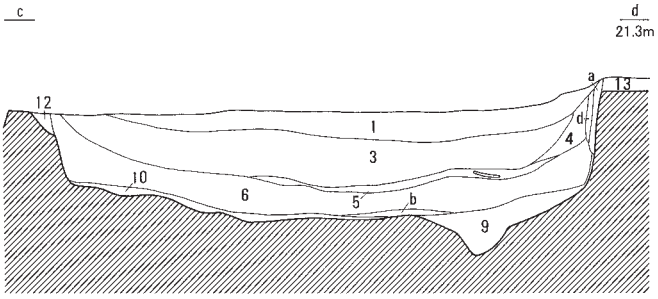
1　10YR3/1黒褐色粘質土
2　10YR2/1黒色粘質土、被熱土ブロック多く含む（被覆材？）
3　10YR2/2黒褐色粘質土、細かい焼土塊・炭化物全体に少量含む
4　10YR2/1黒色粘質土、細かい焼土塊・炭化物全体に少量含む
5　7.5YR5/6明褐色細砂質土、黒色土ブロック・焼土塊多く含む
6　7.5YR5/6明褐色細砂質土、黒色土ブロック・小焼土塊・土器・炭化物多く含む
7　10YR3/2黒褐色粘質土、焼土塊・炭化物少量含む
8　10YR2/2黒褐色細砂質土
9　10YR3/4暗褐色粘質土、地山ブロック多く含む、細かい焼土塊少量含む
10　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む（溝状遺構埋土）
11　10YR4/2灰黄褐色粘質土（根？）
12　10YR3/1黒褐色粘質土、地山ブロック・焼土塊少量含む（土坑埋土？）
13　10YR4/2灰黄褐色粘質土、焼土塊・炭化物多く含む（落ち込み埋土）

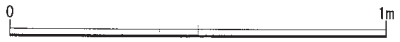
a　5YR4/8赤褐色細砂質土（地山被熱土、被熱度弱）
b　5YR5/6明赤褐色細砂質土（被熱土、被熱土弱）
c　5YR5/8明赤褐色細砂質土（地山被熱土、被熱度強）
d　7.5YR6/8橙色細砂質土（地山被熱土、被熱度強）

色調ａ・ｂの範囲（弱く被熱）

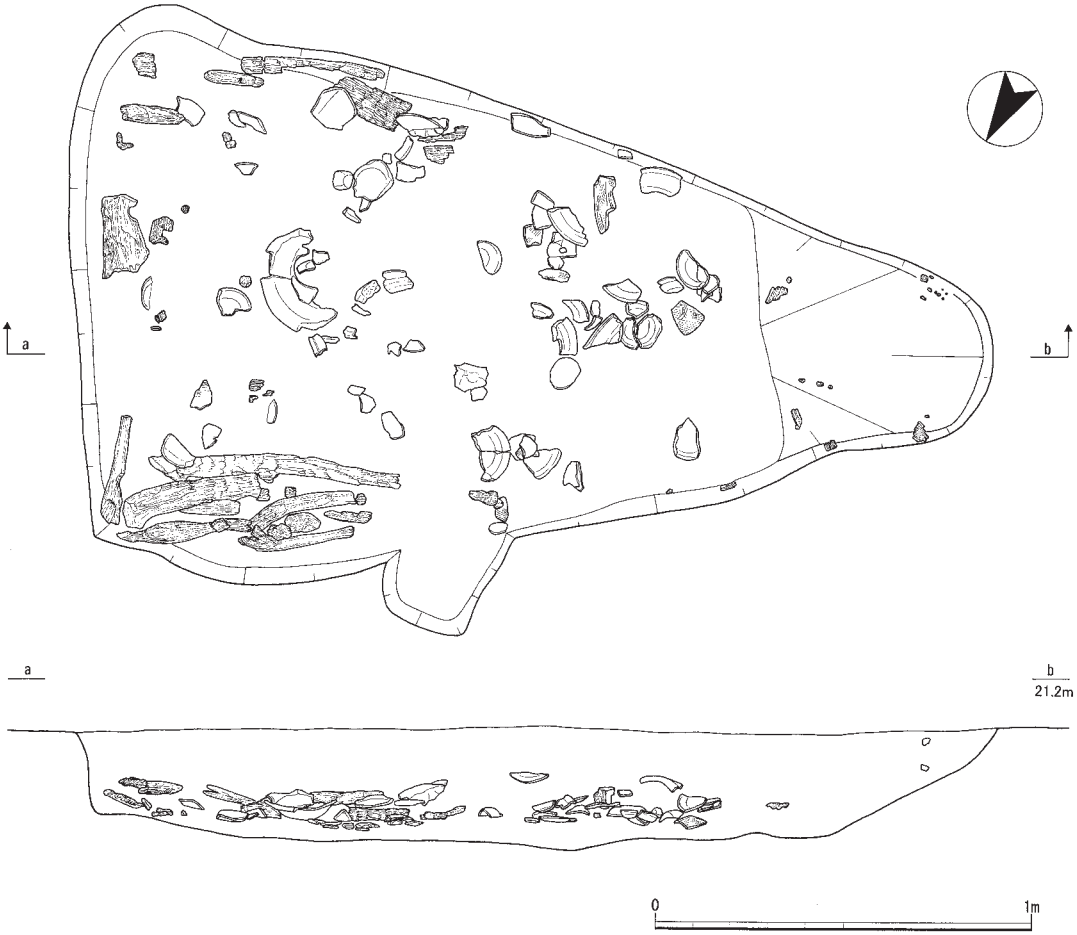
色調ｃ・ｄの範囲（強く被熱）



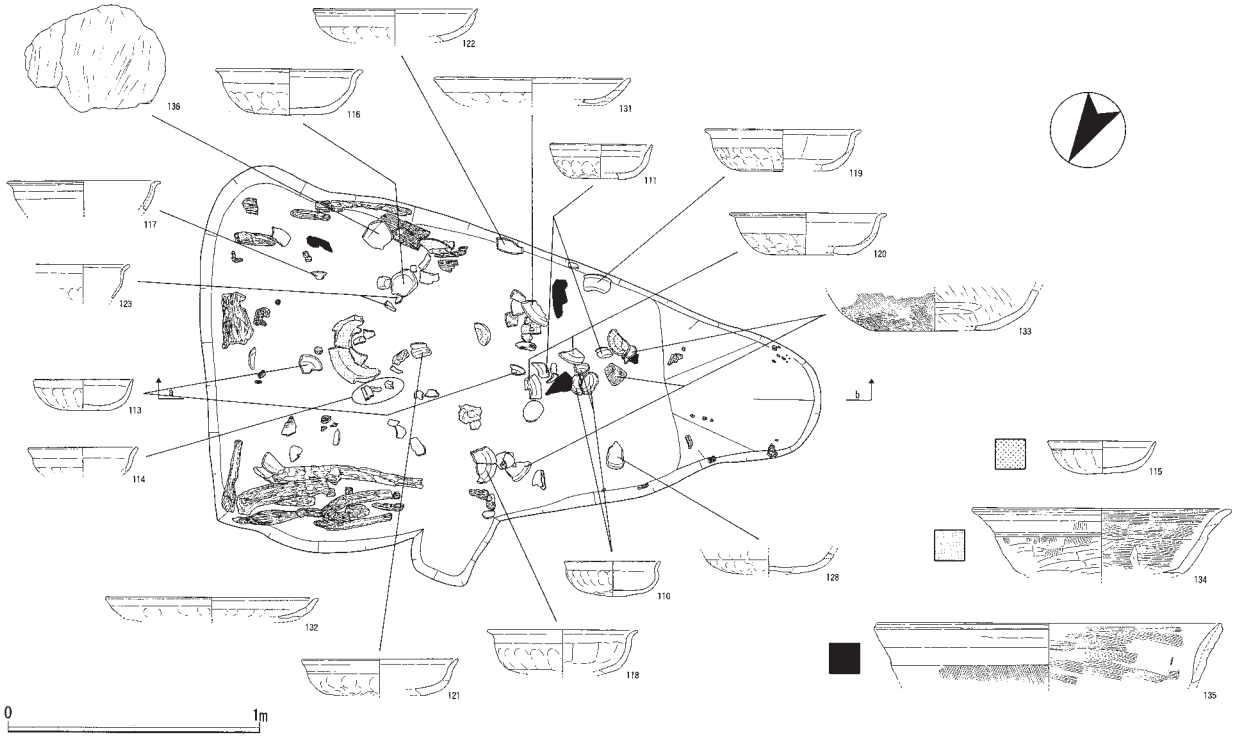




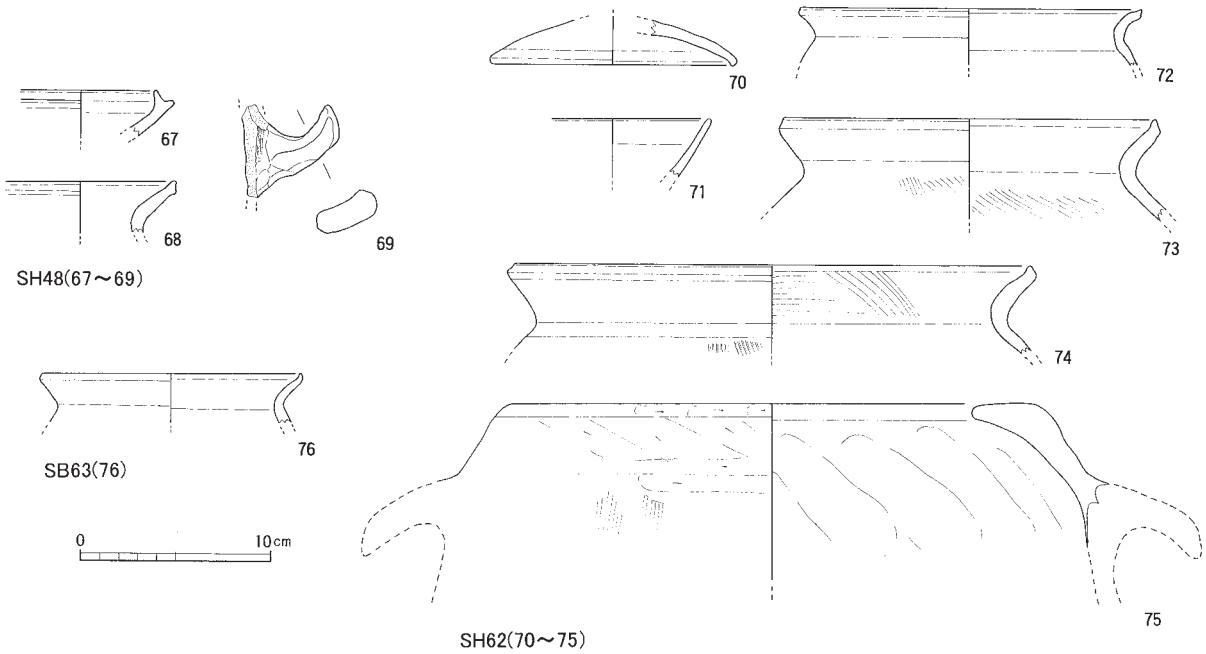
第28図　ＳＦ61平面図･断面図(1:20)



第29図　ＳＦ61遺物出土状況図(1:20)



第30図　ＳＦ61破片分布図(1:30,遺物1:8)



第31図　ＳＨ48･62,ＳＢ63出土遺物実測図(1:4)

が流れ込んでいるような様相が検出時に観察されており、ＳＦ61に関係するようなものであった可能性がある。

遺物は土師器杯・鍋が出土した。床面直上の６層からも少量の遺物が出土しているが（第34図114)、ほとんどの遺物は６層の上に堆積している３層から出土している。

土器の出土状況は雑然としており、同一個体の破片がやや散らばって検出されていることからみても(第30図)、焼成時の配置を反映した出土状況を示す個体はないと考えられる。したがって、３～５層から出土した土器は焼成が行われ、製品が取り出された後に投棄された失敗品であると考えられる。ただし、ＳＦ61中央部よりやや西側の土器が集中して出土した地点で、土器片の直下から焼成に伴うものと見られる植物灰が良好な状態で検出されたことから、これらの土器は焼成終了後比較的早い段階でＳＦ61中に廃棄されたものであるとみられる。

なお、上述の土器の直下で検出された植物灰はイネの籾殻を含んでおり、土師器の焼成にあたっては木材燃料と共に、イネの籾殻などが併用されていたことが判明した[7]。

その他の遺構

ＳＺ49（第27図）　ＳＫ46の北側で検出された不整形な浅い落ち込み状の遺構である。北端は調査区外へ出ており、全体の形状は不明である。ＳＫ46へとつながっていた可能性もあるが、両者が接する部分に重なってピットが掘り込まれており、直接的な関係は明らかにできなかった。

床面には凹凸が顕著に認められ、全体の深さも一定していない。また、床面の一部には被熱が認められ、埋土には細かな焼土塊や炭化物が含まれていた。

遺物としては土師器が出土しているが、小片のみで図化できたものはなかった。

②遺物

ＳＨ48出土遺物（第31図67～69）

須恵器（67）　杯Ｈが出土している。口径は不明であるが、たちあがりはかなり退化している。

土師器（68・69）　甕の口縁部片と甕もしくは甑の把手が出土している。

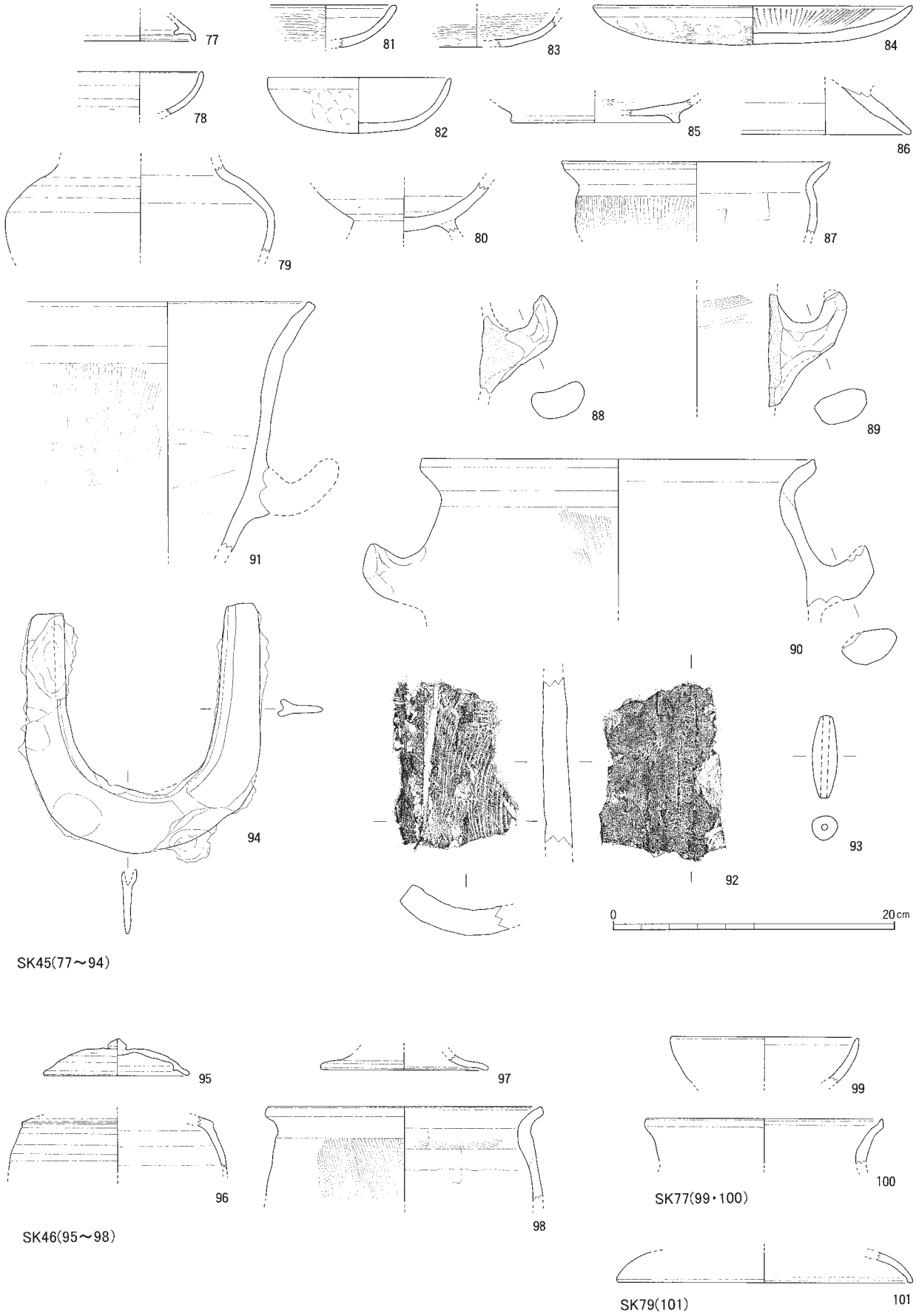
ＳＨ62出土遺物（第31図70～75）

須恵器（70・71）　杯Ｂ蓋、杯が出土している。杯Ｂ蓋（70）は小型で、口縁端部がやや内面へ肥厚するが、明瞭な折り返しは認められない。71は杯の口縁部と考えられる。杯Ａの可能性が高い。

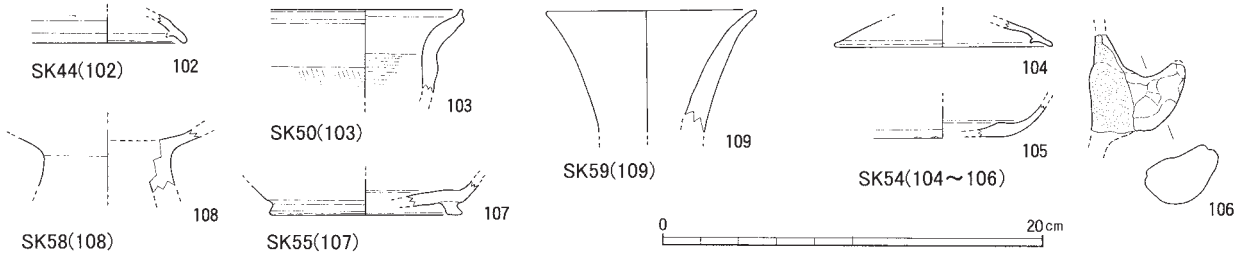
土師器（72～75）　甕と竈が出土している。甕はいずれも口縁端部に面を作る。竈は口縁部の小片であるが、把手が付くものと思われる。口縁部は内側へ突出する。

ＳＢ63出土遺物（第31図76）

土師器（76）　甕の口縁部片が出土している。口縁端



第32図　ＳＫ45･46･77･79出土遺物実測図(1:4)



第33図　ＳＫ44･50･54･55･58･59出土遺物実測図(1:4)

部には面を作る。

ＳＫ45出土遺物（第32図77～94）

須恵器（77～80）　杯Ａ蓋、杯ないし高杯、壺などが出土している。杯Ａ蓋（77）のかえりはかなり退化している。口径は復元できなかったが、かなり小型化しているものと思われる。78は薄手で内弯する口縁部であり、杯ではなく高杯の杯部片である可能性がある。壺（79）は頸部径が大きいと考えられ、短頸壺である可能性が高い。

土師器（81～91）　杯Ｃ、皿Ａ・Ｂ、椀Ｃ、甕、甑等が出土している。杯Ｃ（81）は底部外面をケズリによって調整し、体部外面にはミガキを施す。暗文は認められない。83も杯Ｃであると考えられ、内外面にミガキを施す。椀Ｃ（82）は内外面ともにユビオサエ・ユビナデなどによって調整されており、ＳＦ61出土の杯類と類似する形態を持つ。皿Ａ（84）は内面に放射状の暗文を施す。器高は低く、口縁端部は丸く収める。85は杯Ｂないし皿Ｂと思われる。86は器種不明の破片である。高杯等の脚端部である可能性がある。甕もしくは甑の把手（88・89）が出土しているが、90・91などと同一個体である可能性もある。

瓦（92）　平瓦の破片である。凹面側に布目が残る。側面端部は面取りがなされ、凹面側の側面付近はヘラケズリによって整えられている。

土錘（93）　管状土錘が１点出土している。焼成は土師質で、両端部は細く窄まる。

金属製品（94）　ほぼ完形の鉄製の鋤先が１点出土している。３層から出土した。ほぼ完形であり、平面形はＵ字形を呈する。木質の遺存は明確には確認できず、埋没時には着柄状態ではなかった可能性が高い。

ＳＫ46出土遺物（第32図95～98）

須恵器（95・96）　杯Ａ蓋、壺が出土している。杯Ａ蓋（95）は小型の宝珠つまみを付ける。矮小化したかえりを持ち、口径もかなり小さい。96は壺の肩部と思われる。屈曲部直下は凹線状になっている。肩部から胴部へ向かってやや径が大きくなっており、径があまり大きくないことなどを考慮すると壺蓋などである可能性もある。

土師器（97・98）　高杯、甕が出土している。97は高杯の脚端部であると思われる。甕（98）は外面にタテハケを施しており、内面には横方向の板ナデ状の痕跡が認められる。

ＳＫ77出土遺物（第32図99・100）

土師器（99・100）　杯、甕が出土している。99は杯Ｇないし椀Ｃと思われる。口縁は丸く収められ、口縁部はやや内弯する。内外面の調整は風化により不明瞭である。甕（100）の口縁端部には明瞭に面が作られている。

ＳＫ79出土遺物（第32図101）

土師器（101）　杯Ｂ蓋が出土している。口縁端部の小片であり、皿である可能性もある。口縁端部内面はやや内側へ向かって屈曲する。内外面の調整は風化により不明瞭である。

ＳＫ44出土遺物（第33図102）

須恵器（102）　杯Ａ蓋が出土している。口縁端部の小片であるが、かえりは矮小化し、ほぼ痕跡化している。

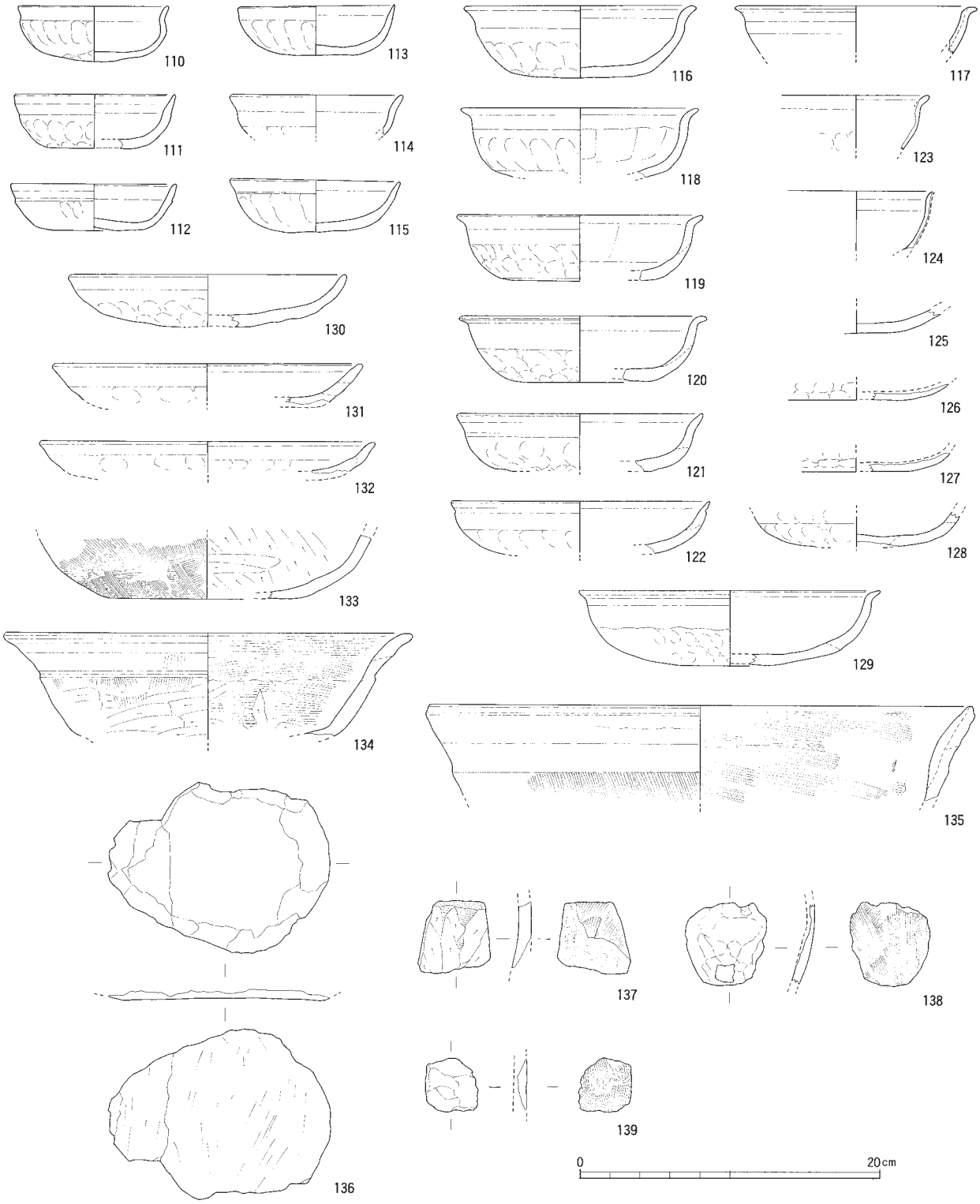
ＳＫ50出土遺物（第33図103）

土師器（103）　甕が出土している。口縁端部には明瞭に面を作っている。

ＳＫ54出土遺物（第33図104～106）

須恵器（104・105）　杯Ａ蓋、杯Ａが出土している。杯Ａ蓋（104）は口径が小さく、かえりは矮小化しほぼ痕跡化している。杯Ａ（105）の底部外面はヘラ切り無調整である。

土師器（106）　甕ないしは甑の把手が出土してい



第34図　ＳＦ61出土遺物実測図(1:4)

る。

ＳＫ55出土遺物（第33図107）

須恵器（107）　杯Ｂが出土している。小片であるが角高台を持ち、底部の高台内部は下方へ向かってかなり突出するようである。高台のすぐ外側で屈曲し、上方へ向かって立ち上がる。

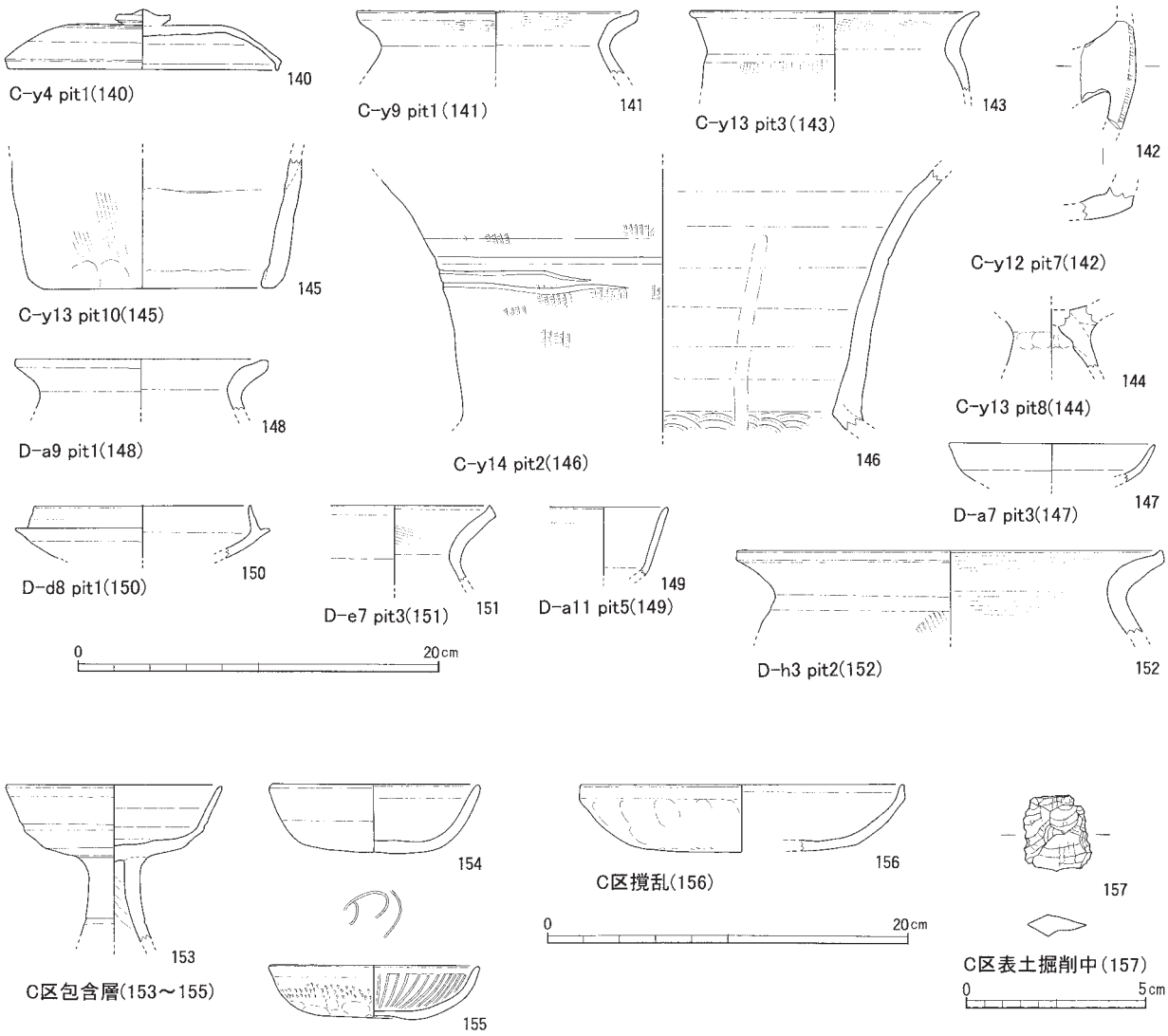
ＳＫ58出土遺物（第33図108）

須恵器（108）　高杯が出土している。頸部の小片である。頸部径はやや太い。

ＳＫ59出土遺物（第33図109）

須恵器（109）　長頸壺の口縁部が出土している。

ＳＦ61出土遺物（第34図110～139）



第35図　C区ピット･包含層等出土遺物実測図(1:4,157のみ1:2)

土師器（110～139）　ＳＦ61からは多くの土師器が出土したが、いずれも破片化が著しく、全形を復元できた個体は一部であった。

出土した土師器は、椀Ｃと椀Ｄ、鍋が主体であり、図化できたものもこれらの器種のみである。それ以外の器種と思われる破片はごくわずかしか確認できなかった。

椀Ｃ（110～129）には大きく２種類のサイズが確認できる。口径が10～11cm前後のもの(110～115)と、口径が15～17cm前後でやや扁平な形態を示すもの(116～129）である。いずれも外面は口縁部付近のみをヨコナデし、体部から底部にかけては成形時のナデやユビオサエを明瞭に残す。内面はナデによって調整されており、一部では工具を用いてナデを行ったような痕跡も認められる（119・125など)。また、大きいサイズの一群には、口縁端部の強い外反が特徴的に認められる。この点に関しては、西野田遺跡出土の椀Ｃ一般にみられる口縁部のヨコナデが、特に強く施されることによって外反することとなったものと考えられる。

椀Ｄ（130～132）は椀Ｃの大きいサイズのものをさらに扁平にした皿状の形態のもので、内外面の調整は椀Ｃと共通する。

鍋（133～135）は浅く口縁が大きく外反する形態のもと思われる。把手は付けられていない可能性が高い。内外面ともハケで調整されるが、底部にはヘラケズリが認められる。135は剥離した多くの破片から復元しているため、口径の復元にはやや不安を残しており、本来は134と同程度の法量である可能性もある。

これらの椀Ｃ・椀Ｄ・鍋については、焼成時に破損したと思われる破片で占められている。焼成時の破損状況については第８章に詳述しているが、出土した土師器片の中には、焼成時に器壁から剥離したと思われる破片[8]が多く認められる。中でも鍋の器壁から剥離したと思われる破片が多い（136～139）。136は134の底部から剥離した破片である可能性が高い。

ＳＦ61から出土した土師器は、器種の偏りや破損状況からみて、ほとんどが焼成時の失敗品であるものと考えられる。そして、現状ではＳＦ61以外に土師器焼成坑が検出されていないことや、出土した土師器同士の形態の共通性がかなり高いことなどを考えれば、これらの土師器はいずれもＳＦ61での焼成に伴う失敗品である可能性が極めて高い。

これらの遺物の時期を比定することは難しい。しかしながら、椀Ｃに都城出土の椀Ｃとの関係性を考え得ることや、椀Ｃと鍋の形態、椀Ｃにみる法量分化などを積極的に評価すれば、７世紀末～８世紀初頭の飛鳥Ｖ・平城宮Ｉあたりに位置づけられる可能性が高いものと思われる。

C-y4pit １出土遺物（第35図140）

須恵器（140） 杯Ｂ蓋が出土している。器高はやや高く、扁平なつまみを持つ。口縁端部は内側へ折り返されている。

C-y9pit １出土遺物（第35図141）

土師器（141） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部には面を作る。

C-y12pit ７出土遺物（第35図142）

須恵器（142） 甑の底部片が出土している。おそらく楕円形になると思われる孔が一部残存している。焼成は甘く、やや軟質である。

C-y13pit ３出土遺物（第35図143）

土師器（143） 甕が出土している。頸部のくびれは弱い。

C-y13pit ８出土遺物（第35図144）

土師器（144） 高杯の頸部片が出土している。脚部内面にはシボリ痕が認められる。

C-y13pit10出土遺物（第35図145）

土師器（145） 甑の底部片が出土している。外面にはタテハケが施されている。

C-y14pit ２出土遺物（第35図146）

須恵器（146） 甕の破片である。体部はほとんど遺存していないが、わずかに遺存している部分には同心円状の当て具痕が認められる。頸部外面にはヘラによる沈線が施されている。頸部内面には自然釉が厚く付着している。

D-a7pit ３出土遺物（第35図147）

須恵器（147） 高杯の杯部片と思われるものが出土している。口縁端部は丸く収め、体部中位でやや屈曲する。

D-a9pit １出土遺物（第35図148）

土師器（148） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部はやや丸く収められ、明瞭な面は認められない。

D-a11pit ５出土遺物（第35図149）

須恵器（149） 杯の口縁部片が出土している。体部下位で屈曲しており、内外面とも回転ナデできれいにナデられていることなどから杯Ｂの破片である可能性が高いであろう。

D-d8pit １出土遺物（第35図150）

須恵器（150） 杯Ｈが出土している。立ち上がりは比較的高く、口径もやや大きいなど、西野田遺跡出土遺物の中でも時期的に遡る特徴を備えている。

D-e7pit ３出土遺物（第35図151）

土師器（151） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部には明瞭に面が作られており、頸部内面にはヨコハケが認められる。

D-h3pit ２出土遺物（第35図152）

土師器（152） 甕が出土している。口縁端部には明瞭に面が作られており、体部外面にはタテハケが施されている。

Ｃ区包含層出土遺物（第35図153～155）

須恵器（153） 高杯が出土している。包含層掘削中に出土したが、ピットなどの遺構に伴っていた可能性が高い。杯部は底部から屈曲して立ち上がる。脚部に透孔は認められない。

土師器（154・155） 杯Ｃ・杯Ｇが出土した。杯Ｇ（154）は風化によって器壁の遺存状況が悪いが、内外面ともにナデで調整されているようである。杯Ｃ（155）は口縁端部内面にはナデによる傾斜面をもつ。内面に放射状の暗文を施し、見込み中央には螺旋状の暗文を施している。また外面には、先の尖った工具に

よる刺突痕が認められる。こうした外面に刺突痕を持つ杯Ｃは、近在する堀田遺跡などでも出土している。[9] 154・155はいずれもＳＨ62付近から出土しており、ＳＨ62に関連する遺物である可能性がある。

Ｃ区撹乱出土遺物（第35図156）

土師器（156） 撹乱内から椀Ｃが出土している。外面はユビオサエ・ユビナデによって調整しており、口縁部にはヨコナデを施す。ＳＦ61出土の椀Ｃのうち大型のものと法量などの面で類似するが、口縁端部は外反せず逆にやや内傾する。

Ｃ区表土掘削中出土遺物（第35図157）

石製品（157） 剥片が１点表土掘削中に出土している。石材は赤色のチャートであり、一部に自然面が残存している。おそらく縄文時代に属するものと考えられる。

第３節　ウ～コ区の調査

本節では主にコ区で検出された遺構・遺物について述べたい。ただし、ウ・エ調査区で検出された遺構・遺物はごく少数であるため、これらの調査区において検出された遺構・遺物についても本節でまとめて報告する。

①遺構

竪穴住居

ＳＨ74（第38図） コ区東端において検出された竪穴住居である。ＳＨ19と同一遺構の可能性が高い。大半が調査区外に出ており、ごく一部の調査にとどまった。そのため規模や詳細な構造などは不明であるが、平面形態は方形をなすものと考えられる。床面からはピットが２基確認されており、柱穴と考えられる。貼床の痕跡は確認できなかった。

竈の明確な位置は不明であるが、調査区東壁付近で少量の焼土の広がりを確認しており、竈は住居北壁沿いに設けられていた可能性が高い。また、この付近は掘り残されたようにやや高まりとなっており、この高まりが竈構築時の基礎部分となっていた可能性もある。

出土遺物としては、須恵器、土師器などがある。これらの出土遺物からみて、奈良時代前期の遺構と考えられる。

掘立柱建物

ＳＢ40（第38図） コ区西端付近で検出された２間の柱列である。地形的に高くなっている地区であるためにかなり削平を受けており、遺存状況はあまりよくない。掘立柱建物の一辺を検出した可能性が高いが、調査区の幅が狭いため、他の辺を構成する柱は調査区内では検出できなかった。

いずれの柱穴も２つの柱穴が切り合っているが、柱痕は片方の柱穴のみに認められる。このことから建て替えが行われているものと考えられる。柱痕が認められた柱穴に切られるピットが東側に存在することから、東側にややずらして建て替えが行われたものと考えられる。

柱穴からは須恵器、土師器が出土している。

ＳＢ69（第38図） ＳＢ40の柱穴列とほぼ一列に並ぶ２間の柱列である。削平により遺存状況はよくないが、掘立柱建物の一辺を検出した可能性が高い。

ＳＢ40と同様に建て替えの痕跡がみられるが、ＳＢ40とは異なり西側へずらして建て替えたことが窺われる。ＳＢ40と一連の建物を形成していた可能性もあるが、柱穴の芯心間距離や、建て替え時に柱穴をずらした方向などから、別の建物と推定した。

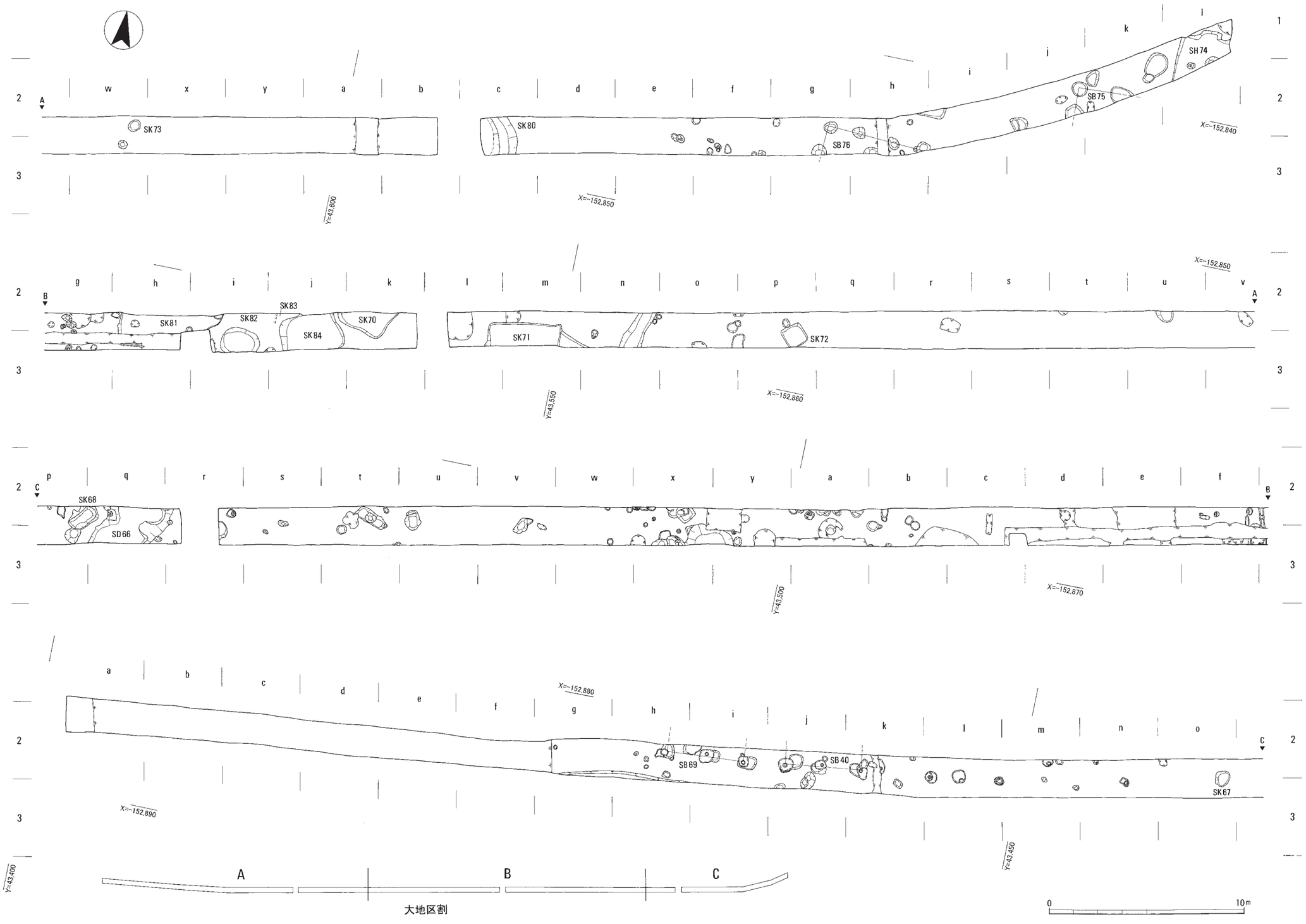
出土遺物はないが、ＳＢ40との関係性を考えるとＳＢ40と同時期もしくはそれに近い時期のものである可能性が高いと思われる。

ＳＢ75（第38図） コ区の東端付近で検出された。ＳＨ74の西側に存在する。この掘立柱建物も、大部分が調査区外へとのびている。調査区内では梁行・桁行ともに１間分しか確認できなかった。そのため主軸方向は不明であるが、ＳＢ76とほぼ同様の主軸方向をとるものとみられる。

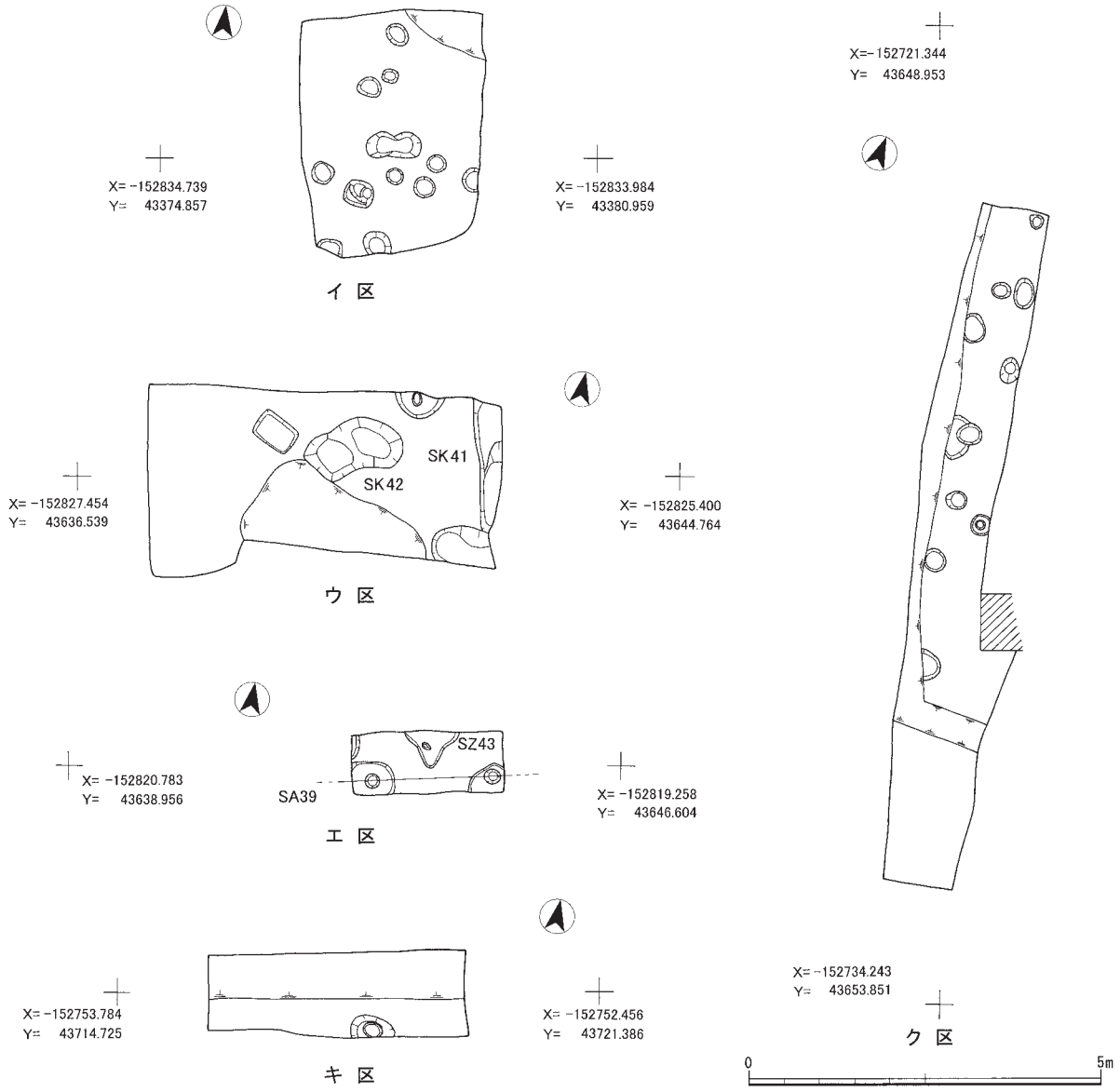
柱痕は明瞭には検出できなかったが、柱穴は長径80～100㎝前後、深さは最も深いもので50㎝とかなり大きく、大型の掘立柱建物の一部であるものと思われる。

柱穴から土師器の小片が出土している。

ＳＢ76（第38図） コ区の東端付近で検出された。調査区の幅が狭いため、半分以上は調査区外へのびて



第36図　コ区遺構平面図(1:200)



第37図　イ～エ･キ･ク区遺構平面図(1:100)

いる。調査区内では桁行３間、梁行１間分しか確認できていないが、側柱建物である可能性が高い。主軸方向はＮ３°Ｅである。

柱痕は明瞭には検出できなかったが、柱穴は長径60～80cm前後、深さは最も深いもので55cmと大きく、大型の掘立柱建物の一部と思われる。

柱穴から土師器が出土している。

柱列

ＳＡ39（第38図）　エ区で検出された２つのピットからなる。ピットは径約70cmとしっかりしており、いずれも柱痕が認められた。両者の柱痕の心芯間距離が、他の掘立柱建物の柱間の長さと近い1.7mであることなどからみて、掘立柱建物の一部である可能性が高い。

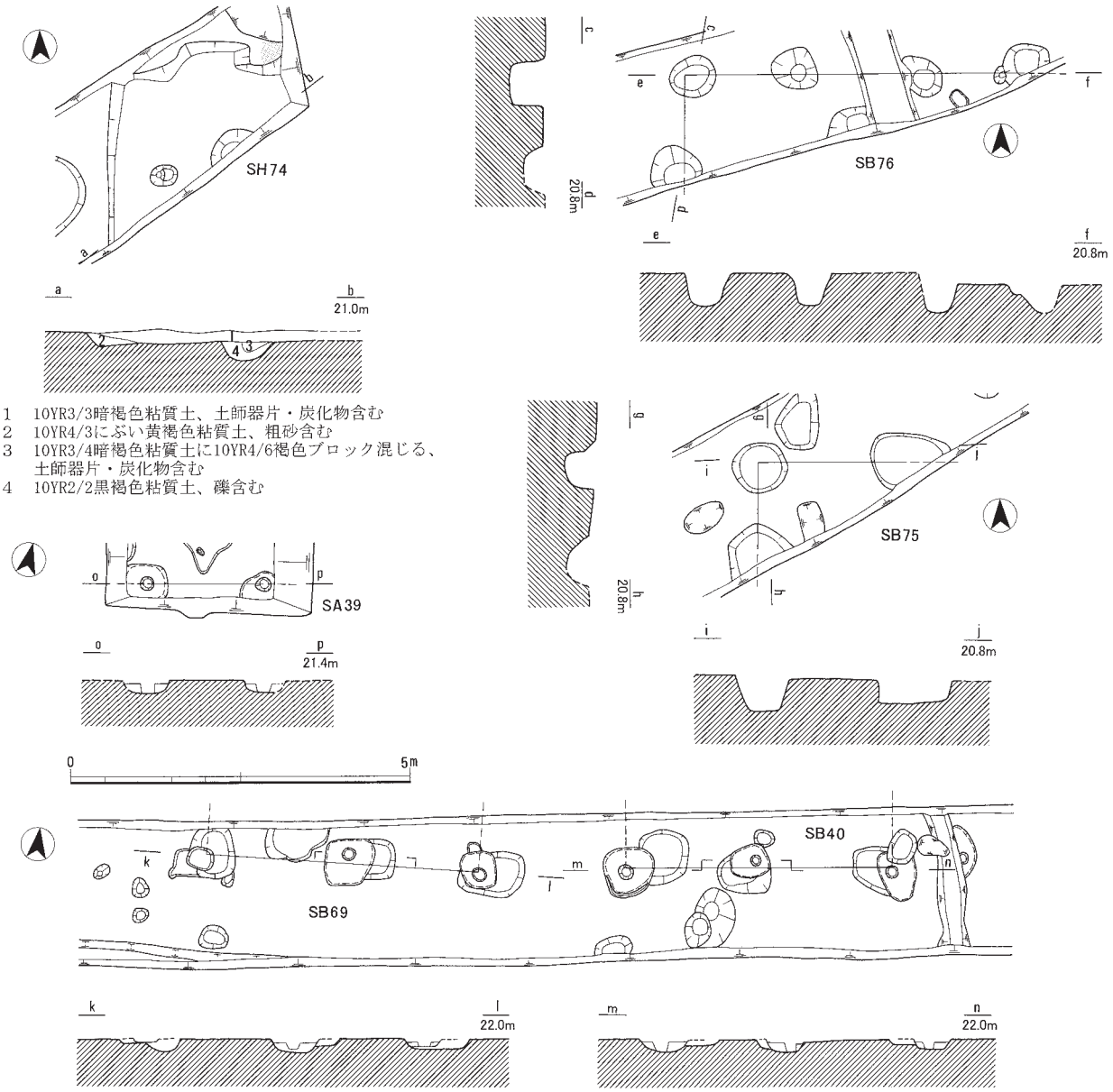
柱穴から土師器の小片が出土しており、１点を図化することができた。

土坑

ＳＫ41（第39図）　ウ区の東端で検出された。半分以上は調査区外へとのびており、全体の形状は不明である。床面は段をなし、南側部分がやや深くなっている。

埋土中からは飛鳥時代～奈良時代の土師器が出土しているが、小片のみで図化できたものはなかった。

ＳＫ42（第39図）　ウ区のほぼ中央部で検出された。南端の一部を撹乱によって壊されている。掘削の結果、２基のピットが連接したような形状となったが、



第38図　ＳＨ74，ＳＢ40・69・75・76，ＳＡ39平面図・断面図(1:100)

埋土からは遺構の重複関係は認められなかった。埋土の上層には全体にわたって被熱痕跡が認められたが、底面や側壁などには顕著な被熱痕跡は認められなかった。

埋土中からは須恵器・土師器の破片が比較的多く出土しているが、細片が多く図化できたものは少ない。

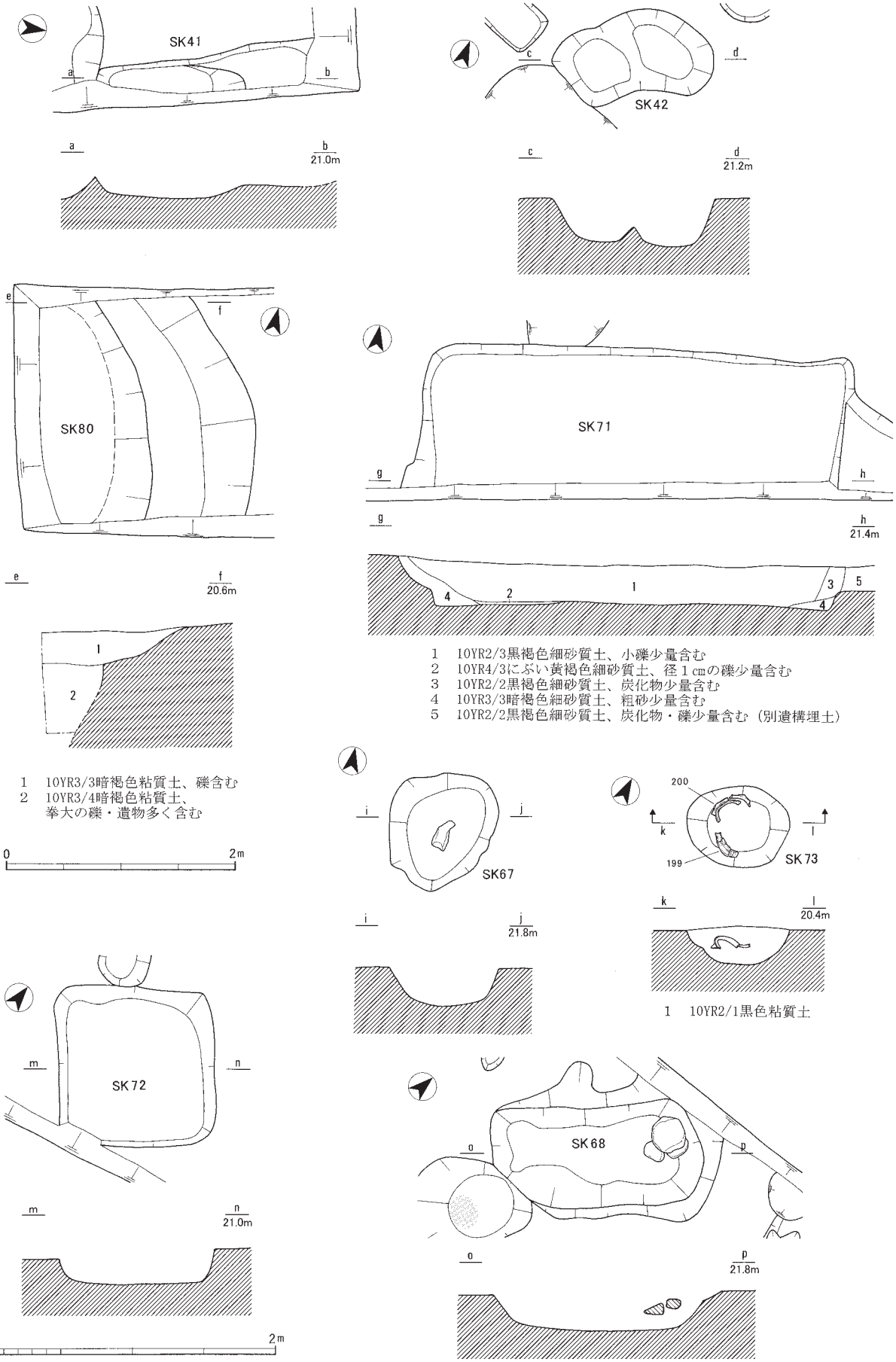
ＳＫ67（第39図）　コ区で検出された小型の土坑である。埋土中には長径20cmほどの角礫が１点含まれていた。出土遺物としては土師器がある。

ＳＫ68（第39図）　コ区のＳＤ66の西側で検出された小型の土坑である。平面形は長方形を呈する。埋土中には径10～20cmほどの礫が数点含まれていた。

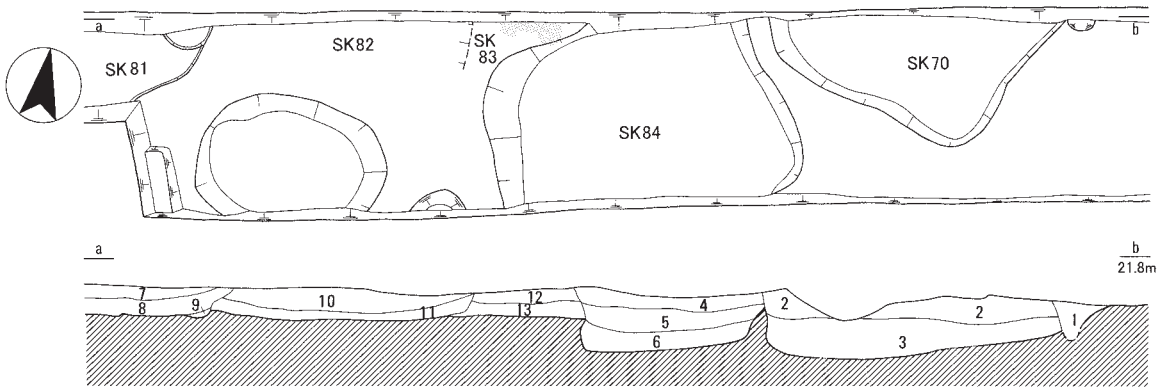
ＳＫ70（第40図）　コ区で検出された。北側半分以上が調査区外へのびており全形は不明であるが、平面形は方形の土坑であると思われる。深さは最も深い部分で80cmほどある。

床面はほぼ平坦で、側壁は垂直気味に立ち上がる。出土遺物としては土師器がある。

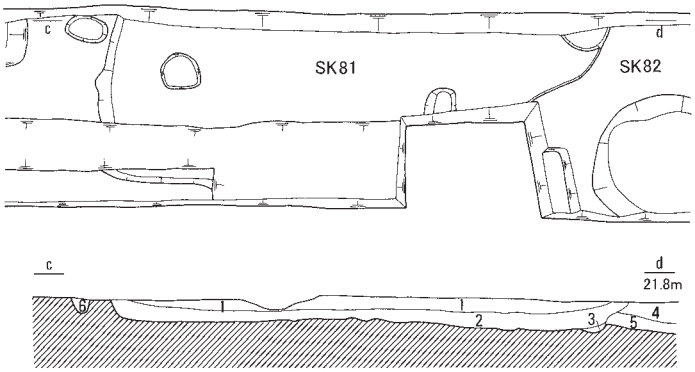
ＳＫ71（第39図）　コ区の東端から100mほど西の地点で検出された。南半は調査区外へとのびており、全体の形状は不明であるが、調査した部分から平面形は一辺3.8m程度の方形と考えられる。埋土は包含



第39図　ＳＫ41･42･67･68･71～73･80平面図･断面図（ＳＫ41･42･71･80は1:50,その他1:40）



1　撹乱
2　10YR2/2黒褐色粘質土（ＳＫ70埋土）
3　10YR2/1黒色粘質土（ＳＫ70埋土）
4　10YR3/1黒褐色粘質土（ＳＫ84埋土）
5　10YR2/1黒色粘質土（ＳＫ84埋土）
6　10YR2/2黒褐色粘質土、地山ブロック含む（ＳＫ84埋土）
7　10YR3/1黒褐色粘質土（ＳＫ81埋土）
8　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック含む（ＳＫ81埋土）
9　10YR2/2黒褐色粘質土（ＳＫ81埋土）
10　10YR3/2黒褐色粘質土（ＳＫ82埋土）
11　10YR2/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む（ＳＫ82埋土）
12　10YR3/2黒褐色粘質土、10YR6/4にぶい黄橙色粘質土ブロック・焼土含む（ＳＫ83埋土）
13　10YR4/2灰黄褐色粘質土、焼土塊多く含む（ＳＫ83埋土）



1　10YR3/1黒褐色粘質土（ＳＫ81埋土）
2　10YR2/1黒色粘質土、地山ブロック含む（ＳＫ81埋土）
3　10YR2/2黒褐色粘質土（ＳＫ81埋土）
4　10YR3/2黒褐色粘質土（ＳＫ82埋土）
5　10YR2/1黒褐色粘質土、地山ブロック含む（ＳＫ82埋土）
6　10YR3/1黒褐色粘質土（ピット埋土）

0　4m

第40図　ＳＫ70･81～84平面図･断面図(1:80)

層とよく似た暗灰色土で、ＳＤ66やＳＫ70の埋土のような黒褐色土ではない。土層断面の観察では一部に壁面の土留めらしい痕跡（３・４層）が確認されており、竪穴住居の可能性もある。

出土遺物としては土師器、須恵器、瓦などが比較的多く出土している。

ＳＫ73（第39図）　コ区の東側で検出された小型の土坑である。内部からは土師器甕の口縁部が２個体分、口縁部を下にして出土した（第43図199・200）。体部から底部にかけての破片は出土しておらず、もともと口縁のみを置いたものと思われる。

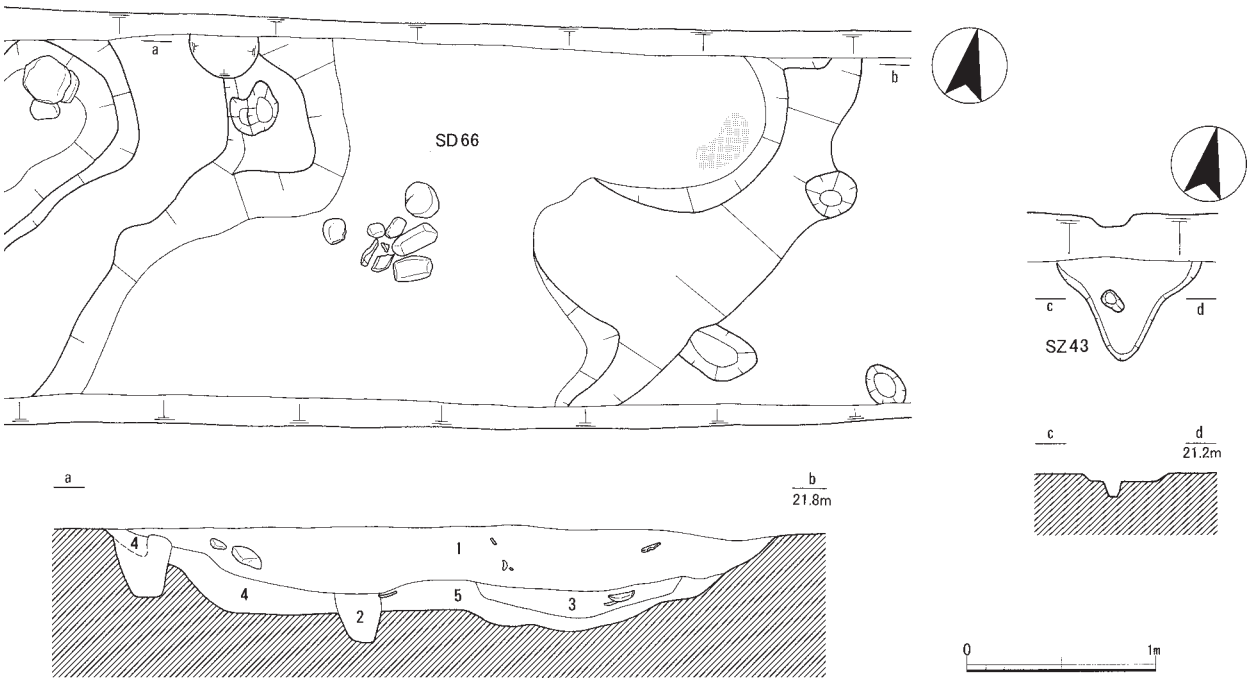
出土遺物としては、埋置された土師器甕以外に、須恵器が出土している。出土した土器からみて、飛鳥時代～奈良時代前期の遺構と考えられる。

ＳＫ80（第39図）　コ区の中央部付近で検出された大型の土坑である。全体の半分以上が調査区外へ出ており、調査できた部分はごく一部である。そのため、地表下2.3mまでは掘削を行ったものの、工事での掘削深度や安全面を考慮してそれ以上の掘削は行っていない。井戸の可能性も考えられるが、埋土に滞水していた様子が窺えないことや、底面が湧水層まで達しているかどうか不明であることなどから、土坑とした。

平面形は円形と考えられ、直径は２m以上あるものと思われる。上部は浅い皿状に掘り込まれ、その中央部が深く掘り下げられているために壁面は段をなすが、埋土の状況などからみて上部の浅い部分は深い部分が埋没した後に新たに掘削された可能性がある。深い部分の埋土には遺物や拳大の礫が多く含まれていた。

出土遺物としては、飛鳥時代～奈良時代の須恵器、土師器などがある。

ＳＫ81（第40図）　コ区の中央部付近で検出された深さ30㎝程度の浅い土坑である。平面形はやや不整



1　10YR3/1黒褐色粘質土、遺物・礫多く含む
2　10YR3/1黒褐色粘質土（ピット埋土？）
3　10YR3/3暗褐色粘質土、遺物・炭化物含む
4　10YR3/3暗褐色粘質土、地山ブロック含む
5　10YR4/4褐色粘質土、小焼土塊・炭化物含む

第41図　ＳＤ66,ＳＺ43平面図･断面図(1:40)

形であるが、方形をなすものと考えられる。明確な壁周溝は認められなかったが、竪穴住居である可能性がある。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

ＳＫ82（第40図）　コ区のＳＫ81とＳＫ84との間で検出された遺構である。西側はＳＫ81によって切られており、また東側も当初はＳＫ83と一連の遺構と認識して掘削を行ったため、平面形は不明である。深さはＳＫ81とほぼ同じであり、埋土の様相にも共通性が認められることから、やはり竪穴住居である可能性が考えられる。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

ＳＫ83（第40図）　コ区のＳＫ82とＳＫ84との間で検出された遺構である。ＳＫ82・84に切られているため、平面形は不明である。埋土には多量の焼土塊を含んでいる。深さは30㎝程度でＳＫ81・82とほぼ同じであり、やはり竪穴住居である可能性が考えられる。埋土に含まれる焼土塊は竈に由来するものと思われる。出土遺物はなく、所属時期は不明であるが、ＳＫ84との重複関係からみて、飛鳥時代～奈良時代の遺構であると考えられる。

ＳＫ84（第40図）　コ区のＳＫ70の西側で検出された土坑である。平面形は一辺３ｍほどの方形であると考えられる。深さや埋土の様相などにはＳＫ70と共通性が認められ、同様の性格を持った遺構と考えられる。

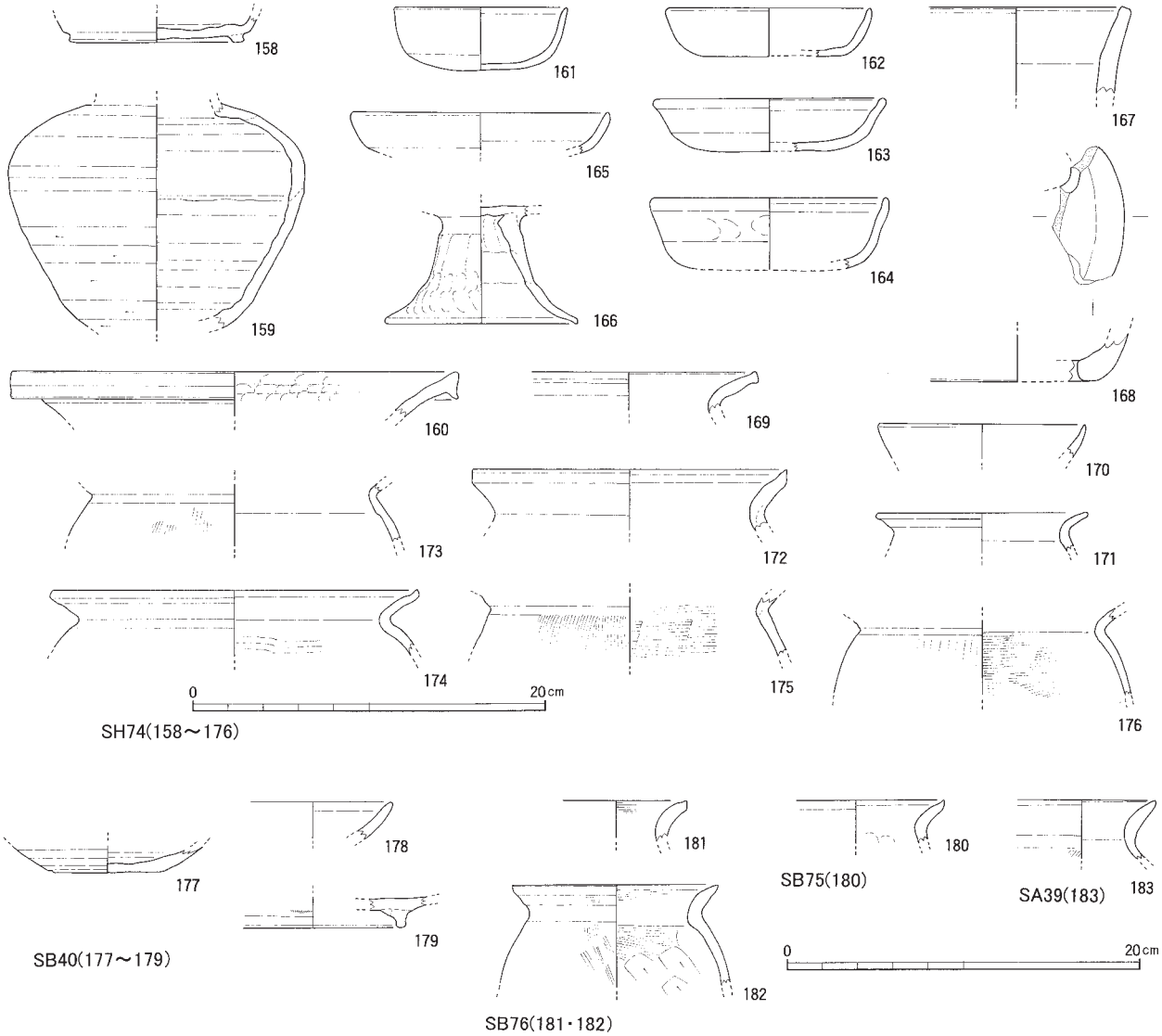
遺物は出土しなかったため所属時期は不明であるが、ＳＫ70に先行することから、飛鳥時代～奈良時代の遺構と考えられる。

溝

ＳＤ66（第41図）　コ区で検出された、南北方向にのびると思われる溝である。幅が狭い調査区内での検出であり、本来は大型の土坑である可能性もある。幅は2.6ｍ、深さは0.5ｍである。底面はやや平坦で壁は緩やかに立ち上がっており、断面形状は逆台形を呈する。

東側底面には部分的に焼土の広がりが認められ、また東側最下層には焼土塊や炭化物を含んだ層（５層）が堆積していた。

最上層からは長径20～30㎝程度の礫がまとまって出土した。多くは地山に含まれるものと同じ花崗岩系の円礫であったが、数点のみ円柱状の砂岩が混じっていた。これらの砂岩はいずれも赤褐色を呈しており脆く、被熱しているものと思われる。また、



第42図　ＳＨ74，ＳＢ40・75・76，ＳＡ39出土遺物実測図（1:4）

いずれも円柱状をなしており、風化のため不明瞭ながらも敲打整形痕と思われる痕跡も認められる。

出土遺物としては、須恵器、土師器、土製品、石製品が比較的多く出土した。図化できた遺物も多い。特筆されるのは暗文土師器が一定量出土していることで（第44図214～216・222）、Ｃ区ではあまり出土していないことから、遺跡内でも場所によって暗文土師器の存在に偏りがある可能性がある。また、土管状土製品の出土も注目される。

須恵器や暗文土師器などの遺物からみて、ＳＤ66は奈良時代前葉に比定することができよう。

その他の遺構

ＳＺ43（第41図）　エ区で検出された浅い落ち込み状の遺構である。大部分が調査区外へ出ており、全体の形状や性格などは不明である。埋土中からは土師器の破片が出土したが、小片のみで図化できたものはなかった。飛鳥～奈良時代の遺構と考えられる。

②遺物

遺物については、まず遺構出土遺物について遺構別に述べていく。その後、包含層等の遺構外から出土した遺物について述べたい。

ＳＨ74出土遺物（第42図158～176）

須恵器（158～160）　杯Ｂ、長頸壺、甕が出土している。杯Ｂ（158）はやや低い高台を持ち、高台のすぐ外側で強く屈曲して立ち上がる。長頸壺（159）は肩部が丸く張り、体部外面の中位以下は広くヘラケズリによって整形されている。甕（160）の口縁端部は拡張され、面を作っている。内面にはユビオサエの

痕跡が明瞭に残る。

土師器（161～176） 杯G、椀C、皿A、高杯、甑、甕が出土している。杯G（162～164）のうち、163・164についてはロ縁部がやや内弯するなど杯Aに近い形態を示すが、明黄褐色系の色調を呈し、暗文を施さず、内外面には粗いナデやユビオサエの痕跡を残すことから杯Gの範疇でとらえられるものと思われる。椀C（161）は小型で器高が高く、ロ縁端部がやや外反する。ＳＦ61出土の杯と形態的に類似する。165は器高の低さから皿Aとしたがロ径は小さく、杯Gに近い。高杯（166）は脚部の破片である。太く短い脚部であり、粗いタテナデが施される。杯部はロ径が大きく浅い盤状のものであった可能性がある。甑はロ縁部（167）と底部（168）とが確認できる。甕にはロ縁端部に面を作っているもの（169・172・174）と丸く収めるもの（170・171）がある。175・176の体部内面はヨコハケによって調整されている。

ＳＢ40出土遺物（第40図177～179）

須恵器（177） 杯Aが出土している。底部外面はヘラ切り無調整である。体部は底部からやや内弯して立ち上がっており、椀状の器形を呈するものと考えられる。杯Hの底部である可能性もある。

土師器（178・179） ロ縁端部を丸く収める杯ないし皿のロ縁部片（178）と、高台を持つ杯Bないし皿Bの底部片（179）が出土している。

ＳＢ75出土遺物（第42図180）

土師器（180） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部には不明瞭な面が認められる。

ＳＢ76出土遺物（第42図181・182）

土師器（181・182） 甕が出土している。182の体部内面にはヘラケズリが認められる。体部外面にはタテハケが施されている。

ＳＡ39出土遺物（第42図183）

土師器（183） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部は丸く収める。

ＳＫ42出土遺物（第43図184・185）

須恵器（184） 長頸壺が出土している。体部の破片で、肩部には明瞭な屈曲部を持つ。

土師器（185） 甕の口縁部である。口縁端部に面はなく、頸部の屈曲は緩い。

ＳＫ67出土遺物（第43図186）

土師器（186） 甕が出土している。体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケによって調整されている。口縁端部には不明瞭な面を作っている。

ＳＫ68出土遺物（第43図187）

須恵器（187） 杯Hが出土している。立ち上がりは欠損しているものの、かなり矮小化している。

ＳＫ70出土遺物（第43図188）

土師器（188） 甕が出土している。口縁端部には面を作っている。体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケによって調整されている。

ＳＫ71出土遺物（第43図189～194）

須恵器（189・190） 杯Ｂ蓋、杯Ｂが出土している。杯Ｂ蓋（189）はつまみ部分のみの出土である。扁平なつまみである。杯Ｂ（190）は角高台を持つ。高台は内側端部で接地し、体部は高台の外側で２回屈曲して立ち上がる。

土師器（191・192） 杯A、甕が出土している。杯A（191）は底部片であり、風化のために調整や暗文の有無は不明である。底部がかなり平坦であり、皿Aである可能性もある。甕（192）は体部内面・外面とも下半部をヘラケズリしている。口縁端部には明瞭な面を作る。

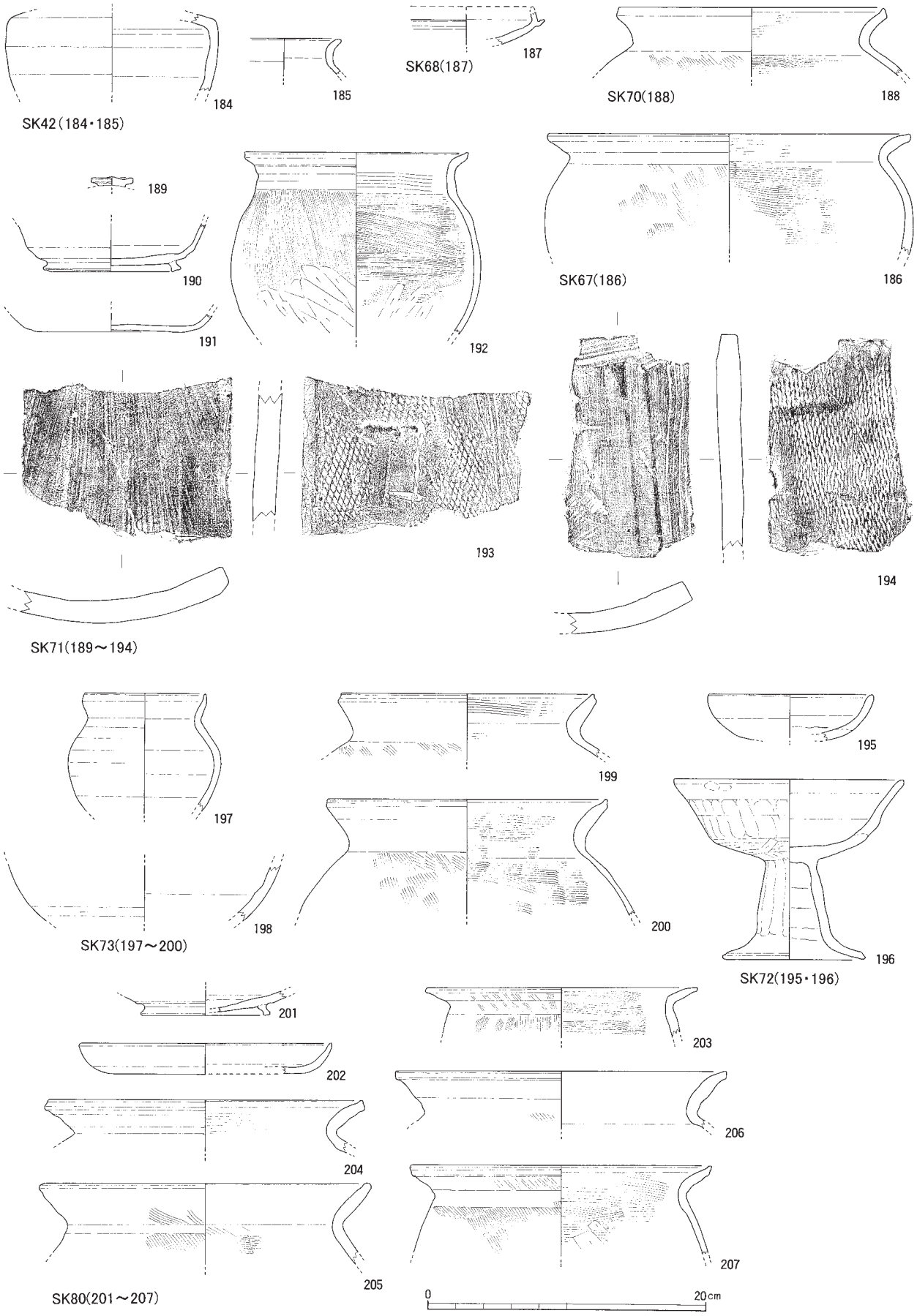
瓦（193・194） 平瓦が出土している。193は凸面に格子状タタキが認められる。凹面には布目が残されている。側面および凸面の側面付近には粗いヘラケズリが施されている。194は凸面に縄目タタキが認められる。凹面には布目が残されている。側面および凹面の側面付近には粗いヘラケズリが施されている。また、小口端面と凹面の小口部分にもヘラケズリが施されている。

ＳＫ72出土遺物（第43図195・196）

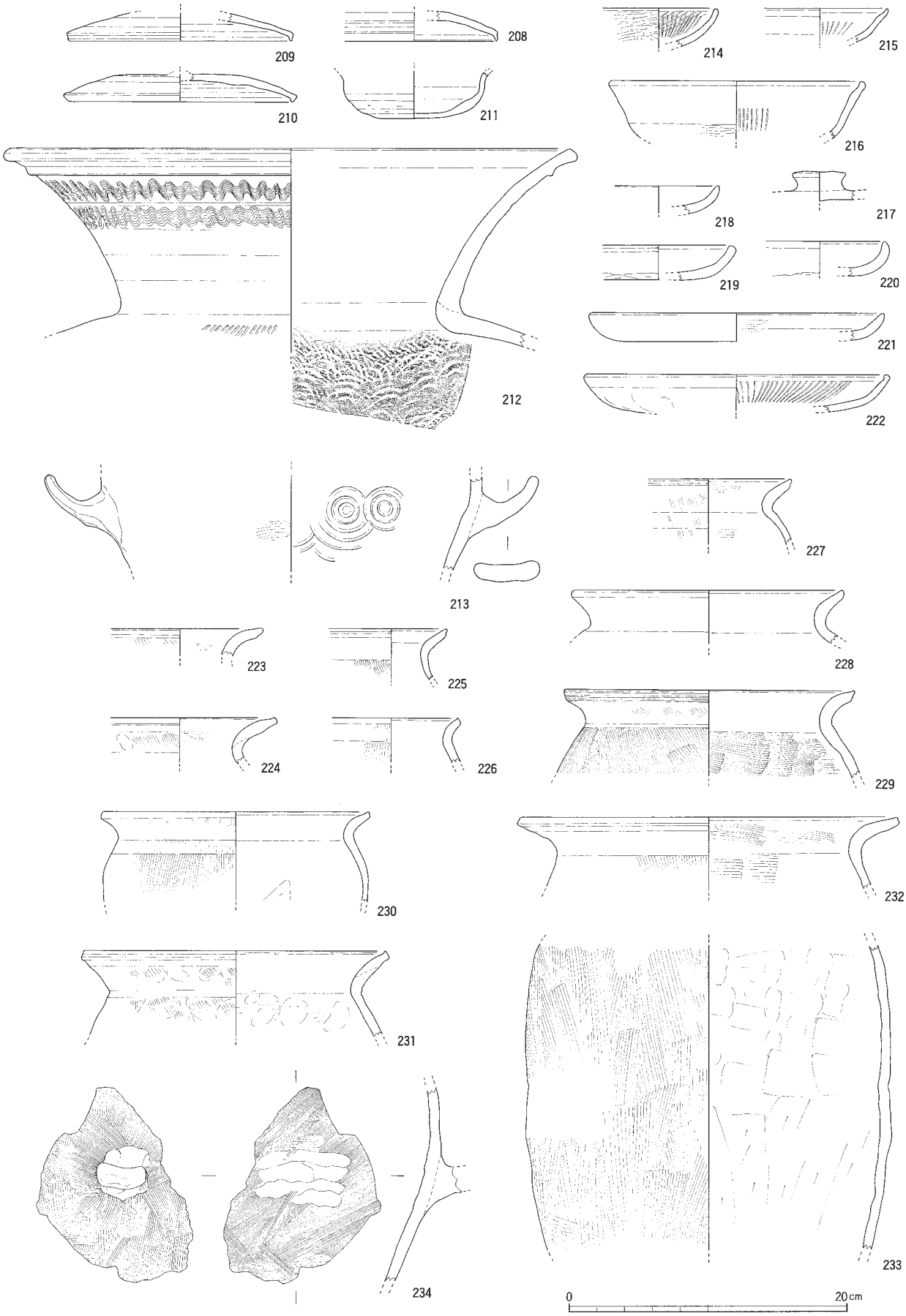
土師器（195・196） 杯Gと高杯が出土している。杯G（195）は内外面ともナデで調整されている。高杯（196）はほぼ完形である。外反する深い杯部を持ち、脚部は中位がふくらみ脚裾部で強く外反する。杯部内面はミガキで平滑に調整されている。こうした形態や調整などからみると、この個体は西野田遺跡出土遺物の中でも古い時期に位置づけられるものと考えられる。

ＳＫ73出土遺物（第43図197～200）

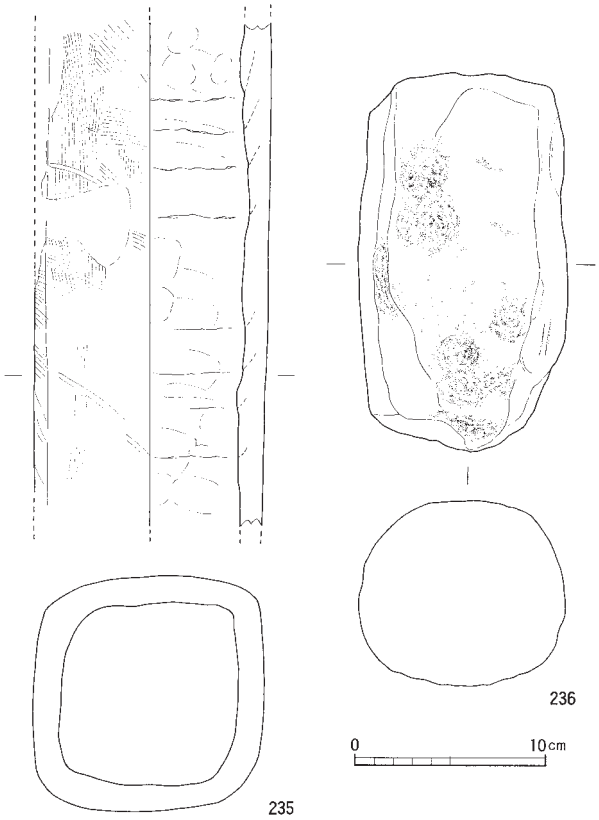
須恵器（197・198） 短頸壺、壺が出土している。短



第43図　ＳＫ42･67･68･70～73･80出土遺物実測図(1:4)



第44図　ＳＤ66出土遺物実測図１（1:4）



第45図　ＳＤ66出土遺物実測図２（1:4）

頸壺（197）は小型で、口縁端部はやや屈曲し内弯する。壺（198）は体部の破片で、元の器形は不明であるが、長頸壺もしくは短頸壺であると考えられる。

土師器（199・200）　甕が出土している。199・200とも口縁端部に明瞭な面を作っている。200の体部内面はヨコハケで調整されている。

ＳＫ80出土遺物（第43図201～207）

須恵器（201）　壺の底部片が出土している。体部の高台付近にはヘラケズリの痕跡が認められる。また、底部外面には糸切りらしい痕跡も認められる。

土師器（202～207）　皿Ａ、甕が出土している。皿Ａ（202）は内外面ともナデによって調整されており、暗文などは認められない。甕は口縁端部に面を明瞭に作るもの（204・206・207）と、面が明瞭に認められないもの（203・205）とがある。207の体部内面下半にはヘラケズリが施されている。

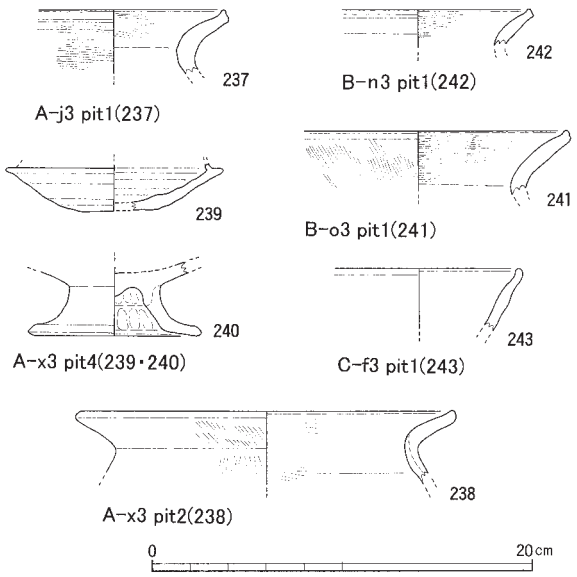
ＳＤ66出土遺物（第44･45図208～236）

須恵器（208～213）　杯Ａ、杯Ｂ蓋、甕が出土している。杯Ｂ蓋（208～210）はいずれも口縁端部が折り返されている。つまみは欠損している。杯Ａ（211）は体部中位までヘラケズリが施されており、口縁部は外反する。甕（212・213）のうち、212は口縁部外面に波状文を二段に施している。体部内面には同心円状の当て具痕が残されている。213は把手が付く甕である。焼成が甘く、白色を呈し軟質である。体部外面には並行タタキ、体部内面には同心円状の当て具痕が残されている。ススが付着している。

土師器（214～234）　杯Ａ・Ｃ、皿Ａ、杯・皿Ｂ蓋、甕が出土している。杯Ａ（215・216）にはいずれも内面に放射状の暗文が施されており、口縁端部はやや内弯する。杯Ｃ（214）の外面はヨコミガキで調整され、内面には放射状の暗文が施されている。口縁端部は丸く収められる。218～220は器高が低いと考えられることから皿Ａに含めたが、いずれも小片でまた風化のため調整も不明瞭であり、蓋や杯である可能性もある。222については内面に放射状の暗文を施しており、口縁端部は肥厚し内弯する。杯・皿Ｂ蓋（217）はつまみの破片である。接合しないが同一個体と考えられる破片があり、その内面には暗文が施されている。甕（223～234）の口縁端部には、明瞭な面が作られているものが多い。体部内面は基本的にヨコハケで調整されているが、230・233などの体部内面下半にはヘラケズリが施されている。233はやや長胴の器形であり、体部外面は全体的にタテハケで調整されている。234は把手を持つが欠損している。体部外面はタテハケ、体部内面は不整方向のハケによって調整されている。

土製品（235）　235は土管状の土製品である。焼成は土師質である。断面はほぼ正方形で、両端は欠損しており元の長さは不明である。外面はハケによって丁寧に調整されているが、内面には粘土紐の痕跡を明瞭に残す。ススの付着や被熱などは認められない。

この土製品の用途は不明であるが、伊勢湾西岸地域では津市雲出島貫遺跡や六大Ａ遺跡などで西野田遺跡の例とも近い時期のものと思われる土管状の土製品が検出されており[10]、また尾北古窯跡群など須恵器生産地においても須恵器・瓦とともに土管状の土製品が焼成されていることが知られている[11]。これらの例には断面が円形のものが多いが、断面方形のものも存在しており、235もこうした土製品の一種であると思われる。



第46図　コ区ピット出土遺物実測図(1:4)

石製品（236） 236は短い円柱状の石である。砂岩であると思われ、被熱によって全体的に赤色を帯びている。被熱や風化によって不明瞭ではあるが、全体に敲打痕と思われる痕跡が残されており、人為的に整形されているものと思われる。同様の石製品で破片化したものが他にも同じ地点から数点検出されている。

A-j3pit 1出土遺物（第46図237）

土師器（237） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部には明瞭な面が作られている。頸部外面にはヨコハケが施されている。

A-x3pit 2出土遺物（第46図238）

土師器（238） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部にはやや不明瞭な面が作られている。頸部外面にはタテハケが施されている。

A-x3pit 4出土遺物（第46図239・240）

須恵器（239） 杯Hが出土している。口径は小さく、たちあがりや受け部は矮小化している。底部外面はヘラ切り無調整である。

土師器（240） 高杯の脚と考えられるものが出土している。かなり低平で、盤状の口径が大きく浅い杯部を持つものと考えられる。

B-o3pit 1出土遺物（第46図241）

土師器（241） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部には不明瞭な面を作っている。口縁外面にはタテハケ、口縁内面にはヨコハケが施されている。

B-n3pit 1出土遺物（第46図242）

土師器（242） 甕の口縁端部片が出土している。口縁端部には明瞭な面を作っている。

C-f3pit 1出土遺物（第46図243）

土師器（243） 杯Aの口縁部片が出土している。口縁端部は内側に肥厚する。

ウ区包含層出土遺物（第47図244・245）

須恵器（244） 杯A蓋ないし杯B蓋が出土している。宝珠つまみ部分のみが出土している。

土師器（245） 甕が出土している。口縁端部には面を作る。頸部の屈曲は緩い。頸部外面にはタテハケが施されている。

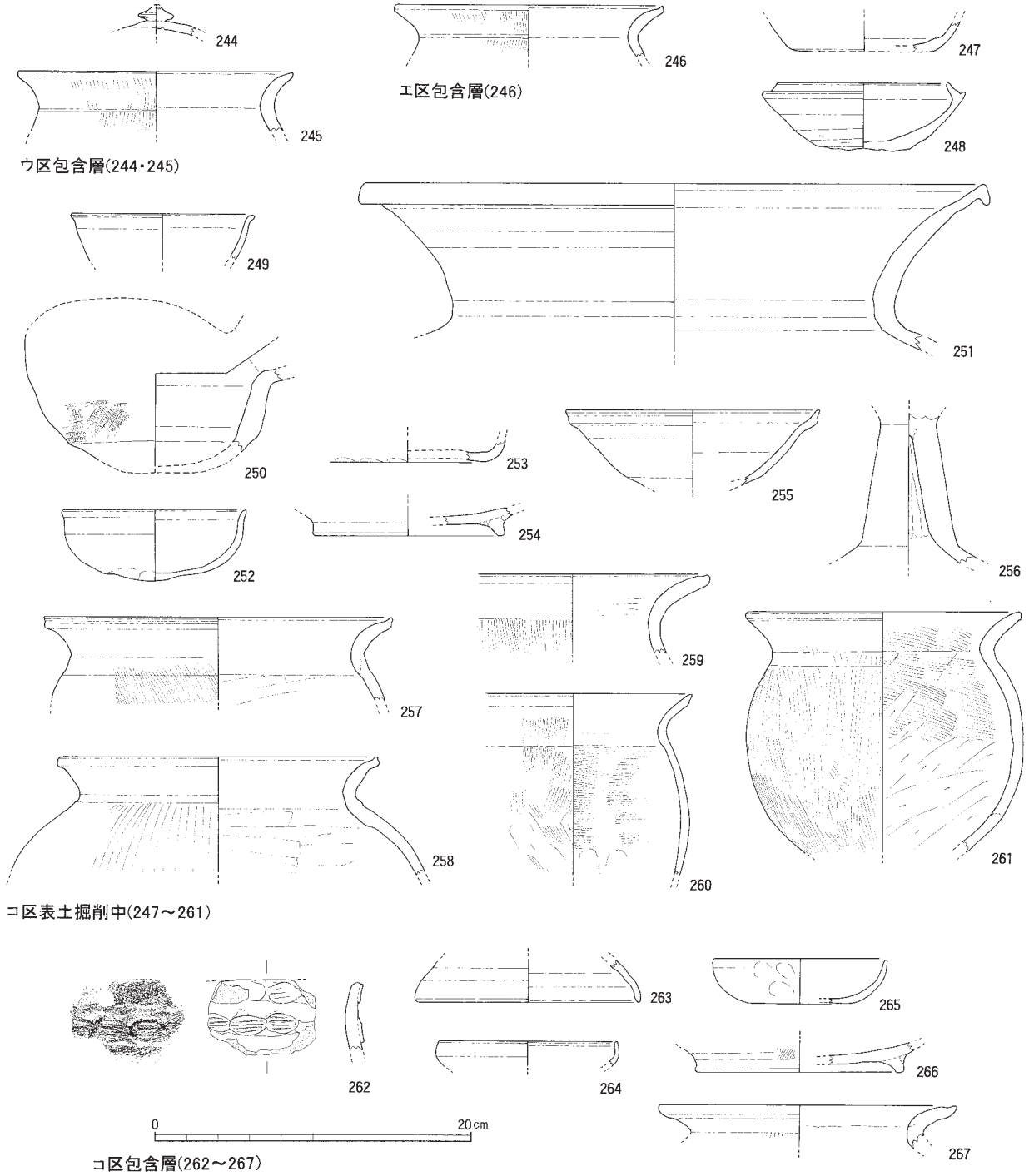
エ区包含層出土遺物（第47図246）

土師器（246） 甕の口縁部片が出土している。口縁端部には面を作っている。

コ区表土掘削中出土遺物（第47図247～261）

須恵器（247～251） 杯A、杯H、平瓶、甕が出土している。杯A（247）の底部外面はヘラ切り無調整で、敷物状のものの圧痕が残っている。249も杯Aと考えられる。杯H（248）の口径は小さく、たちあがりや受け部は矮小化しているものの、底部外面には回転ヘラケズリが施されている。平瓶（250）は小片であり、器形の復元には不安を残す。体部外面には格子状タタキが残されており、体部をタタキによって成形し、その後に底部をヘラケズリによって整形している様子が窺われる。甕（251）の口縁端部は面をなし、垂下している。口縁部に波状文は施されない。

土師器（252～261） 椀C、皿A、皿B、高杯、甕Aが出土している。椀C（252）の口縁端部は外反する。口縁部付近をヨコナデし、外面にはナデ・ユビオサエの痕跡が残されている。ＳＦ61出土の椀Ｃと器形・法量などの点で類似する。皿A（253）は小片である。平底の底部から口縁部が強く屈曲して立ち上がる。皿B（254）は風化により内外面の調整は不明である。255は杯状のもので、口縁端部は外方へつまみ上げられる。器形から見ておそらく高杯の杯部である可能性が高い。256は高杯の脚部で、脚裾部で強く屈曲する。脚部内面にはシボリ痕を明瞭に残す。甕には口縁端部に明瞭に面を作っているもの（257・258・260）と丸く収めているもの（259・261）とが認められる。257・258は体部内面上半に横方向の板ナデ状



第47図　ウ·エ·コ区包含層等出土遺物実測図(1:4)

の痕跡が認められる。260・261は体部内面下半にヘラケズリを施しており、260は体部外面下半にもヘラケズリが認められる。

コ区包含層出土遺物（第47図262～267）

縄文土器（262）　深鉢の口縁部片が出土している。口縁端部と、口縁端部からやや下がった位置の２箇所に突帯が貼り付けられている。突帯はハケ状の工具で強く断続的にナデつけられ、連続したO字形の文様状を呈している。馬見塚式に併行する時期のものと思われる。(12)

須恵器（263・264）　杯H蓋と高杯とが出土している。杯H蓋（263）は口縁部の破片である。264は杯状の器種の口縁部である。器壁は薄く、内弯しており、おそらく高杯の口縁部であると思われる。

土師器（265～267） 杯G、皿B、甕が出土している。杯G(265)の口縁部は丸く収められ、内外面はユビオサエやナデによって調整されている。皿B（266）の高台が一部剥がれた部分にはハケ状の痕跡が認められる。内面はナデによって調整されており、暗文は確認できない。甕（267）の口縁は大きく外反し、口縁端部には不明瞭な面を作っている。

第4節　小結

第２次調査の成果として最も特筆されるのは、Ｃ区で西野田遺跡における生産活動の明確な痕跡を検出できたことであろう。土師器焼成坑ＳＦ61がその代表的なものであり、灰を貯蔵していたＳＫ45も何らかの生産活動に関わるものといえる。

また、Ｃ区では倉庫と考えられる遺構も検出された。ＳＢ64・65は平面形態や規模などからみて、倉庫と考えてよいであろう[13]。また、この２棟に比べて貧弱ではあるが、平面形からみるとＳＢ63にもその可能性が想定できるかもしれない。

この倉庫群から西側についてはＳＦ61やＳＫ45・46、そして小型台形土坑群などが分布し、遺構から見れば居住域としての様相は薄い。

以上の点からみて、Ｃ区については西野田遺跡の中でも、主に生産活動などが行われていた空間に相当する場所の調査であったといえるのではなかろうか。

コ区の調査は、幅が狭い調査区であったため、多くの遺構が検出されたものの、その全容はほとんど把握できなかった。しかしながら、掘立柱建物・竪穴住居などを複数検出することができた。畜産研究部敷地内の南端に設けられたコ区で遺構が複数検出されたことにより、西野田遺跡の集落域がより南方まで広がっていることがほぼ確実となった。おそらく、南側の丘陵端付近まで集落が展開していたものと考えられる。

一方、Ｃ区・コ区と同様にややまとまった面積の調査となったＤ区では、遺構・遺物ともに全く検出されなかった。しかしながら、この調査区の成果は重要である。現況地表面では確認することのできなかった旧地形の状況と、そしてそれに対応する遺構の分布状況に関する情報を得ることができ、西野田遺跡の集落構造について考える上で大きな情報源となったことは間違いない。

第２次調査では、このほか小規模な調査区を多数設けている。調査区の面積が僅少であるために、各調査区単位では大きな成果を上げるには至っていないが、西野田遺跡の範囲内に散在するこれら小規模調査区の調査成果によって、西野田遺跡全体における遺構の分布状況について把握する手がかりを得ることができたことは、重要な成果である。

特に、第１・３次調査でも調査の及ばなかった地区に存在するキ区において、柱穴などの可能性もある比較的しっかりしたピットを検出したことは、第１次調査のア区より東側にも、集落域の一部が広がっていたことを示唆する重要な情報である。ただし、第１次調査以前の範囲確認調査における遺構・遺物の検出状況や、キ区の遺構・遺物の検出状況などからみて、遺構・遺物の分布密度はア区より西側に比べてかなり低くなっている可能性が高いであろう。

（石井智大）

註

（1）Ｃ区とコ区で一部遺構番号が連続せず錯綜しているのは、Ｃ区から先に調査を開始しＣ区で検出された遺構に先に遺構番号を付与したものの、コ区の調査が始まってからＣ区の拡張部分などにおいて新たに遺構が検出されたためである。

（2）第３章第３節参照。

（3）この小穴については調査当初は木根による撹乱などと考えていたために図化していなかった。そのため図中には表現されていないが、調査時の所見としては小型台形土坑に属するものの多くにこの小穴が確認されている。

（4）第28図では床面の被熱部分はごく一部のみであるが、これは後述する床面直上の暗褐色土層（９層）の上面では被熱による土色の変化が明瞭ではなかったため、床面検出過程において大部分で被熱層下の暗褐色土層まで掘削を行ってしまったためである。

（5）煙出し部付近から検出された炭化物の樹種同定からは、側壁・前壁付近に残された燃料材とは異なる種類の材の存在が確認できている。この部分には、煙出しのほか、焚き付け口や追加燃料の差し込み口としても機能していた可能性も考えられるのかもしれない。

（6）焼成坑を作った時に、周囲の水分を飛ばすために空焚きが行われた可能性もあるため、９層中の炭化物や焼土粒については、この空焚きに由来するものであるとも考えられる。９層中から遺物が出土していないことを考えれば、焼成坑の補修・作り替えよりは空焚きの蓋然性の方が高いかもしれない。

（7）第７章第２節参照。

（8）焼成剥離土器片などと呼ばれている、器壁から薄く剥がれたような形態のものである。
田崎博之『遺跡出土の焼成粘土塊・焼成剥離土器片からみた弥生土器の生産・供給体制』平成９～11年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）（２））研究成果報告書　1999

（9）三重県埋蔵文化財センター『堀田　第６次調査』三重県埋蔵文化財調査報告261　2005

(10) 三重県埋蔵文化財センター『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財調査報告218　2001、三重県埋蔵文化財センター『六大Ａ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-16　2002

(11) 齊藤孝正「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一様相－篠岡２号窯出土資料を中心として－」『名古屋大学文学部研究論集』107史学36　名古屋大学文学部　1990

(12) 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文土器の様相－伊勢地方からの視点－」『三重県史研究』第６号　三重県　1990、山田猛「伊勢の突帯文土器－野々田遺跡と蛇亀橋遺跡を中心に－」『いちのみや考古』№20　一宮考古学会　2006

(13) 松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会　1983

第６章　第３次調査

第１節　調査区の位置と概要

①調査区の設定

平成19年度に行なった調査は、建物建設に伴うもの７地区（Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ区）および配管工事などに伴うもの３地区（シ・ス・セ区）で行なった。調査区および調査区名の設定方法は、第３章第１節に詳細が記載されているので参照されたい。

②調査区の概要

以下、各調査区について個々に概要を述べる。

Ｅ区（第48図）　畜産研究部の敷地中央北側に位置し、第２次調査Ｃ区に北接する。建物建設に伴って破壊される約226㎡について調査を行なった。

約20㎝の表土および造成土を除去すると、黒褐色系の包含層が約20㎝堆積し、その下のにぶい黄橙色粘質土層上面で遺構を検出した。調査区の北半を中心に、撹乱が非常に多く、南端部でＣ区に延びる掘立柱建物を１棟検出したのみである。また、遺物の出土も非常に少ない。

Ｆ区（第81図）　畜産研究部敷地内の中央北部に位置し、Ｃ区に西接する。建物建設及び配管工事に伴って破壊される約210㎡について調査を行なった。

約20㎝の表土を除去すると、黒褐色砂質土系の包含層が約20㎝堆積し、その下のにぶい黄橙色土層上面で遺構を検出した。

確認した遺構は、Ｃ区と接する西側で竪穴住居１棟および東側で掘立柱建物１棟が確認されたが、Ｅ区と同様、建物の基礎や埋設管などの撹乱が非常に多く、遺構埋土以外での出土遺物も少ない。

Ｇ区（第50・51図）　畜産研究部敷地内の中央部に位置し、Ｃ区の南に近接し、後述するＨ区のすぐ北側に位置する。建物建設に伴って破壊される約340㎡について調査を行なった。

約10㎝の表土を除去すると、黒褐色土の包含層が約20㎝堆積し、その下のにぶい黄橙色粘質土層上面で遺構を検出した。

検出した遺構は、竪穴住居１棟と掘立柱建物２棟である。竪穴住居は非常に浅く、遺構上面がかなり削平されているようである。また、当区南部に近接するＨ区に延びる掘立柱建物については、規模を確認するために、Ｇ・Ｈ区の間を一部拡張して調査を行なった。ただし、拡張箇所については、検出のみで遺構の掘削は行わなかった。

Ｈ区（第50・51図）　畜産研究部敷地内の中央部に位置し、Ｇ区の南に近接する。建物建設および配管工事に伴って破壊される約350㎡について調査を行なった。

層序は隣接するＧ区と変わらず、表土・造成土、黒褐色土と続いて堆積し、その下のにぶい黄橙色粘質土層上面で遺構を検出した。１次調査のア区でも確認したように、当調査区も南に向かって地形が落ち込む状況がみられた。

撹乱が非常に多く、遺構はＧ区に延びる掘立柱建物を１棟および竪穴住居を１棟、住居の可能性がある土坑を南端部で１基確認した。また、性格不明ではあるが、第２次調査で「小型台形土坑」としたものに類似する土坑も数基検出したほか、撹乱として掘削したもののなかにも、「小型台形土坑」である可能性が考えられるものも数基存在する。

Ｉ・Ｊ区（第56図）　畜産研究部敷地内の中央部、Ｈ区の西、Ｋ区の東に位置する。建物建設に伴って破壊される部分について調査を行なった。当初Ｉ・Ｊ区は各々長方形の別の調査区であったが、南北に非常に近接するため、作業の効率なども考えて一連で調査を行なった。調査面積はあわせて約550㎡である。

表土および造成土を除去すると、黒褐色系の包含層が約20㎝堆積する。遺構はその下の褐色土層上面で検出した。当区においても撹乱が非常に多かったが、竪穴住居２棟、それに付属すると思われる廃棄土坑２基、掘立柱建物、近世の土壙墓などを確認し

第48図　Ｅ区遺構平面図(1:200)

た。また、竪穴住居と重複する撹乱からは、近世後半の遺物が多く出土している。ビンなども出土していることから、現代の撹乱であることには間違いないと考えるが、すぐ南部に近世墓もあり、周辺に近世後半の遺構が存在したと思われる。

当区は廃棄土坑を中心に出土遺物量も多く、西にあるＫ・Ｌ区とともに、西野田遺跡の中心であると考える。

Ｋ区（第56図）　畜産研究部敷地内の中央に位置する。東にＩ・Ｊ区、西にＬ区がある。建物建設に伴って破壊される約570㎡について調査を行なった。

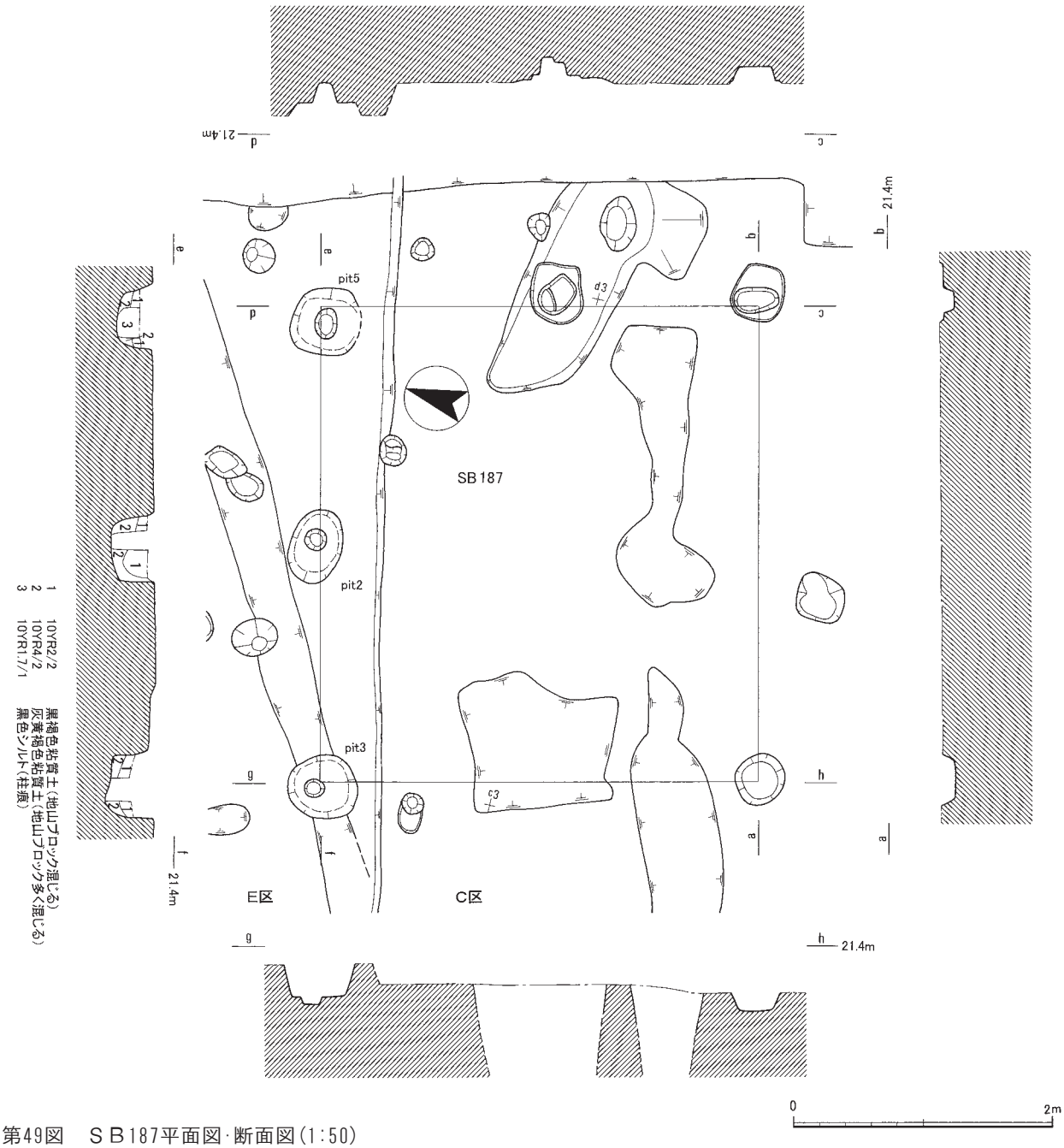
Ｉ・Ｊ区と同じ層序で、明黄褐色粘質土層上面で遺構を検出した。竪穴住居をはじめ、住居に伴うと思われる廃棄土坑、掘立柱建物などを確認した。出土遺物も比較的多く、赤彩土器や鉄製品などが確認されている。前述したように、当区は西野田遺跡の中心部分であると考えられる。

Ｌ区（第87・88図）　畜産研究部敷地内の中央、Ｋ区の西に位置する。建物建設および配管工事に伴って破壊される約2,700㎡について調査を行なった。

当区の層序は、表土・造成土を除去すると、その下に暗褐色砂質土の包含層が約20㎝堆積し、その下のにぶい黄橙色粘質土層上面で遺構を検出した。確認した遺構はＫ区に近い東側が中心で、掘立柱建物や竪穴住居、土坑などを検出した。なかでも、調査区南東部で確認したＳＢ127は、身舎が２つの柱穴が一組となったような建物で、特徴的である。また、埋土中に焼土や炭化物・木片を多量に含み、壁面が良く焼けた土坑ＳＫ118も確認した。調査区西側については、残念ながら非常に撹乱が多く、遺構はほとんど確認できなかった。

シ～セ区（第３・77・82図）　シ区はＣ区にほぼ西接する、幅約２ｍ、長さ30ｍの南北に長い調査区である。表土・造成土の下のにぶい黄橙粘質土層上面で検出した。南端部では包含層と思われる黒褐色砂質土が一部残っていた。

ス区はＣ区に東接する、幅約1.7ｍ、長さ約12.4ｍの調査区である。遺構・遺物ともにほとんど確認さ



第49図　ＳＢ187平面図･断面図(1:50)

れなかった。

セ区はＬ区の北に位置する、幅約1.8m、長さ約58mの東西に長い調査区である。Ｌ区に延びる掘立柱建物をはじめ、溝や土坑を確認した。出土遺物の量は多くないが、円面硯を１点確認した。

（柴山圭子）

第２節　Ｅ区の調査

①　遺構

Ｅ区で確認した遺構は、Ｃ区に延びる掘立柱建物１棟のほかは数個のピットのみである。

掘立柱建物

ＳＢ187（第49図）　Ｅ区の南部からＣ区の北部、D-c2グリッド付近で検出した遺構である。梁行２間、桁行２間、北を基準とした主軸方向はN11～12°Ｗ

第50図　G·H区遺構平面図１(1:400)

の側柱建物である。掘方は直径約60cmの円形であるが、方形に近いものもあり、統一感がない。E区で検出した柱穴には約20cmの柱痕が確認できた。柱穴内および周辺から遺物は出土していない。

②　遺物

西野田遺跡全体で出土した遺物量は、決して多いものではないが、そのなかでも当区で出土した遺物は、他調査区に比べて非常に少ないものである。前述したように、大形の遺構もなく、遺物は全てピットおよび包含層、撹乱から出土したものである。

また、他調査区では一定量の須恵器が出土しているが、ここでは全く見られず、土師器のみであり、甕の破片が目立つ。ただし小片ばかりで図示できるものは無かった。　(柴山圭子)

第３節　G・H区の調査

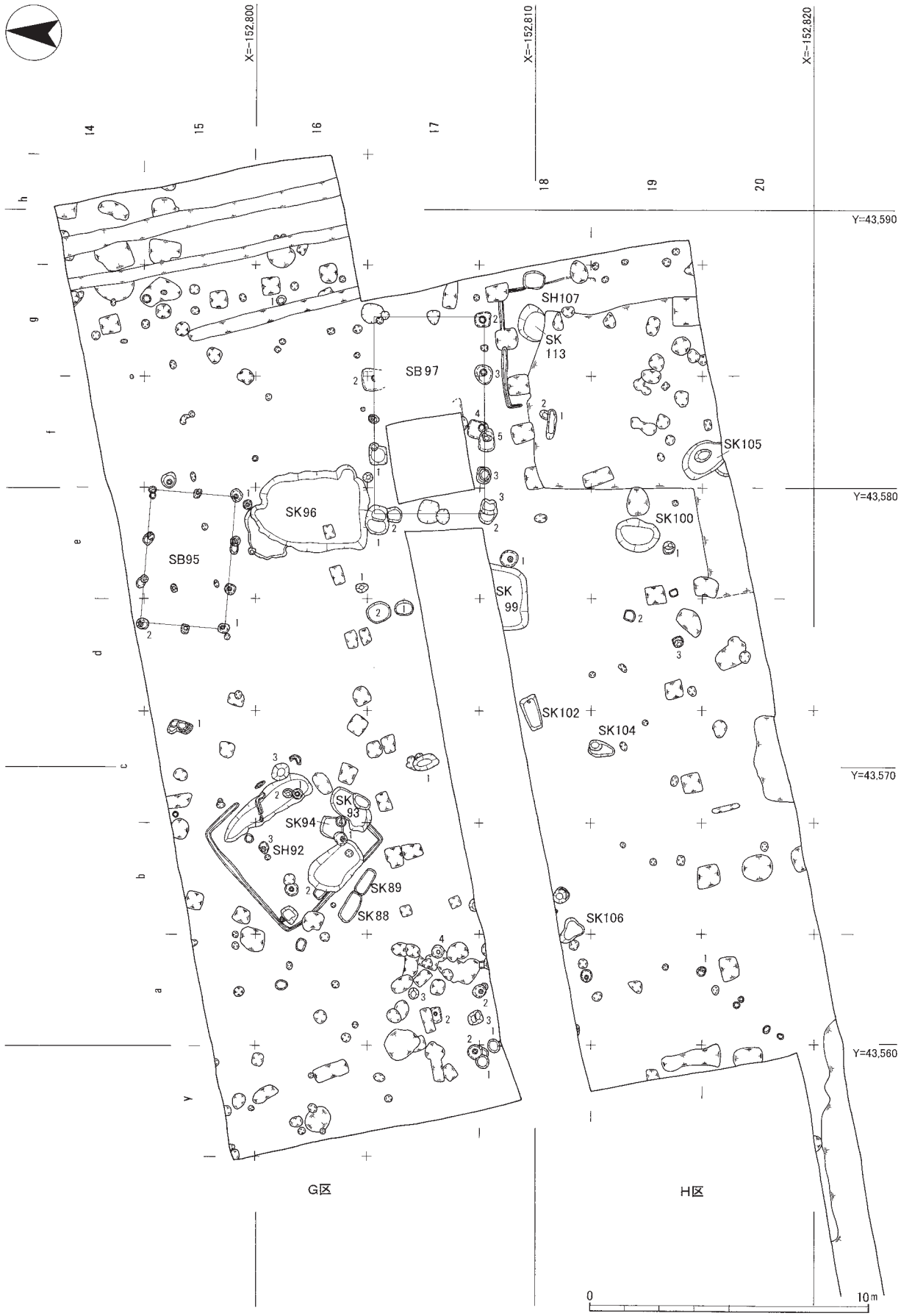
①　遺構

ここでは、G・H区で確認した主な遺構につい述べる。個々の遺構の詳細については、後掲の遺構一覧（第18・19表）を参照されたい。

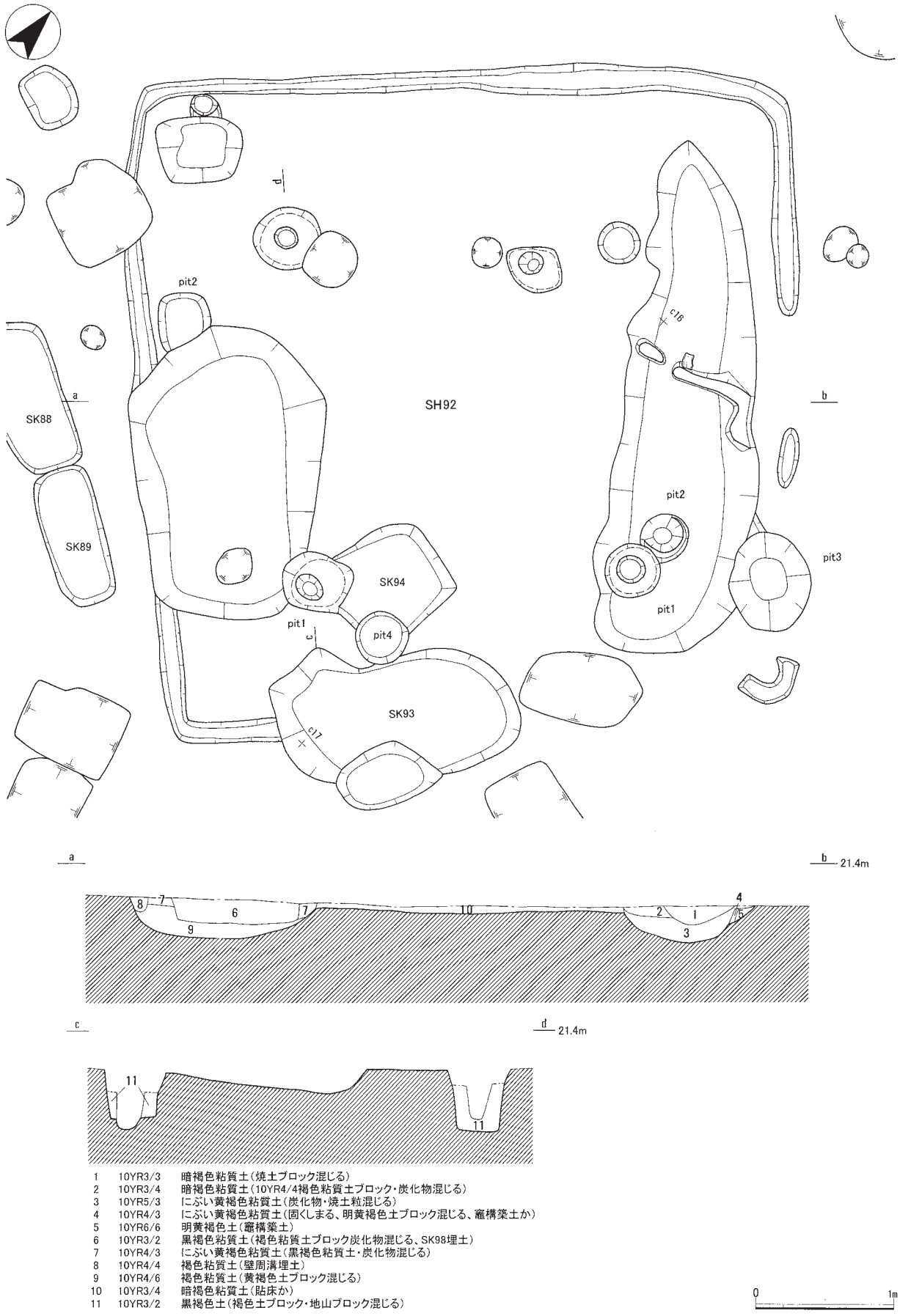
竪穴住居

ＳＨ92（第52図）　G区の中央西部、D-b16グリッド付近で検出した遺構である。上面が削平されており、残りが非常に悪いが、１辺約4.9mの方形の住居になるであろう。検出面からの深さは約４cmである。

北東辺のほぼ中央に竈が構築されている。構築土の残りも非常に悪いが、地山に近い土を使用しているようである。この北東辺に沿うように、不整形の土坑状の落ち込みを確認したが、上面の削平に加えて、検出面を下げすぎたこともあり、住居跡の埋土との関係が不明で、この住居に伴う土坑なのか詳細は不明である。ただし、かろうじて残っていた竈の袖が、この土坑の肩までで止まっていることや、土坑の北東側の肩と住居の辺がほぼ平行であることか



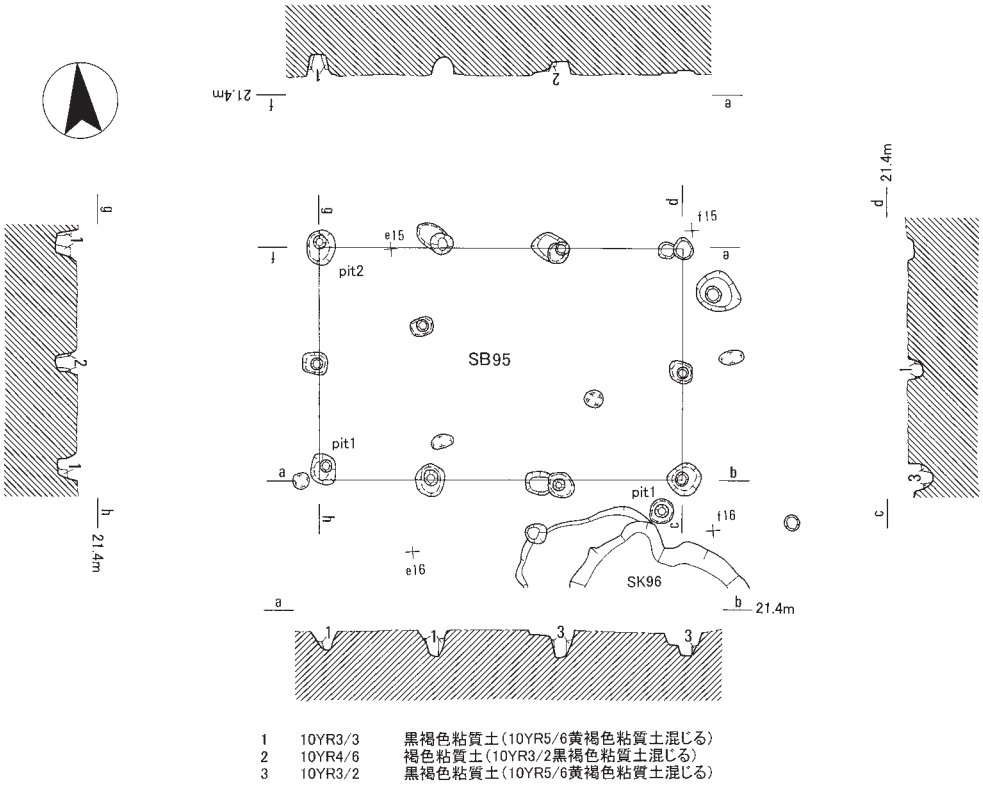
第51図　G･H区遺構平面図２(1:200)



1	10YR3/3	暗褐色粘質土(焼土ブロック混じる)
2	10YR3/4	暗褐色粘質土(10YR4/4褐色粘質土ブロック・炭化物混じる)
3	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土(炭化物・焼土粒混じる)
4	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土(固くしまる、明黄褐色土ブロック混じる、竈構築土か)
5	10YR6/6	明黄褐色土(竈構築土)
6	10YR3/2	黒褐色粘質土(褐色粘質土ブロック炭化物混じる、SK98埋土)
7	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土(黒褐色粘質土・炭化物混じる)
8	10YR4/4	褐色粘質土(壁周溝埋土)
9	10YR4/6	褐色粘質土(黄褐色土ブロック混じる)
10	10YR3/4	暗褐色粘質土(貼床か)
11	10YR3/2	黒褐色土(褐色土ブロック・地山ブロック混じる)

0 1m

第52図　ＳＨ92平面図･断面図(1:40)



第53図　ＳＢ95平面図･断面図(1:100)

ら、居住時はともかく、住居施工時に一連で掘削されたものと考えられる。

また、南西辺にも同じく長楕円形の土坑状の落ち込みが見られる。これについても前述したものと同様、住居との関連は不明であるが、ほぼ辺を同じくすることや、土坑を掘削して埋め戻した後に壁周溝を敷設していることから、居住時には埋め戻されていたとしても、住居施工時に何らかの目的を持って掘削したものであろう。なお、壁周溝と土坑状の落ち込みの新旧関係は、土層観察用の畦で確認したものである。

そのほかの施設としては、主柱穴・壁周溝・貼床などが確認された。主柱穴は、前述した土坑状の落ち込みを切るように検出した。壁周溝は、竈があったと思われる北東辺を除いて、ほぼ全周すると思われる。貼床は、住居中央部を中心に確認できた。

埋土からは土師器の杯や鍋などが出土している。

ＳＨ107（第51図）　Ｈ区の東側、D-ｇ18グリッド付近で検出した遺構である。撹乱により南側がほとんど破壊されているが、東西辺は約５ｍの平面方形の竪穴住居であると考えられる。東辺には明確ではないが、焼けしまった部分が確認できた。竈が構築されていた可能性が考えられる。また、北辺の一部ではあるが、壁周溝を検出した。床面には貼床の残存も認められたが、それを除去すると、ＳＫ113が確認された。床下土坑の可能性が考えられる。

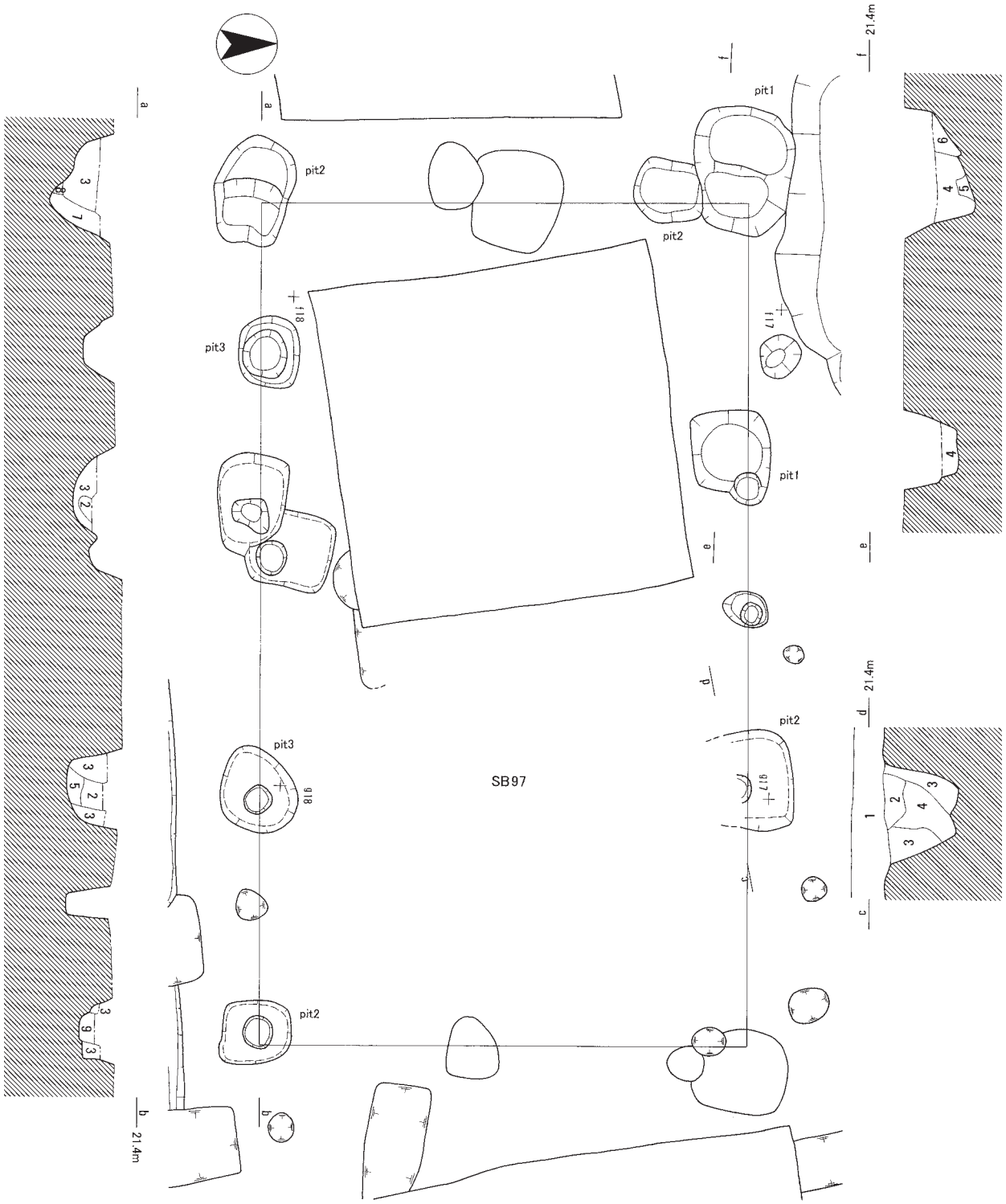
掘立柱建物

ＳＢ95（第53図）　Ｇ区の中央部、D-ｅ15グリッド付近で検出した遺構である。梁行３間、桁行２間の東西棟の建物で、北を基準とした主軸方向がＮ４°Ｅの側柱建物である。

柱穴はいずれも規模が小さく、直径20～40cmの円形の掘方に、20cm前後の柱痕が確認できる。北東隅の柱穴は他に比べて浅く、柱痕も確認できなかった。

柱穴の埋土からは、土師器の甕などが出土している。

ＳＢ97（第54図）　Ｇ区の南部、Ｈ区の北部、D-ｆ17グリッド付近で検出した遺構である。いずれの地区でも壁際に柱穴が並んでおり、当初規模が不明であったが、両区の境を拡張したところ、桁行３間、



1	10YR3/3	暗褐色土
2	10YR3/1	黒褐色土(10YR4/3にぶい黄褐色土混じる)
3	10YR3/2	黒褐色土(焼土・地山粒混じる)
4	10YR4/3	にぶい黄褐色土(10YR6/4にぶい黄橙色粘質土ブロック混じる)
5	10YR4/4	褐色砂質土(10YR3/2黒褐色土混じる、柱痕か？)
6	10YR4/3	にぶい黄褐色土(10YR3/2黒褐色土ブロック混じる、別ピットか)
7	10YR3/1	黒褐色土
8	10YR4/4	褐色土
9	10YR2/2	黒褐色粘質土(10YR4/4褐色土ブロック混じる、柱痕)

0 2m

第54図　ＳＢ97平面図･断面図(1:50)

梁行２間の側柱建物であることが判明した。ただし、拡張した際の東側の柱穴が、相対的に小さく、構築物のため確認できなかった東側に延びる可能性を残す。建物の主軸方向は、Ｎ１°Ｗである。

柱穴には、柱痕跡を確認できたものもあるが、全体的に明瞭ではない。また、重複するピットがいくつか確認できるため、建て替えなど、別の建物が存在する可能性も考えられる。

柱穴の埋土からは、土師器の甕や須恵器片などが出土している。

土坑

ＳＫ96（第51図） Ｇ区の中央部、D-e16グリッド付近で検出した遺構である。平面はほぼ長方形を呈し、長軸4.3m、短軸2.9mで、壁は緩やかに立ち上がる。底部はほぼフラットであるが、直径５～10cm程度の小穴が多く見られ、凸凹した状態である。

埋土からは須恵器蓋や土師器の杯、甕などが出土している。

ＳＫ99（第51図） Ｈ区の北部壁際、D-e18グリッド付近で検出した遺構である。調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。底部の状況が前述したＳＫ96とよく似るが、壁の立ち上がりは比較的急である。

埋土からは土師器の甕などが出土している。

ＳＫ102（第51図） Ｈ区の北部中央、D-ｄ18グリッド付近で検出した遺構である。平面形は縦長の台形で、長軸約1.3m、最大幅約0.6m、検出面からの深さは最深部で約33cmである。

埋土の状況や、規模、特徴などから、Ｃ区（第２次調査）で数基確認されている「小型台形土坑」であろう。

ＳＫ109（第51図） Ｈ区の東西方向のトレンチ西部、C-ｘ25グリッド付近で検出した遺構である。南半部は調査区外にあるため全体の規模は不明であるが、確認できた長軸約１ｍ、検出面からの深さ61cmである。埋土には礫が多量に含まれ、底に近くなるほど大きくなる。

丸瓦や土師器、須恵器などが出土している。

落ち込み

ＳＺ112（第51図） Ｈ区の南端部、H-ｘ３グリッドで検出した遺構である。当初、不整形の落ち込みと考え、幅約60cmの細長い箇所のみを遺構としたが、壁面の土層観察により、ＳＺ112の北にある落ちまでが一連の遺構であることが判明した。調査区幅が約１ｍと狭いため、詳細は不明であるが、竪穴住居である可能性が高いと考える。

埋土からは土師器杯や把手などが出土している。

②　遺物

ＳＫ96出土遺物（第55図268～272）

須恵器（268） 杯Ｈ蓋である。硯に転用していた可能性が考えられる。

土師器（269～272） 269は杯Ｇ。器面の剥離が激しく、調整は全体的に不明瞭である。270は皿Ａ。271・272は甕。271は口縁部が「く」の字状に強く屈曲する。272は頸部付近まで外面ケズリ調整を施す。体部が直線的で、そこから口縁部が緩く外反する。

ＳＨ92出土遺物（第55図273・274）

土師器（273・274） 273は杯Ｃ。底部が丸みを帯び、体部との境が不明瞭である。274は鉢。内面の摩滅が激しい。

ＳＫ93出土遺物（第55図275～277）

土師器（275・276） 275・276は甕。276は体部外面に「×」のヘラ描きが見られる。

石製品（277） 砥石である。いずれの面も良く使い込まれている。

ＳＫ105出土遺物（第55図278）

土師器（278） 椀Ｃである。底部から口縁部まで、明瞭な境が無く丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。

ＳＫ99出土遺物（第55図279）

土師器（279） 甕である。口縁端部が強いヨコナデにより上方に突出する。

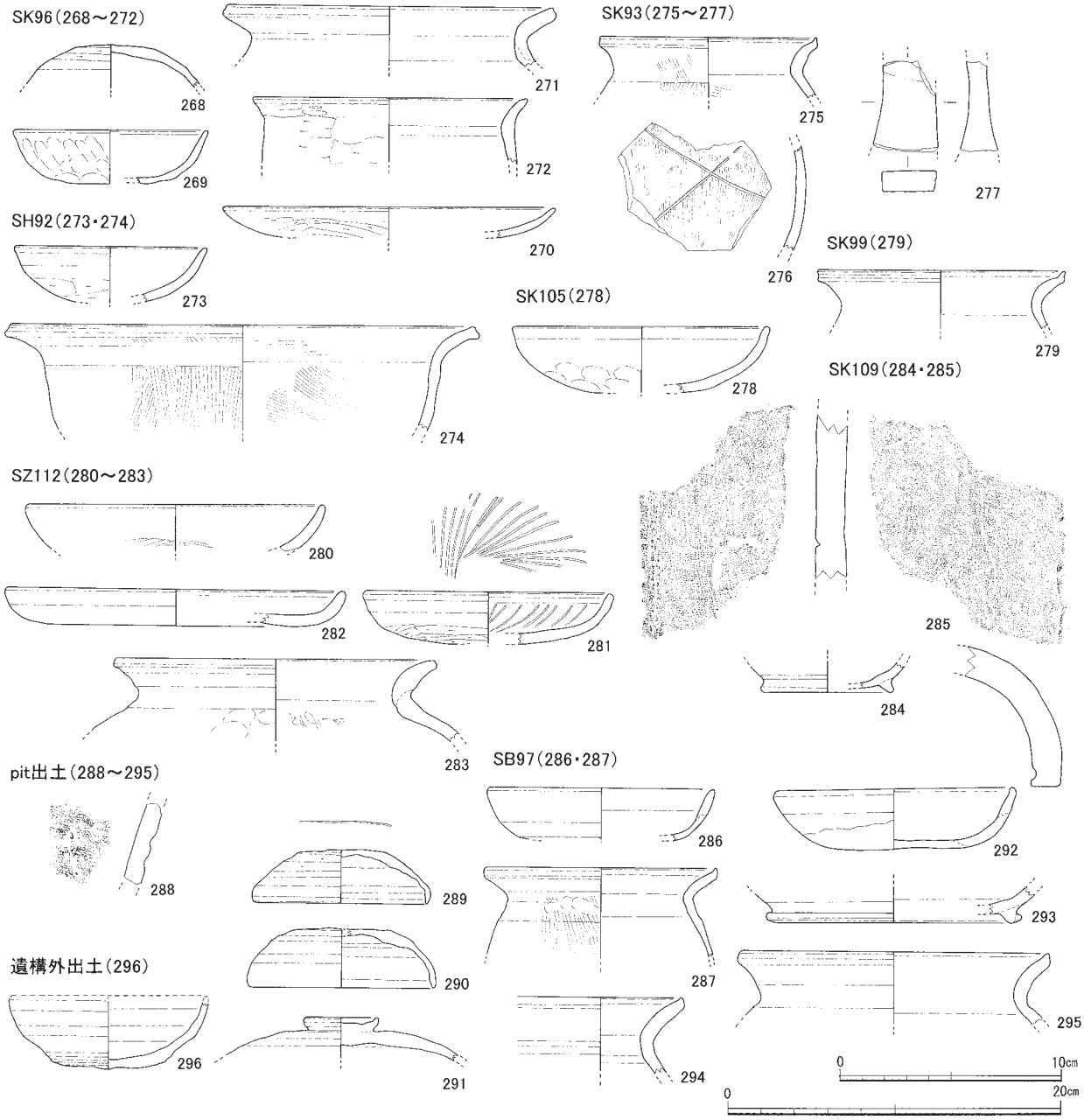
ＳＺ112出土遺物（第55図280～283）

土師器（280～283） 280・281は杯Ｃ、282は皿Ａである。281の内面には放射状暗文が見られる。283は甕である。

ＳＫ109出土遺物（第55図284・285）

土師器（284） 椀の高台部分であろう。底部から体部への境目付近に断面三角形の高台が付く。

瓦（285） 丸瓦である。内面に粘土繋ぎ痕跡が明瞭



第55図　G・H区出土遺物実測図(288は1:3,それ以外1:4)

に残る。

ＳＢ97出土遺物（第55図286・287）

土師器（286・287） 286は杯Ｇである。内外面とも摩滅が激しく、調整は不明。287は甕である。

ｐｉｔ出土遺物（第55図288～295）

縄文土器（288） 深鉢の破片と思われる。摩滅が非常に激しいので、文様など不明瞭であるが、押型文と見られ、早期初頭のものと考えられる。H区D-f19 pit1出土である。

須恵器（289～291） 289は杯H蓋である。全体的に生焼けで調整不明瞭である。外面にヘラ記号が見られる。本報告では蓋としたが、杯Ａの可能性も考えられる。Ｇ区D-c16pit3出土である。290は杯H蓋。外面には灰をかぶった痕跡が見られる。Ｇ区D-c16 pit4出土である。291は杯蓋。口縁部を欠く。天頂部につまみが付く。H区D-f18pit1出土である。

土師器（292～295） 292は杯Ｇである。粘土輪積み痕が残り、粗製である。Ｇ区D-e16pit1出土である。

第56図　Ⅰ・Ｊ・Ｋ区遺構平面図(1:200)

293は杯Ｂか。Ｇ区D-a17pit2出土である。294は甕。Ｇ区D-c16pit1出土である。295は甕。Ｇ区D-d17pit1出土である。

遺構外出土遺物（第55図296）

須恵器（296） 杯Ａか。蓋の可能性も考えられる。

（柴山圭子）

第４節　Ｉ・Ｊ・Ｋ区の調査

①　遺構

ここでは、Ｉ・Ｊ・Ｋ区で確認した主な遺構について述べる。個々の遺構の詳細については、後掲の遺構一覧（第19～21表）を参照されたい。

ａ　Ｉ・Ｊ区の遺構

竪穴住居

ＳＨ120（第57図） Ｊ区の南西隅、H-ｓ１グリッド付近で検出した遺構である。平面長方形で、長辺約3.3m、短辺約2.7m、検出面からの深さは約26cmである。

東辺には焼土粒の混じった埋土が確認でき、竈が構築されていたと考えられるが、床面などの焼け締まりがほとんど見られず、袖などの施設も明確に確認できなかった。その他、住居に伴う壁周溝や主柱穴は見られず、床面についても少々の硬化がある程度で、明確な貼床としては認識できなかった。

埋土からは須恵器の杯や壺、土師器の杯や甕などが出土したが、量は多くない。むしろ、西に近接する土坑ＳＫ121から遺物は多く出土している。ＳＨ120は廃棄土坑を伴う施設であると考えられる。

ＳＨ139（第58図） Ｉ区の中央、C-s20グリッド付近で検出した遺構である。平面長方形で、長辺7.3m、短辺4.1m、検出面からの深さ12cmである。

中央付近から南側が撹乱されており、遺構内の施設の詳細は不明であるが、壁周溝および西側壁周溝内を中心に壁柱穴を確認した。また、ＳＫ158は床下土坑の可能性が考えられる。

西野田遺跡全体を通して検出した竪穴住居と比較して、平面プラン、住居内施設などが特徴的で、明らかな物証は無いが、居住用施設というよりは工房関連の施設である可能性が考えられる。

東に近接する廃棄土坑ＳＫ142からは、刀子をはじめとした大量の遺物が出土しているが、それと比較すると、ＳＨ139の出土遺物はそれほど多くない。須恵器杯・壺、土師器皿や甕、暗文土師器などが出土した。

掘立柱建物

ＳＢ156（第60・61図） Ｉ区の北部および一部Ｋ区の北東部、C-q17グリッド付近で検出した遺構である。

一部調査区外に延びるため、確定はできないが、おそらく桁行４間、梁行３間、主軸方向がＮ７～９°Ｅの側柱建物である。柱穴の掘方は平面隅丸の長方形で、長辺が60cmから大きいもので１ｍになるものもある。規格性は見られない。その中で、撹乱により破壊されていたものを除き、直径約20cmの柱痕がほぼ確認できる。

柱穴内からは須恵器の杯や土師器の皿などが出土している。

ＳＢ157（第59図） Ｉ区の北部、C-s17グリッド付近で検出した遺構である。調査区外に延びるため、全体の規模は不明であるが、桁行２間以上、梁行２間の側柱建物である。主軸方向は前述のＳＢ156と同様Ｎ７～９°Ｅである。

柱穴の掘方は平面隅丸の長方形で、長辺が80～100cm、確認できた柱痕は直径約20cmである。ＳＢ156と比較すると、柱穴の掘方の形状にバラツキが少なく、おおよその規格を意識していると考えられる。

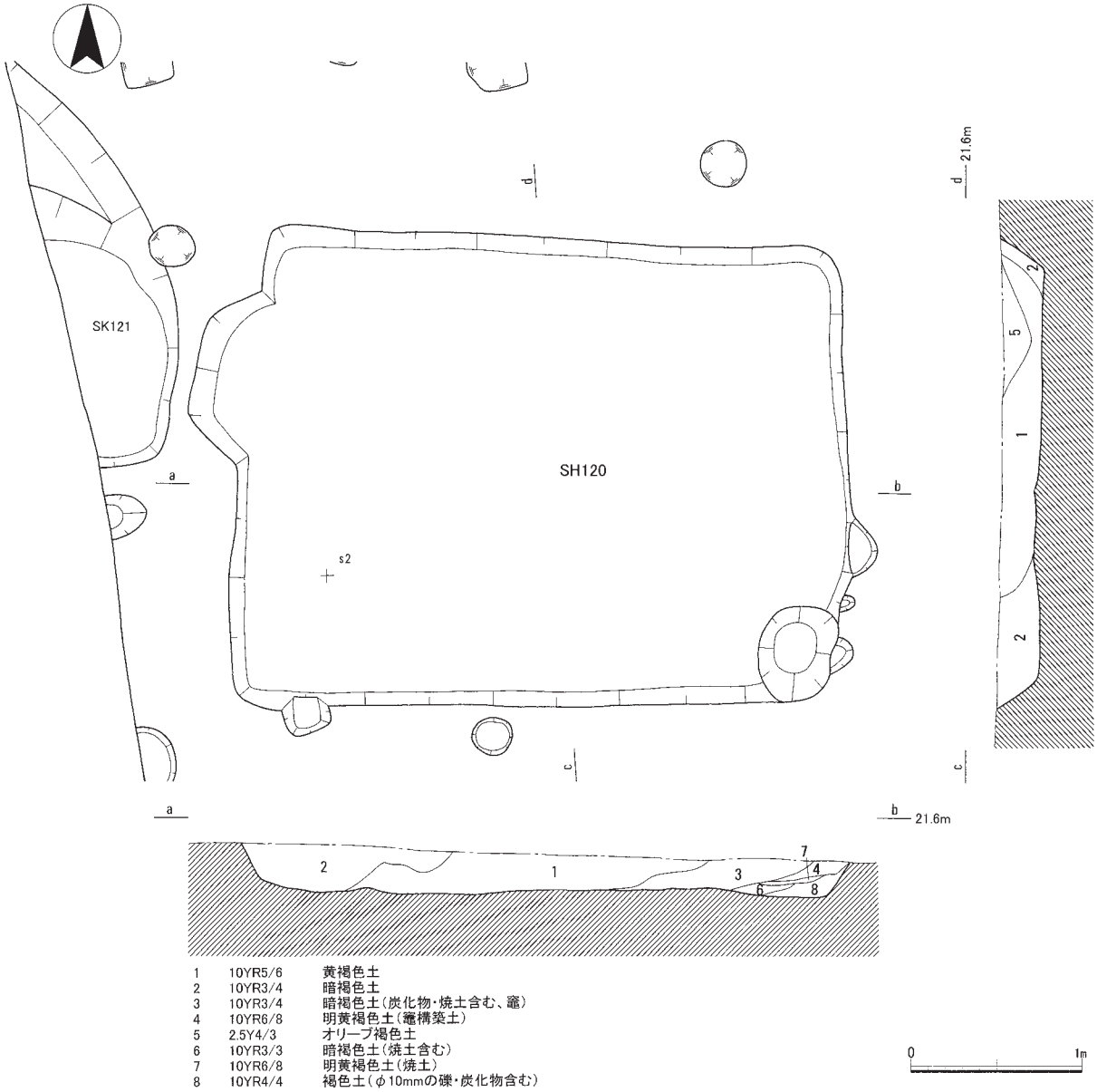
柱穴からは須恵器の蓋をはじめ、土師器の甕、土錘などが出土している。

土坑

ＳＫ121（第56図） Ｊ区の南西部、H-ｒ１グリッドで検出した遺構である。ほとんどが、調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。検出できた最大幅は約2.5m、検出面からの深さは40cmである。

調査区西壁で確認した土層の状況から、遺構の北側の肩は緩やかに立ち上がり、南側については比較的急な立ち上がりであることが観察できる。

竪穴住居ＳＨ120の西側に近接し、他の遺構と比較して、出土遺物の量が多いことが特徴的である。こ



第57図　ＳＨ120平面図･断面図(1:40)

のＳＫ121に限らず、竪穴住居近くの土坑から比較的多量の遺物が出土している状況が見られることから、建物に伴う廃棄土坑であると考えられる。

埋土からは、須恵器の高杯や甕、土師器の杯などが出土している。

ＳＫ142（第62図）　Ｉ区の南東、C-t21グリッド付近で検出した遺構である。東部が調査区外にあるため、全体の規模は不明であるが、おそらく平面隅丸の長方形で、短辺約４ｍ、長辺６ｍ以上、検出面からの深さ約30cmである。中央部からやや北に土坑状の落ち込みＳＫ148・ＳＫ149を検出したが、ＳＫ142に伴うものか否かは不明である。

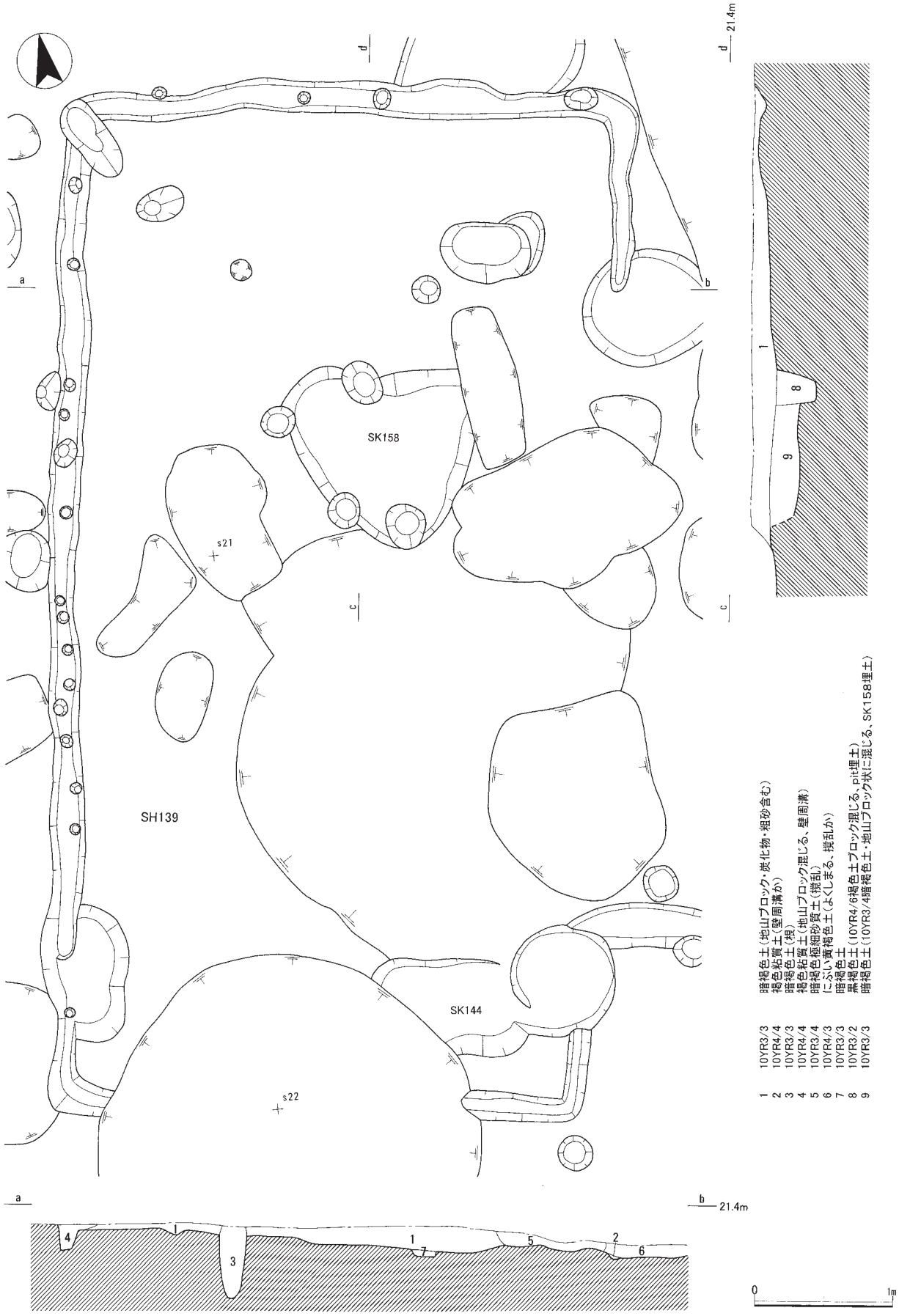
北西辺中央付近に焼土の塊が確認でき、よく焼けしまった状況で、焼土の中にも遺物が含まれていた。

竪穴住居ＳＨ139の東に近接し、出土遺物量も非常に多い。須恵器の杯や蓋、高杯、土師器の杯や甕などのほか、土錘や刀子などが出土している。

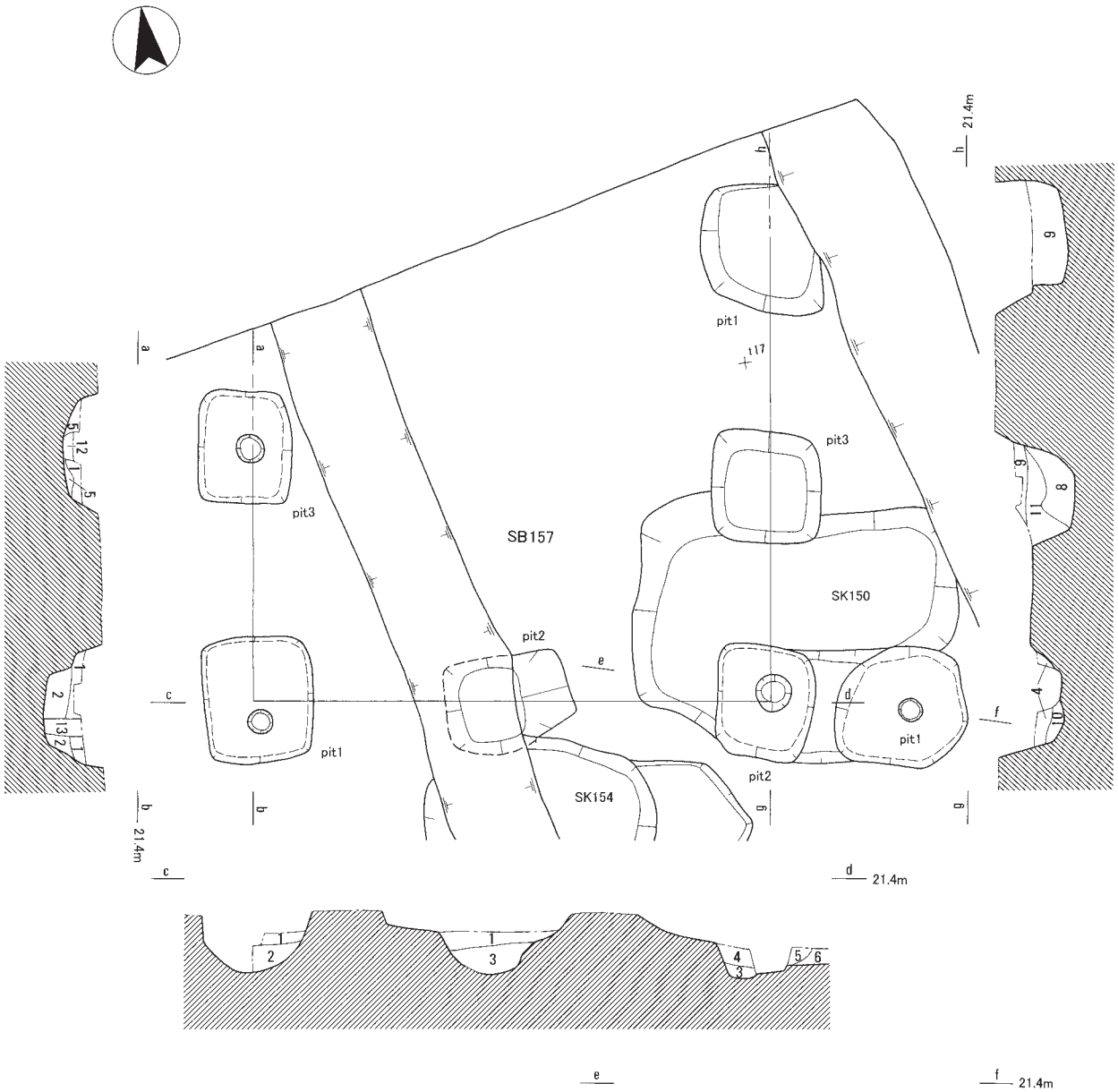
近世墓

ＳＸ136（第63図）　Ｊ区の中央北部、C-s24グリッド付近で検出した遺構である。撹乱で一部破壊されているが、平面方形で長辺90cm、短辺80cm、検出面からの深さ約20cmである。

人骨が一体、頭部を西に向けた屈葬状態で出土した。詳細な分析の報告は第７章を参照されたい。そ



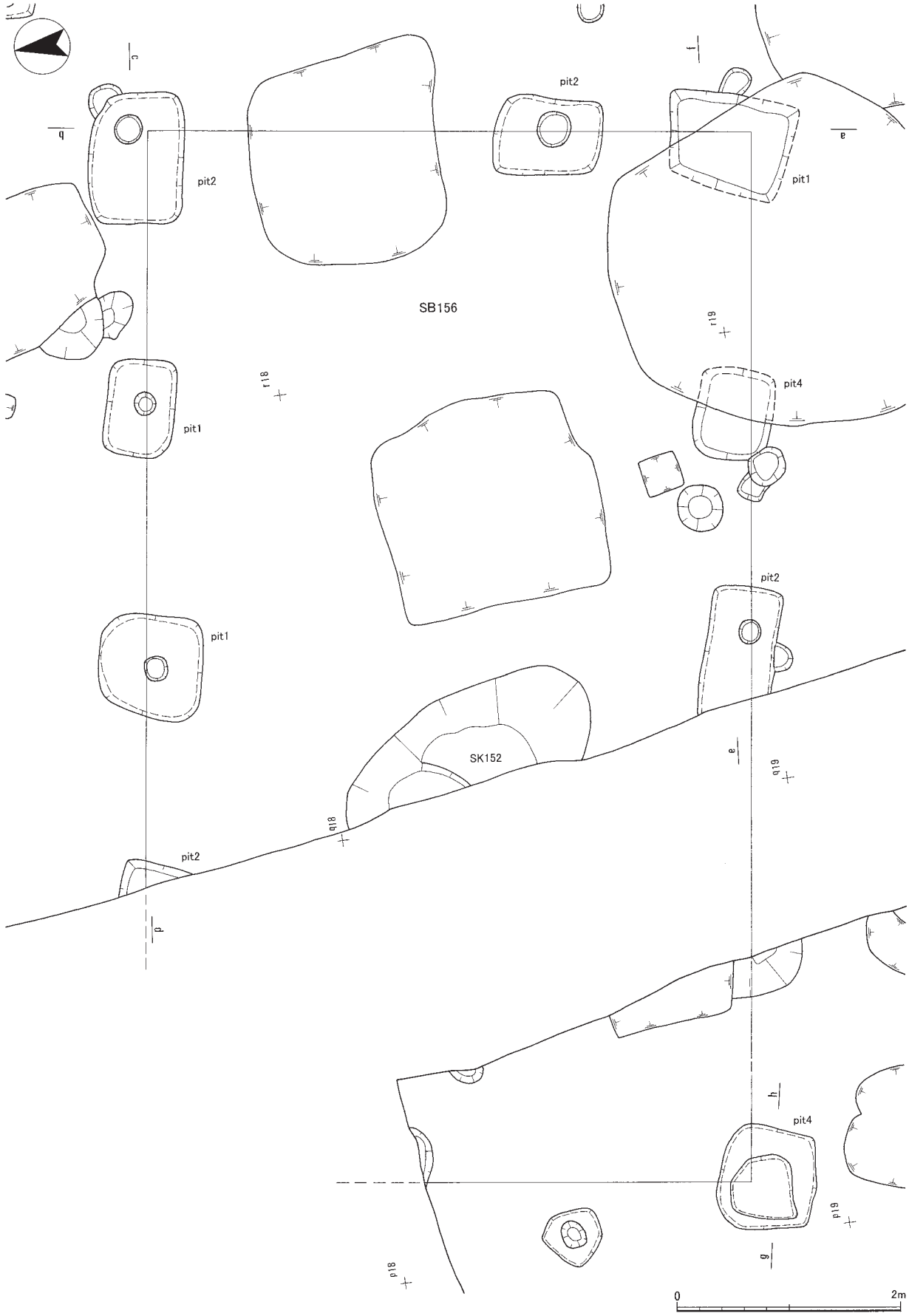
第58図　ＳＨ139平面図･断面図(1:40)



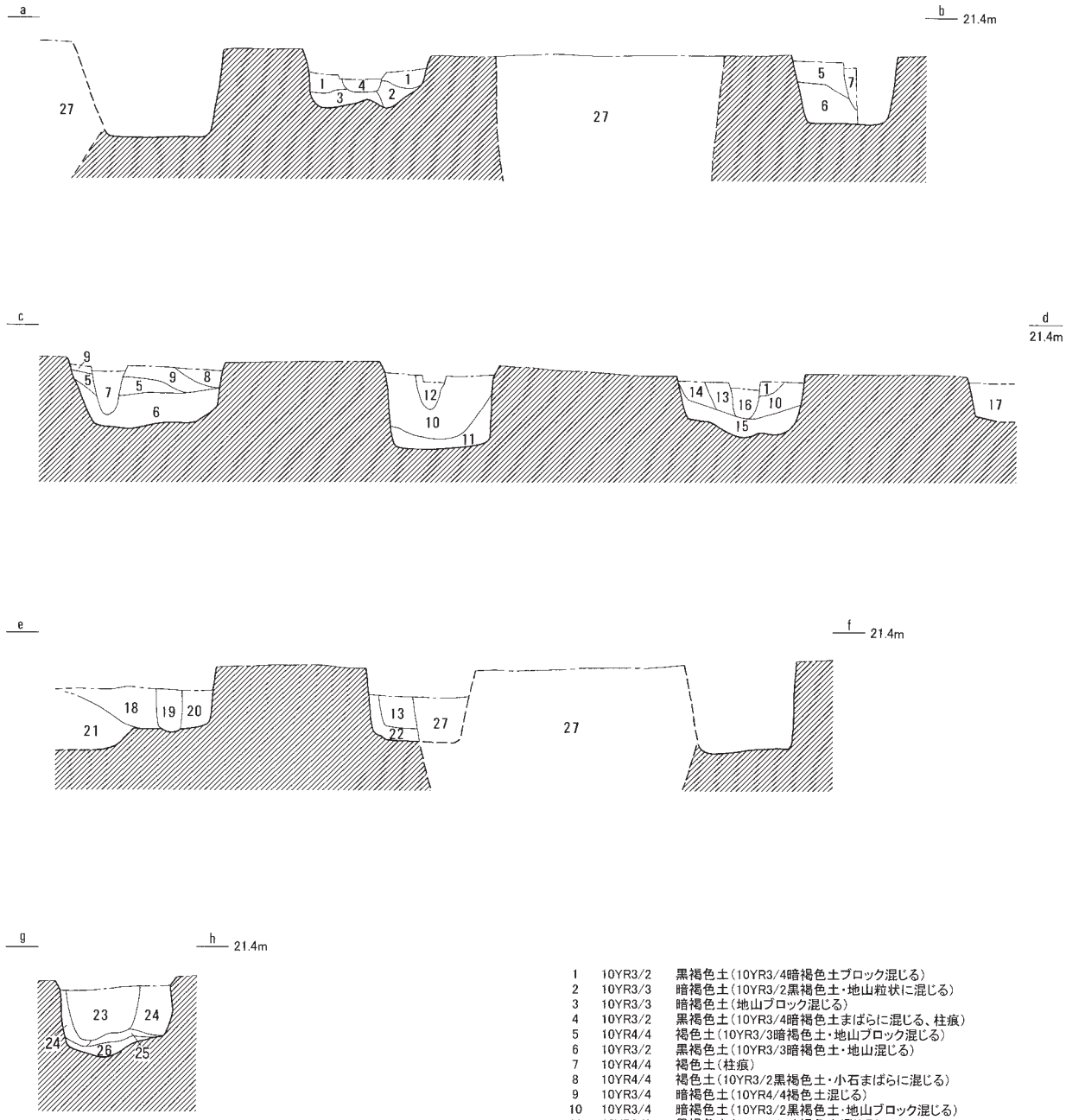
1	10YR3/2	黒褐色土(10YR3/4暗褐色土・地山ブロック混じる)
2	10YR3/4	暗褐色土(10YR3/3暗褐色土ブロック混じる)
3	10YR4/4	褐色土(10YR3/2黒褐色土・地山ブロック混じる)
4	10YR3/4	暗褐色土(10YR3/2黒褐色土混じる)
5	10YR3/4	暗褐色土(地山ブロック混じる)
6	10YR4/6	褐色土(小石混じる)
7	10YR4/4	褐色土(10YR3/2黒褐色土混じる、柱痕)
8	10YR3/3	暗褐色土(10YR4/4褐色土混じる)
9	10YR4/4	褐色土(10YR3/2黒褐色土ブロック・小石混じる)
10	10YR3/3	暗褐色土(地山ブロック混じる)
11	10YR4/6	褐色土(10YR3/2黒褐色ブロック・粗砂混じる)
12	10YR3/4	暗褐色土(柱痕)
13	10YR3/3	暗褐色土(地山粒状に混じる、柱痕)

0 2m

第59図　ＳＢ157平面図･断面図(1:50)



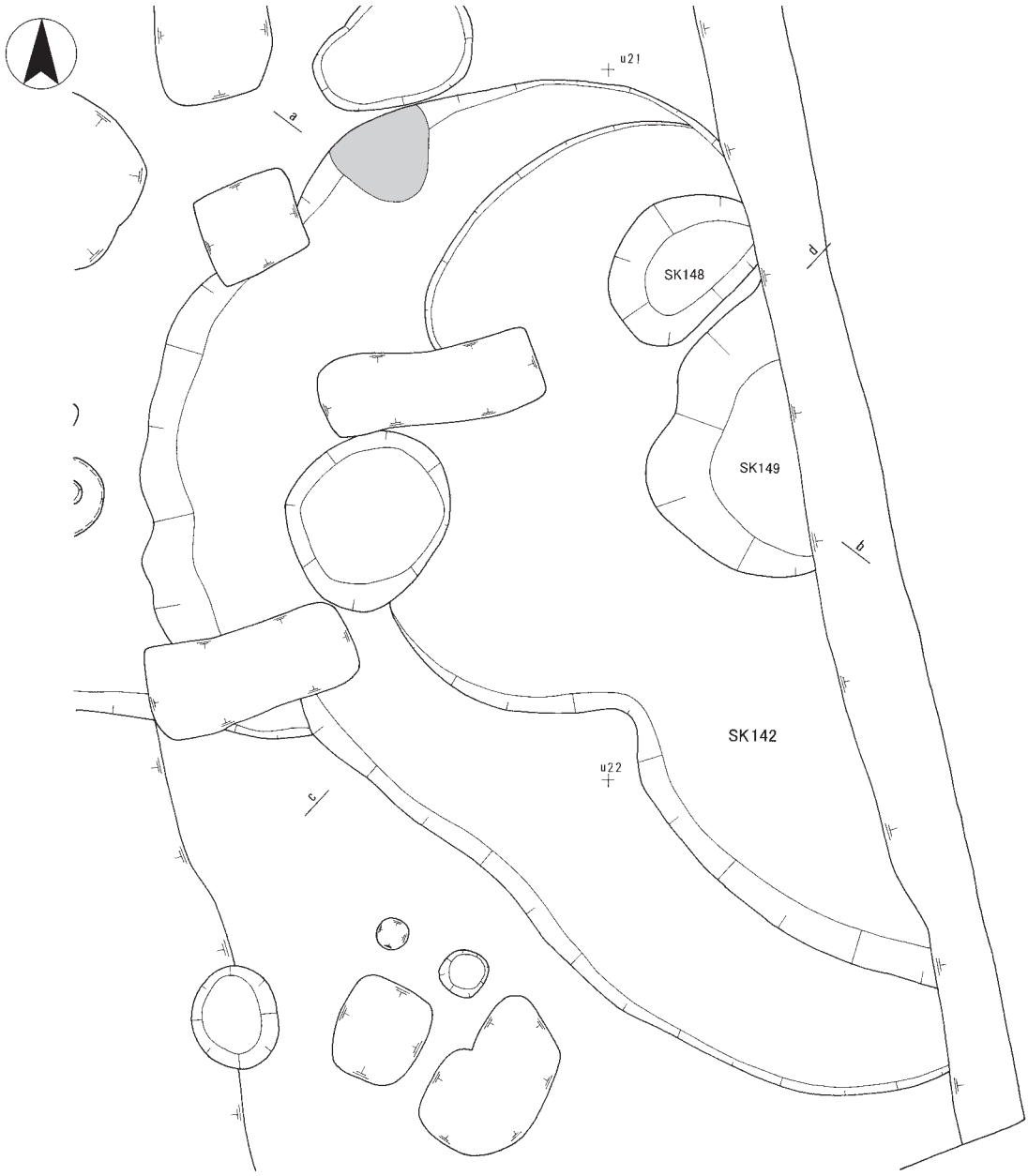
第60図　ＳＢ156平面図(1:50)

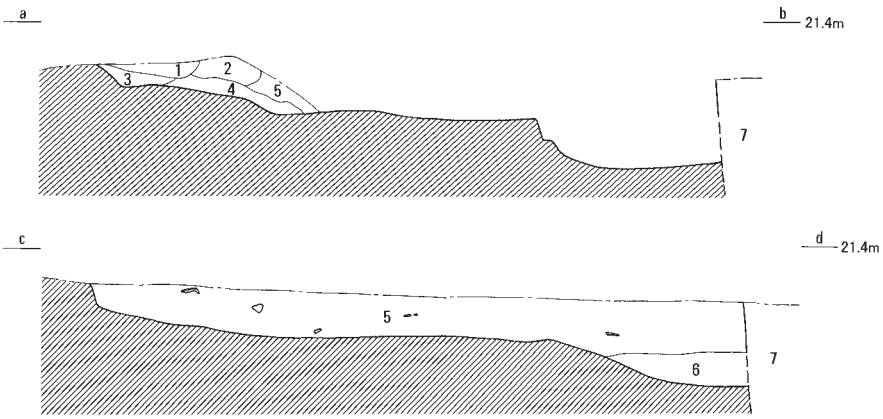


1	10YR3/2	黒褐色土(10YR3/4暗褐色土ブロック混じる)
2	10YR3/3	暗褐色土(10YR3/2黒褐色土・地山粒状に混じる)
3	10YR3/3	暗褐色土(地山ブロック混じる)
4	10YR3/2	黒褐色土(10YR3/4暗褐色土まばらに混じる、柱痕)
5	10YR4/4	褐色土(10YR3/3暗褐色土・地山ブロック混じる)
6	10YR3/2	黒褐色土(10YR3/3暗褐色土・地山混じる)
7	10YR4/4	褐色土(柱痕)
8	10YR4/4	褐色土(10YR3/2黒褐色土・小石まばらに混じる)
9	10YR3/4	暗褐色土(10YR4/4褐色土混じる)
10	10YR3/4	暗褐色土(10YR3/2黒褐色土・地山ブロック混じる)
11	10YR3/2	黒褐色土(10YR3/4暗褐色土混じる)
12	10YR4/4	褐色土(10YR3/2黒褐色土・炭化物・焼土混じる、柱痕)
13	10YR3/3	暗褐色土(10YR3/4暗褐色土混じる)
14	10YR4/6	褐色土(10YR3/4暗褐色土・小石混じる)
15	10YR3/2	黒褐色土(地山混じる)
16	10YR3/4	暗褐色土(地山粒状に混じる、柱痕)
17	10YR3/2	黒褐色土(10YR2/3黒褐色土・地山・炭化物・焼土混じる)
18	10YR4/4	褐色土(10YR3/2黒褐色土・地山混じる)
19	10YR3/3	暗褐色土(炭化物・焼土混じる、柱痕)
20	10YR3/2	黒褐色土(10YR4/4褐色土混じる)
21	10YR3/2	黒褐色土(炭化物混じる、別遺構か)
22	10YR3/2	黒褐色土(地山ブロック・焼土混じる)
23	10YR4/2	灰黄褐色土(地山ブロック混じる、柱痕か？)
24	10YR3/2	黒褐色土
25	10YR6/4	にぶい黄橙色
26	10YR5/2	灰黄褐色土
27		撹乱

0 2m

第61図　ＳＢ156断面図(1:50)

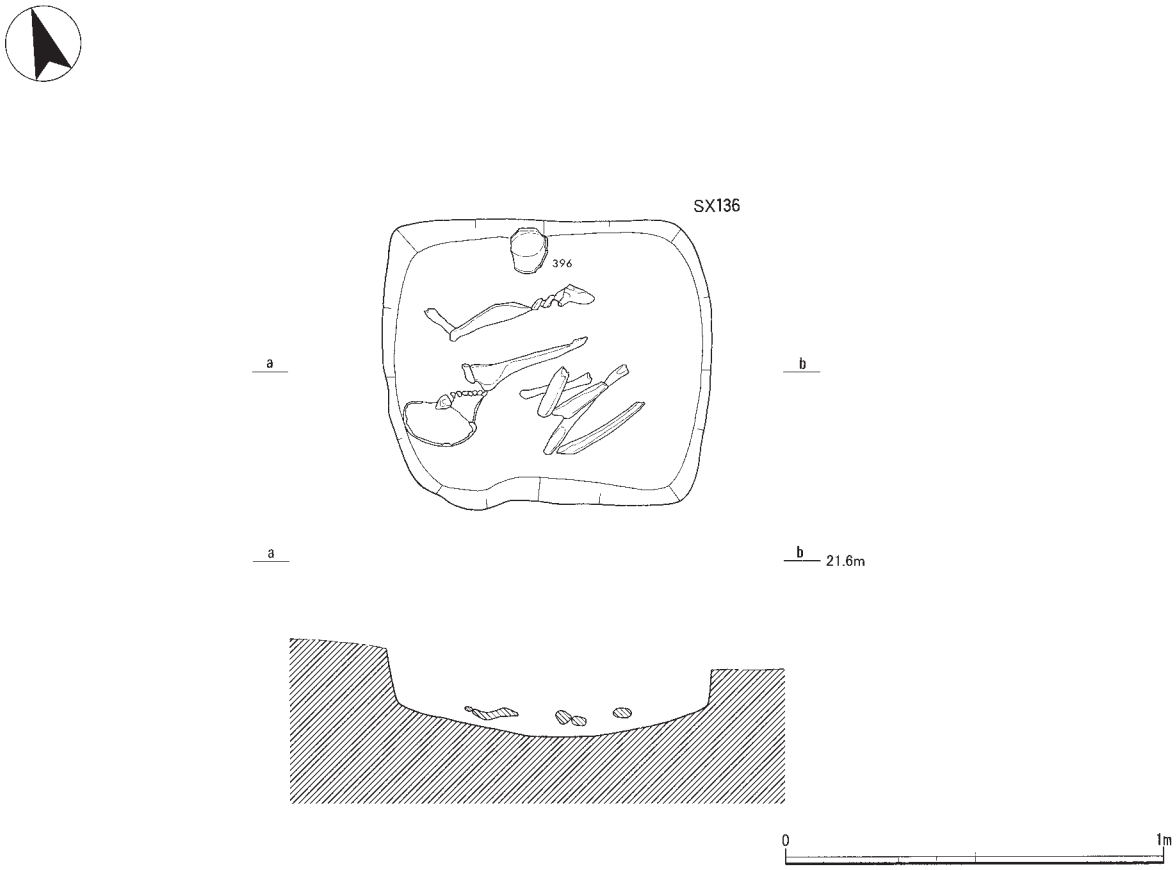




1	10YR3/3	暗褐色土(5YR4/8赤褐色土・焼土ブロック多く混じる、よく焼けしまる)
2	10YR3/3	暗褐色土(10YR4/6褐色土・焼土ブロック混じる)
3	10YR3/4	暗褐色土(焼土含む)
4	10YR3/3	暗褐色土(焼土・地山ブロック混じる)
5	10YR3/2	黒褐色土(炭化物・焼土混じる)
6	10YR3/3	暗褐色土(地山ブロック・焼土含む、SK149埋土)
7		撹乱

0　1m

第62図　ＳＫ142平面図･断面図(1:40)　※アミかけ部分は焼土塊を表す。



第63図　ＳＸ136平面図･断面図(1:20)

のほか、屈葬した背中側に鉄釉丸椀、頭部に近いところで寛永通寶６枚が出土した。鉄滓が１点出土しているが、釘などは見られなかった。

（柴山圭子）

ｂ　Ｋ区の遺構

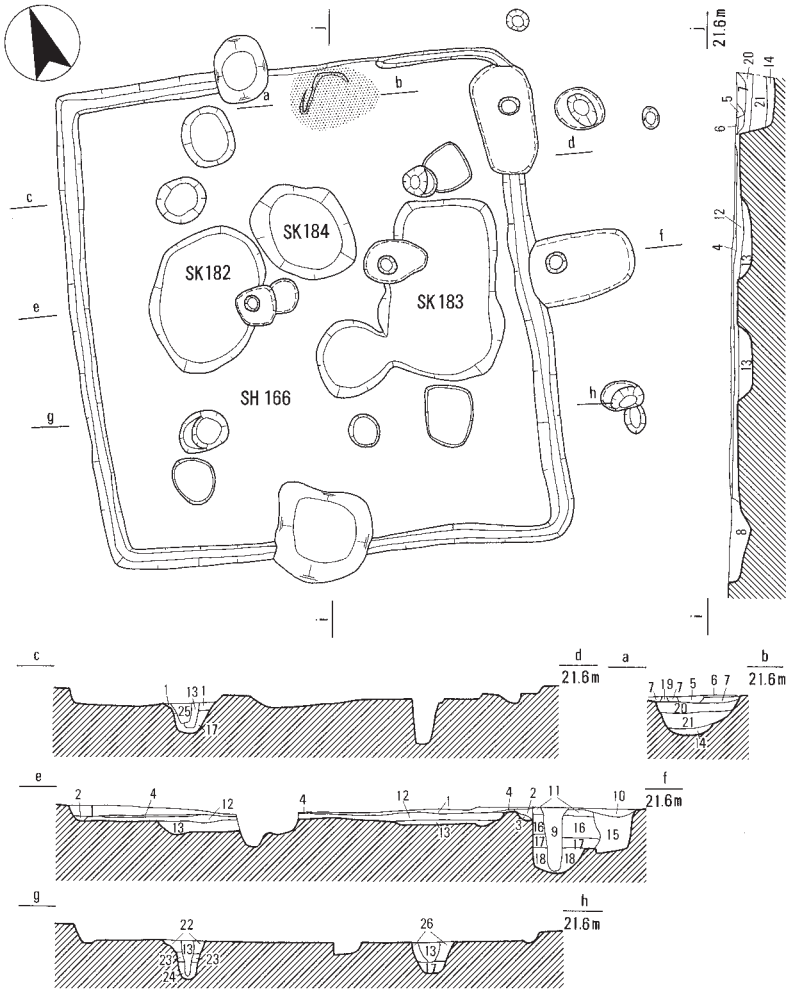
竪穴住居

ＳＨ166（第64図）　調査区中央に位置する竪穴住居である。平面形は隅丸方形で、規模は長軸6.4m、短軸6.5m、深さ0.2mである。竈跡を北辺のほぼ中央に確認した。基底部が若干残存していた。壁周溝は竈跡を除く四周を巡る。規模は、幅0.1～0.3m、深さ0.1m程度であった。建物方向はN14°Ｅである。住居内において主柱穴４箇所を確認した。床面の一部では貼床が存在する。貼床除去後にＳＫ182・183・184を確認した。出土遺物は土師器甕・壺・椀・鍋・暗文土師器小片、須恵器壺・甕・杯・杯蓋・椀、鏃茎・滓等である。出土遺物より、飛鳥時代後半に属すると考えられる。

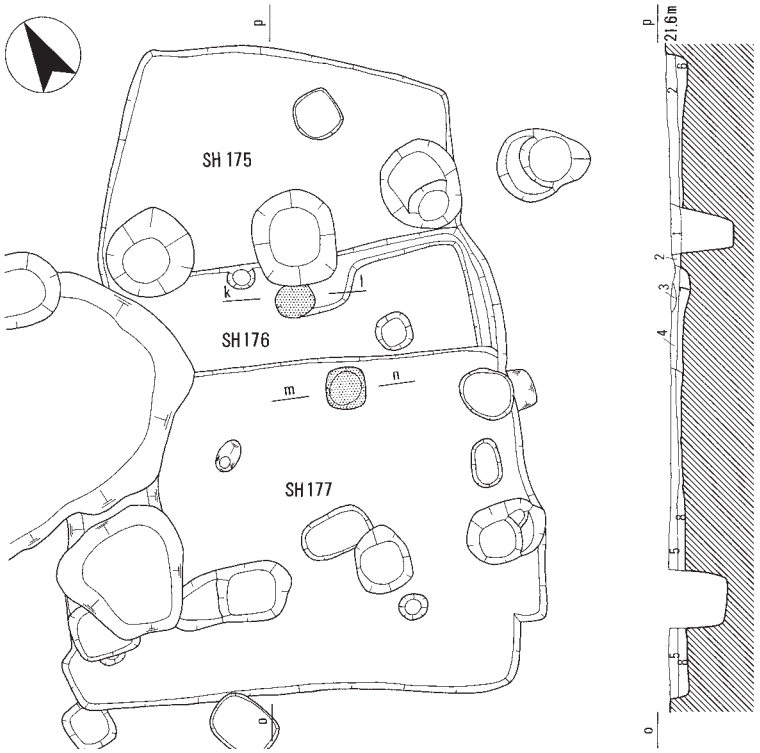
ＳＨ175（第64図）　当初は１つの遺構、ＳＫ171としていたが、掘削を進めていくとＳＨ175、ＳＨ176、ＳＨ177の竪穴住居が３棟の存在が確認できた。ＳＫ171として取りあげた出土遺物は、土師器甕・杯・高杯、暗文土師器小片、須恵器杯・甕である。出土遺構が判然としないため、ＳＫ171出土として遺物は報告した。ＳＨ175は調査区南部で検出された竪穴住居である。平面形は隅丸方形であろうか。規模は長軸4.8m、短軸2.7m以上、深さ0.28mである。建物方向はN36°Ｅである。遺構の新旧関係については、ＳＨ176に切られていた。出土遺物は土師器甕を確認した。出土遺物や遺構の新旧関係より、飛鳥時代後半に属すると考えられる。

ＳＨ176（第64図）　調査区南部で検出された竪穴住居である。平面形は隅丸方形であろうか。規模は長軸5.1m、短軸2.0m以上、深さ0.15mである。建物方向はN23°Ｅである。遺構の新旧関係については、ＳＨ177に切られていた。出土遺物は土師器甕を確認した。出土遺物と遺構の新旧関係より、飛鳥時代末から奈良時代前半に属すると考えられる。

ＳＨ177（第64図）　調査区南部で検出された竪穴住居である。平面形は隅丸方形である。規模は長軸6.8



・ＳＨ166
1 10YR3/2黒褐色土(埋土、主柱穴埋土)
2 10YR3/1黒褐色土(壁周溝埋土)
3 10YR3/3暗褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック含む(壁周溝埋土)
4 10YR4/2灰黄褐色土(貼床)
5 10YR4/3にぶい黄褐色土、炭化物混じる(竈)
6 10YR5/4にぶい黄褐色土、焼土混じる(竈)
7 10YR5/3にぶい黄褐色土地山ブロック、炭化物混(竈)
8 10YR3/3暗褐色土（撹乱埋土）
9 10YR3/2黒褐色土に地山ブロック含む焼土極少量含む（SB179柱痕埋土）
10 10YR3/2黒褐色土（木根痕か？）
11 10YR4/2灰黄褐色土、地山ブロック多く含む（SB179掘方埋土）
12 10YR4/3にぶい黄褐色土地山ブロック混じる（埋土）
13 10YR4/2灰黄褐色土、地山ブロック含む（SK182・183・184埋土、SB179掘方埋土）
14 10YR3/3暗褐色土、焼土ブロック混じる（竈）
15 10YR3/1黒褐色土地山ブロック多く含む（木根痕）
16 10YR5/2灰黄褐色土に地山ブロック多く含む（SB179掘方埋土）
17 10YR5/3にぶい黄褐色土に地山ブロック含む（SB179掘方埋土）
18 10YR7/6明黄褐色土（竈袖）
19 10YR4/2灰黄褐色土、焼土若干混じる（竈）
20 10YR4/3にぶい黄褐色土焼土ブロック混じる（SH166竈）
21 10YR4/3にぶい黄褐色土に地山ブロック含む（竈）
22 10YR5/2灰黄褐色土に地山ブロック含む（主柱穴柱痕埋土）
23 10YR4/3にぶい黄褐色土に地山ブロック少量含む（主柱穴掘方埋土）
24 10YR3/2黒褐色土に地山ブロック少量含む（主柱穴掘方埋土）
25 10YR4/3にぶい黄褐色土に地山ブロック多量含む（木根痕）
26 10YR4/3にぶい黄褐色土に地山ブロック含む（主柱穴掘方埋土）



・ＳＨ175，176，177
1 10YR3/2黒褐色土（SB185堀方埋土）
2 10YR3/3暗褐色土（SH175埋土）
3 10YR3/2黒褐色土、焼土混じる（SH176埋土）
4 10YR4/3にぶい黄褐色土（SH176埋土）
5 10YR4/2灰黄褐色土（SH177埋土）
6 10YR4/2灰黄褐色土に地山ブロック含む（SH175埋土）
7 10YR4/3にぶい黄褐色土に地山ブロック含む（SH176埋土）
8 10YR5/4にぶい黄褐色土に地山ブロック含む（SH177埋土）
9 5YR6/6橙色土、焼土の塊（SH176竈）
10 10YR4/3にぶい黄褐色土に焼土混じる（SH176竈）
11 10YR5/3にぶい黄褐色土（SH176・177竈）
12 5YR4/6赤褐色土、焼土の塊（SH177竈）
13 10YR5/3にぶい黄褐色土5YR5/6明赤褐色土（SH177竈）

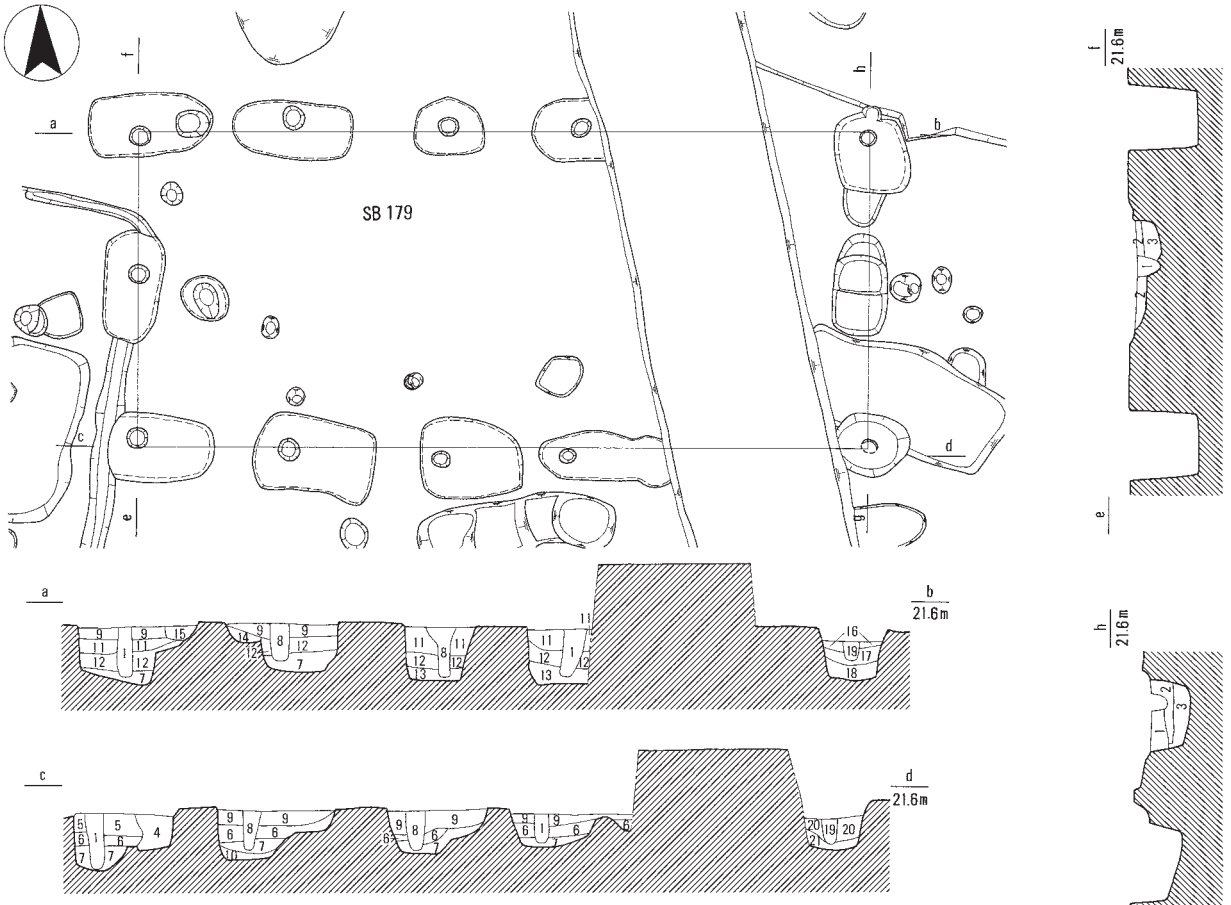
0　4m

第64図　ＳＨ166･175～177平面図･断面図(1:100)

m、短軸4.2m、深さ0.21mである。建物方向はN23°Eである。北辺中央からやや東寄りに竈跡と思われる焼土痕を確認した。出土遺物は土師器甕・杯、須恵器甕・杯蓋を確認した。出土遺物と切り合う遺構の新旧関係より、奈良時代前半に属するものと思われる。

掘立柱建物

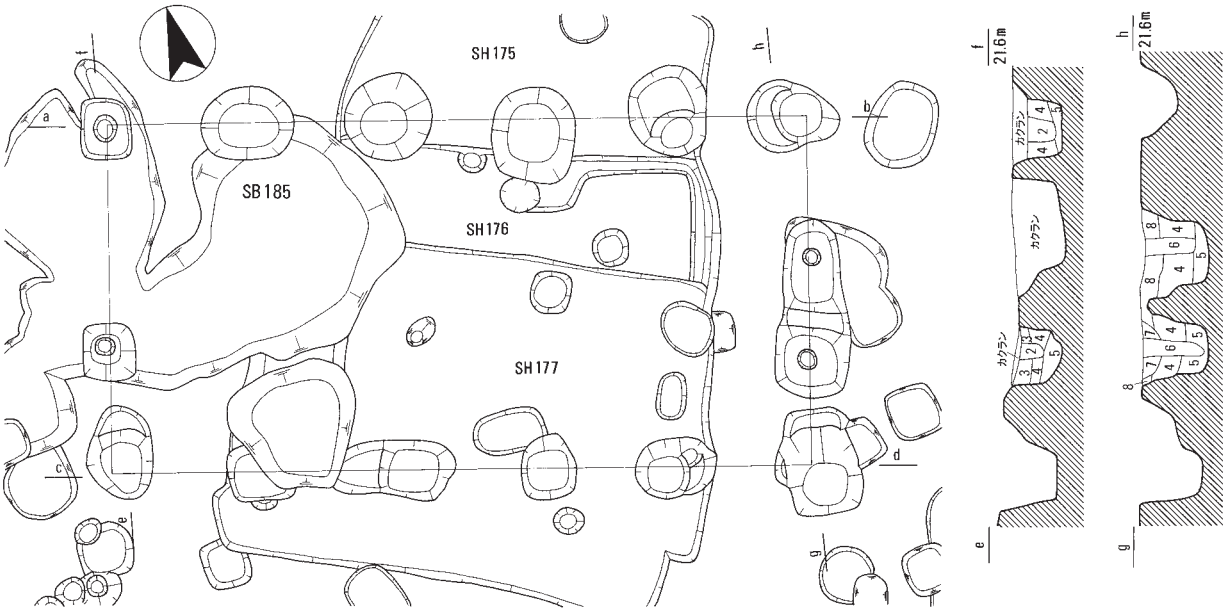
ＳＢ179（第65図） Ｋ地区東側から、Ｉ・Ｊ地区にかけて検出された掘立柱建物である。桁行５間、梁行２間の側柱建物である。柱穴については調査区の境界ということもあり、全てを検出しているわけではない。柱間は、桁行が1.9m、梁行が2.2mというように各方向で各々等しい。建物面積は41.8㎡。建物方向は、Ｎ３°Ｅである。柱掘方は平面形が隅丸方形及び楕円形で一辺0.9～1.6m程度、柱痕跡は平面形が円形で径0.20～0.30m程度であった。一部の柱痕跡埋土には焼土を確認したが、柱掘方埋土には焼土が含まれていなかった。出土遺物については、土師器甕・杯、須恵器杯・杯蓋を確認した。遺構の新旧関係や出土遺物より、奈良時代前半に属するも

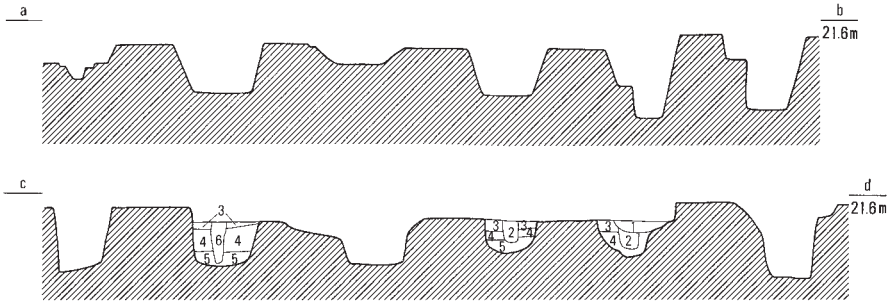


・ＳＢ179
1 10YR3/2黒褐色土に地山ブロック混じる焼土極小量含む（柱痕）
2 10YR4/3にぶい黄褐色土（掘方埋土）
3 10YR3/3暗褐色土（掘方埋土）
4 10YR3/1黒褐色土に地山ブロック多く含む（木根痕）
5 10YR5/2灰黄褐色土に地山ブロック含む（掘方埋土）
6 10YR5/3にぶい黄褐色土（掘方埋土）
7 10YR4/2灰黄褐色土に地山ブロック含む（掘方埋土）
8 10YR4/2灰黄褐色土、焼土多く含む（柱痕）
9 10YR2/3黒褐色土、炭混じる（掘方埋土）
10 10YR5/3にぶい黄褐色土に地山大ブロック含む（掘方埋土）
11 10YR2/1黒色土に地山ブロック含む（掘方埋土）
12 10YR3/2黒褐色土に地山ブロック含む（掘方埋土）
13 10YR3/1黒褐色土に地山ブロック多く含む（掘方埋土）
14 10YR5/3にぶい黄褐色土に地山ブロック含む（掘方埋土）
15 10YR4/2灰黄褐色土（ピット埋土）
16 10YR4/4褐色土、地山まばらに含む、炭化物・焼土含む（掘方埋土）
17 10YR4/3にぶい黄褐色土、10YR4/4褐色土まばらに含む（掘方埋土）
18 10YR3/3暗褐色土、10YR3/2黒褐色土混じる、小石含む（掘方埋土）
19 10YR3/3暗褐色土、10YR4/4褐色土ブロック混じる、炭化物・焼土・小石含む（柱痕）
20 10YR3/2黒褐色土、焼土・小石含む（掘方埋土）
21 10YR4/3にぶい黄褐色土、10YR3/2黒褐色土、地山含む（掘方埋土）

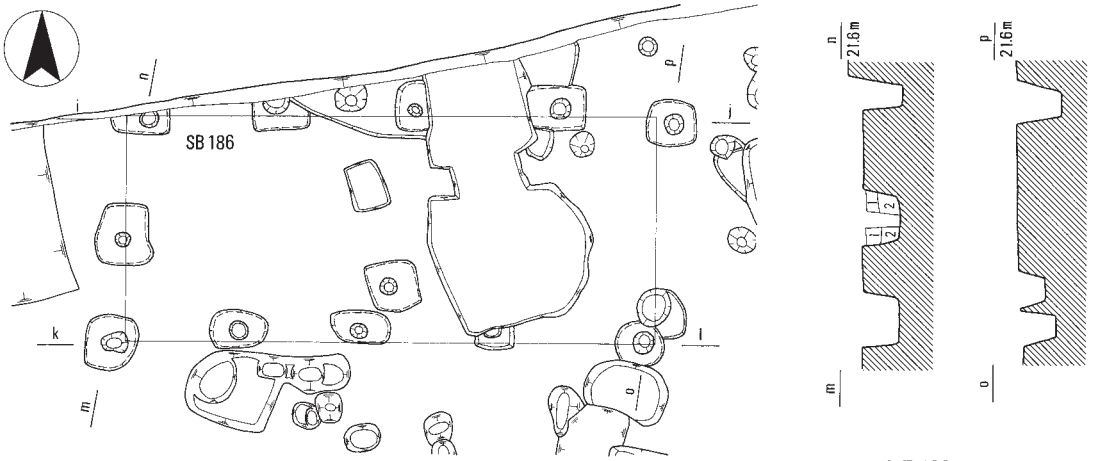
0　4m

第65図　ＳＢ179平面図･断面図(1:100)



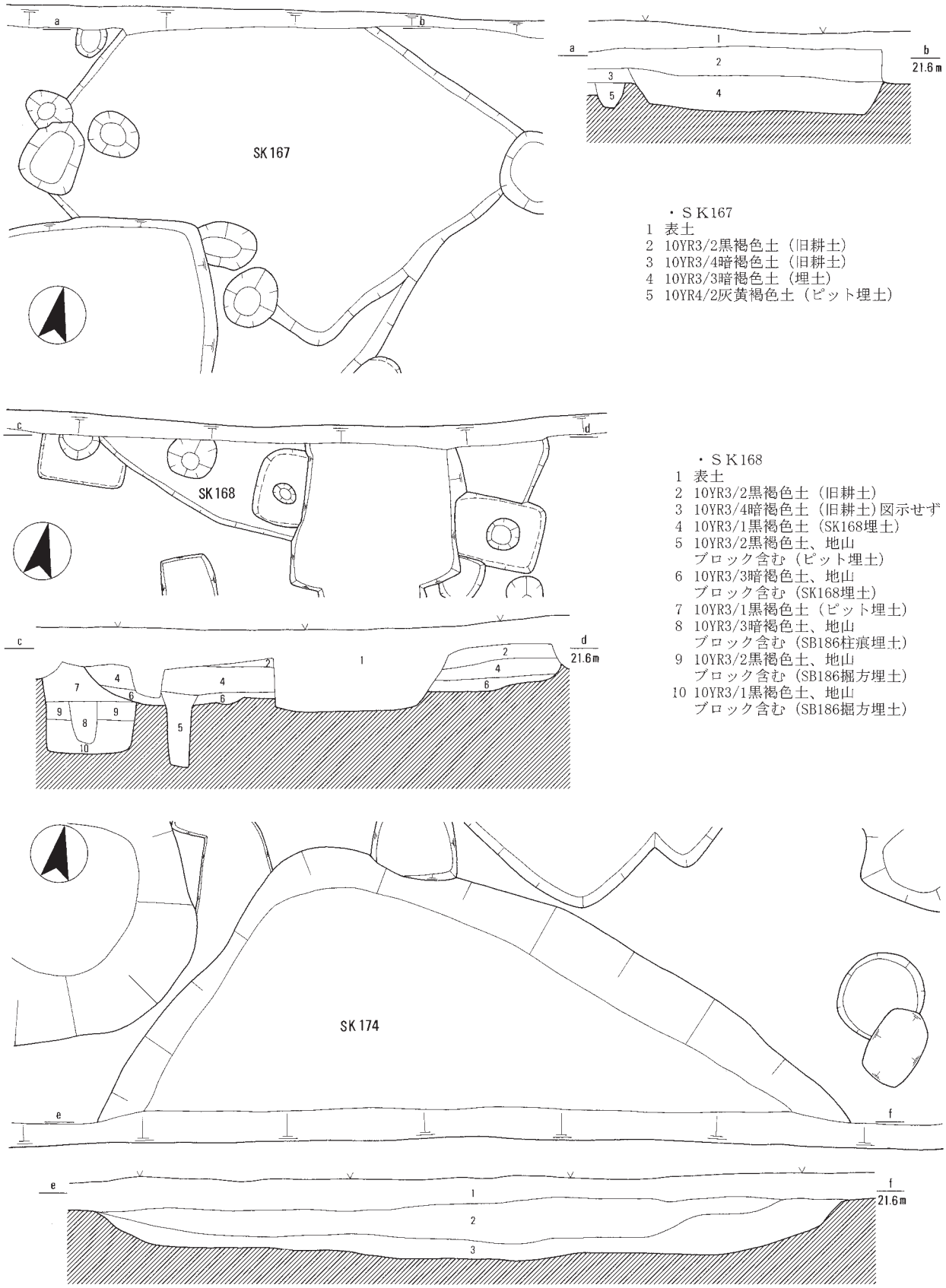


・ＳＢ185
1 10YR3/2黒褐色土
（抜き取り痕）
2 10YR3/1黒褐色土、地山
ブロック含む（柱痕）
3 10YR3/1黒褐色土（掘方埋土）
4 10YR2/2黒褐色土、
地山ブロック含む（掘方埋土）
5 10YR3/3暗褐色土、
地山ブロック含む（掘方埋土）
6 10YR4/2灰黄褐色土、
地山ブロック含む（柱痕）
7 10YR5/2灰黄褐色土（掘方埋土）
8 10YR4/3にぶい黄褐色土、
地山ブロック含む（掘方埋土）



・ＳＢ186
1 10YR4/2灰黄褐色土、
地山ブロック含む（掘方埋土）
2 10YR3/2黒褐色土、
地山ブロック含む（掘方埋土）
3 10YR3/3暗褐色土（柱痕）
4 10YR5/3にぶい黄褐色土、
地山ブロック多く含む（掘方埋土）
5 10YR3/1黒褐色土、
地山ブロック含む（掘方埋土）

第66図　ＳＢ185･186平面図･断面図(1:100)



・ＳＫ167
1 表土
2 10YR3/2黒褐色土（旧耕土）
3 10YR3/4暗褐色土（旧耕土）
4 10YR3/3暗褐色土（埋土）
5 10YR4/2灰黄褐色土（ピット埋土）

・ＳＫ168
1 表土
2 10YR3/2黒褐色土（旧耕土）
3 10YR3/4暗褐色土（旧耕土）図示せず
4 10YR3/1黒褐色土（SK168埋土）
5 10YR3/2黒褐色土、地山ブロック含む（ピット埋土）
6 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む（SK168埋土）
7 10YR3/1黒褐色土（ピット埋土）
8 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む（SB186柱痕埋土）
9 10YR3/2黒褐色土、地山ブロック含む（SB186掘方埋土）
10 10YR3/1黒褐色土、地山ブロック含む（SB186掘方埋土）

・ＳＫ174
1 表土・旧耕作土
2 10YR3/3暗褐色土（埋土）
3 10YR3/1黒褐色土（埋土）

0 2m

第67図　ＳＫ167･168･174平面図･断面図(1:50)

のと思われる。

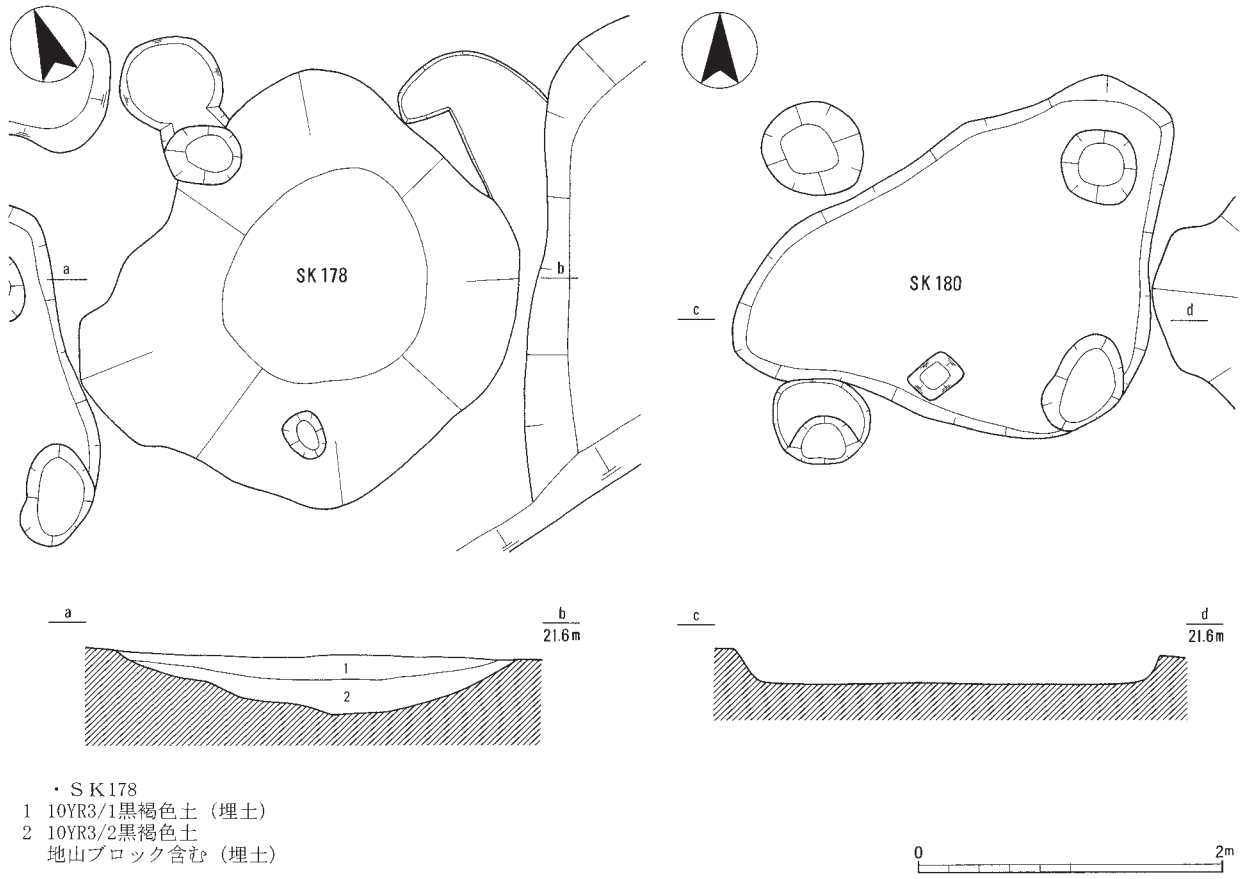
ＳＢ185（第66図） 調査区南側にある掘立柱建物である。桁行５間、梁行３間の側柱建物である。柱掘方は平面形が隅丸方形及び楕円形で一辺1.0～1.25ｍ程度、柱痕跡は平面形が円形で径0.25～0.35ｍ程度であった。柱間は桁行が1.9ｍの等間、梁行が2.3ｍの等間である。建物面積については43.7㎡である。建物方向はN18°Ｅ。妻入り部分は撹乱のため平面では確認できなかった。梁行東側の柱穴２箇所では、布掘りが行われていた模様である。遺構の切り合いから、当遺構はＳＨ175・176・177より新しくなるようである。出土遺物は、土師器甕・壺・鍋・杯・暗文土師器小片、須恵器甕・杯・壺である。遺構の所属時期としては、奈良時代前半に属するものと考えられる。

ＳＢ186（第66図） 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。桁行４間、梁行２間の側柱建物である。柱掘方は平面形が隅丸方形及び楕円形で一辺0.6～0.85ｍ程度、柱痕跡は平面形が円形で径0.20～0.35ｍ程度であった。柱間は桁行が1.75ｍの等間、梁行が1.5ｍの等間である。建物方向はＮ３°Ｅ。出土遺物としては、土師器甕・椀・鍋・杯・暗文土師器小片、須恵器甕・杯を確認した。遺構の所属時期としては、奈良時代前半に属するものと思われる。

土坑

ＳＫ167（第67図） 調査区北部で検出された土坑である。更に調査区の北へ延びていくようである。平面形は隅丸方形で、規模は長軸3.5ｍ、短軸2.9ｍ、深さ0.17ｍである。遺構の形状から竪穴住居の可能性を否定できないだろう。出土遺物については、土師器甕・高杯・壺・杯、暗文土師器小片、鞴羽口、須恵器杯・杯蓋・甕を確認した。第３次調査においては、出土遺物量が多いといえる。時期は、奈良時代前半に属すると考えられる。

ＳＫ168（第67図） 調査区北部で検出された土坑である。更に調査区の北へ延びていくようである。平面形は隅丸方形で、規模は長軸4.3ｍ、短軸2.4ｍ以上、深さ0.16ｍ。遺構の切り合い関係からＳＢ186より新しくなる。出土遺物については、土師器甕を確認した。出土遺物の量が少なく、遺構の所属時期は



・ＳＫ178
1　10YR3/1黒褐色土（埋土）
2　10YR3/2黒褐色土
　地山ブロック含む（埋土）

第68図　ＳＫ178･180平面図･断面図(1:50)

判断に苦しむが、概ね飛鳥時代末から奈良時代初めに属するものと思われる。

ＳＫ174（第67図） 調査区南側で検出した土坑である。調査区の南側へ延びていく。平面形は隅丸方形であろうか。規模は、長軸5.5m以上、短軸3.1m以上、深さ0.59mである。出土遺物は、土師器甕・杯、暗文土師器小片、須恵器甕・杯蓋・杯、鉄滓を確認した。遺構の所属時期については、飛鳥時代末から奈良時代初めに属するものと考えられる。

ＳＫ178（第68図） 調査区南側で検出した土坑である。平面形は不整形な方形で、規模は長軸2.9m、短軸2.8m、深さ0.41mである。出土遺物については、土師器鍋・甕を確認した。遺構の所属時期は、飛鳥時代末から奈良時代初めのものと思われる。

ＳＫ180（第68図） 調査区西側で検出された土坑である。平面形は不整形な三角形で、規模は長軸2.7m、短軸2.2m、深さ0.16mである。出土遺物については、土師器甕・移動式竈、須恵器甕・杯蓋を確認した。遺構の所属時期については、飛鳥時代末から奈良時代初めに属すると考えられる。

ＳＫ182（第56図） ＳＨ166貼床の除去後に検出した土坑である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.16m。出土遺物については土師器小片を確認した。出土遺物やＳＨ166との関連を考慮すると、遺構の所属時期は飛鳥時代後半のものであろうか。

ＳＫ183（第56図） ＳＨ166貼床の除去後に検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、規模は長軸2.4m、短軸1.4m、深さ0.16m。出土遺物については土師器甕、須恵器杯を確認した。出土遺物やＳＨ166との関連を考慮すると、遺構の所属時期については飛鳥時代後半に属するものであろうか。

ＳＫ184（第56図） ＳＨ166貼床の除去後に検出した土坑である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.19m。出土遺物については土師器小片を確認した。出土遺物やＳＨ166との関連を考慮すると、遺構の所属時期は飛鳥時代後半のものであろうか。 （前野謙一）

② 遺物

Ｉ・Ｊ・Ｋ区で確認した遺物は、３次調査全体の出土遺物の半分以上を占め、遺物の出土量からも当調査区が西野田遺跡の中心部であることを示す。

ここでは、調査区ごとに主な遺物について概述するが、詳細は後掲の遺物観察表（第32～40表）を参照されたい。

ａ Ｉ・Ｊ区の遺物

ＳＫ142出土遺物（第69・70図297～352）

須恵器（297～328） 297～299は杯Ａ蓋である。300・301はつまみの付いた蓋であるが、口縁部分が欠損しているため、杯Ａか杯Ｂに伴うものかは不明である。300はつまみ部がキノコ形を呈し、徳居窯を中心とする旧庵芸郡の窯の製品である可能性が考えられる。[1] 302は杯Ｈの蓋である。天頂部および口縁部を欠く。外面にはヘラ記号が見られる。303～310は杯Ｂ蓋で、口縁部径が小さいほど器高が高い。

311～319は杯Ａである。312の底部外面には、焼成時に付着した粘土が付く。316の内面には漆が付着する。320～322は杯Ｂ。323は壺の底部であろうか。底部から体部にかけての断面が弧状である。高台断面は方形。内面に自然釉が付着する。

324・325は高杯の脚部。326は鉢。327・328は甕の口縁部。328の外面には波状文が施され、端部に近い部分に突帯が付く。

土師器（329～348） 329～333は皿Ａである。不明瞭なものもあるが、おおよそ内面に暗文を施し、底部外面を削る。334は杯Ｃ。底部と体部の境がなく、緩やかに立ち上がる。内面に放射状および螺旋状暗文が見られる。335は杯Ｂか。外面に赤色顔料塗布の痕跡がある。

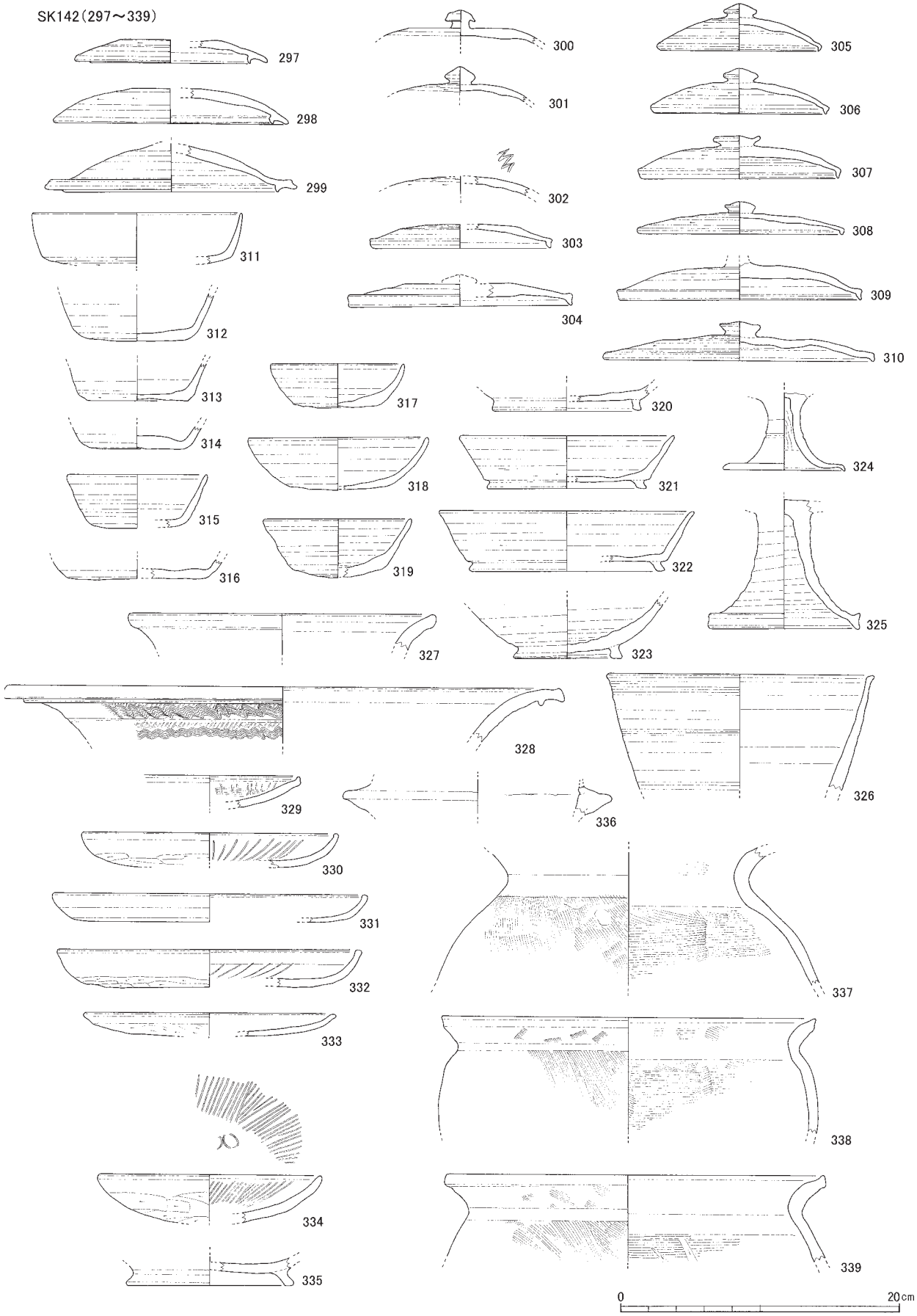
336は円筒状土器の鍔部と思われる。337～348は甕。いずれの甕も煤や炭化物の付着は認められず、非常に摩滅が激しいものが多い。

土製品（349～351） いずれも土錘である。紡錘形を呈し、最大径が２㎝程度である。

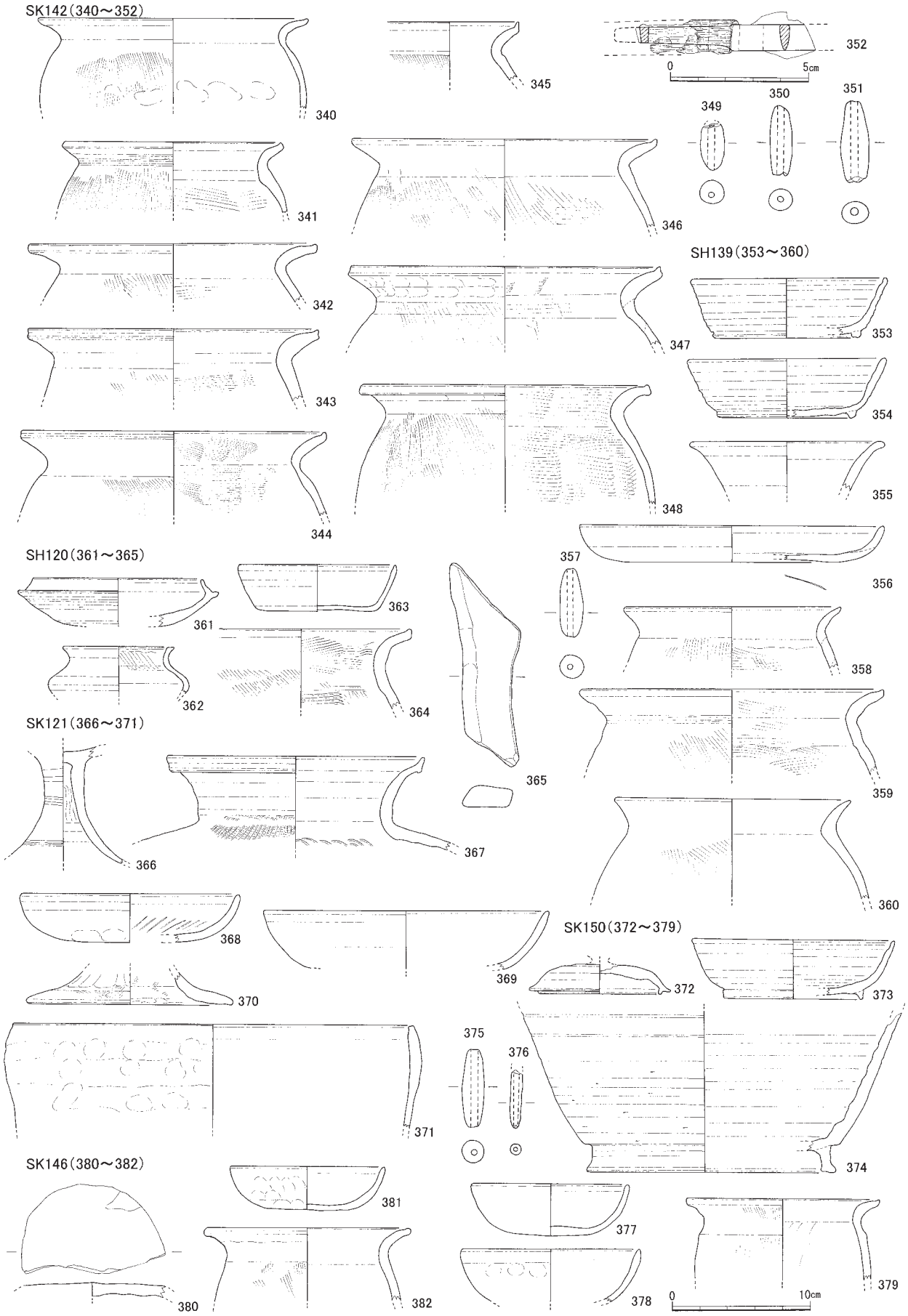
金属製品（352） 刀子である。茎先端と刀身先端が欠損する。残存長6.3㎝、関幅1.2㎝。一部に柄木の表装が残る。

ＳＨ139出土遺物（第70図353～360）

須恵器（353～355） 353・354は杯Ｂである。354の外面に墨痕らしき痕跡が見られる。355は壺の口縁部。灰を被っている。



第69図　ＳＫ142出土遺物実測図(1:4)



第70図　ＳＫ121･142･146･150，ＳＨ120･139出土遺物実測図(352は1:2，それ以外1:4)

土師器（356・358～360） 356は皿Ａである。底部外面にヘラ記号が見られる。358～360は甕。いずれも煤や炭化物の付着は認められず、摩滅が激しい。

土製品（357） 土錘である。紡錘形を呈す。

ＳＨ120出土遺物（第70図361～365）

須恵器（361・362） 361は杯Ｈである。器高が低く、扁平である。362は短頸壺。

土師器（363・364） 363は杯Ｇ。内外面とも摩滅が激しく調整は不明である。364は甕である。

石器（365） 観察表で「敲石？」としたが、明確な敲打痕などが見られず根拠は薄い。ただ、竪穴住居内出土遺物であり、手で握って使用するのに適した形状から、何らかの道具の可能性を考えて掲載した。

ＳＫ121出土遺物（第70図366～371）

須恵器（366・367） 366は高杯の脚部、367は甕。

土師器（368～371） 368は杯Ｃ。内面に暗文が見られる。369は同じく杯Ｃであるが、摩滅が激しく調整不明である。370は高杯脚部、371は甑口縁部か。

ＳＫ150出土遺物（第70図372～379）

須恵器（372～374） 372は杯Ａ蓋。つまみ部を欠く。口縁部径が約９㎝と小形である。373は杯Ｂ。374は壺の台部か。内面に焼きぶくれが見られる。

土製品（375・376） 375・376は土錘。376は相対的に細く、残存最大幅は0.8㎝である。

土師器（377～379） 377・378は杯Ｇである。いずれも断面半円形で、形状が似る。379は甕である。内外面の摩滅が激しい。

ＳＫ146出土遺物（第70図380～382）

須恵器（380） 杯の天井部か。炭が付着し、表面が研磨されていることから、転用硯として報告した。

土師器（381・382） 381は椀Ｃ、382は甕である。いずれも摩滅が激しい。

ＳＫ154出土遺物（第71図383・384）

土師器（383・384） 383は杯Ｃである。内面に暗文が見られる。384は甕の口縁部。

ＳＫ143出土遺物（第71図385）

土師器（385） 杯Ｂか。高台部のみの出土であることから、皿Ｂである可能性も考えられる。

ＳＨ159出土遺物（第71図386）

土師器（386） 甕である。体部から口縁部が大きく外反する。

ＳＢ156出土遺物（第71図387～389）

須恵器（387・388） 387は杯Ａか。ただし底部外面に円形に剥離の痕跡のようなものが見られ、高杯の杯部となる可能性もあろう。388は杯Ａである。

土師器（389） 皿Ａである。内面に放射状暗文が見られる。

ＳＢ157出土遺物（第71図390）

土製品（390） 土錘である。摩滅が激しく、現状で棒状を呈す。残存幅は0.9㎝である。

ｐｉｔ出土遺物（第71図391～393）

須恵器（391） 杯Ｈである。内外面とも摩滅が激しい。Ｉ区C-r17 pit3出土である。

土師器（392・393） 392は甕の口縁部片。Ｊ区C-t23 pit1出土である。393は甕の小片である。口縁部が緩やかに外反する。Ｉ区C-q18 pit1出土である。

ＳＸ136出土遺物（第71図394～396）

瓦質土器（394） 接合できない口縁部片と底部片がある。おそらく断面が長方形の同一個体のものであろう。口縁端部を四角く収めるが、一定の間隔でつまみ上げられる。

金属製品（395） 銭貨である。６枚が重なって錆付いているため、詳細は不明であるが、表面に現れているものは寛永通寶であることがわかる。中には鉄製のものも含まれており、大きさも不統一である。紐を通したような痕跡が微かではあるが認められる。

陶器（396） 鉄釉の丸椀である。瀬戸・美濃産か。

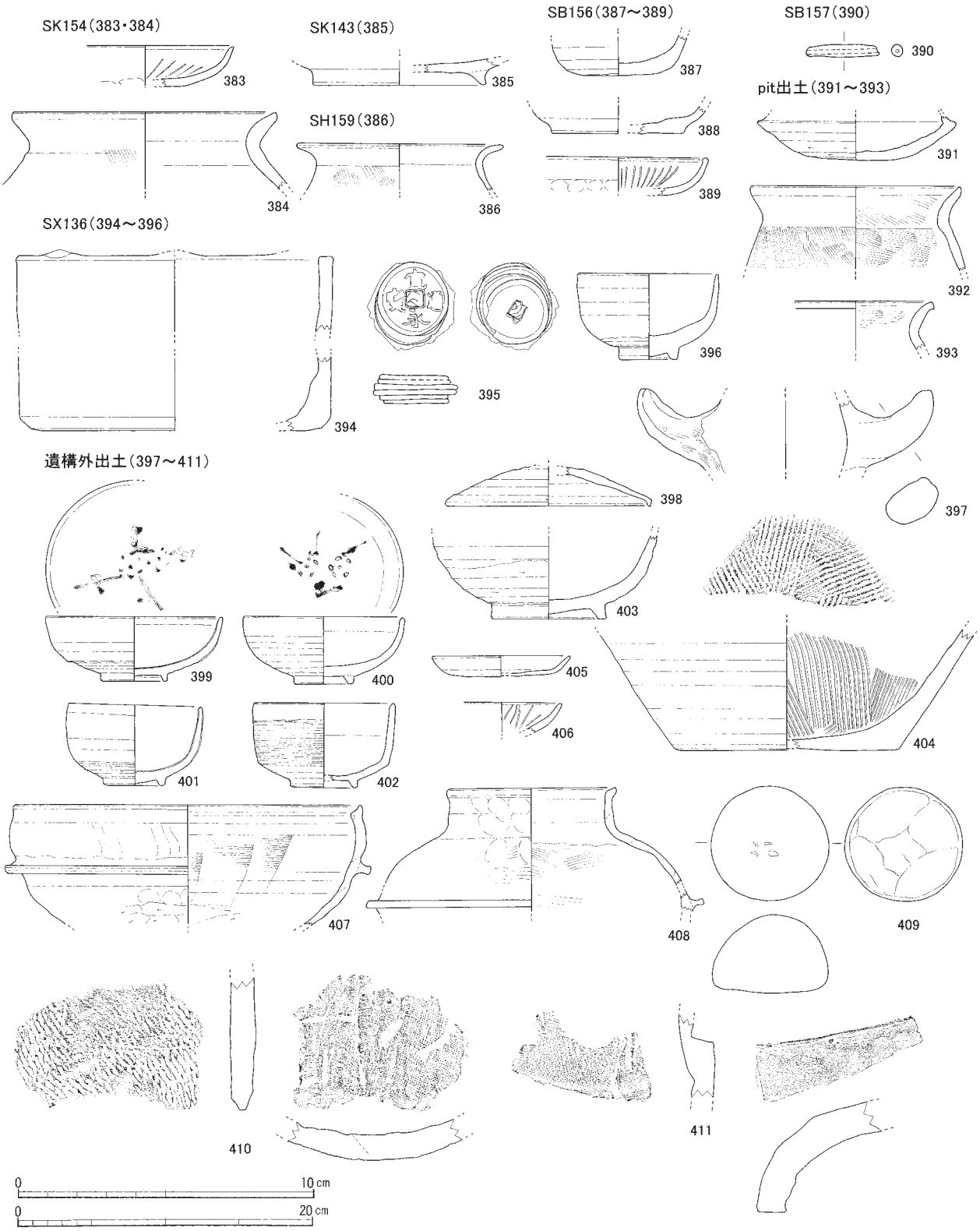
遺構外出土遺物（第71図397～411）

土師器（397） 鍋または甑の把手である。

須恵器（398） 杯Ｂ蓋。つまみ部が欠損する。

陶器（399～404） 399・400は梅文皿。399は400と比較して扁平である。401は丸椀、402は腰錆椀、403は椀である。403の内面にはトチン痕が見られる。いずれも瀬戸・美濃産。18世紀末～19世紀初頭のものと思われる。404は錆釉が施された擂鉢である。

近世土師器（405～408） 405・406は小皿。405の口縁部には油煙が付着し、灯明皿として使用されたものであろう。406の内面には数条のヘラ描きが見られる。407は羽釜である。底部は欠損するが、口縁部から体部下方にかけて丸みを帯び、体部の中央部付近に短い断面方形の鍔が付く。口縁部付近の外面に煤



第71図　ＳＫ143･154，ＳＨ159，ＳＢ156･157，SX136，ピット，遺構外出土遺物実測図（395は1:2，それ以外1:4）

が付着する。南伊勢系のものか[2]。408は鍔が付く茶釜。口縁部と鍔部破片は接合できないが、おそらく体部の中央付近に付くものと思われる。外面に煤が付着する。

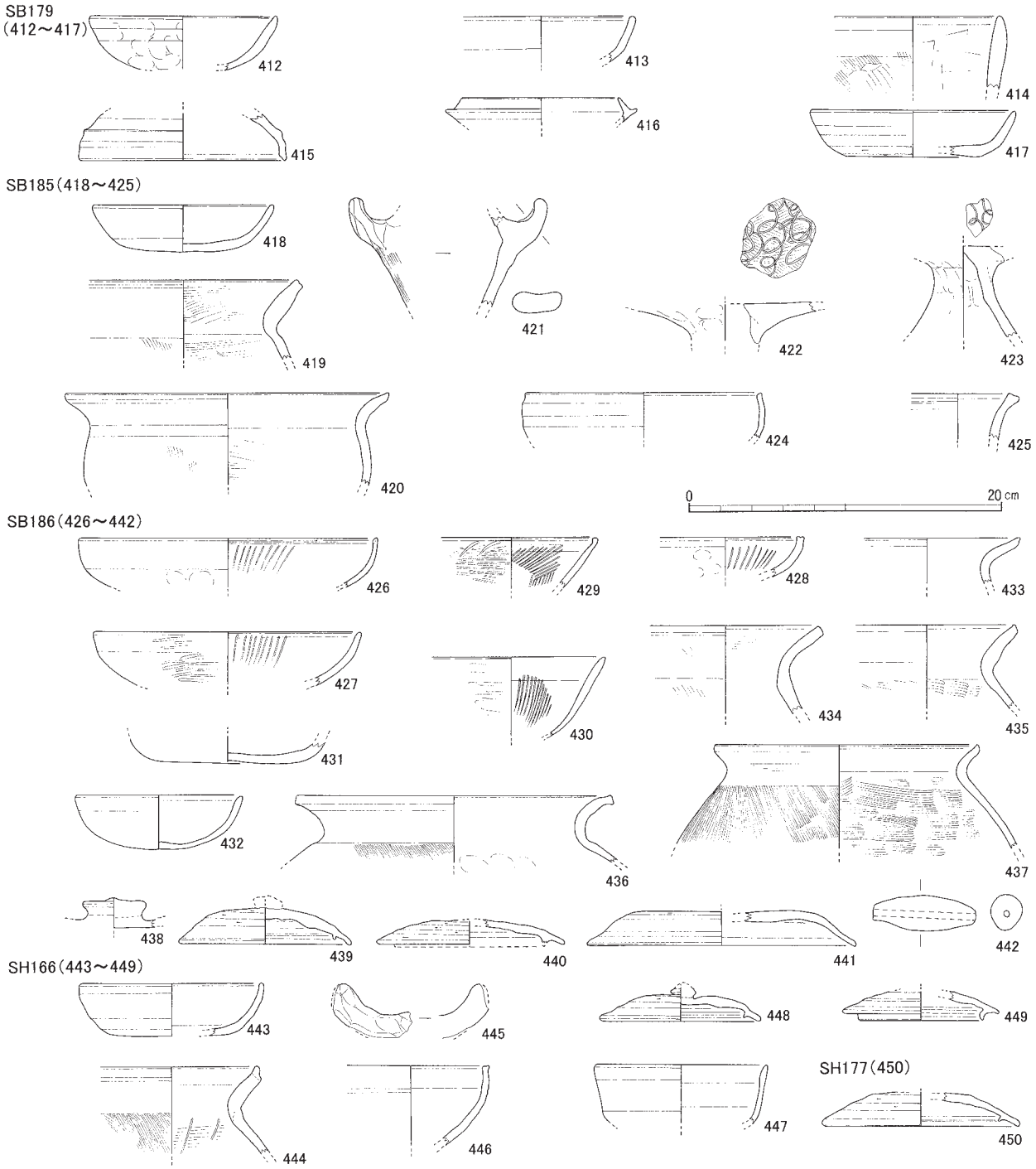
石器（409） 器種は不明である。手の中に収まる大きさで、明瞭な敲打痕などは見られないが、敲石の可能性が考えられる。

瓦（410・411） 410は平瓦、411は丸瓦である。410の内面には粘土のつなぎ痕や型のつなぎ痕、紐の痕跡などが見られる。411についても内面に粘土つなぎ痕が確認できる。（柴山圭子）

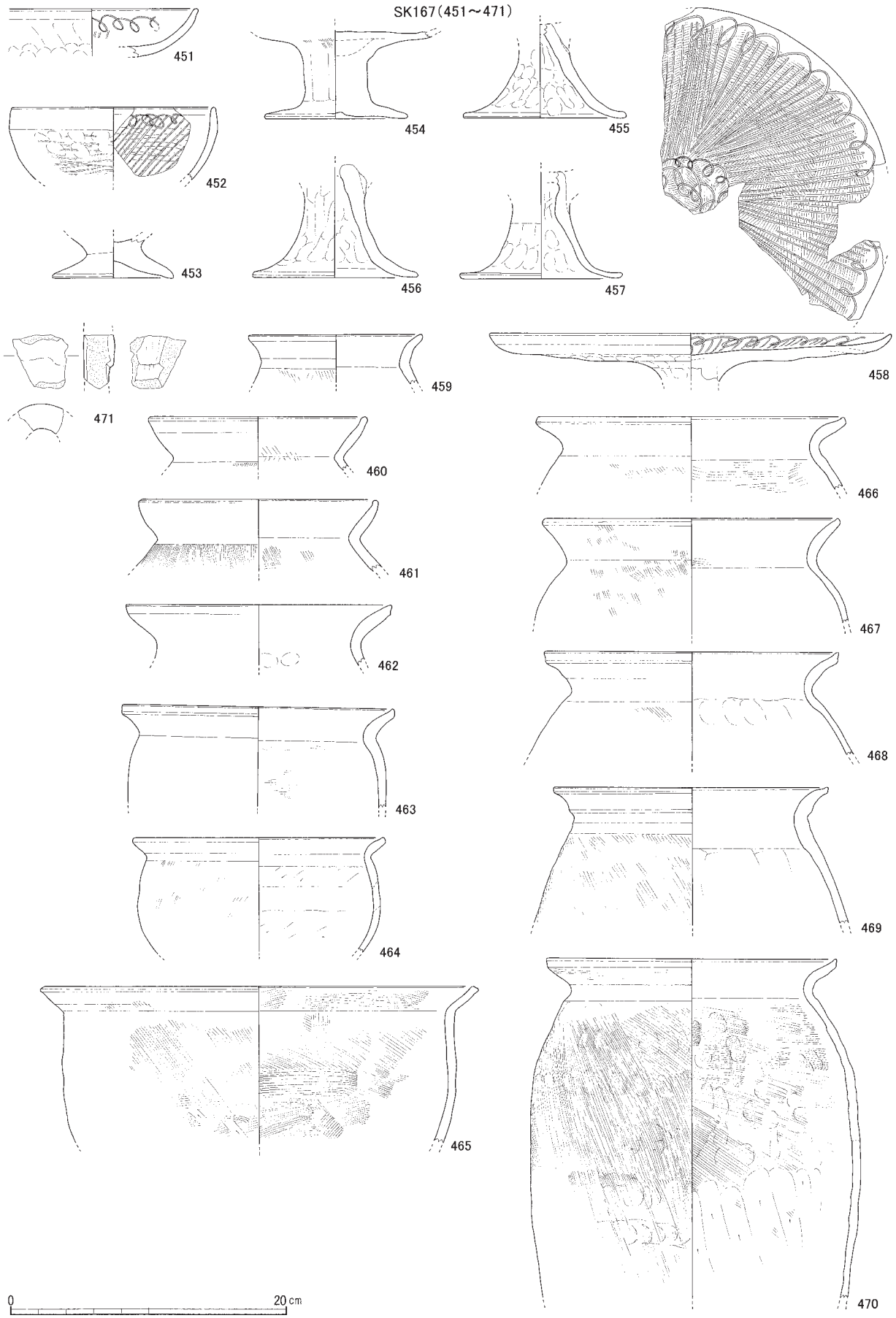
b　K区の遺物

ＳＢ179出土遺物（第72図412～417）

土師器（412～414） 412・413は杯Ｇである。口縁部が内弯気味に立ち上がる。414は甑口縁部片である。これらは、概ね都城編年平城Ｉに比定できよう[3]。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。



第72図　ＳＢ179･185･186，ＳＨ166･177出土遺物実測図(1:4)



第73図　ＳＫ167出土遺物実測図１(1:4)

須恵器（415～417） 415は杯蓋であろうか。416は杯Ｈである。カエリの部分が残存している。417は杯Ａである。口縁部が直線気味に立ち上がる。これらは、概ね都城編年平城Ｉに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。

ＳＢ185出土遺物（第72図418～425）

土師器（418～423） 418は杯Ｇである。口縁部が内弯気味に立ち上がる。419は甕口縁部片である。大形のものであろう。420は甕口縁部片である。小形のものであろう。421は甑の把手部分の一部である。422・423は高杯杯部と脚部の接合部分である。杯部内面には螺旋状の暗文が施されている。また、杯部内外面と脚部外面には赤色顔料の塗布がみられる。これらは都城編年平城Ｉに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。

須恵器（424・425） 424は杯口縁部片である。425は壺の口縁部片であろうか。これらは都城編年平城Ｉに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。

ＳＢ186出土遺物（第72図426～442）

土師器（426～438） 426～428は杯Ｃである。口縁部が内弯気味に立ち上がる。土器内面には放射状の暗文が施されている。429・430 は杯Ａの口縁部片である。土器内面には放射状の暗文がみられる。431は杯の底部片である。432は杯Ｇである。底部から口縁部にかけて曲線的な器形である。433～437は甕口縁部片である。大形のものであろうか。438は杯蓋の摘み部分である。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（439～441） 439・440は杯Ａ蓋である。摘み部分は欠失してある。441は杯Ｂ蓋であろうか。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

土製品（442） 土師質の土錘である。貫孔している。

ＳＨ166出土遺物（第72図443～449）

土師器（443～445） 443は杯Ｇである。口縁部が内弯気味に立ち上がる。444は甕口縁部片である。大形のものであろう。445は甑の把手部分である。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できるものであろう。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（446～449） 446は高杯か。杯部がゆるやかに内弯する口縁部片である。447は杯Ａの口縁部片である。底部から直線的に立ち上がるものである。448・449は杯Ａ蓋である。449は摘み部分が欠失している。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できるものであろう。飛鳥時代末のものと考えられる。

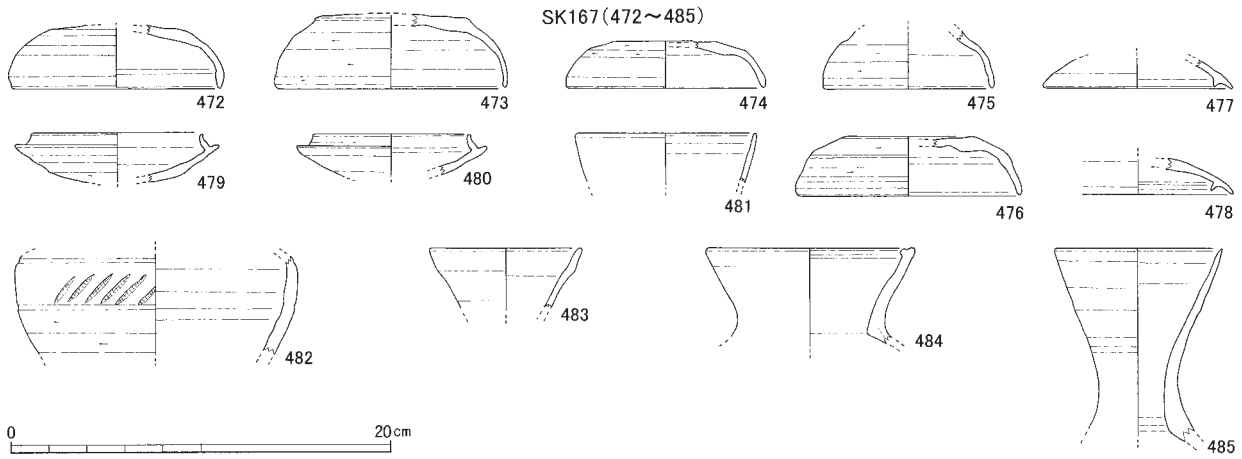
金属製品 先端部分を欠失している鏃茎であろう。

ＳＨ177出土遺物（第72図450）

須恵器（450） 杯Ａ蓋である。摘み部分は欠失している。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

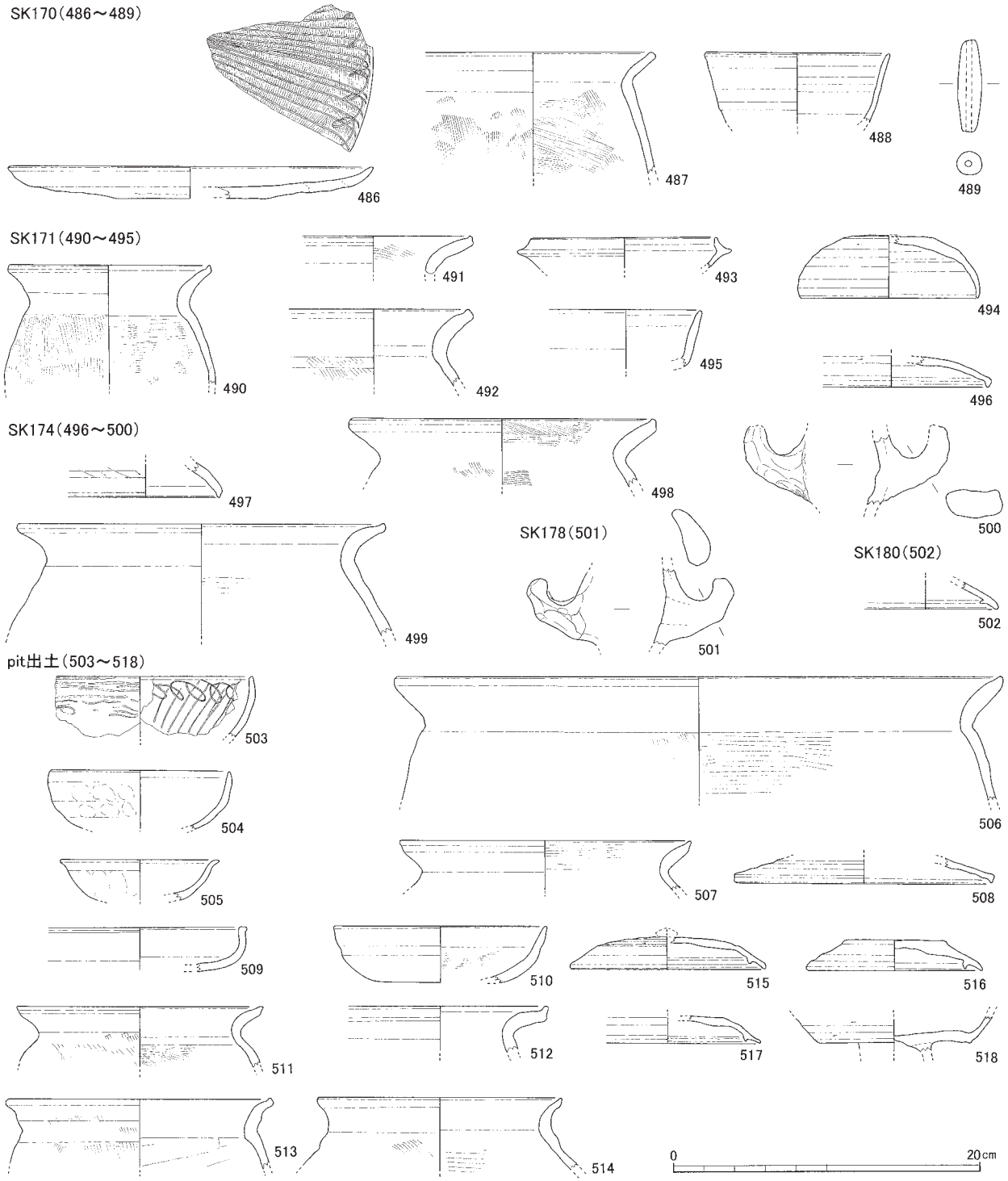
ＳＫ167出土遺物（第73・74図451～485）

土師器（451～472） 451・452は杯Ｃである。口縁部が内弯気味に立ち上がる。土器内面には螺旋状と放射状の暗文が施されている。また、内外面全体に赤



第74図　ＳＫ167出土遺物実測図２（1:4）

色顔料が塗布されている。453は台付の杯、台部分と思われる。454～457は高杯脚部片である。接地部分が大きく開く。454は中実、455～457は中空で、外面に赤色顔料の塗布がみられる。458は土師器高杯の杯部である。深さは浅いものである。杯部の内面には螺旋状と放射状の暗文が施されている。また、赤色顔料が杯部分の内外面の全体にわたり塗布されていたようである。459～464は甕口縁部片である。小形のもので、底部は丸底になるものであろう。465は甕口縁部片である。大形で、器高の低いものである。鍋の可能性もあろう。466～470は長胴甕口縁部片である。口縁端部は面をもち、口縁部が曲線を描くように大きく外反する器形である。これらは概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のもの



第75図　ＳＫ170･171･174･178･180,ピット出土遺物実測図(1:4)

と考えられる。

土製品（471） 鞴羽口小片である。

須恵器（472～485） 472～476は杯Ｈ蓋。口縁部が直線的に立ち上がる。477・478は杯Ａ蓋である。口縁部の小片であるがカエリの部分が残存している。479・480 は杯Ｈの口縁部片である。481は杯Ａの口縁部片であろうか。482は壺の体部片と思われる。483～485は壺の口縁部片である。484は口縁端部が肥厚する。485は頸部が長いものである。これらは概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ｖに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

ＳＫ170出土遺物（第75図486～489）

土師器（486・487） 486は高杯の杯部分である。杯部の内面には螺旋状と放射状の暗文が施されている。また、内外面には赤色顔料の塗布がみられる。487は甕口縁部片である。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ｖに比定できるものと考えられる。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（488） 488は杯Ａと思われる。口縁部が直線的に外反する。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ｖに比定できるものと考えられる。飛鳥時代末のものと考えられる。

土製品（489） 土師質の土錘である。

ＳＫ171出土遺物（第75図490～495）

土師器（490～492） 490は甕口縁部片である。小形で底部は丸底になるものであろう。491・492は甕口縁部片である。大形のものである。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ｖに比定できるものと思われる。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（493～495） 493は杯Ｈの口縁部片である。494は杯Ｈ蓋。口縁部が直線的に立ち上がる。495は杯Ａの口縁部片であろうか。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ｖに比定できるものと思われる。飛鳥時代末のものと考えられる。

ＳＫ174出土遺物（第75図496～500）

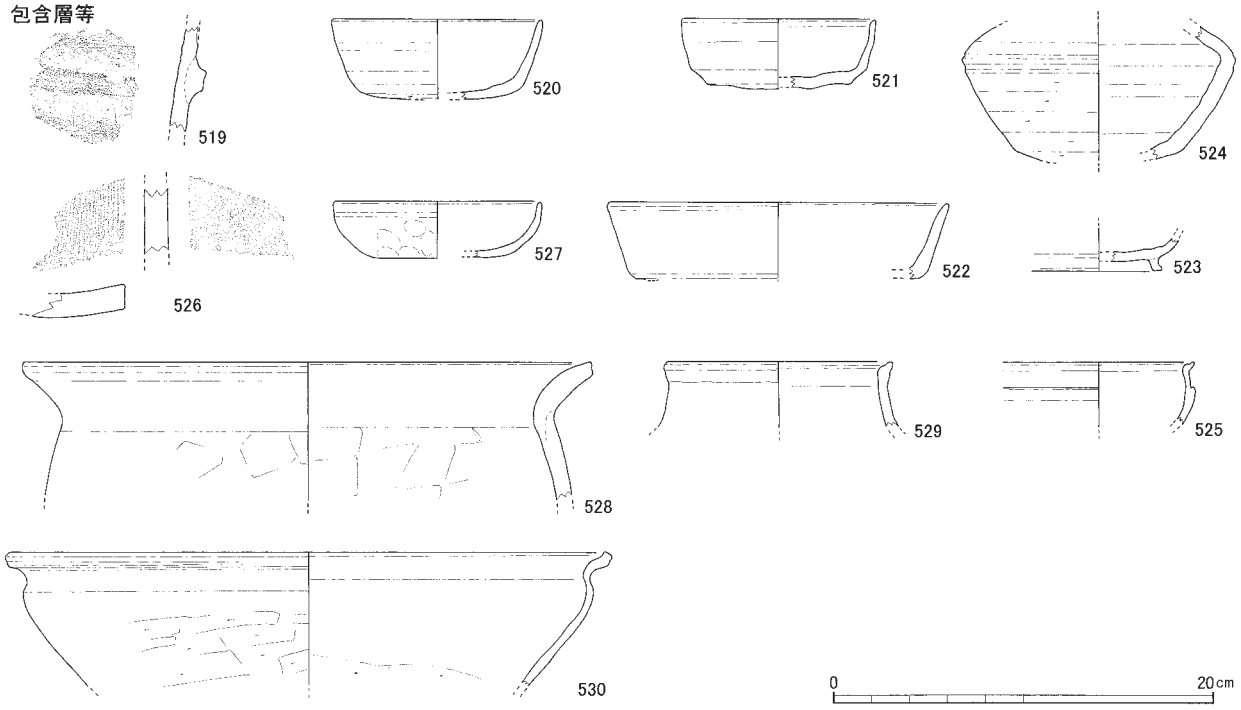
須恵器（496・497） 496は杯Ｂ蓋である。497は杯Ｂ蓋の口縁部小片である。焼成は良くないようで、土師器のような発色である。これらは、概ね都城編年平城Ｉの比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めのものと考えられる。

土師器（498～500） 498・499は甕口縁部片である。500は鍋あるいは甑の把手部分である。これらは、概ね都城編年平城Ｉに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めのものと考えられる。

ＳＫ178出土遺物（第75図501）

土師器（501） 鍋あるいは甑の把手部分である。奈良時代前半のものと考えられる。

ＳＫ180出土遺物（第75図502）



第76図　Ｋ区包含層等出土遺物実測図(1:4)

須恵器（502） 杯Ａ蓋である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

C-o24Pit ２出土遺物（第75図503～508）

土師器（503～507） 503は杯Ｃの口縁部小片である。土器内面には螺旋状及び放射状の暗文が施されている。また、内外面に赤色顔料が塗布されている。504は杯Ｇの口縁部小片である。口縁部が少し内弯する。505は椀Ｃの口縁部小片である。口縁端部が外反する。506は甕口縁部片である。大形のものである。507は甕口縁部小片である。小形のものであろう。概ね都城編年平城Ⅰに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（508） 杯Ｂ蓋である。口縁端部が直立気味である。概ね都城編年平城Ⅰに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

C-q24Pit １出土遺物（第75図509）

土師器（509） 皿口縁部小片である。奈良時代前半のものと考えられる。

C-n23Pit １出土遺物（第75図510）

土師器（510） 杯Ｇの口縁部小片である。奈良時代前半のものと考えられる。

C-n24Pit ３出土遺物（第75図511）

土師器（511） 甕口縁部小片である。奈良時代前半のものと考えられる。

C-m20Pit ２出土遺物（第75図512）

土師器（512） 甕口縁部小片である。奈良時代前半のものと考えられる。

C-p19Pit １出土遺物（第75図513）

土師器（513） 甕口縁部小片である。奈良時代前半のものと考えられる。

C-l20Pit １出土遺物（第75図514）

土師器（514） 甕口縁部小片である。奈良時代前半のものと考えられる。

C-n20Pit ４出土遺物（第75図515）

須恵器（515） 杯Ａ蓋の口縁部小片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

C-p23Pit ７出土遺物（第75図516）

須恵器（516） 杯Ａ蓋の口縁部小片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

C-n20Pit ３出土遺物（第75図517）

須恵器（517） 杯Ａ蓋の口縁部小片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

C-n20Pit ６出土遺物（第75図518）

須恵器（518） 高杯杯部と脚部の接合部分である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

C-p18Pit ４出土遺物

金属製品 刀子の刃部か。

包含層等出土遺物（第76図519～530）

埴輪（519） 円筒埴輪小片である。突帯の一部が残存している。古墳時代に属するものと考えられる。

須恵器（520～525） 520・521は杯Ａの口縁部小片である。口縁部が直線的に外反する。522は杯Ｂの口縁部小片である。口縁部が直線的に外反する。523は杯Ｂの底部小片である。524は壺の体部小片である。台が底部に付く長頸壺であろうか。525は高杯の杯部口縁部片である。口縁端部外面下に段がみられる。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

瓦（526） 平瓦の小片である。古代のものか。

土師器（527・528） 527は杯である。少し内弯気味の口縁で、器壁が薄い。奈良時代のものか。時期が下る可能性もある。528は甕口縁部片である。奈良時代前半のものと考えられる。

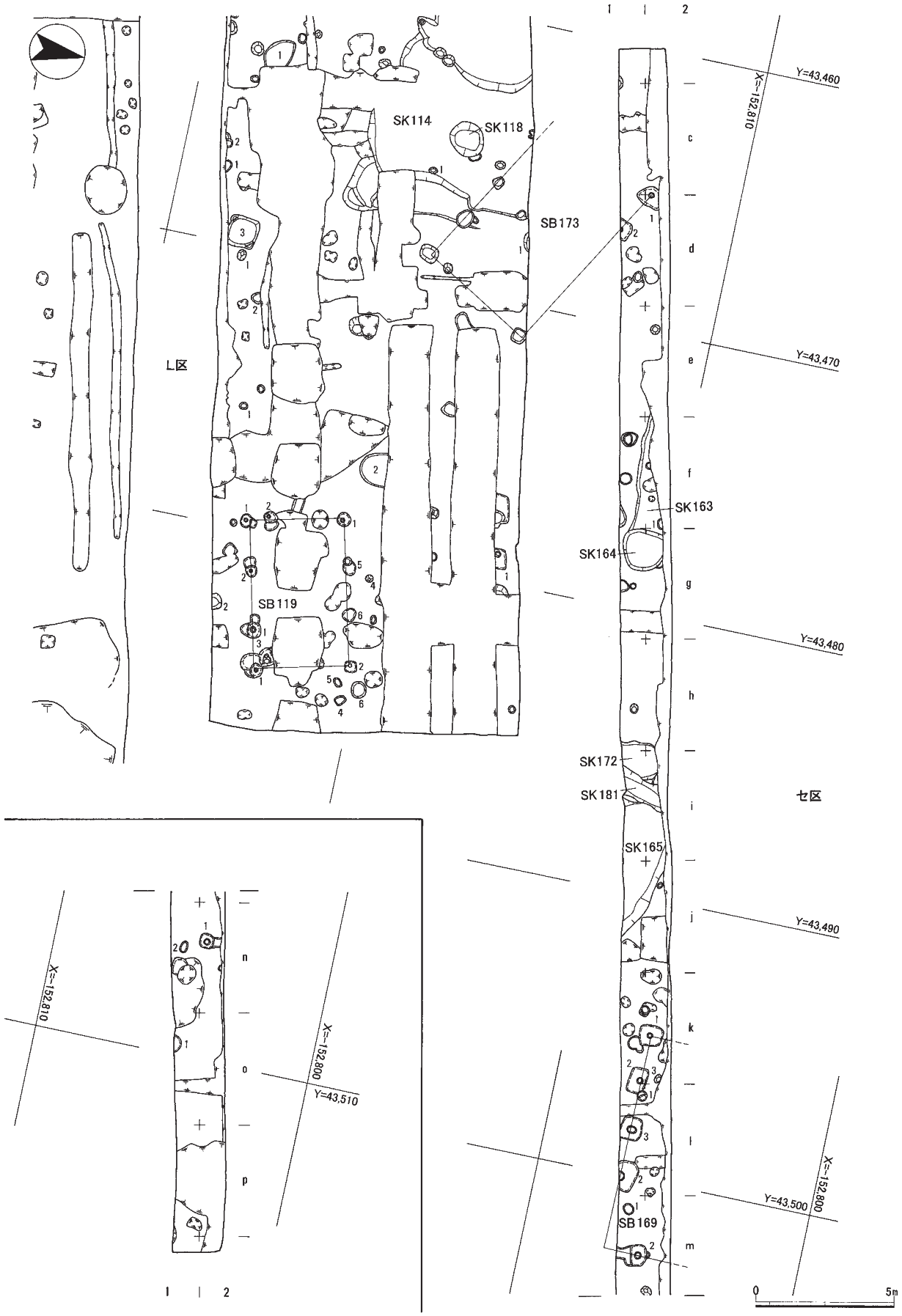
近世土師器（529・530） 529は茶釜の口縁部片である。土師質で、南伊勢系土器と考えられる。近世のものか。530は焙烙。土師質で、南伊勢系土器である。近世のものと考えられる。

（小濵　学）

第５節　ス・セ区の調査

①　遺構

ここでは、ス・セ区で確認した主な遺構につい述べる。個々の遺構の詳細については、後掲の遺構一



第77図　セ区遺構平面図(1:200)

覧（第21表）を参照されたい。

ａ　ス区の遺構

遺構と判断できるものは、確認できなかった。

ｂ　セ区の遺構

掘立柱建物

ＳＢ169（第78図）　セ区の中央東寄り、１２グリッド付近で検出した遺構である。細長い調査区の限られた範囲で検出したため、全体の規模は不明であるが、おそらく梁行２間以上、桁行３間以上の側柱建物である。北を基準とした主軸方向はＮ１°Ｗである。

柱掘方はいずれも60～70cmの方形で、その中央付近に径約20cmの柱痕がみられる。ただし、深さにバラツキがあり、中には検出面から20cm程度と浅いものも見られる。遺構上面がかなり削平されている可能性が考えられる。

柱穴からは土師器の壺や甕などが出土している。

ＳＢ173（第79図）　セ区の西部からＬ区に延びる遺構である。セ区のｄ２、Ｌ区のC-c20グリッド付近で検出した。一部が調査区外にあるため、全体の規模は不明であるが、おそらく桁行４間以上、梁行２間の側柱建物である。北を基準とした主軸方向はN31～32°Ｅである。

Ｌ区側の調査のときは、建物の柱穴として認識していなかったため、柱痕の有無の確認は行っていない。セ区の状況およびＬ区の掘り上がりから、柱掘方は約80cmの平面方形で、径20cmほどの柱痕があると思われる。

柱穴からは須恵器の杯が出土している。

土坑

ＳＫ165･172･181（第77図）　セ区の中央、ｉ２グリッド付近で検出した遺構である。当初、１つの大土坑ＳＫ165と認識して掘削したが、途中でＳＫ172、溝状のＳＫ181に分かれることが判明した。限られた範囲のため、いずれの土坑も全体の規模は不明である。検出面からの深さは、ＳＫ165が約30cm、ＳＫ172が約40cm、ＳＫ181が約75cmである。

ＳＫ165とＳＫ172・181との新旧関係は確認できなかった。ＳＫ172とＳＫ181は調査区南壁の土層より、ＳＫ172が新しいこと確認できた。

埋土からは、須恵器の杯や蓋、土師器の杯や甕などのほか、円面硯が出土している。また前述したように、掘削当初３土坑をそれと認識せず掘削したため、その間の出土遺物は全てＳＫ165のものとして取り上げている。

②　遺物

ａ　ス区の遺物

図示できるような遺物は確認できなかった。

ｂ　セ区の遺物

ＳＫ165出土遺物（第80図531～539）

須恵器（531～537）　531・532は杯Ａ蓋である。531はつまみ部が欠損する。532はキノコ形のつまみを持つ。外面には自然釉が付着する。533・534は杯Ｈ、535は杯Ａである。536は円面硯。陸部には明瞭な使用痕がみられる。また脚台部下方を欠損するが、方形の透かしが確認できる。537は鉢か。

土師器（538・539）　538・539は甕である。いずれも内外面の摩滅が激しい。

ＳＫ164出土遺物（第80図540～542）

須恵器（540）　杯Ｈ蓋である。天井部を欠く。

土師器（541・542）　541・542は甕。542の内面には微かにハケメの痕跡が残る。

ＳＫ163出土遺物（第80図543・544）

須恵器（543）　杯Ｈである。器高が低く、非常に扁平である。

土師器（544）　甕の口縁部である。

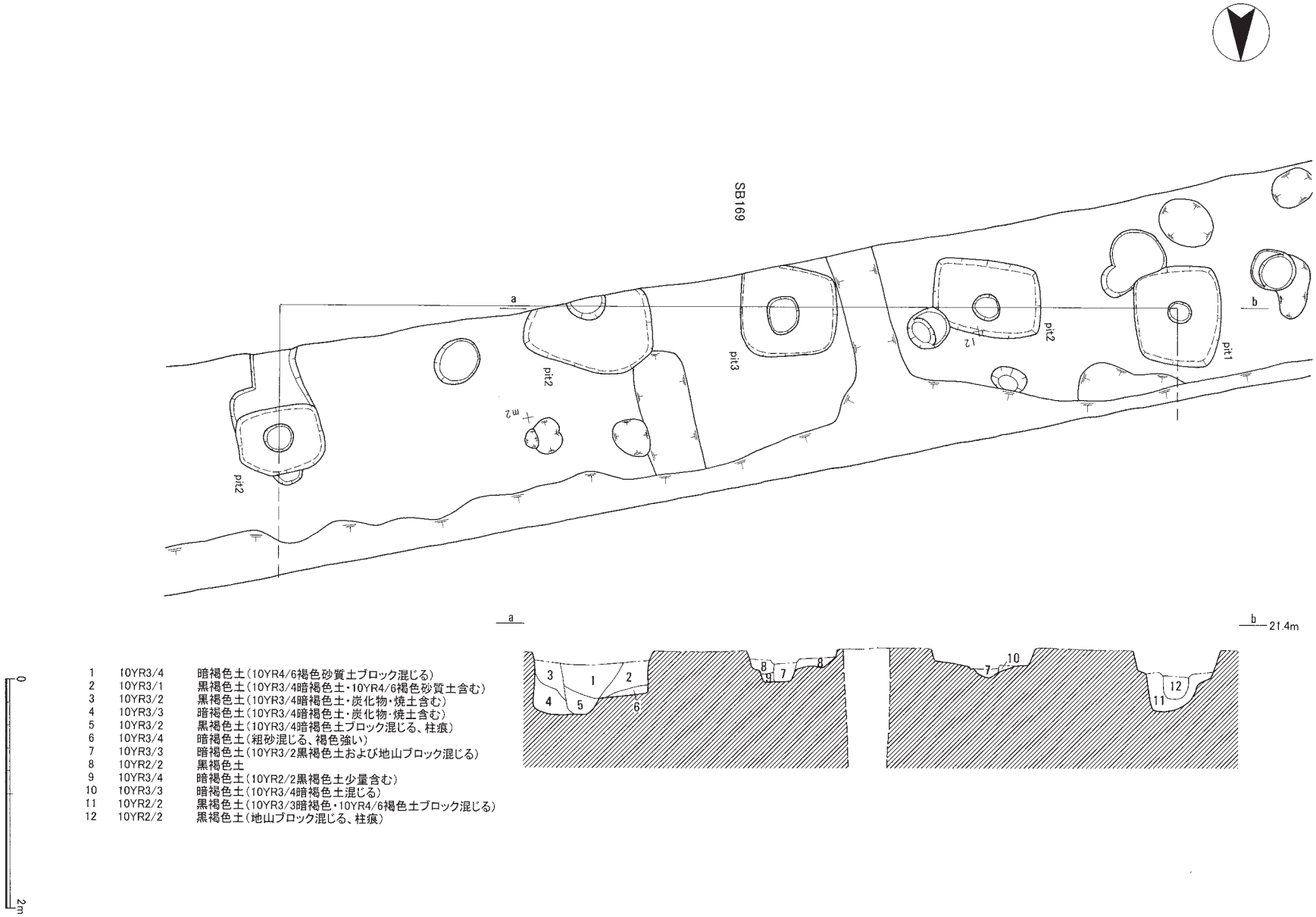
ＳＢ169出土遺物（第80図545・546）

土師器（545・546）　545は壺、546は甕である。546の外面には煤が少量付着する。また、内面に黒変箇所が認められるが、黒変した上端の線が揃う。

ｐｉｔ・包含層出土遺物（第80図547～549）

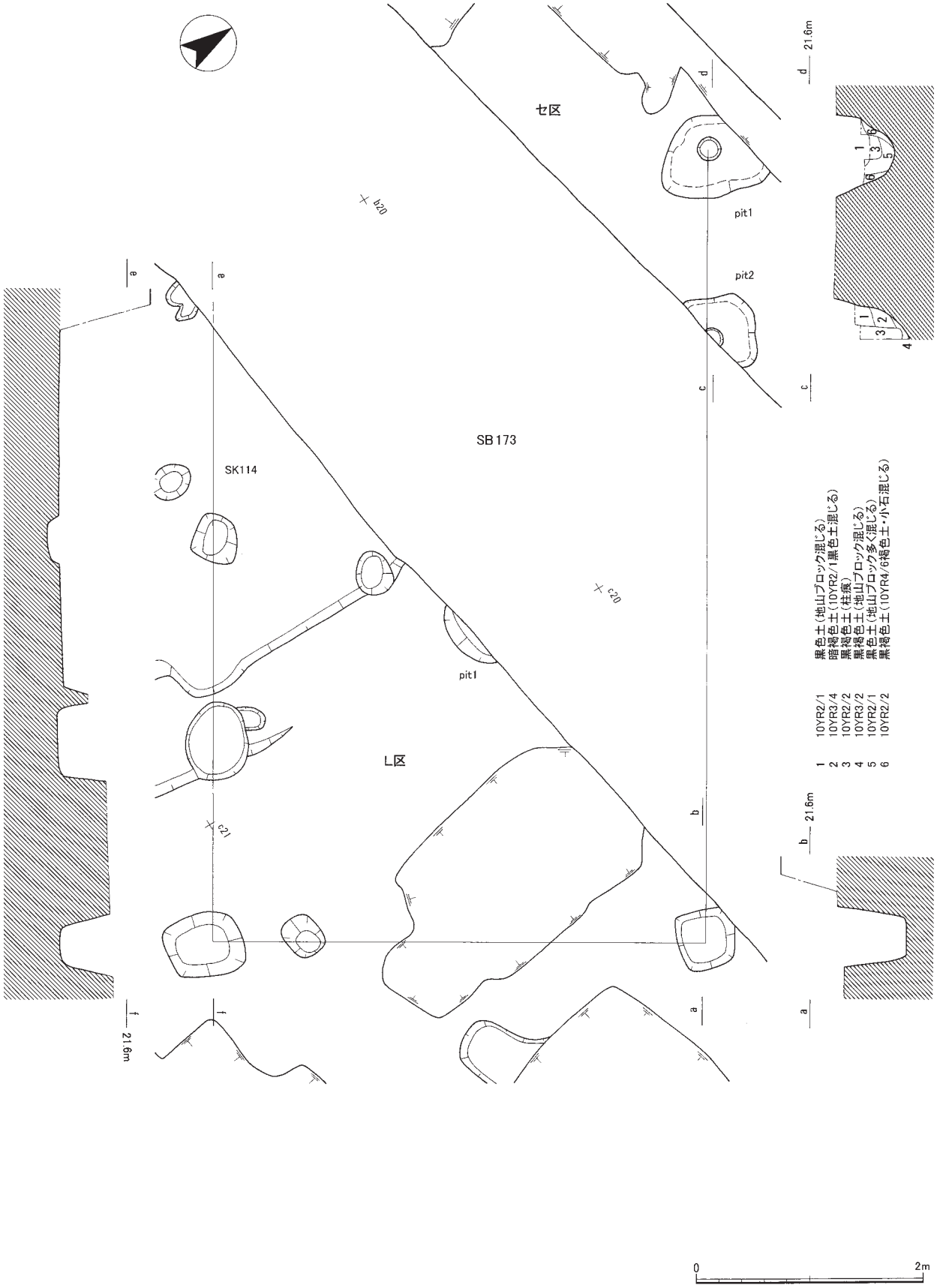
須恵器（547・548）　547は杯Ｈである。非常に扁平で、立ち上がりも短い。セ区f1pit2出土である。548は杯Ａか。底部が欠損していることから、杯Ｂの可能性も考えられる。セ区f2の包含層出土である。

土師器（549）　杯Ｇである。底部から口縁部が緩やかに立ち上がる。底部外面に木葉痕が残る。セ区f1pit2出土である。　（柴山圭子）

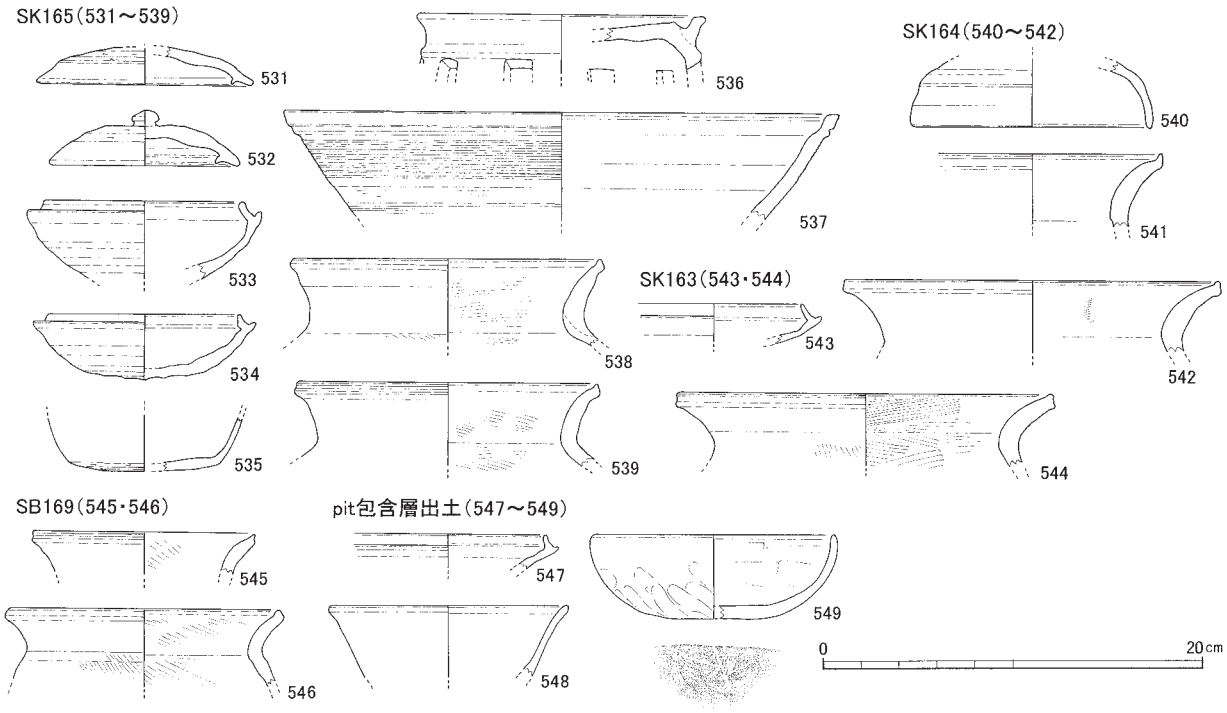


1	10YR3/4	暗褐色土（10YR4/6褐色砂質土ブロック混じる）
2	10YR3/1	黒褐色土（10YR3/4暗褐色土・10YR4/6褐色砂質土含む）
3	10YR3/2	黒褐色土（10YR3/4暗褐色土・炭化物・焼土含む）
4	10YR3/3	暗褐色土（10YR3/4暗褐色土・炭化物・焼土含む）
5	10YR3/2	黒褐色土（10YR3/4暗褐色土ブロック混じる、柱痕）
6	10YR3/4	暗褐色土（粗砂混じる、褐色強い）
7	10YR3/3	暗褐色土（10YR3/2黒褐色土および地山ブロック混じる）
8	10YR2/2	黒褐色土
9	10YR3/4	暗褐色土（10YR2/2黒褐色土少量含む）
10	10YR3/3	暗褐色土（10YR3/4暗褐色土混じる）
11	10YR2/2	黒褐色土（10YR3/3暗褐色・10YR4/6褐色土ブロック混じる）
12	10YR2/2	黒褐色土（地山ブロック混じる、柱痕）

第78図　ＳＢ169平面図・断面図（1：50）



第79図　ＳＢ173平面図･断面図(1:50)



第80図　ＳＫ163～165，ＳＢ169，ピット，セ区包含層出土遺物実測図(1:4)

第６節　Ｆ区・シ区の調査

①遺構

竪穴住居

ＳＨ85（第83図）　Ｆ区西部で検出された竪穴住居である。平面形は隅丸方形で、規模は長軸4.8m、短軸4.2m、深さ0.25mである。建物方向はN20°Wである。主柱穴は確認できなかったが、床面の一部で貼床を確認した。貼床除去後にＳＫ101を確認した。竈跡は東辺北寄りで検出した。基底部が若干残存していた。竈については、壁周溝を掘削してから竈部分を築造したようである。竈跡南西部には、熱をうけた石があり、袖部分の補強をしていた可能性がある。出土遺物については須恵器杯蓋、土師器甕を確認した。遺構の所属時期は、概ね飛鳥時代後半に属するものと思われる。

掘立柱建物

ＳＢ91（第84図）　Ｆ区東端部で検出された掘立柱建物である。桁行３間以上、梁行２間以上の側柱建物であり、調査区外で延びていくようである。柱掘方は平面形が楕円形で径0.6～0.7m程度、柱痕跡は平面形が円形で径0.15～0.25m程度であった。柱間は桁行が1.4mの等間、梁行が1.6mの等間である。建物方向はN12°Wである。出土遺物については、土師器甕、須恵器甕を確認した。遺構の時期は、飛鳥時代後期から奈良時代に属すると考えられる。

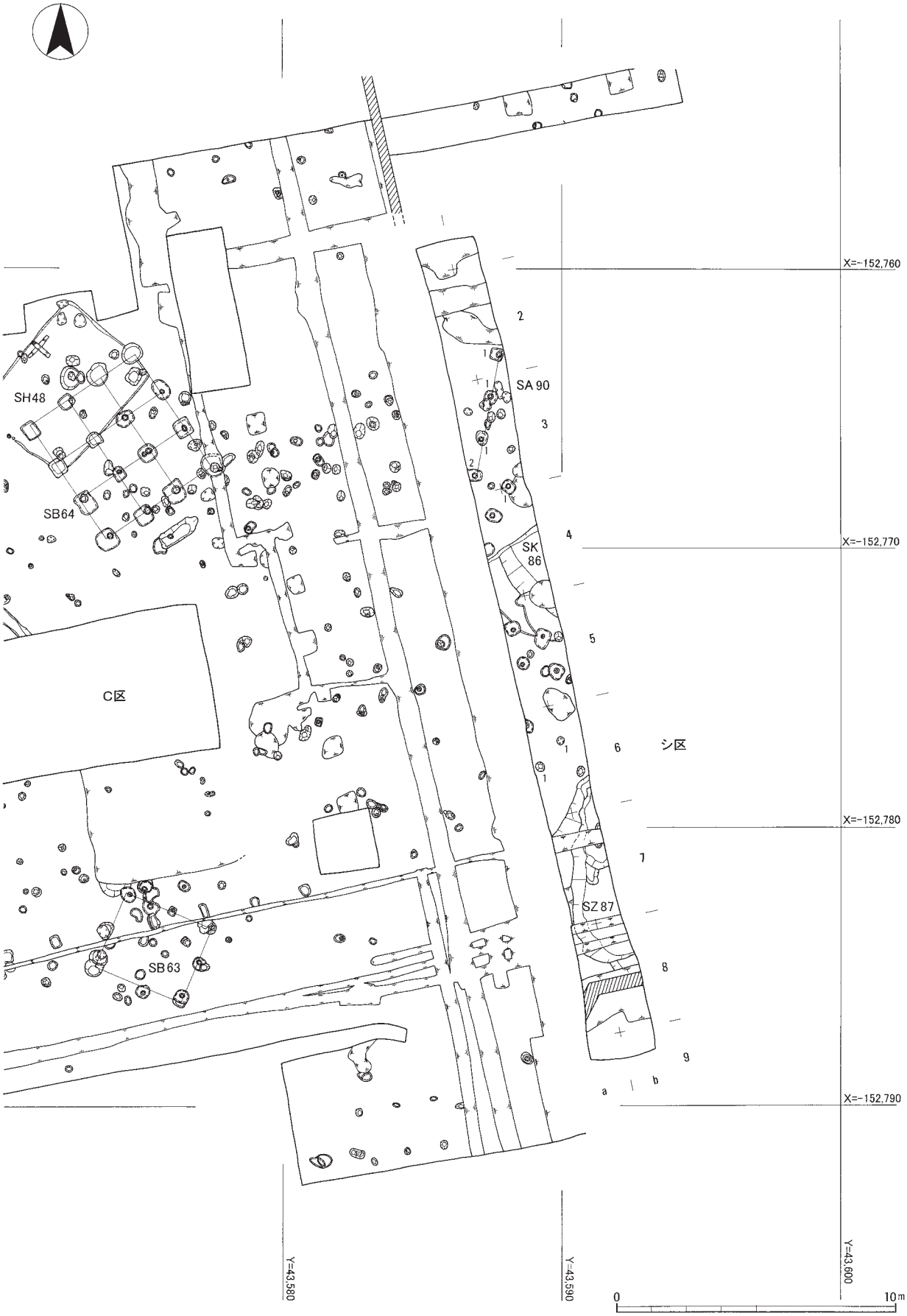
柱列

ＳＡ90（第84図）　シ区北部で検出された柱列である。３間分の柱列を調査区内で確認した。柱掘方は平面形が楕円形で長径0.5～0.55m程度、柱痕跡は平面形が円形で径0.2～0.25m程度であった。柱間は1.5mの等間である。建物方向はN12°Ｅである。柱掘方から土師器甕が出土している。遺構の所属時期については、概ね飛鳥時代末から奈良時代初めに属するものと考えられる。

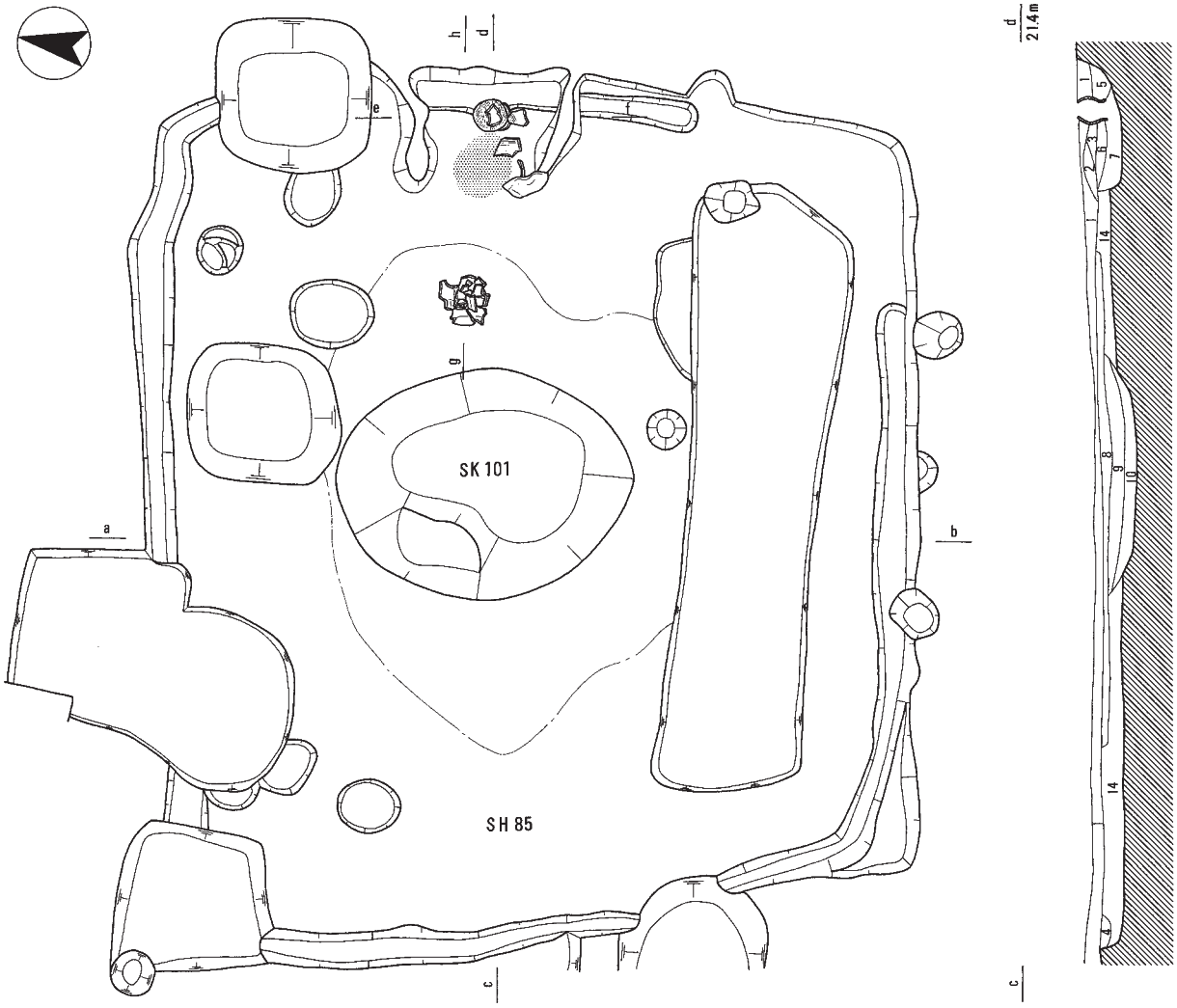
土坑

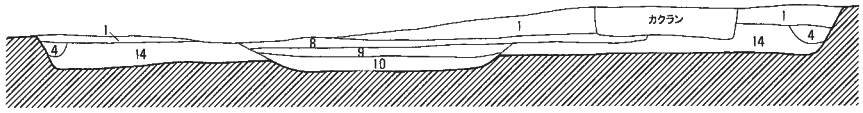
ＳＫ101（第83図）　ＳＨ85貼床除去後に検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.28m、深さ0.17mである。出土遺物については、土師器片・須恵器甕片を確認した。竪穴住居との関係から、遺構の所属時期については、飛鳥時代後半に属するものと思われる。

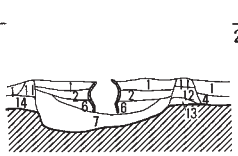
第81図　F区遺構平面図(1:200)



第82図　シ区遺構平面図(1:200)



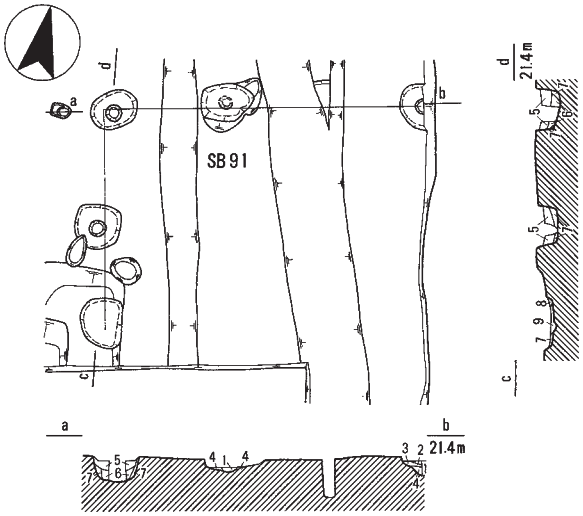




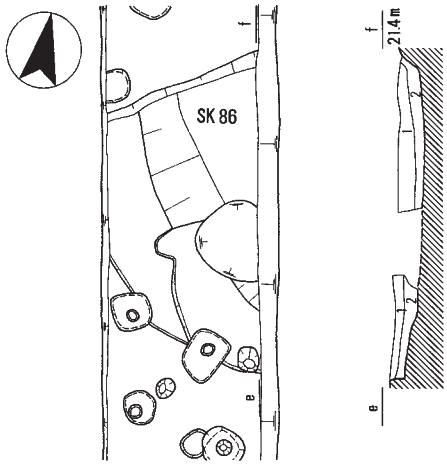
・ＳＨ85
1 10YR2/2黒褐色砂質土（埋土）
2 10YR3/2黒褐色砂質土、焼土・炭化物混じる(竈崩落土)
3 10YR3/3暗褐色砂質土、焼土多く含む(竈崩落土)
4 10YR2/3黒褐色砂質土(壁周溝)
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(壁周溝)
6 5YR4/8赤褐色土(竈使用時の焼土)
7 10YR4/4褐色砂質土(竈掘方埋土)
8 10YR5/4にぶい黄褐色土、粘性弱い（貼床）
9 10YR3/2黒褐色砂質土、10YR5/4にぶい黄褐色粘質土混じる（SK101埋土）
10 10YR3/1黒褐色砂質土（SK101埋土）
11 10YR7/4にぶい黄橙色砂質土（竈構築材）
12 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土（竈構築材）
13 10YR5/2灰黄褐色砂質土（竈構築材）
14 10YR2/2黒褐色砂質土（埋土）

0 2m

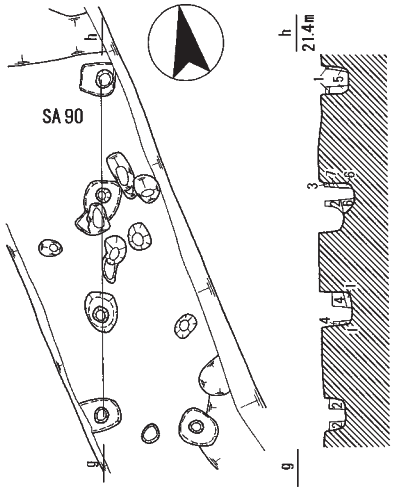
第83図　ＳＨ85，ＳＫ101平面図･断面図(1:40)



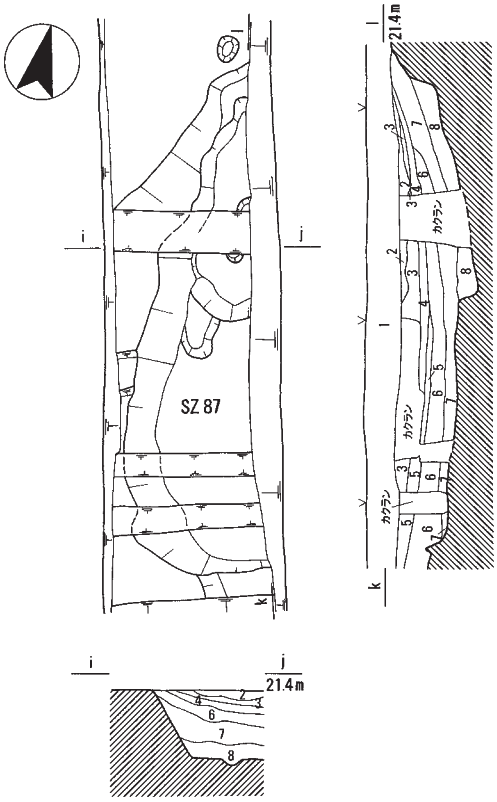
・ＳＢ91
1 10YR3/1黒褐色砂質土（柱痕）
2 10YR3/2黒褐色砂質土（掘方埋土）
3 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土（掘方埋土）
4 10YR4/2灰黄褐色砂質土（掘方埋土）
5 10YR2/1黒色砂質土（掘方埋土）
6 10YR3/2黒褐色砂質土、土器含む（掘方埋土）
7 10YR2/2黒褐色砂質土（掘方埋土）
8 10YR6/6明黄褐色砂質土
（木根による撹乱が著しいため詳細は不明）
9 10YR3/1黒褐色砂質土
（木根による撹乱が著しいため詳細は不明）



・ＳＫ86
1 10YR3/2黒褐色砂質土、10YR6/3にぶい黄橙色砂質土細粒ブロック含む（埋土）
2 10YR3/2黒褐色砂質土、10YR7/6黄褐色砂質土大ブロック含む（埋土）



・ＳＡ90
1 10YR3/2黒褐色砂質土、10YR6/6明黄褐色ブロック含む
（掘方埋土）
2 10YR3/2黒褐色砂質土（掘方埋土）
3 10YR3/1黒褐色砂質土、10YR6/6明黄褐色ブロック含む
（掘方埋土）
4 10YR3/1黒褐色砂質土（掘方埋土）
5 10YR2/2黒褐色砂質土（掘方埋土）
6 10YR2/1黒色砂質土（掘方埋土）
7 10YR4/2灰黄褐色砂質土、10YR6/6明黄褐色ブロック含む
（掘方埋土）



・ＳＺ87
1 表土
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土、10YR5/4にぶい黄褐色砂質ブロック状に含む（埋土）
3 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土、10YR6/6明黄褐色砂質互層状に混じる（埋土）
4 10YR4/2灰黄褐色砂質土、礫混じる・砂質強い
（埋土）
5 10YR3/2黒褐色砂質土、砂質強い（埋土）
6 10YR3/1黒褐色砂質土、土器片多く含む（埋土）
7 10YR6/1褐灰色砂質土（埋土）
8 10YR5/2灰黄褐色砂質土、焼土・炭多く含む（埋土）

0　　4m

第84図　ＳＢ91，ＳＡ90，ＳＫ86，ＳＺ87平面図･断面図(1:100)

ＳＫ86（第84図） シ区北部で一部を検出した土坑である。平面形は、調査区が狭小なため全容が判然としない。規模については、調査区内で長軸3.7m以上、短軸2.2m以上。調査区外に延びていくようである。出土遺物がないため、遺構の所属時期は判断が難しい。

その他の遺構

ＳＺ87（第84図） シ区南部で検出された性格不明の遺構である。平面形は、調査区が狭小なため全容が判然としない。規模については、調査区内で長軸6.3m以上、短軸1.9m以上、深さ0.9m。調査区外へ延びていくようである。出土遺物については、近世遺物、須恵器甕・土師器甕を確認した。なお、埋土には焼土及び炭化物が混入していた。

（前野謙一）

②遺物

Ｆ区

ＳＨ85出土遺物（第85図550～558）

土師器（550～553） 550は杯Ｇである。口縁部が内弯気味に立ち上がる。551は甕である。丸底の大形のものか。552・553は甕である。丸底の小形のものか。これらは、概ね都城編年平城Ｉに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。

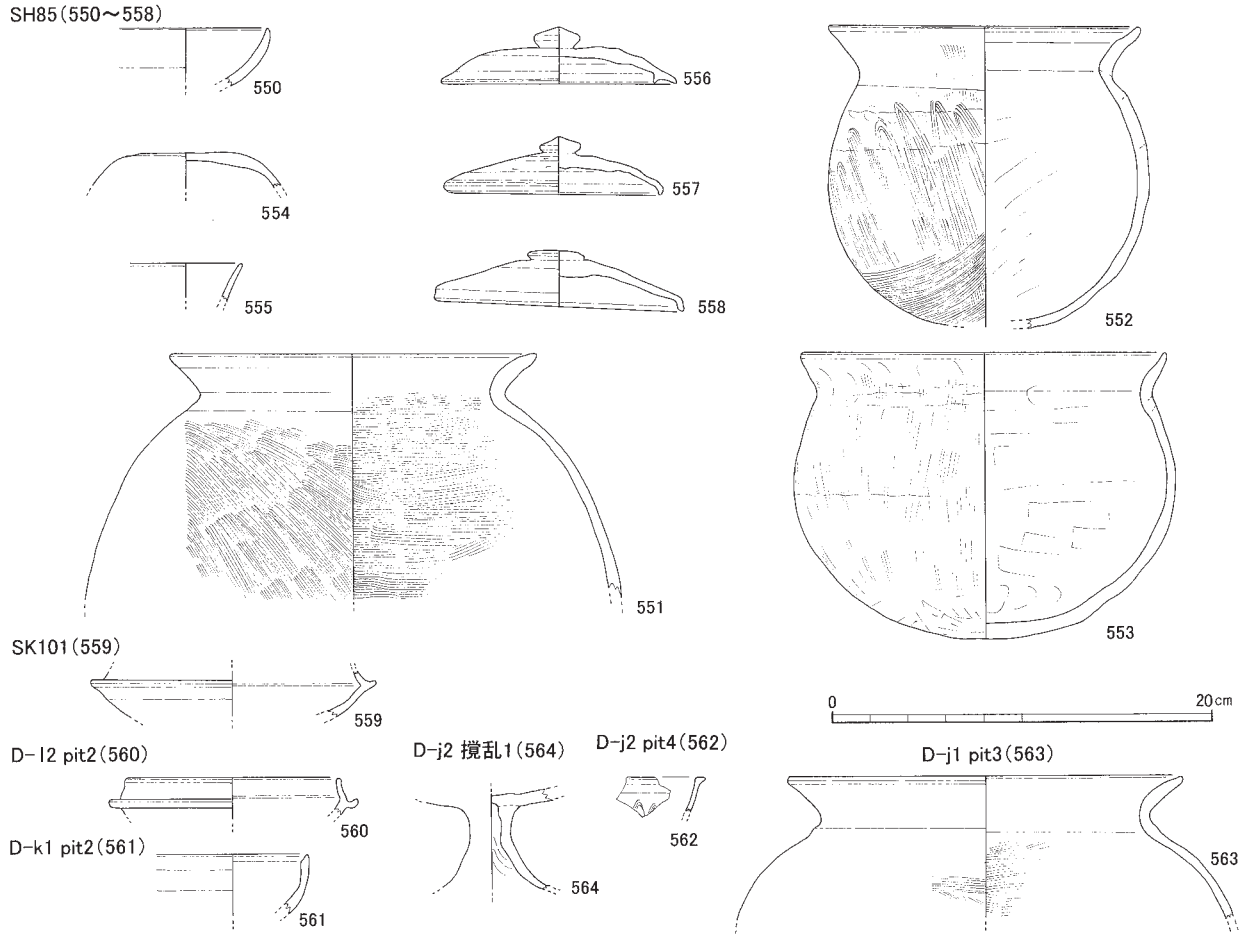
須恵器（554～558） 554は杯Ｈ蓋である。摘みはみられないものである。555は杯Ａである。口縁部が直線的に外傾している。556は杯Ａ蓋である。口縁部に低いカエリがみられる。557・558は杯Ｂ蓋である。口縁部が直立気味に屈曲する。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

ＳＫ101出土遺物（第85図559）

須恵器（559） 杯Ｈである。口縁端部を欠く。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

D-I2Pit ２出土遺物（第85図560）

須恵器（560） 杯Ｈであろうか。口縁部片でカエリ



第85図　ＳＨ85，ＳＫ101，ピット出土遺物実測図（1:4）

が内傾する。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

D-k1Pit ２出土遺物（第85図561）

須恵器（561） 椀。内弯する口縁部片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

D-j2Pit ４出土遺物（第85図562）

須恵器（562） 高杯あるいは瓿の口縁部片であろうか。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

D-j1Pit ３出土遺物（第85図563）

土師器（563） 甕である。丸底の大形のものか。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

D-j2撹乱１出土遺物（第85図564）

須恵器（564） 高杯の杯部と脚部片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

シ区

ＳＺ87出土遺物（第86図565～571）

土師器（565・566） 565は甕口縁部小片である。566は鍋の把手部分であろうか。

須恵器（567・568） 567は杯の内弯する口縁部小片である。568は杯Ｂ蓋である。口縁部が直立気味に屈曲する。これらは概ね都城編年平城Ⅰに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。

陶器（569～571） 569は小皿か。口縁部が直立し、底部には糸切痕がみられる。近世のものであろうか。570は陶器鉢の底部か。台は剥落している。571は大形のものの底部と思われる。室町時代のものであろうか。

b3Pit １出土遺物（第86図572）

須恵器（572） 杯蓋である。摘み及び口縁部は欠失している。都城編年平城Ⅰに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。

a3Pit １出土遺物（第86図573）

須恵器（573） 須恵器杯の小片である。都城編年平城Ⅰに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めにかけてのものと考えられる。　（小濵　学）

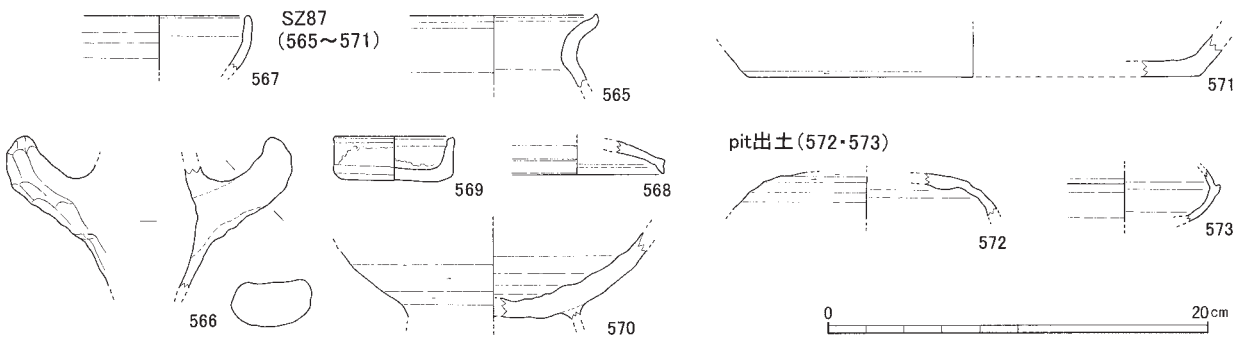
第７節　Ｌ区の調査

①遺構

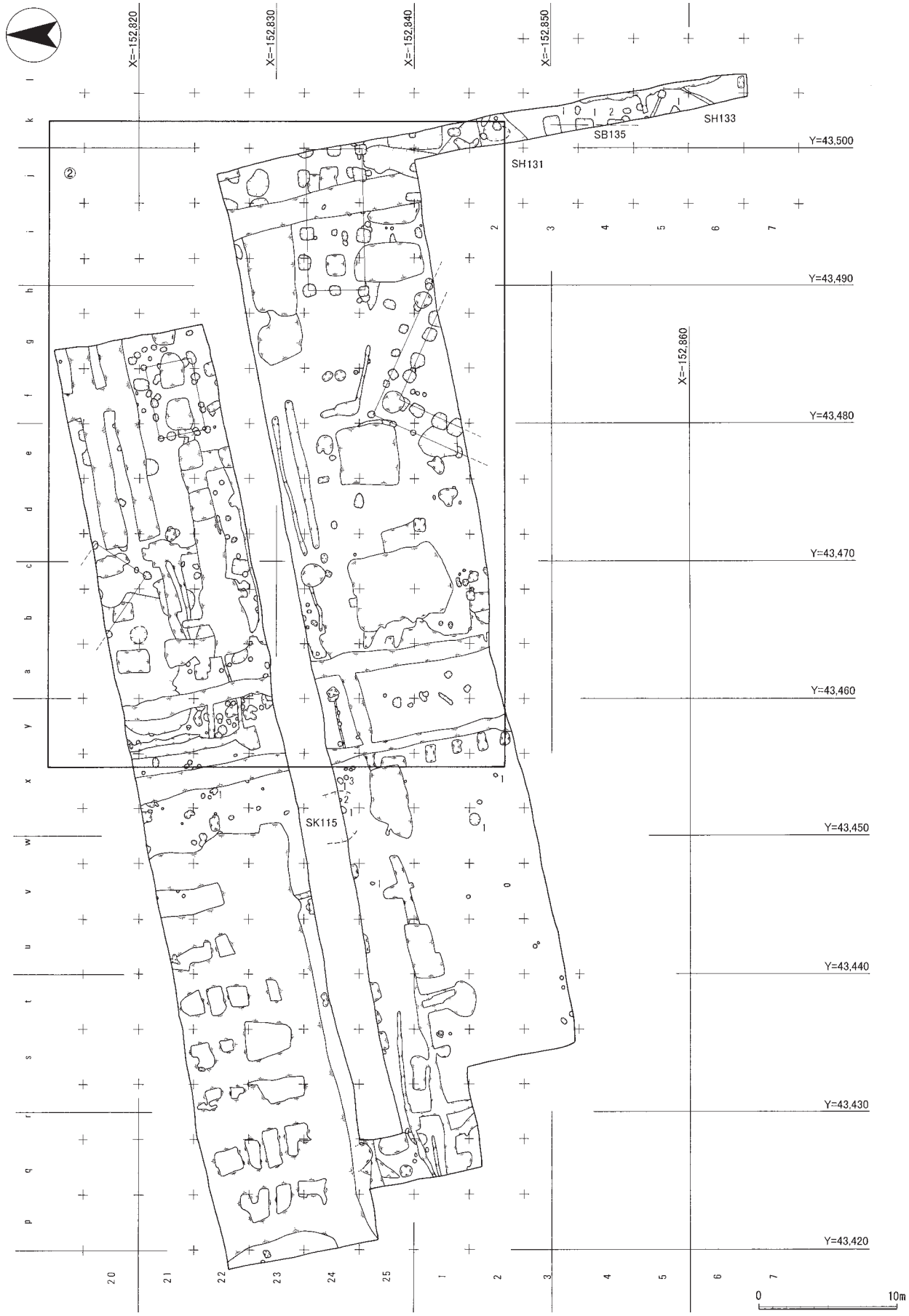
竪穴住居

ＳＨ131（第89図） 調査区南東部で一部が検出された。調査区外へ延びていくようであるが、隅丸方形の平面形と思われる。長軸2.5m以上、短軸2.3m以上、深さ0.22mである。建物方向はN36°Ｅである。遺構内の一部で貼床、壁周溝を確認することができた。出土遺物は土師器甕・須恵器甕である。時期は、飛鳥時代後期から奈良時代に属すると考えられる。また、貼床の下で土坑ＳＫ161を確認した。

ＳＨ132（第89図） 調査区東側で遺構の一部が検出された。更に東へ延びていくようである。平面形としては隅丸方形であろう。長軸４m以上、短軸1.2m以上、深さ0.32mである。建物方向はＮ２°Ｗである。貼床及び壁周溝は調査区内では確認できなかった。遺構の新旧関係としては、切り合いからＳＫ134より新しい。出土遺物については、土師器甕、須恵



第86図　ＳＺ87,ピット出土遺物実測図(1:4)



第87図　L区遺構平面図1 (1:400)

第88図　L区遺構平面図２(1:200)

器甕である。遺構の新旧関係を考慮すると、飛鳥時代後期から奈良時代に属すると考えられる。

ＳＨ133（第89図） 調査区南側で遺構の一部を検出した。長軸2.5m以上、短軸1.2m以上、深さ0.28mである。調査区西側へ延びていくようで、隅丸方形の平面形と思われる。建物方向はN23°Ｅである。明確な主柱穴、貼床は確認できなかったが、壁周溝を確認することができた。出土遺物はなく明確な判断はしがたいが、建物の方向を考慮すると飛鳥時代後期から奈良時代に属すると考えられる。

掘立柱建物

ＳＢ119（第90図） 調査区東側で検出された。桁行３間、梁行２間の側柱建物である。建物方向はN15°Wである。柱穴は木根の撹乱のため一部確認できなかったが、柱掘方は径0.4～0.6m程度の円形で、柱痕跡は径0.15～0.20m程度で円形であった。柱穴からの出土遺物については、土師器甕が確認できた。遺構の時期は、飛鳥時代後期から奈良時代に属すると考えられる。

ＳＢ126（第90図） 調査区東側で検出された。桁行５間、梁行２間の側柱建物である。建物方向はＮ１°Wである。柱穴が撹乱により消失していたり、遺構自体が調査区外に延びるため全容は確認できなかった。確認できる部分では、柱掘方は一辺0.65～1.10m程度の隅丸方形で、柱痕跡は径0.2～0.3m程度で円形であった。遺構の新旧関係は、切り合いからＳＫ134より新しいものといえよう。柱穴からの出土遺物としては、土師器甕・杯・甑、須恵器杯・甕、釘を確認した。所属時期については、奈良時代前半に属するものと考えられる。

ＳＢ127（第91図） 調査区南東側で検出された。調査区内で確認されたものとしては、身舎が桁行４間以上、梁行３間以上の側柱建物である。なお、そのまわりには５間以上の庇の付く掘立柱建物である。更に遺構は調査区南側へ延びていくようである。建物方向は、N23°Ｅである。柱穴については、木根の撹乱のため一部確認できなかったが、身舎部分ついては柱掘方は径1.0～1.2m程度の平面形が隅丸方形あるいは楕円形で、柱痕跡は径0.20～0.30m程度の平面形が円形であった。柱穴２箇所毎に布掘が行われていたようで、そのため柱掘方が近接しているようである。また、図示はしていないが、柱掘方をつなぐような浅い溝状のものが調査時に確認されている。柱間は1.5mと1.8mである。庇の柱掘方は径0.5～0.6m程度の平面形が円形で、柱痕跡は径0.15～0.30m程度で平面形が円形であった。庇の柱穴も５間以上、４間以上であり、大型掘立柱建物と平行である。このピットも撹乱のため一部確認できなかったが、径は0.5～0.6m、深さ0.15m、柱間は東西が2.4mと1.8m、南北1.6mである。出土遺物は、土師器小片、須恵器甕がある。明確な時期は判断しがたいが、他の掘立柱建物と比較すると、奈良時代前半に属するものといえよう。

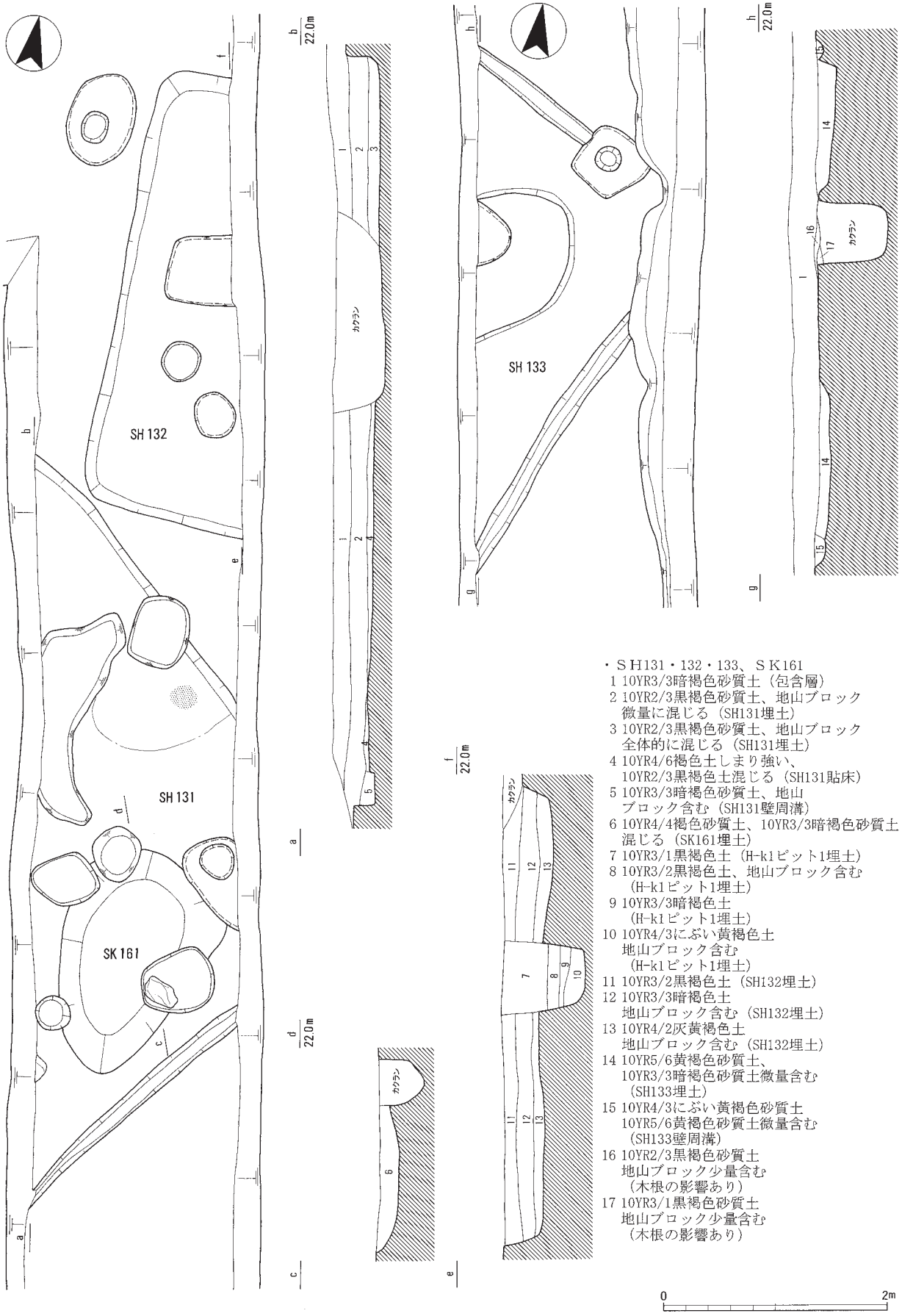
ＳＢ135（第91図） ２間以上の掘立柱建物であろうか。調査区南側の一部で検出された。更に調査区外へ延びていくようである。調査区が狭小であるため遺構の全容は判然としない。建物方向はＮ０°である。調査区内で確認できた規模としては、柱掘方は平面形が隅丸方形で一辺1.0～1.3m程度、柱痕跡は平面形が円形で径0.20～0.30m程度であった。柱間は2.4mである。出土遺物は土師器甕である。時期は、奈良時代に属すると考えられる。

土坑

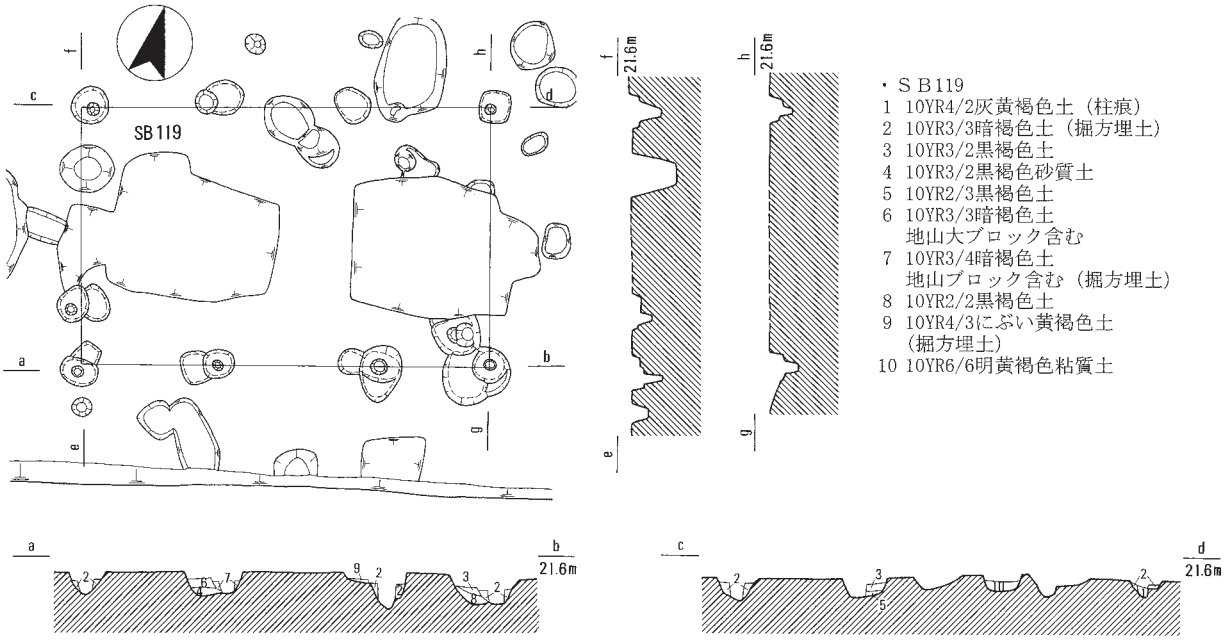
ＳＫ114（第92図） 調査区北側で検出された。長軸9.2m以上、短軸6.6m以上の土坑であるが、更に調査区北側に延びていくようである。遺構の西側については、長軸5.8m以上、短軸4.6m、深さ約0.7m落ち込む。複数の遺構が重複している可能性は否定できない。出土遺物は,土師器甕・甑・椀、須恵器甕を確認した。時期は、飛鳥時代末から奈良時代前半に属するものと考えられる。

ＳＫ115（第87図） 土層の断面観察により確認することができた。調査区北壁付近に位置する。調査区の外へ延びていくようである。須恵器甕、土師器甕の出土を確認した。時期は、飛鳥時代末から奈良時代前半に属するものと考えられる。

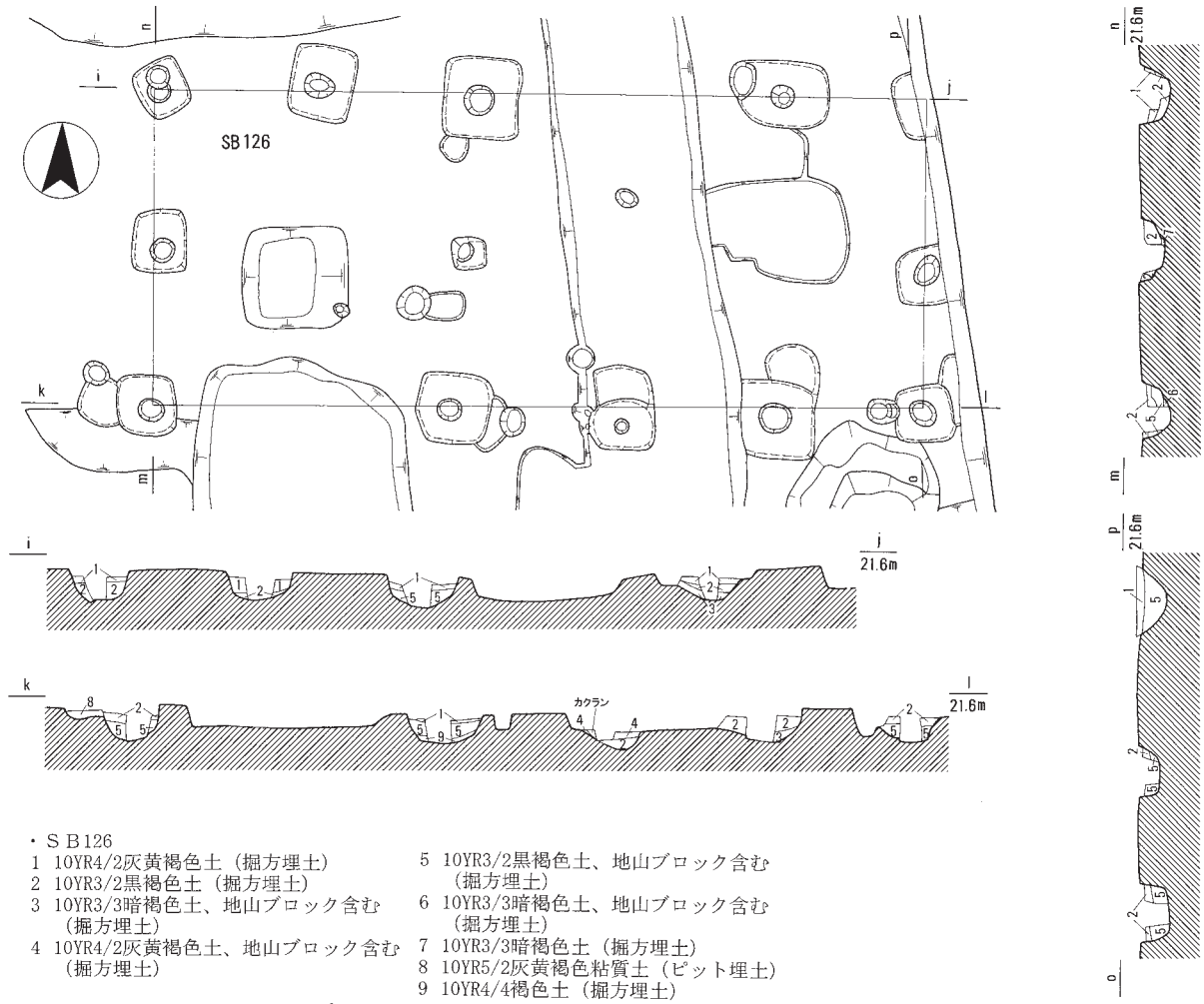
ＳＫ118（第92図） 調査区北側ＳＫ114掘削後にＳＫ114東側で確認することができた。ＳＫ114との新旧関係は判然としない。平面形は隅丸方形で、規模としては長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.61mである。遺構北側の底部付近で炭化物や焼土を検出した。断面では、焼土、炭化物及び木片の順で重なっていた。



第89図　ＳＨ131～133，ＳＫ161平面図･断面図(1:50)



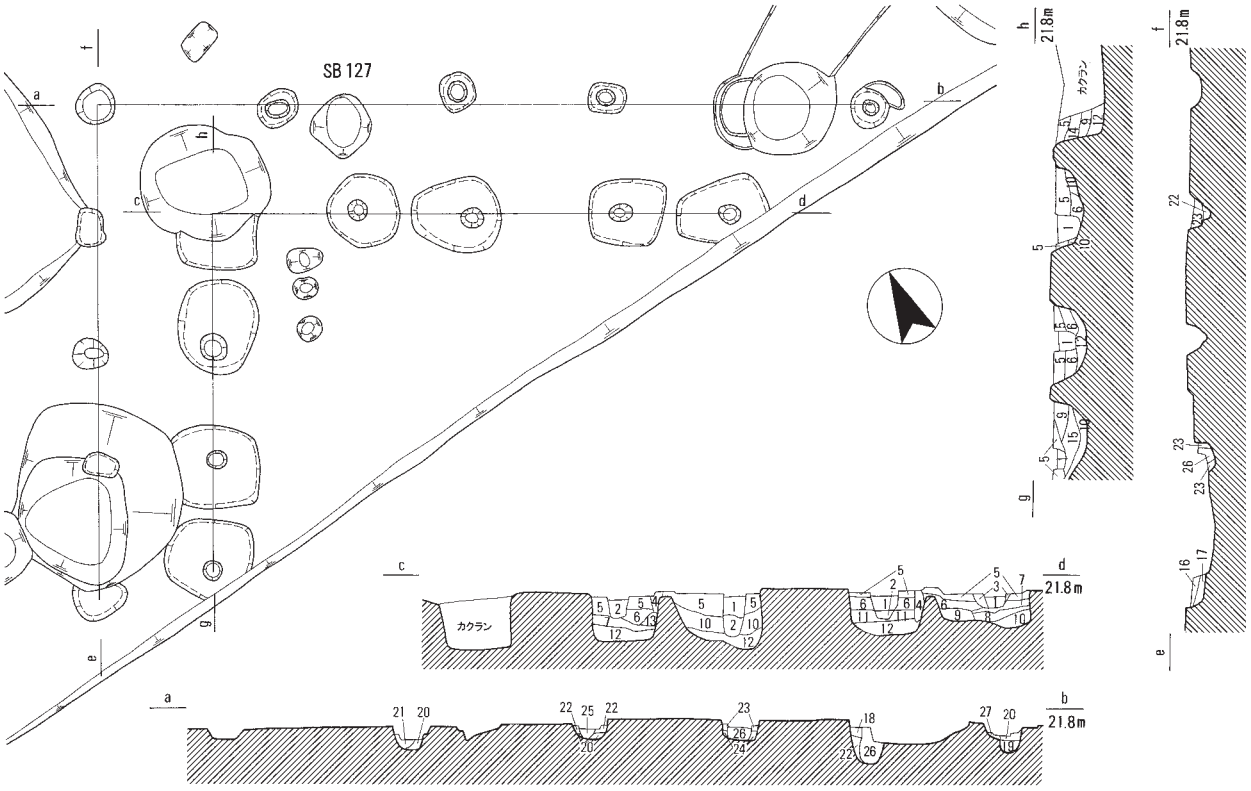
・ＳＢ119
1 10YR4/2灰黄褐色土（柱痕）
2 10YR3/3暗褐色土（掘方埋土）
3 10YR3/2黒褐色土
4 10YR3/2黒褐色砂質土
5 10YR2/3黒褐色土
6 10YR3/3暗褐色土
地山大ブロック含む
7 10YR3/4暗褐色土
地山ブロック含む（掘方埋土）
8 10YR2/2黒褐色土
9 10YR4/3にぶい黄褐色土
（掘方埋土）
10 10YR6/6明黄褐色粘質土



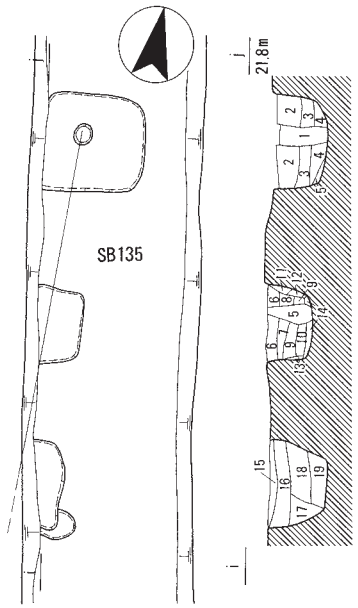
・ＳＢ126
1 10YR4/2灰黄褐色土（掘方埋土）
2 10YR3/2黒褐色土（掘方埋土）
3 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む
（掘方埋土）
4 10YR4/2灰黄褐色土、地山ブロック含む
（掘方埋土）
5 10YR3/2黒褐色土、地山ブロック含む
（掘方埋土）
6 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む
（掘方埋土）
7 10YR3/3暗褐色土（掘方埋土）
8 10YR5/2灰黄褐色粘質土（ピット埋土）
9 10YR4/4褐色土（掘方埋土）

0 4m

第90図　ＳＢ119･126平面図･断面図(1:100)



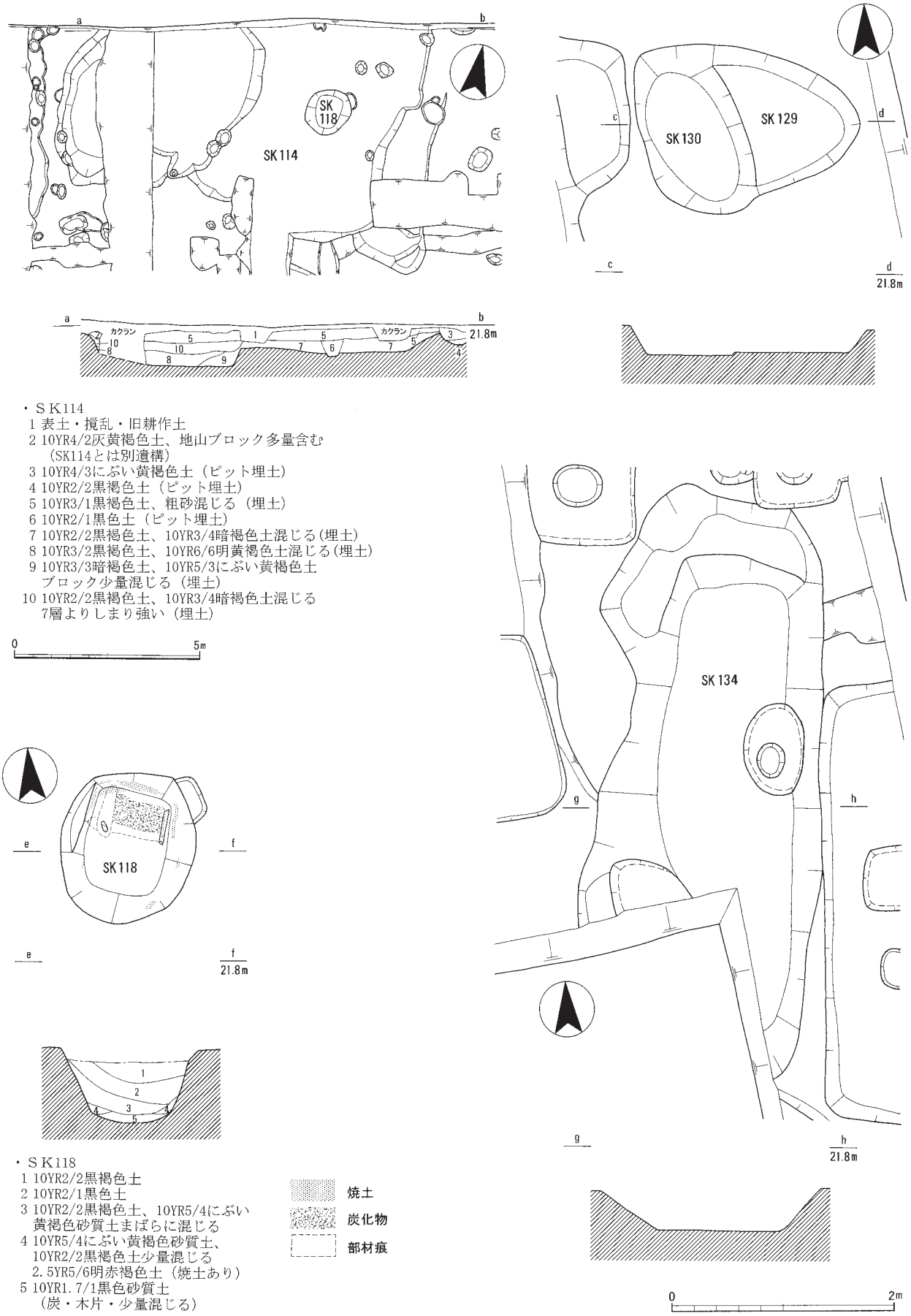
・ＳＢ127
1 10YR2/2黒褐色砂質土（柱痕埋土）
2 10YR2/2黒褐色砂質土
地山ブロック含む（柱痕埋土）
3 10YR2/2黒褐色土
地山ブロック微量混じる（掘方埋土）
4 10YR3/1黒褐色土
地山ブロック粒状に含む（掘方埋土）
5 10YR3/2黒褐色土
地山ブロック含む（掘方埋土）
6 10YR3/1黒褐色土、地山ブロック少量含む（掘方埋土）
7 10YR3/2黒褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック多量含む（掘方埋土）
8 10YR3/3暗褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック多量含む（掘方埋土）
9 10YR4/2灰黄褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック多量含む（掘方埋土）
10 10YR3/1黒褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック多量含む（掘方埋土）
11 10YR3/2黒褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック少量含む（掘方埋土）
12 10YR3/1黒褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック少量含む（掘方埋土）
13 10YR4/2灰黄褐色砂質土、地山ブロック少量含む（掘方埋土）
14 10YR7/4にぶい黄橙色土、地山ブロック粒混じる（掘方埋土）
15 10YR6/4にぶい黄橙色土、10YR3/1黒褐色土混じる（掘方埋土）
16 10YR2/1黒色土
（木根浸食のため詳細は不明）
17 10YR3/1黒褐色土
（木根浸食のため詳細は不明）
18 10YR4/2灰黄褐色土（掘方埋土）
19 10YR3/1黒褐色土（掘方埋土）
20 10YR3/2黒褐色土（掘方埋土）
21 10YR3/2黒褐色土、地山ブロック含む（掘方埋土）
22 10YR3/3暗褐色土（掘方埋土）
23 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む（掘方埋土）
24 10YR3/4暗褐色土（掘方埋土）
25 10YR3/1黒褐色土（柱痕埋土）
26 10YR3/2黒褐色土（柱痕埋土）
27 10YR4/2灰黄褐色土



・ＳＢ135
1 10YR4/2灰黄褐色土、10YR6/6明黄褐色土ブロック混じる（柱痕）
2 10YR4/3にぶい黄褐色土と10YR7/6明黄褐色土が互層状に入る
3 10YR7/6明黄褐色土と10YR5/2灰黄褐色土が互層状に混じる（掘方埋土）
4 10YR6/4にぶい黄橙色土に10YR3/1黒褐色土が互層状に混じる（掘方埋土）
5 10YR4/2灰黄褐色土（柱痕）
6 10YR5/3にぶい黄褐色土に10YR7/6明黄褐色土が多量含む（掘方埋土）
7 10YR3/2黒褐色土（掘方埋土）
8 10YR3/2黒褐色土に10YR7/6明黄褐色土が多量含む（掘方埋土）
9 10YR5/3にぶい黄褐色土に10YR7/6明黄褐色土が非常に多量含む（掘方埋土）
10 10YR5/3にぶい黄褐色土に10YR6/4にぶい黄橙色土がブロック状に入る
（掘方埋土）
11 10YR4/2灰黄褐色土
（掘方埋土・部材痕跡の可能性あり）
12 10YR3/2黒褐色土に10YR7/6明黄褐色土がブロック状に入る
（掘方埋土・部材痕跡の可能性あり）
13 10YR3/3暗褐色土
（掘方埋土・部材痕跡の可能性あり）
14 10YR4/3にぶい黄褐色土に10YR6/4にぶい黄橙色土がブロック状に入る（掘方埋土）
15 10YR7/2にぶい黄橙褐色土と10YR5/3にぶい黄褐色土混じる（掘方埋土）
16 10YR3/3暗褐色土に10YR7/6明黄褐色土がブロック状に混じる（掘方埋土）
17 10YR3/2黒褐色土に10YR6/4にぶい黄橙色土がブロック状に若干混じる（掘方埋土）
18 10YR4/2灰黄褐色土に10YR6/4にぶい黄橙色土がブロック状に多量含む（掘方埋土）
19 10YR3/2黒褐色土に10YR6/4にぶい黄橙色土がブロック状に少量含む（掘方埋土）

0　4m

第91図　ＳＢ127･135平面図･断面図(1:100)



・ＳＫ114
1 表土・撹乱・旧耕作土
2 10YR4/2灰黄褐色土、地山ブロック多量含む
（SK114とは別遺構）
3 10YR4/3にぶい黄褐色土（ピット埋土）
4 10YR2/2黒褐色土（ピット埋土）
5 10YR3/1黒褐色土、粗砂混じる（埋土）
6 10YR2/1黒色土（ピット埋土）
7 10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土混じる(埋土)
8 10YR3/2黒褐色土、10YR6/6明黄褐色土混じる(埋土)
9 10YR3/3暗褐色土、10YR5/3にぶい黄褐色土
ブロック少量混じる（埋土）
10 10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土混じる
7層よりしまり強い（埋土）

・ＳＫ118
1 10YR2/2黒褐色土
2 10YR2/1黒色土
3 10YR2/2黒褐色土、10YR5/4にぶい
黄褐色砂質土まばらに混じる
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土、
10YR2/2黒褐色土少量混じる
2.5YR5/6明赤褐色土（焼土あり）
5 10YR1.7/1黒色砂質土
（炭・木片・少量混じる）

焼土
炭化物
部材痕

第92図　ＳＫ114･118･129･130･134平面図･断面図（ＳＫ114は1:150，それ以外1:50）

また、遺構北側の壁が被熱している状況が観察できた。遺構の形状や焼土の存在から炉跡の可能性を指摘できよう。出土遺物は土師器甕及び土師器の破片を確認した。所属時期については、概ね飛鳥時代末から奈良時代前半に属するものと思われる。

ＳＫ129（第92図） 調査区東側で検出された。長軸1.4m以上、短軸1.0m以上、深さ0.05mの土坑である。ＳＫ130との重複があるため全容は判然としない。出土遺物としては、土師器甕・須恵器甕を確認した。所属時期は、飛鳥時代末から奈良時代前半に属するものか。

ＳＫ130（第92図） 調査区東側で検出された。平面形は楕円形で、長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.22mの土坑である。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器甕がある。時期は、飛鳥時代後期から奈良時代に属すると考えられる。

ＳＫ134（第92図） 調査区南側で遺構の一部を検出した。調査区南側へ延びていくようである。平面形は楕円形である。規模としては、長軸5.1m以上、短軸2.2m、深さ0.24mである。遺構の新旧については、ＳＨ132に切られ、ＳＢ126に切られている。出土遺物としては、土師器甕、須恵器甕・杯を確認した。出土遺物や遺構の新旧関係を考慮して、所属時期は、飛鳥時代後半に属するものと思われる。

ＳＫ161（第89図） ＳＨ131の貼床除去後に検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸２m、短軸1.3m、深さ0.22mの土坑である。遺物の出土はなく、ＳＨ131との関係から、飛鳥時代末から奈良時代前半に属するものと考えられる。（前野謙一）

②遺物

ＳＢ126出土遺物（第93図574・575）

須恵器（574） 杯Ｈ蓋の小片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

瓦（575） 平瓦小片である。古代のものか。

ＳＨ131出土遺物（第93図576・577）

須恵器（576） 杯Ｂ蓋の口縁部小片である。概ね都城編年平城Ⅰに比定できよう。飛鳥時代末から奈良時代初めのものと考えられる。

土製品（577） 土師質の土錘である。

ＳＫ114出土遺物（第93図578～584）

土師器（578～582） 578は杯Ｇの口縁部小片である。579は高杯脚部片である。接地部分が大きく開く。580～582は甕口縁部片である。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（583・584） 583は高杯杯部と脚部の接合部である。584は杯Ｈの口縁部小片である。カエリが直線的に内傾する。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

ＳＫ115出土遺物（第93図585）

土師器（585） 甕口縁部片である。奈良時代前半のものと考えられる。

ＳＫ125出土遺物（第93図586）

須恵器（586） 杯Ａ蓋の口縁部小片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

ＳＫ128出土遺物（第93図587～590）

土師器（587～589） 587は杯Ｇの口縁部小片である。588は高杯杯部と脚部の接合部である。589は甕口縁部小片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（590） 杯Ｈ蓋の口縁部小片である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

ＳＫ130出土遺物（第93図591～594）

土師器（591～594） 591は高杯の杯部である。浅い皿状である。592は皿の口縁部小片である。593・594は甕口縁部片である。大形のものである。奈良時代前半のものと考えられる。

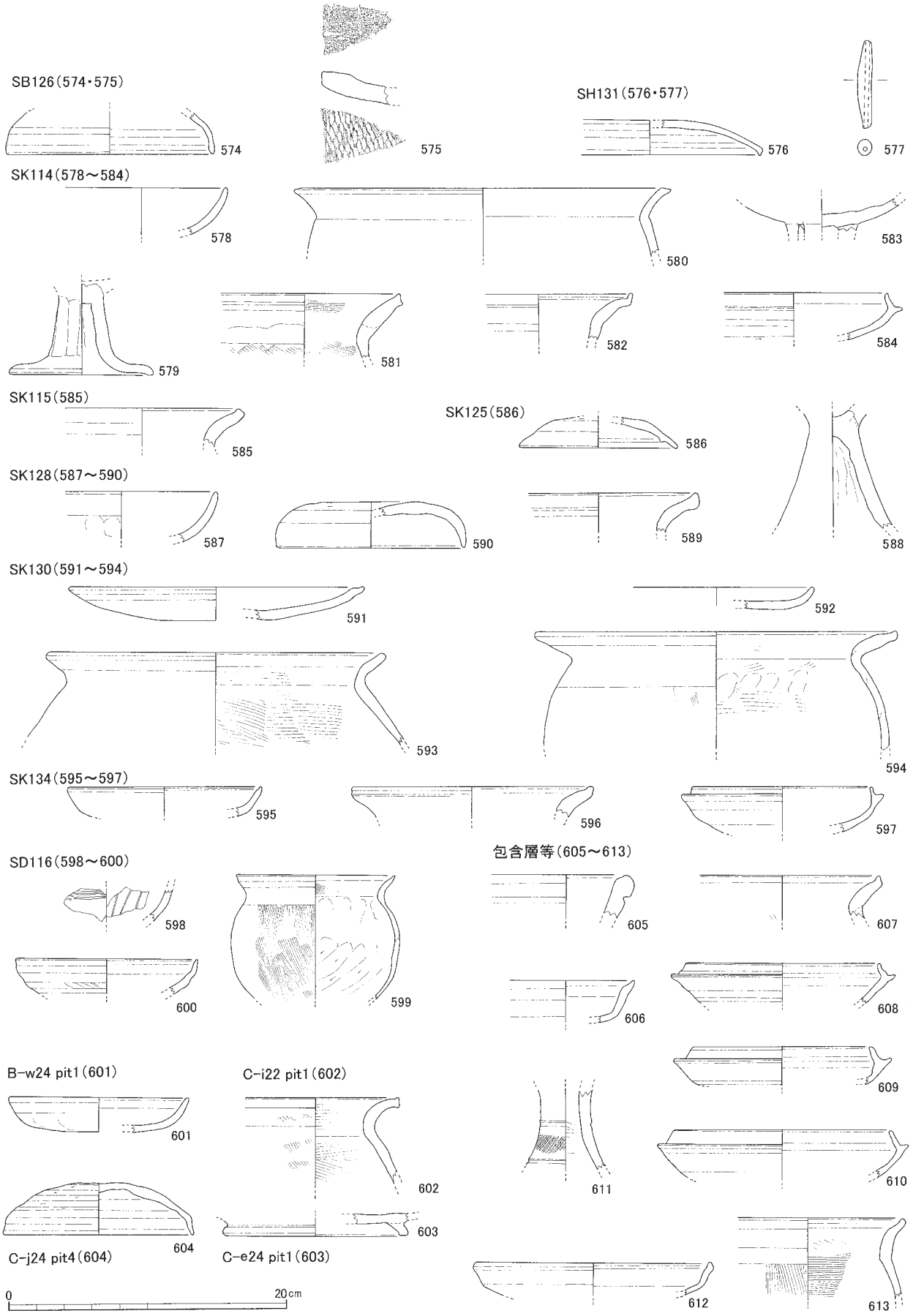
ＳＫ134出土遺物（第93図595～597）

土師器（595・596） 595は皿の口縁部小片である。596は甕口縁部片である。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（597） 杯Ｈの口縁部小片である。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

ＳＤ116出土遺物（第93図598～600）

土師器（598・599） 598は杯の一部分である。内面には放射状暗文がみられる。内外面には赤色顔料が



第93図　ＳＢ126，ＳＨ131，ＳＫ114・115・125・128・130・134，ＳＤ116，ピット，包含層等出土遺物実測図(1:4)

塗布されている。599は甕である。小形のもので丸底になる。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

須恵器（600） 杯口縁部小片である。これらは、概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

B-w24pit 1出土遺物（第93図601）

土師器（601） 杯Ｇである。奈良時代前半のものであろう。

C-i22pit 1出土遺物（第93図602）

土師器（602） 甕口縁部片である。大形のものか。奈良時代前半に属するものであろう。

C-e24pit 1出土遺物（第93図603）

土師器（603） 杯Ｂの高台部分である。奈良時代前半に属するものであろう。

C-j24pit 4出土遺物（第93図604）

須恵器（604） 杯Ｈ蓋である。概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものと考えられる。

C-j24pit 1出土遺物

金属製品 鋏と思われる。

包含層等出土遺物（第93図605～613）

縄文土器（605） 深鉢口縁部小片である。縄文時代後期のものであろう。

土師器（606・607） 606は椀Ｃの口縁部小片である。奈良時代前半に属するものであろう。607は甕口縁部片である。奈良時代前半のものと考えられる。

須恵器（608～611） 608～610は杯Ｈの口縁部小片である。611は高杯である。これらは概ね都城編年飛鳥Ⅳ～Ⅴに比定できよう。飛鳥時代末のものか。

表土掘削時出土遺物（第93図612・613）

土師器（612・613） 612は皿であろうか。613は甕口縁部片である。小形で丸底になるものであろう。これらは、概ね奈良時代前半のものと考えられる。

（小濵　学）

註

（1）三重県埋蔵文化財センター『堀田　第６次調査』三重県埋蔵文化財調査報告261　2005

（2）伊藤裕偉氏のご教示による。

（3）以下の文献を参考にした。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊　1976

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊　1978

古代の土器研究会『古代の土器１　都城の土器集成』1992

第７章　西野田遺跡における自然科学分析

第１節　西野田遺跡における樹種同定

①　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

②　試料

試料は、奈良時代の土師器焼成遺構（ＳＦ61）から出土した炭化材25点である。

③　方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

④　結果

第１表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マキ属　*Podocarpus*　マキ科　写真図版47　1・2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はゆるやかである。樹脂細胞が散在する。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個存在する。樹脂細胞が散在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で１～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80㎝である。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　写真図版47　3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２ｍに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schottky　ブナ科　写真図版48　4

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は単列のものと集合放射組織が存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　写真図版48　5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管

が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*

ブナ科　写真図版48　6

横断面：中型から大型の道管が１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

⑤　所見

樹種同定の結果、奈良時代の土師器焼成遺構（ＳＦ61）から出土した炭化材では、マキ属16点、クリ３点、コナラ属アカガシ亜属３点、ツブラジイ２点、コナラ属クヌギ節１点が同定された。このうち、全体の64％を占めるマキ属は、東海地方には比較的多く分布しており、暖地の山林内や暖傾斜の適潤な場所を好む。温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布し、温暖な気候下の常緑針葉樹である。クリとコナラ属クヌギ節は、温帯に広く分布する落葉広葉樹で、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイは、温帯下部の

No.	取上番号	形状	結果（学名／和名）	
1	w１	板材（板目材）芯なし	*Podocarpus*	マキ属
2	w２	板目材　芯なし	*Podocarpus*	マキ属
3	w３	丸太材　芯なし	*Podocarpus*	マキ属
4	w５	板目材　芯なし	*Podocarpus*	マキ属
5	w７	板目材　芯なし	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
6	w８	半裁材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
7	w10	四分割材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
8	w11	八分割材　芯あり	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
9	w12	芯なし	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
10	w13-1	半裁材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
11	w13-2	丸太材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
12	w14	丸太材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
13	w15	半裁材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
14	w16	板目材　芯なし	*Podocarpus*	マキ属
15	w18	板材（柾目材）芯なし	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
16	w19	半裁材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
17	w20	半裁材　芯なし	*Podocarpus*	マキ属
18	w21	四分割材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
19	w22	四分割材　芯あり	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
20	w23	四分割材　芯あり	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
21	w24	板目材　芯なし	*Podocarpus*	マキ属
22	w25	丸太材　芯あり	*Podocarpus*	マキ属
23	炭サンプル６	板目材　芯なし	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
24	炭サンプル７	板目材　芯なし	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
24	炭サンプル７	板目材　芯なし	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節

第１表　西野田遺跡における樹種同定結果

暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素であり、アラカシやスダジイは二次林要素でもある。マキ属は樹脂を多く含み、クリ、ツブラジイ、コナラ属クヌギ節、コナラ属アカガシ亜属の広葉樹は、蒔炭などの燃料として古来より多用されている。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

（株式会社 古環境研究所）

第２節　西野田遺跡における植物珪酸体分析

①　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山　2000）。

②　試料

分析試料は、奈良時代の土師器焼成遺構（ＳＦ61）、飛鳥時代～奈良時代の竪穴住居（ＳＨ48）、奈良時代の土坑（ＳＫ45）から採取された計８点である。試料の詳細を分析結果図に示す。

③　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原　1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

④　分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第２表および第94図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、Ｂタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

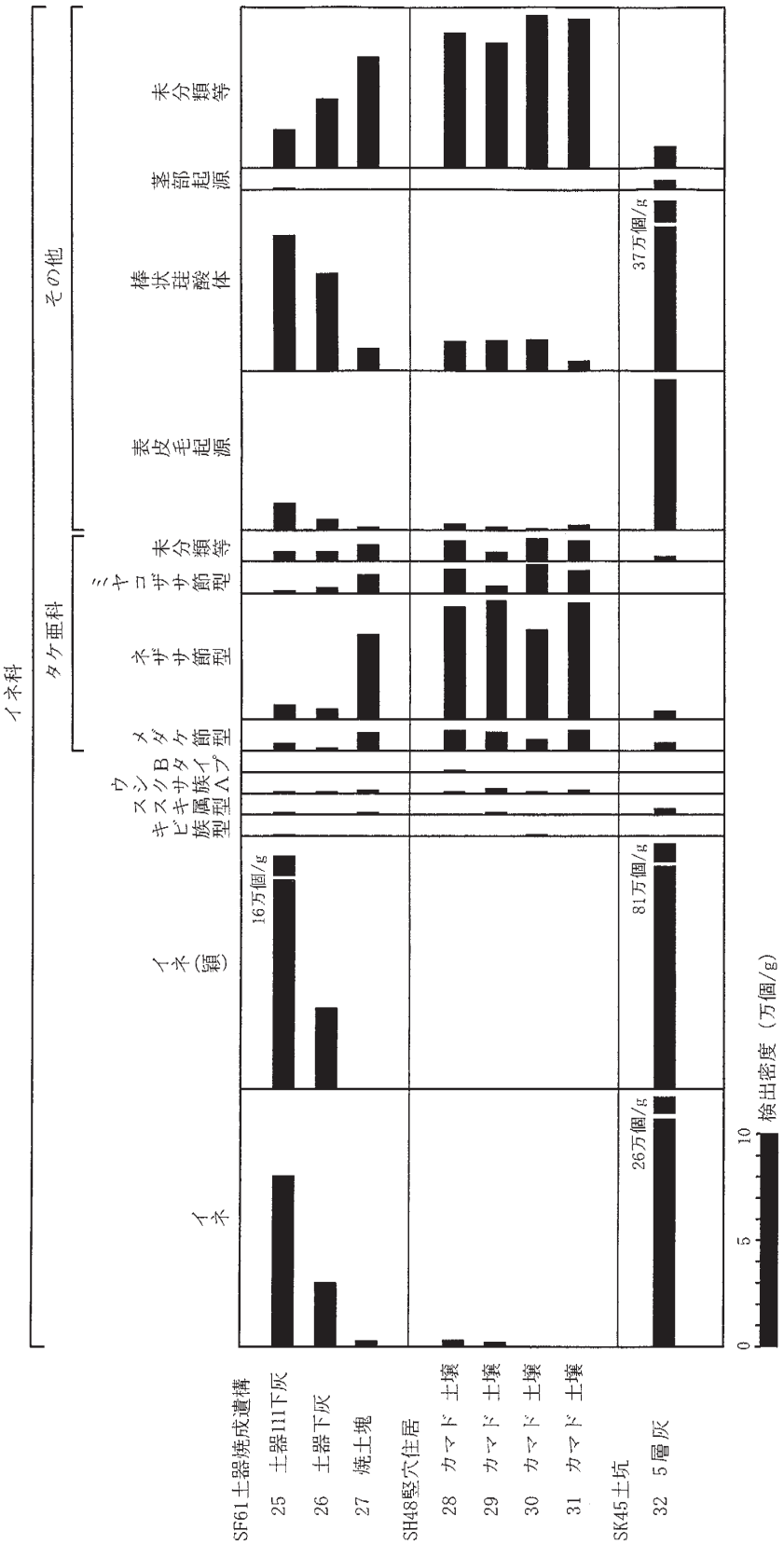
⑤　考察

（１）飛鳥～奈良時代の土師器焼成遺構（ＳＦ61）

１）灰試料

土器111下から採取された灰試料（№25）では、イネ（葉部の機動細胞由来）が80,300個/g、イネの籾殻（穎の表皮細胞由来）が159,200個/g、籾殻の芒などに由来するとみられる棒状珪酸体が63,300個/gと極めて高い密度で検出された。その他の分類群では、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。以上の結果から、同試料はイネの葉（稲藁）および籾殻に由来すると考えられる。

遺構中央付近出土土器下から採取された灰試料（№26）でも、灰試料（№25）と同様の分類群が検出された。イネ（葉部の機動細胞由来）は30,500個/g、イネの籾殻（穎の表皮細胞由来）は38,300個/gと高い密度である。したがって、同試料についてもイネの葉（稲藁）および籾殻に由来すると考えられる。



第94図　西野田遺跡における植物珪酸体分析結果

樹種同定（第1節）によると、同遺構ではマキ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイ、コナラ属クヌギ節の炭化材が確認されている。このうち、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）とツブラジイ（シイ類）の葉部には明瞭な植物珪酸体が形成されるが、今回の分析ではこれらに由来する植物珪酸体は検出されなかった。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬　1986）。

2）焼土塊

焼土塊（No.27）では、ネザサ節型が41,200個/gと高い密度で検出され、イネ（葉部の機動細胞由来）、ススキ属型、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども少量検出された。イネの密度は2,700個/gと比較的低

第2表　西野田遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	SF61土器焼成遺構			SH48竪穴住居				SK45土坑
			25	26	27	28	29	30	31	32
イネ科	Gramineae (Grasses)									
イネ	*Oryza sativa*		803	305	27	29	21			2636
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	*Oryza sativa* (husk Phytolith)		1592	383						8145
キビ族型	Paniceae type		7					7		
ススキ属型	*Miscanthus* type		7		7		7			20
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		7	7	14	7	21	7	15	
Bタイプ	B type					7				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)									
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		36	14	89	101	92	56	102	39
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		71	50	412	543	595	435	563	39
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		14	28	89	116	35	140	110	
未分類等	Others		43	43	75	94	42	105	95	20
その他のイネ科	Others									
表皮毛起源	Husk hair origin		128	50	14	29	14	7	22	708
棒状珪酸体	Rod-shaped		633	454	103	137	142	147	44	3699
茎部起源	Stem origin		7							39
未分類等	Others		178	319	515	630	581	709	694	98
植物珪酸体総数	Total		3526	1653	1345	1693	1551	1614	1644	15443

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	23.61	8.97	0.81	0.85	0.62			77.50
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.09		0.09		0.09			0.24
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.41	0.16	1.03	1.18	1.07	0.65	1.19	0.46
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.34	0.24	1.98	2.61	2.86	2.09	2.70	0.19
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.04	0.09	0.27	0.35	0.11	0.42	0.33	

い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。なお、樹木葉に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

以上の結果から、ここではメダケ属（ネザサ節）やイネなどの葉が燃料などとして利用された可能性が考えられるが、遺構外の土壌などの比較試料の検討が行われていないことから確定的なことは言えない。

（２）飛鳥時代～奈良時代の竪穴住居（ＳＨ48）

カマド土壌（№28）では、ネザサ節型が54,300個/gと高い密度で検出され､イネ（葉部の機動細胞由来）､メダケ節型、ミヤコザサ節型なども少量検出された。イネの密度は2,900個/gと比較的低い値である。その他のカマド土壌（№29、№30、№31）でも、おおむね同様の結果であり、樹木葉に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

以上の結果から、ここではメダケ属（ネザサ節）やイネなどの葉が燃料などとして利用された可能性が考えられるが、遺構外の土壌などの比較試料の検討が行われていないことから確定的なことは言えない。

（３）飛鳥～奈良時代の土坑（ＳＫ45）

土坑下部の５層から採取された灰試料（№32）では、イネ（葉部の機動細胞由来）が263,600個/g、イネの籾殻（穎の表皮細胞由来）が814,500個/g、籾殻の芒などに由来するとみられる棒状珪酸体が369,900個/gと極めて高い密度で検出され、籾殻の剛毛などに由来するとみられる表皮毛起源も70,600個/gとかなり高い密度で検出された。その他の分類群では、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。なお、樹木葉に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

以上の結果から、同試料はイネの葉（稲藁）および籾殻に由来すると考えられる。同遺構におけるイネの葉（稲藁）の利用としては、俵、縄、ムシロなどが想定される。籾殻については、貯蔵されていた稲籾に由来する可能性も考えられるが、現時点では詳細は不明である。

（株式会社 古環境研究所）

第３節　三重県西野田遺跡出土の人骨

①　緒言

西野田遺跡は三重県松阪市嬉野下之庄町ほかに所在する。本遺跡は平成19年５月から同９月まで調査が行われ、飛鳥時代後半～奈良時代前半の遺構と、近世墓が確認できた。近世墓は１基検出され、寛永通宝や鉄釉丸椀と一緒に１体分と推定できる人骨が出土した。墓は長方形の掘方で、人骨は顎を引いた状態の屈葬と推定できる姿勢である。また、頭位は南西を向いているが、顎を引いた状態であるために、顔はほぼ東を向いている。

人骨の保存状態は悪い。骨はもろく、触ると崩れてしまうため、同定は非常に困難であった。保存されている頭蓋骨はそれぞれが細かく割れており、頭蓋冠の復元は困難だったため、部位ごとに鑑定を行った。人骨名については和名を用いた。出土人骨のうち、歯の保存状態については歯式を用いた。○印は歯槽開放、アンダーラインのあるものは遊離歯、記載の無いものは歯槽部及び歯のどちらも保存されていない状態をそれぞれ表す。

骨と歯の接合・補強・保存処理はすべてビニール製合成樹脂のビュットバル（BUTVAL）をアセトンで溶かして使用した。特に発掘作業中から長期にわたり露出していた骨の一部については、破損部分から壊れ始めていたために、60％のBUTVALで接合の後、10％のBUTVALで骨の表面を湿布し、補強並びに保存処理を施した。また、骨の一部と歯についてはDNA、安定同位体、年代測定など今後予定されている分析を考慮してBUTVALの湿布による補強と保存処理を行わなかった。

②　人骨所見

頭蓋骨　前頭骨、頭頂骨、後頭骨、側頭骨のそれぞれ一部が確認できる。同定できた頭蓋骨の一部は接合部が少なく、頭蓋冠を復元することはできなかった。右側の側頭骨は比較的よく保存されている。外

耳孔は楕円形で大きい。乳様突起や乳突上稜は保存されていない。内面の鼓室部はがっちりと大きく、男性の印象を与える。縫合の癒合状態は内板、外板とも解放の状態（ブロカの０）である。顔面部の骨は上顎骨の一部以外は保存されていない。

下顎骨　下顎骨は正中から右側第一大臼歯部まで保存されている。植立した状態の歯は犬歯１本のみであった。下顎体は高く、オトガイ結節が明瞭である。舌側の歯槽骨隆起は認められない。犬歯の歯槽部は深く犬歯の根尖は完全に完成されたと判断してよい。下顎体の一部しか保存されていないが、がっちりとした印象である。

歯　下顎歯は右側の犬歯のみ出土した。犬歯の萌出は完全に終了し、根尖の閉鎖も終了している。上顎歯は、破損している上顎骨に植立した状態のものと遊離歯が出土した。保存されている上顎歯はすべて右側である。歯根はもろくなっているが、歯冠部は比較的よく保存されている。ただし、エナメル質が殆ど剥がれ落ちており、復元は困難を極めた。上顎歯の咬耗の程度はブロカの０～１である。上顎の第三大臼歯が歯根の形成をほとんど終えているので、少なくとも18歳以上であることは疑いようがない。また歯の咬耗がほとんど進んでいないことから35歳より年齢が高いとは判断できない。そこで、歯の鑑定結果から、本人骨の年齢は18歳以上35歳であると判断した。

上顎右側側切歯はシャベル型で、窪みは非常に深い。また、第一小臼歯に介在結節が認められる。また、犬歯と第一小臼歯の歯間にのみ歯石が付着している。

保存されている歯については歯式で示した。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2		
		○	○	○	C	○	○	

体幹骨　肋骨片が数点と椎骨片が１点確認できるのみであった。

上肢骨　鎖骨は左側の遠位部４cmほどが保存されている。特筆すべきことはない。

肩甲骨は右側の関節窩の周辺が５cm程度保存されている。関節面は破損しているが大きくはない。

上腕骨は右側の遠位１／２程度が保存されている。遠位端の外側上顆は破損している。骨質は厚くないが、華奢な印象はない。保存されている上肢骨から上腕部の筋力はあまり強くない印象がある。

橈骨は右側近位部の一部と骨体の一部が３cmほど保存されている。保存状態は非常に悪く、触ると壊れてしまう状態である。

尺骨は右側近位の関節面の一部が保存されている。鈎状突起と橈骨切痕の一部が確認できる。橈骨切痕は滑らかで、辺縁部の肥厚も認められないことから、上腕部と同様にひじ関節の筋力も強い印象を与えない。

下肢骨　大腿骨は両側とも一部が保存されている。左側は遠位部の内側のみ保存されている。右側は骨体のみが保存されている。後面のピラスタル形成はほとんど認められず、粗造もなめらかで、下肢の筋付着量は少ない印象がある。

脛骨は左側遠位部の内側のみが保存されている。骨質は厚くはないが、華奢な印象はない。近位の上関節面は一部が保存されており、大腿骨の遠位関節面と連結する。

③　結語

西野田遺跡出土人骨は保存状態が悪く、同定は非常に困難であったが、発掘調査時の出土状況から個体数は１個体であるということが確認できている。また、ほかの出土遺物から江戸時代の人骨と判断されている。本人骨は、四肢骨全体が頑丈ではないものの、下顎骨には頑丈な点も認められ、基本的に華奢という印象はない。頭蓋骨の縫合は内板、外板とも解放の状態である。また、四肢骨の中でも骨端部の癒合が遅い上腕骨の遠位端は、完全に癒合が終了している。歯は上顎第三大臼歯の放出が終了し根尖の閉鎖もほとんど終了している。以上から、本人骨の年齢は25歳以上35歳未満と推定した。また、性別は側頭骨内部にある鼓室骨部分が大きいこと、下顎骨のオトガイ結節が明瞭で頑丈であることから、男性である可能性が非常に高い。大腿骨など長い骨の保存状態が悪いために身長を推定することはできないが、ごく平均的な江戸時代人骨であると推定して

よいであろう。

本人骨が江戸時代のどの時期に相当するのか不明であるが、中期から後期と推定されるならば、いわゆる貴族形質に当てはまるような点は認められない。どちらか判断をするならば、庶民形質の示す特徴をもっているといえよう。ただし、江戸初期の資料であったならばその限りではない。詳しい年代測定の報告を待ち考察を行いたい。

（橋本裕子・奈良文化財研究所環境考古学研究室、株式会社古環境研究所）

第４節　西野田遺跡（第３次）出土鉄滓

平成19年度畜産研究所施設整備事業に伴い出土した鉄滓の分析を行ったので報告する。

①　分析対象

西野田遺跡（第３次）出土鉄滓（預2008-0110 No．２）

②　分析内容

ダイヤモンド替刃を備えたバンドソーにて鉄滓の切断を行った。切断面を蛍光Ｘ線分析装置により定性分析し鉄分の存在を確認後、株式会社九州テクノリサーチによる詳細な分析が行われた。

③　使用機器及び原理

・エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（XRF）（SIIナノテクノロジー社製SEA5230）

試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

金属の同定で使用される励起電圧45kV、コリメータ径φ1.8㎜、大気圧下にて測定した。なお、Ｘ線管球はモリブデン（Mo）である。（詳細な測定条件は、第３表参照）

④　結果

鉄滓No．２のXRF分析チャートを第95図に示し、第４表にその結果を掲げる。XRF分析の結果から、鉄（Fe）が強く検出されたため、これらを鉄分析試料とした。

鉄分析の結果から、鉄滓No．２について次のようなことがわかった。

⑤　考察

鉄滓No．２は、酸化鉄（FeO）主体で造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）を約12％を含む鍛錬鍛冶滓（高温沸し鍛接）であることが分かった。砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、Ｖ、MnO）及び塩基性成分（CaO+MgO）が低値であり、鍛造剥片の付着が確認されたことから、純度の高い（製錬～精錬鍛冶滓を含まない）鉄素材を熱間で鍛打加工した時、鉄素材の酸化に伴う吹き減りで生じた鍛錬鍛冶滓と考えられる。

⑥　分析データ

第95図、第３・４表を参照のこと。

⑦　鉄分析

詳細は、以下の分析調査を参照のこと

西野田遺跡出土鉄滓の金属学的調査

１　いきさつ

西野田遺跡は三重県松阪市に所在する。遺跡内の近世墓（SX136）から、鍛冶滓が１点出土している。鍛冶滓は近世墓に副葬されたものではなく、混入品の可能性が高いと考えられている。この鍛冶滓の性状を詳しく検討するため、金属学的調査を行う運びとなった。

２　調査方法

２－１　供試材

鍛冶滓１点の調査を行った（第５表参照）。

２－２　調査項目

（１）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。この結果をもとに、分析試料の採取位置を決定している。

（２）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で

撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（３）顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μと1μで鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では３％ナイタル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

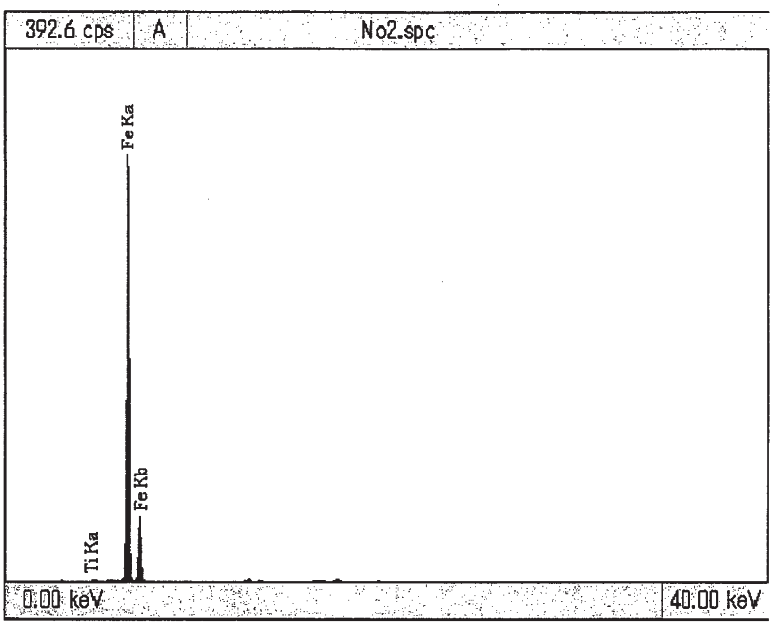
（４）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の晶出物の判定を行った。また金属組織（合金相）の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は100gfで測定した。

鉄滓	No. 2
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	218
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	16

第３表　鉄滓切断面XRF測定条件



第95図　鉄滓No．２切断面のXRF分析チャート

Z	元素	元素名	ライン	No. 2 (cps)	ＲＯＩ (keV)
22	Ti	チタン	Kα	9.197	4.35- 4.66
26	Fe	鉄	Kα	2551.109	6.23- 6.57

第４表　鉄滓切断面のXRF測定結果

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
No.2	西野田	SX136	鍛冶滓	近世以前？	36×30×24	20.53	なし	○	○	○		○	○			

第５表　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	* 二酸化珪素 (SiO_2)	* 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K_2O)	* 酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	Σ* 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
No.2	西野田	SX136	鍛冶滓	近世以前？	59.77	0.09	34.70	46.76	7.41	3.10	0.96	0.42	0.40	0.04	0.04	0.14	0.04	0.069	0.21	0.26	<0.01	0.01	<0.01	12.33	0.206	0.002	

第６表　供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成(%)								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
No.2	西野田遺跡	SX136	鉄滓	近世以前？	滓部：ウスタイト、鍛造剥片、錆化鉄(金属組織不明瞭)	59.77	46.76	1.38	0.14	<0.01	0.04	12.33	0.01	鍛錬鍛冶滓(高温沸し鍛接)

第７表　出土遺物の調査結果のまとめ

（５）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

（６）化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（Ｃ）、硫黄（Ｓ）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（Ｖ）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法 ：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３　調査結果

№2：鍛冶滓

（１）肉眼観察：ごく小型で不定形の鍛冶滓である。滓の地の色調は黒灰色で、表層には茶褐色の鉄銹化物が付着する。また表面の気孔は少なく、緻密な滓である。

（２）マクロ組織：写真図版51①に示す。断面観察位置では、滓中にまとまった金属鉄部は確認されず、不定形の銹化鉄部が散在する。

（３）顕微鏡組織：写真図版51②～⑤に示す。②は側面端部で、③～⑤はその拡大である。③は滓部で、白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）が、素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。④中央は表層に付着する鍛造剥片[(1)]である。また⑤は銹化鉄部の拡大である。金属組織の痕跡は不明瞭で、炭素含有量等に関する情報は得られなかった。銹化鉄の占める面積は広い。

（４）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の調査を実施した。硬度値は448Hvであった。ウスタイトの文献硬度値450～500Hv[(2)]を僅かに下回るが、測定時の亀裂等による誤差の可能性が高い。

（５）EPMA調査：写真図版51⑥に滓部の反射電子像（COMP）を示す。１の白色粒状結晶の定量分析値は99.5％FeOであった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。また２の素地部分の定量分析値は37.0％SiO_2－10.7％Al_2O_3－7.4％CaO－3.1％K_2O－39.9％FeOであった。非晶質珪酸塩（ガラス質滓）である。また鉄分（FeO）を高い割合で含む。

（６）化学組成分析：第６表に示す。

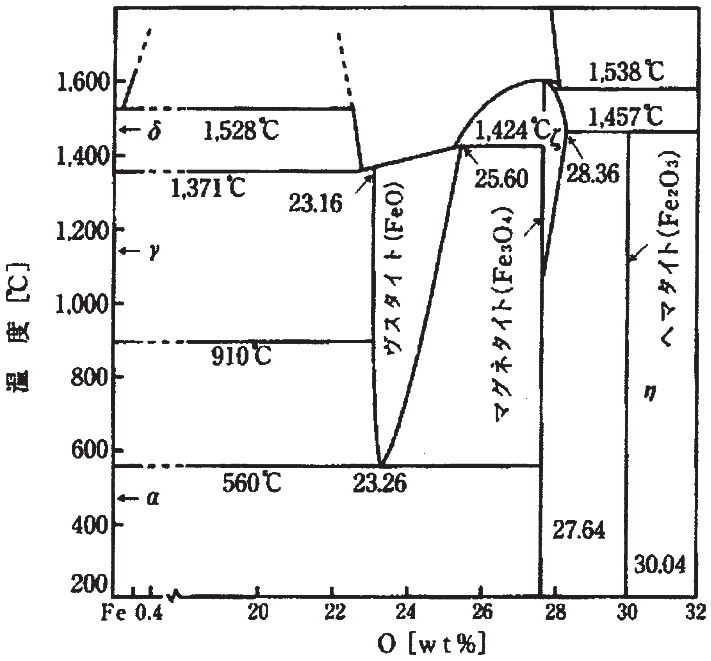
全鉄分（Total Fe）59.77％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.09％、酸化第１鉄（FeO）34.70％、マクロ・ミクロ組織で観察された銹化鉄は多く、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は46.76％と高い割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）12.33％で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は1.38％と低値であった。砂鉄起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.14％、バナジウム（Ｖ）＜0.01％であった。さらに酸化マンガン（MnO）も0.04％、銅（Cu）0.01％と低値である。

４　まとめ

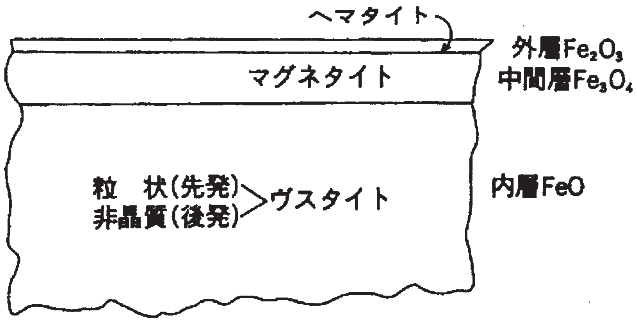
西野田遺跡出土鍛冶滓を分析調査した結果、酸化鉄（Wustite：FeO）主体の鍛錬鍛冶滓（高温沸し鍛接）であることが明らかになった。純度の高い（製錬～精錬鍛冶滓を含まない）鉄素材を熱間で鍛打加工した時、鉄素材の酸化に伴う吹き減りで生じたものと判断される。

また、表面には鍛造剥片の付着が確認された。これも熱間での鍛打加工が行われたことを示す微細遺物である。

（山田卓司（財）元興寺文化財研究所、大澤正己・鈴木瑞穂 九州テクノリサーチ・TACセンター）



第96図　Fe−O系平衡状態図



第97図　鍛造剥片３層分離型模式図

Element	1	2
K_2O	−	3.125
Na_2O	0.062	0.295
CuO	0.121	−
MgO	0.261	0.507
CaO	−	7.352
Al_2O_3	0.751	10.663
FeO	99.511	39.868
SiO_2	0.132	36.987
TiO_2	0.195	0.090
S	0.011	0.017
MnO	0.045	0.117
P_2O_5	−	0.016
ZrO_2	−	0.145
Cr_2O_3	0.039	0.016
V_2O_3	0.018	0.036
Total	101.143	99.036

Element	16
O	0.114
Ti	0.015
Fe	102.727
V	0.009
Total	102.865

第８表　定量分析値

註

（1）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる（註３）。

この鍛造剥片や粒状滓は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶趾の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当っては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である（註４）。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ウスタイト（Wustite：Fe0）の３層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ウスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe－0系平衡状態図から説明される（註５）。

鍛造剥片を王水（塩酸3：硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）は黄変する。内層のウスタイト（Wustite：Fe0）は黒変する。

鍛打作業前半段階ではウスタイト（Wustite：Fe0）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

（2）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968 ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

（3）大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘　年報15』 平成3年度　千葉県房総風土記の丘　1992

（4）大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』 今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書　第13集　福岡県教育委員会　1991

（5）森岡進ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11　朝倉書店　1975

参考文献

第１節

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司『木材の構造』文永堂出版　290p　1985

島地 謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣　296p　1988

山田昌久『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 植生史研究特別１号』植生史研究会　242p　1993

第２節

近藤錬三・佐瀬隆「植物珪酸体，その特性と応用」『第四紀研究　25』 p.31-63　1986

杉山真二「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究　38（2）』p.109-123　1999

杉山真二「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社　p.189-213　2000

藤原宏志「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学　9』p.15-29　1976

藤原宏志・杉山真二「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学　17』 p.73-85　1984

第３節

Brothwell D. R. 1981. *Digging up Bones*. Cornell University press.

橋本裕子「平戸台２号墳出土人骨」『千葉県八千代市平戸台２号墳発掘調査報告書』八千代市教育委員会　2001

橋本裕子「白土城跡出土人骨」『白土城跡－白土城跡北西域の調査－』（財）いわき市教育文化事業団　2007

橋本裕子・馬場悠男「人骨の分析」『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書』八千代市教育委員会　2002

橋本裕子・松井章「笹山遺跡出土人骨」『稲荷岡遺跡（２次）・笹山遺跡（１次）』埼玉県比企郡小川町教育委員会 2006

松村博文・橋本裕子「多摩ニュータウンNo．113遺跡出土人骨」『東京都埋蔵文化財センター調査報告書第71集　多摩ニュータウン遺跡－No.113・No.115遺跡－』東京都埋蔵文化財センター　1999

White, T. D. 1991 *Human Osteology*. Academic Press, Inc.

第８章　結　語

第１節　集落の時期と変遷

３次にわたる西野田遺跡の調査では、多くの遺構・遺物が検出された。西野田遺跡が位置する中村川流域には、飛鳥時代から奈良時代にかけて造営されたとみられる寺院が複数集中しており、また、暗文を施すいわゆる畿内系土師器が多く出土することでも知られる。こうした点などから当該地域に一志郡衙の存在も推定されており[(1)]、伊勢地域でも重要な地域の一つであるといえよう。しかしながら、当該地域ではこれまでに堀田遺跡[(2)]・片野遺跡[(3)]・平生遺跡[(4)]などの古代の遺跡が調査されているものの、集落域を広範に調査した例はなく、西野田遺跡の調査によって初めて具体的な集落のあり方が明らかになったといえる。

西野田遺跡でも集落全体を調査できたわけではないが、調査によって得られた情報を中心に、西野田遺跡の集落について整理を行っていきたい。

①集落の時期

形成時期　西野田遺跡から出土した遺物は、ほぼ古代のものに限られる。ごく少量の縄文時代・鎌倉時代・江戸時代などの遺物・遺構が検出されているが、基本的に人間が居住していたのは古代のごく限られた期間であると思われる。

出土遺物からみると、杯Ｈが一定量出土していることに注意が必要である。尾張地域における須恵器編年では、杯ＨはＩ17号窯式期をもってほぼ消滅するようである[(5)]。また、杯Ａ蓋の出土点数も多い。このかえりの付く杯Ａ蓋もＩ17号窯式期に続くＩ41号窯式期をもって消滅するとされており、Ｉ41号窯式期には、すでに量的にかなり減少傾向にあるようである。

以上の点からみれば、西野田遺跡の集落形成はＩ17号窯式期の７世紀後半頃に始まっている可能性が高いと見られ、遅くとも７世紀末までには集落として成立しているものと考えられる。

廃絶時期　西野田遺跡では平安時代の遺物は全く出土しておらず、この頃には集落が廃絶していたことは確実である。方法論的に集落の廃絶の時期を把握することは難しいが、出土遺物の様相からある程度の推定が可能である。

まず須恵器から見ると、杯Ｂ蓋の口径が大きいものがかなり少ないことが注意される。また、杯Ｂ蓋の口縁部はほぼ直線的に開くもので占められている。器高もやや高いものが多い。杯Ｂ蓋の変遷観から見れば、西野田遺跡出土の杯Ｂ蓋のほとんどは尾張地域の須恵器編年ではＮＮ32号窯式期までに収まる可能性が高く、都城で出土する須恵器からみても平城宮Ⅲ期までに収まる可能性が高い。

同じく須恵器の壺類には、肩部が明瞭に屈曲する長頸壺は複数個体の存在が確認できる一方で、いわゆる三段構成の肩部が丸くなる長頸壺・細頸壺の出土は明確には確認できない。尾張地域の須恵器編年では三段構成の壺類の出現はＩ25号窯式期とされる。したがって、西野田遺跡においてはＩ25号窯式期以降の壺類の存在が希薄であると考えられる。

三段構成の壺類以外にも、Ｉ25号窯式期には口縁部で明瞭に屈曲する盤や、椀などの器種も出現しているが、そのいずれも西野田遺跡では出土が明確に確認できない。

以上のような点から考えれば、西野田遺跡の集落はＩ25号窯式期、都城編年の平城宮Ⅲ期までには廃絶を迎えていたものと考えられる。Ｃ２号窯式期には集落の解体は始まっていたものと思われる。暦年代では、およそ８世紀前半頃と捉えられよう。

②集落の変遷

西野田遺跡の集落の存続時期は、最大限見積もって７世紀後半から８世紀前半のおよそ100年弱ほどであったと考えられた。検出された遺構には、重複や建て替えなども認められることから、集落存続期間中には集落内の建物配置や空間利用などに変化が生じた時期があったことが想定できよう。こうした

集落の時期的な変遷について、いくつかの手がかりをもとにみていきたい。

遺物からみた遺構の時期　西野田遺跡では台地上に立地することや、耕作や撹乱による削平が激しいことなどもあり、竪穴住居や掘立柱建物については良好な状況で出土した遺物が少なく、時期が不明なものが多い。遺物が比較的良好な状況で出土した遺構は、大型の土坑などに限られる。それらのうち、時期が比較的明確に比定できるものでは、ＳＫ165のようにＩ17号窯式期と思われる一群と、ＳＤ66やＳＫ142などのようにＩ41号窯式期と思われる一群が存在している。

建物主軸方位　掘立柱建物は全体が窺えるものが15棟ほどあるが、その主軸方位については大きく見て３群程度のまとまりを抽出することができそうである。庇付の掘立柱建物ＳＢ127などの東西主軸から北へ30～40°程度主軸を振る群（ａ群）、ＳＢ126・179などのほぼ東西主軸をとる群（ｂ群）、ＳＢ119などの東西主軸から南へやや主軸を振る群（ｃ群）の３群である。このうち、後の二者についてはその主軸のずれは小さく、同一の群として把握できる可能性もある。

掘立柱建物の主軸方位のまとまりは、おおよそ時期的なまとまりを示していると考えられることが多いが、こうした見解に従えば、西野田遺跡の掘立柱建物群についても２～３時期程度の変遷があることが想定される。

遺構の重複関係・建て替え痕跡　竪穴住居と掘立柱建物に限れば、遺構同士の重複は意外に少ない。重複が確認できるのは、Ｃ区のＳＢ64・ＳＨ48と、Ｋ区のＳＢ185・ＳＨ175～177に限られる。

掘立柱建物には建て替え痕跡が認められるものがいくつか存在しているが（ＳＢ40・63・69など）、柱穴が小さな小型の掘立柱建物が多い。いずれも、確認できる範囲では建て替えは１回限りで、２回以上に及ぶ建て替えは行われていない。

また、掘立柱建物には柱の抜き取り痕が確認できるものもある。ＳＢ65は倉庫と考えられるような正方形指向の平面プランを持つ掘立柱建物であるが、土層断面からは柱の抜き取りがあったことが明確に分かる。したがって、この建物の廃絶にあたっては放置されて腐朽したのではなく、人為的な取り壊しが行われていると考えられる。ＳＢ64も倉庫と考えられる総柱式の掘立柱建物であるが、第５章で述べたようにこの建物を取り壊してＳＨ48が作られていることは明らかである。

こうした掘立柱建物の取り壊しといった行為も、集落の変化の節目にあたって行われていた可能性があろう。

集落の変遷と時期　以上のことから、西野田遺跡の集落は大きく２時期に分けて考えることができよう。前半にあたる時期を前半期、後半にあたる時期を後半期と呼ぶこととする。

前半期は尾張地域の須恵器編年でＩ17号窯式期・Ｉ41号窯式期、都城編年で飛鳥Ⅲ～Ⅴ期にあたる時期が想定される。およそ、７世紀後半～末にあたる時期であろう。

後半期は尾張地域の須恵器編年でＩ41号窯式期・Ｃ２号窯式期、都城編年で飛鳥Ⅴ～平城宮Ⅱ期にあたる時期が想定される。およそ、７世紀末～８世紀前葉にあたる時期であろう。

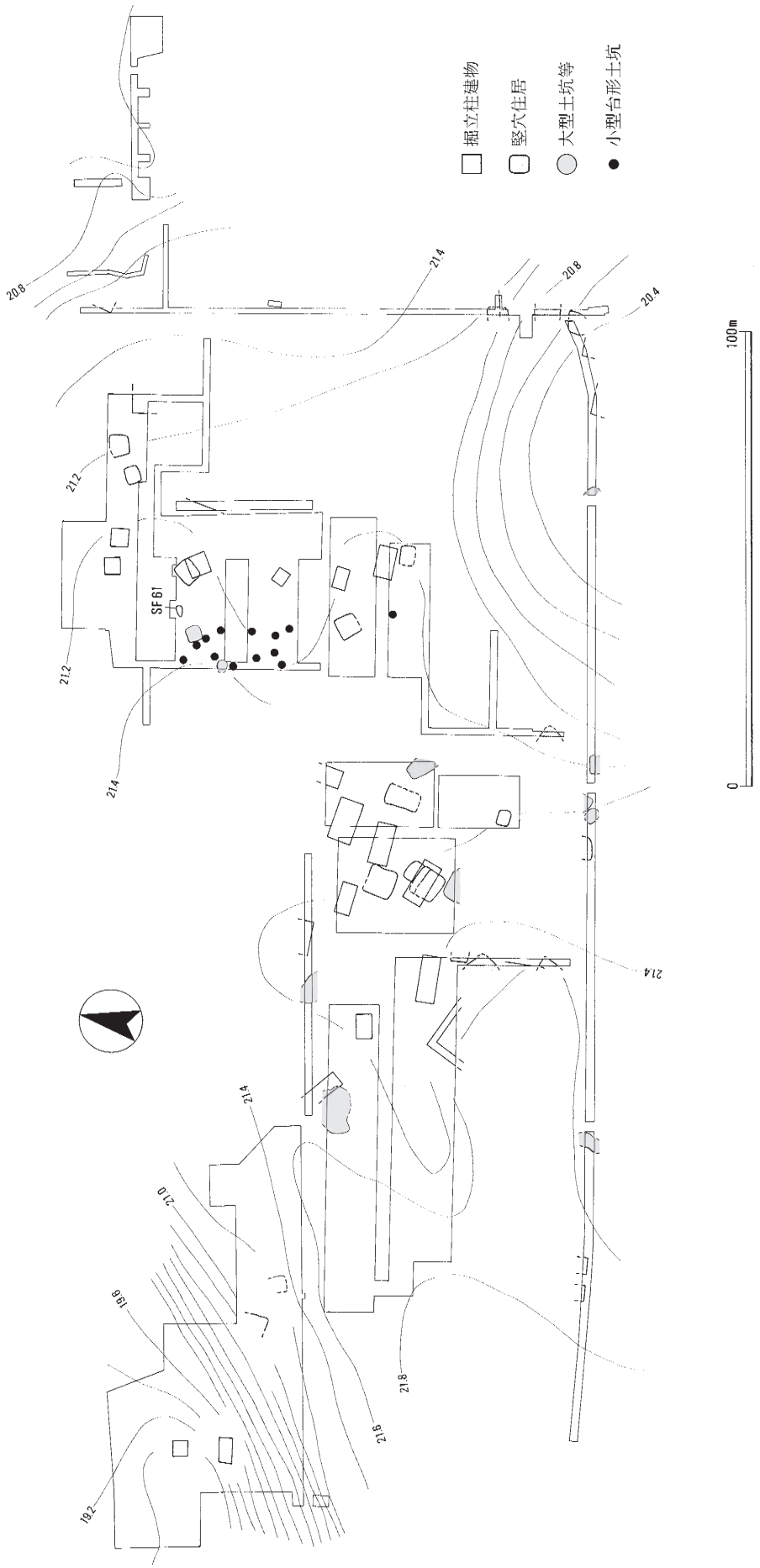
前半期・後半期で集落の様相も変化しているものと考えられるが、遺物や遺構の重複関係などからみて、両期の間には大きな間断はない。こうしたこともあって、検出された遺構には両期にまたがる時期幅の遺物が出土し、どちらの時期に帰属するのかが不明であるものが多い。

掘立柱建物も帰属時期が確定できないものが大半であるが、ａ群に属するＫ区のＳＢ185がＳＨ175～177より後出することから、ａ群の掘立柱建物は後半期に属するものと推定しておきたい。

第２節　集落の構造と性格

①集落の構造

建物の構成　西野田遺跡では、竪穴住居と掘立柱建物が混在している。後に述べるように、時期によって両者の比率に違いがある可能性はあるものの、全時期を通じて掘立柱建物と竪穴住居とが共存してい



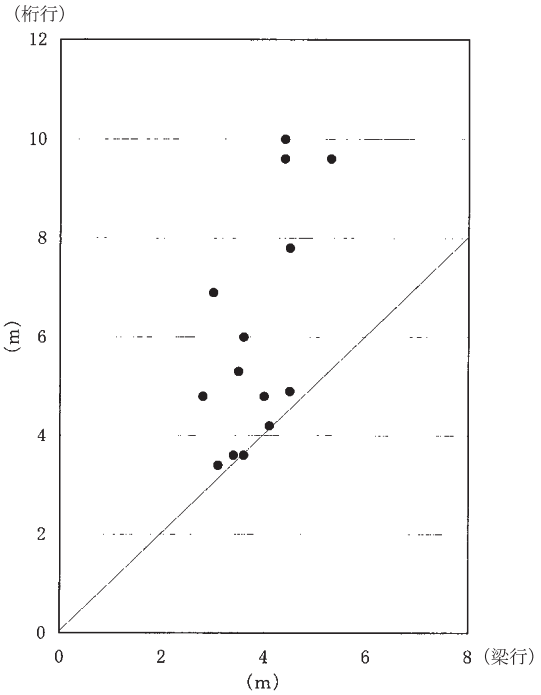
第98図　主要遺構配置図(1:1,400)

たと思われる。

掘立柱建物には群を抜いて大型のものは認められない。ただし、掘立柱建物のうち全体を検出し得たものについて規模をみてみると（第99図）、まず、多くの建物は平面の面積が30㎡以下であることが窺われる。この30㎡以下の群には、平面形が正方形を呈する倉と思われるものが含まれる。

そして、平面の面積が40～50㎡あり、30㎡以下の群とは規模的に明らかに区別できるものが存在している。これらの大型の建物が恒常的な居住施設となっていたかどうかは不明であるが、ＳＢ127のように庇が付くものもあり、こうした掘立柱建物は倉ではなく、居住施設などとして使用されていた可能性が高いであろう。竪穴住居もしくは小型の掘立柱建物に居住する人々が存在する一方で、こうした大型掘立柱建物を利用する人々もいたと考えられることからは、集落内において階層差が存在していた可能性も指摘できる。

また、掘立柱建物には、一定の法則に従って配置されているような様相は見いだしがたい。検出された掘立柱建物の多くは、主軸方向をほぼ東西におくことを基本としており、これらに直交する形で配置されている掘立柱建物は明確には認められない。ＳＢ157やＳＢ135などはａ群ないしｂ群の掘立柱建物群と直交する方向に主軸をとる建物である可能性があるが、調査区内では建物のごく一部しか確認できておらず、不確実である。



第99図　掘立柱建物規模

空間利用　まず注目されるのは、庇付の掘立柱建物ＳＢ127が存在するＬ区からＩ・Ｊ区にかけての地区である。掘立柱建物ではＳＢ127のほかにもやや大型の建物が存在している。また、竪穴住居にもＳＨ166のように大型のものや、やや特殊な性格を想定しうるＳＨ139などが存在している。出土遺物からみても、赤色顔料で塗彩された高杯などが目立つ。こうしたことから、Ｌ区東部からＩ・Ｊ区にかけての地区が今回調査を行った範囲の中で中心的な位置にあったことが窺われる。

これに対して、Ｃ・Ｅ・Ｆ区にかけての地区には、Ｌ区東部からＩ・Ｊ区でみられるものよりも小規模な掘立柱建物が多く存在している。平面形が正方形に近いものが多く、中にはＳＢ65のように総柱建物の倉と推定されるものもある。また、この地区には土師器焼成坑のＳＦ61や植物灰貯蔵施設のＳＫ45など、生産活動に関わる施設の存在も顕著である。こうした点からみると、この地区は倉庫・工房地区といった機能をもっていた可能性が高い。小型台形土坑として報告した一群の土坑が、この倉庫・工房地区と中心地区との間の空間に集中して分布していることも注目される。この小型台形土坑の分布が、集落の中における空間区画の一端を示しているようにも思われる。

また、竪穴住居の分布を見ていくと、中心地区と倉庫・工房地区にそれぞれまとまって分布するほか、Ｂ区の段丘崖付近とア区南部の２箇所にまとまりがみられる。ア区南部のまとまりは、中心地区とは南から入り込む谷地形によってやや分離されている観がある。調査が及んでいない部分も多く、不確実ではあるが、居住域もいくつかのまとまりに分かれていた可能性が高い。Ｂ区とア区南部の居住域については、いずれも地形的に一段低くなっている部分に掘立柱建物が存在しており、こうした周辺部に位置する居住域に共通点がみられることも注目されよう。

以上のように、今回の調査範囲の中で見た場合、西野田遺跡の集落は中心地区と倉庫・工房地区という機能分化した空間によって構成されており、さら

にこうした中核をなす空間の周辺に、竪穴住居と少数の掘立柱建物からなる居住域が複数設けられていたことが窺われる。そして、それらの総体として集落が構成されていたものと推定される。

②集落構造の時期的変化

各遺構の時期比定が明瞭に行えていないため、集落構造について時期を限らずにみてきたが、集落自体には前節で述べたように大きくみて２時期の変遷が考えられる。この変遷において、集落構造がどのように変化しているのかについて、可能な範囲で述べておきたい。

前半期の集落構造　竪穴住居については出土遺物から時期を比定することが難しいものが多いが、前半期にあたる時期の遺物の出土が目立つ。竪穴住居の多くは前半期に営まれていた可能性があろう。

掘立柱建物では、竪穴住居との重複関係からみると、ＳＢ64のように平面形や規模、構造などから倉庫と推定される建物[(6)]が前半期にも存在したことが推定される。ＳＢ64は総柱建物で、西野田遺跡の掘立柱建物のほとんどが側柱建物である中でやや特異な存在といえる。

倉庫・工房地区では、この時期の明確な生産活動の痕跡は不明であるが、先のＳＢ64がほぼ確実にこの時期に存在したとみられるほか、方形大型土坑のＳＫ46も出土遺物や他の遺構との重複関係からみてこの時期に属する可能性がある。前半期には、倉庫・工房地区はすでにその性格を明確にしつつあったことが窺われる。

ＳＦ61に一部を切られているＳＤ78も前半期に属する可能性があり、これに連続すると考えられるＳＤ47も前半期のものであろう。浅い溝であるが、位置関係からみてＳＢ64と関連する区画施設であった可能性もある。

後半期の集落構造　後半期に属すると考えられるものには、ａ群の掘立柱建物がある。中心的な位置をなすのはＳＢ127で、中心地区にこうしたやや大型の掘立柱建物が建てられていくのは後半期であると推測される。

ｂ群やｃ群の掘立柱建物群については時期を比定する根拠に乏しいが、ＳＢ126のように前半期に属する土坑に後出しているものもあり、ｂ群についても後半期に位置づけることが可能である。このようにみていくと、掘立柱建物自体が増加していくのが後半期であると思われる。

竪穴住居も存在していたと考えられ、ＳＢ64の後に作られているＳＨ48は後半期に属するものと推定される。ただし、出土遺物からみるとＳＨ48は前半期に位置づけられる可能性もあるなど、確実に後半期に属すると断定できる竪穴住居は認めがたい。後半期には、掘立柱建物の増加に対して竪穴住居は数を減じており、比率的には掘立柱建物の方がかなり高くなっていたものと考えられる。

また、ＳＦ61・ＳＫ45などのように、生産活動に関わると考えられる施設群の中には、出土遺物からみてこの時期に属する可能性が高いものが存在している。この生産活動関連施設群の付近に展開する小型台形土坑群については出土遺物が僅少であることから時期の特定が難しいが、遺構や土層の重複関係からみて、後半期に営まれた遺構群であると推定される。

前半期から後半期への集落構造の変化　こうした後半期の様相からみていくと、西野田遺跡の集落は集落形成時からほぼ同様の構造を維持していたとみられるものの、その特徴が明瞭化してくるのは後半期からであると考えられるのではなかろうか。

特に、後半期に中心地区の明確化と倉庫・工房地区における生産活動の活発化が起こった可能性がある点については、集落の変化を考える上で重要と思われる。

③西野田遺跡の集落の性格

嬉野廃寺との関係　西野田遺跡については、調査当初から南側に存在したとされる嬉野廃寺との関係性が重視されてきた。嬉野廃寺の実態はほぼ不明と言ってよい状況であるが、西野田遺跡の調査で少量ながらも瓦が出土したことは、近隣における瓦葺き建物の存在を傍証するものであろう。

西野田遺跡を特徴づける要素の一つとして、その限られた存続期間があげられるが、こうした限られた点からみれば、この集落は何らかの目的の下に設けられた集落である可能性が考えられる。その目的

は不明であるが、嬉野廃寺の実在を前提とするならば、寺の造営に関わる集落と見ることもできよう。

ただし、嬉野廃寺の造営時期が近隣の上野廃寺からの出土遺物との比較から平城宮Ⅱ期段階前後であるとの想定もあり[8]、西野田遺跡の集落の形成時期とは、ずれがある可能性がある。

また、集落の構造には前半期・後半期を通じて日常生活を営む以上の特殊性は認めがたく、嬉野廃寺の造営・運営のみを主とした集落であるとは考えにくい。土師器焼成坑は寺で使用する土師器を生産したものとも考えられるが、今回の調査状況からは土師器焼成坑がほかにも多数存在した様相は認めがたく、多量の土師器を継起的に供給していた様相は認めがたい。

このように、西野田遺跡の集落の形成ないしは前半期から後半期にかけての構造変化の契機が嬉野廃寺の造寺にあった可能性はあるが、集落の性格自体をそれに限定することは難しい。

一志郡衙との関係　嬉野廃寺の他に西野田遺跡の集落の形成と関わりを持つ可能性があるのは、一志郡衙である。西野田遺跡とは中村川を挟んで1.8～２㎞ほど北に位置する堀田遺跡や平生遺跡を中心とする地域には、７世紀後半頃に一志郡衙が存在した可能性が指摘されている[9]。

郡衙は政庁以外にも複数の関連施設を周囲に配することが各地の調査において想定されており、西野田遺跡近辺から堀田遺跡にかけて濃密に分布する古代の遺跡には、こうした性格を持つものも存在すると思われる。地名などから郡市の存在も指摘されており[10]、当該地域に存在している複数の寺院についても、一志郡衙と何らかの関係をもちながら造営されていった可能性があろう[11]。

ただし、西野田遺跡自体の集落構造には、官衙的要素は見いだしにくい。本節でも指摘したように、

次数	遺構番号	地区	時　期	主軸	主軸方向(N基準)	規模（間＋間）	規模（m＋m）	備　　考
1	ＳＢ３６	B		東西	Ｎ５～10°Ｗ	２＋４	3.6＋６	側柱
1	ＳＢ３７	B		南北	Ｎ５°Ｗ	２＋２	3.6+3.6	側柱、ｂ群
1	ＳＢ３０	ア			Ｎ６°Ｅ	（２）＋（１）		側柱？、ｂ群
2	ＳＢ６３	C		南北	N23°Ｅ	２＋２	3.4+3.1	側柱、ａ群
2	ＳＢ６４	C	飛鳥	東西	N34°Ｗ	３＋３	4.9+4.5	総柱、ａ群
2	ＳＢ６５	C		南北	Ｎ６°Ｗ	３＋	4.2+4.1	側柱、ｂ群
2	ＳＢ６９	コ					4.0＋（0.7）	建替え痕跡
2	ＳＢ７５	コ			Ｎ２°Ｗ？		(2.3)＋(1.5)	ｂ群？
2	ＳＢ７６	コ			Ｎ３°Ｅ		(5.0)＋(1.6)	ｂ群
2	ＳＢ４０	コ					3.9＋（0.8）	
2	ＳＡ３９	エ					(1.7)	
3	ＳＡ９０	シ	飛鳥後～奈良		N12°Ｅ	（３）	(4.3)	ｃ群
3	ＳＢ９１	F	飛鳥後～奈良		N12°Ｗ	（３）＋（２）	（４）＋(3.3)	側柱、ｃ群
3	ＳＢ９５	G		東西	Ｎ４°Ｅ	３＋２	4.8+2.8	側柱、ｂ群
3	ＳＢ９７	G・H		東西	Ｎ１°Ｗ	３＋２	4.8＋４	側柱、ｂ群
3	ＳＢ１１９	L	飛鳥後～奈良	東西	N15°Ｗ	３＋２	5.3+3.5	側柱、ｃ群
3	ＳＢ１２６	L	奈良	東西	Ｎ１°Ｗ	５＋２	10+4.4	側柱、ｂ群
3	ＳＢ１２７	L	奈良	東西	N23°Ｅ	（３）＋（４）	(4.5)＋(6.7)	布掘、庇付き、ｃ群
3	ＳＢ１３５	L	奈良		Ｎ０°	（２）	(4.6)	ｂ群
3	ＳＢ１５６	I・K		東西	Ｎ７～９°Ｅ	４＋３	9.6+5.3	側柱、ｃ群
3	ＳＢ１５７	I		南北	Ｎ７～９°Ｅ	（２）＋２	(3.5)＋４	側柱、ｃ群
3	ＳＢ１６９	セ		東西	Ｎ１°Ｗ	（５）＋（２）		側柱、ｂ群
3	ＳＢ１７３	セ		東西	N31～32°Ｅ	（４）＋２		側柱、ａ群
3	ＳＢ１７９	I・K	奈良	東西	Ｎ３°Ｅ	５＋２	9.6+4.4	側柱、ｂ群
3	ＳＢ１８５	K	奈良	東西	N18°Ｅ	５＋３	7.8+4.5	側柱、ｃ群
3	ＳＢ１８６	K	奈良	東西	Ｎ３°Ｅ	４＋２	6.9＋３	側柱、ｂ群
3	ＳＢ１８７	E・C			N11°Ｗ	２＋２	3.6+3.4	側柱、ｃ群

第９表　掘立柱建物一覧表

建物配置に寺院や郡衙などでみられるような柱筋を通すなどの計画性は認めがたい。こうした点は、西野田遺跡の建物群があまり公的性を帯びたものではないことを示すのではなかろうか。

遺跡群としての様相　こうしてみてくると、西野田遺跡の集落のあり方は、この地域に展開する飛鳥時代後期～奈良時代前期遺跡群の性格の一端を明瞭に示しているものと考えられる。

これまでにも注目されていたように、西野田遺跡を含む中村川下流域に展開する古代遺跡群の濃密さや、古代寺院の集中状況には目を引くものがある。それらは一志郡衙と関連してこの地域に集中した可能性は高いが[12]、西野田遺跡の調査成果からみると、そのすべてについて郡衙の関連施設として把握することは難しいのではなかろうか。

一志郡衙の存在が推定される中村川北岸とは川を隔てて存在する西野田遺跡とその周辺地域では、一志郡衙の関連施設として捉えられるような施設としては、下之庄東方遺跡で柱通りを揃えて建てられた掘立柱建物群が検出されているが、時期的には８世紀後半の平城宮Ⅳ期以降のものとされている[13]。西野田遺跡に集落が営まれ、また堀田遺跡ないしは平生遺跡付近に郡衙が存在したと推定される７世紀後半～８世紀前半頃には、中村川北岸地域での郡衙関連施設の存在を見いだすことは、今のところ困難なようである。

西野田遺跡付近における古代遺跡の様相を考える上で参考になるのは、平成19年度に松阪市教育委員会によって行われた、今回の調査区が位置する丘陵からは一段低くなっている地区での調査である。この調査でも、今回の調査とほぼ同時期の掘立柱建物や竪穴住居からなる集落が検出されている。この地区も西野田遺跡として周知される遺跡に含まれているが、丘陵の上と下とに近接して集落が展開していることとなり、その意味を考える必要があろう。

この松阪市教育委員会の調査では、非常に大きな柱穴を掘って建てられた大型の掘立柱建物が確認されていることから、立地の高低差を居住者の階層差と結びつけることは難しい。丘陵上の今回の調査地において、庇付の掘立柱建物等を擁する中心となる地区があり、その周囲に倉庫・工房や小単位の居住域などが展開するという、集落としてある程度まとまった様相を見せることからは、丘陵上と丘陵下とで、それぞれ別個に集落が形成されていたと考えた方がよいように思われる[14]。

少なくとも、７世紀後半～８世紀前半にかけての時期には、西野田遺跡や隣接する下之庄東方遺跡など、中村川南岸に広く展開している古代の集落は、こうしたいくつかの集落からなる集落群として捉えることができるのではなかろうか。　（石井智大）

第３節　土師器焼成坑について

①土師器焼成坑の構造と燃料

土師器焼成坑ＳＦ61は、重機による表土掘削時に遺構の壁面が赤変色し硬化している特徴が観察されたことから発見された。遺構を検出した当初には、調査区内に収まっていなかったために調査区を拡幅しており、その際には、従来知られていなかった構造物の有無を確認するために慎重に掘削した。その結果、奥壁から側壁にかけての一部で、壁面上部が壁面と同様に焼けている部分が確認された（巻頭写真図版２）。壁面から天井部にかけて室内のように閉塞して焼成する構造を想定していたが、壁面上部が壁面と同様に連続して焼けている点からは開放された形態であったと考えられ、削平されずに残存していたと判断できる。

現地調査時の所見については、第５章に詳細に記載しているように、天井部を除いてほぼ完全な状態で検出された。そして、土師器焼成坑の埋土には土器類のほかに、炭化材・灰・焼土塊[15]などが含まれていたことから、調査時に出土した植物質起源の遺物については土師器焼成坑の構造や燃料を復原する一環として自然科学分析を実施し、その結果を第７章に掲載している。

さて、出土した遺物の機能を峻別する決め手となるのはいうまでもなく出土状況であり、それは土器や石器といった明らかな人工遺物だけでなく植物質起源の遺物についても同様である。したがって、本節では第５章の現地調査時の所見と第７章の自然科

学分析の成果をうけて、土師器焼成坑の構造や燃料について検討する。

自然科学分析の目的　自然科学分析の主な目的は、構造材もしくは燃料材として使用された植物質の素材を特定することにあり、焼土塊・灰についてプラント・オパール分析を実施し、炭化材について樹種同定を実施している（第10表）。

焼土塊にはイネ科の稈と推定される細長い圧痕がみられたことから、焼成時には稲藁などの植物質のものと接していたことが明らかである。焼土塊に、稲藁あるいは籾殻が包含されているかどうかを具体的に証明することを目的に試料とした。

灰については、肉眼観察によって籾殻状の形態を把握できるものがあった（写真参照）ために、イネの穎が使用されていることが想定された。しかし、同時に木材も出土しており、木取りからは自然木を使用している可能性が考えられた。樹木は幹・枝・葉部から構成されていることから、自然木を伐採すると幹・枝・葉部の全てが植物質資源として利用されている可能性があり、なかでも葉部は焚きつけに効果的と考えられる。したがって、肉眼観察で確認していた樹木の幹・枝部だけでなく、同じ樹木の葉部を燃料として使用している可能性も考えられる。木本類においても、プラント・オパールの特徴から特定できることがある[16]ことから、プラント・オパール分析は樹木起源のものも検鏡時に有無を確認している。

つまり、土師器焼成にかかる燃料資源を植物質資源として捉えた場合には、第12表のように樹木や草本類の利用される部位は一つの部位に限られないことを想定できる。この場合、試料の出土状況も異なり、復原するための手段も元々は一つの資源であれども複数に及ぶと考えられる。

試料は、これらの土師器焼成坑から出土したものほかに、土坑ＳＫ45出土灰や竪穴住居ＳＨ48の竈埋土などを対象とした。各遺構の機能を復原するだけではなく、土師器焼成坑出土の灰との比較を目的としたためである。

構造と燃料　土師器焼成坑の部位については、『古代の土師器生産と焼成遺構』[17]に基づき、記載する。また、前部が地形の傾斜の低い方を向く事例の多い点や複数の焼成坑が重複している場合には地形の傾斜の低い方の遺構と重複し、灰原状に利用されている事例があることから、焚き口は前部と推定されている[18]。

土師器焼成坑（第５章第28図・第100図）は、地山を掘りこんで作られており、側壁・奥壁は垂直に立ち上がる。前部は緩やかなスロープ状をなす。

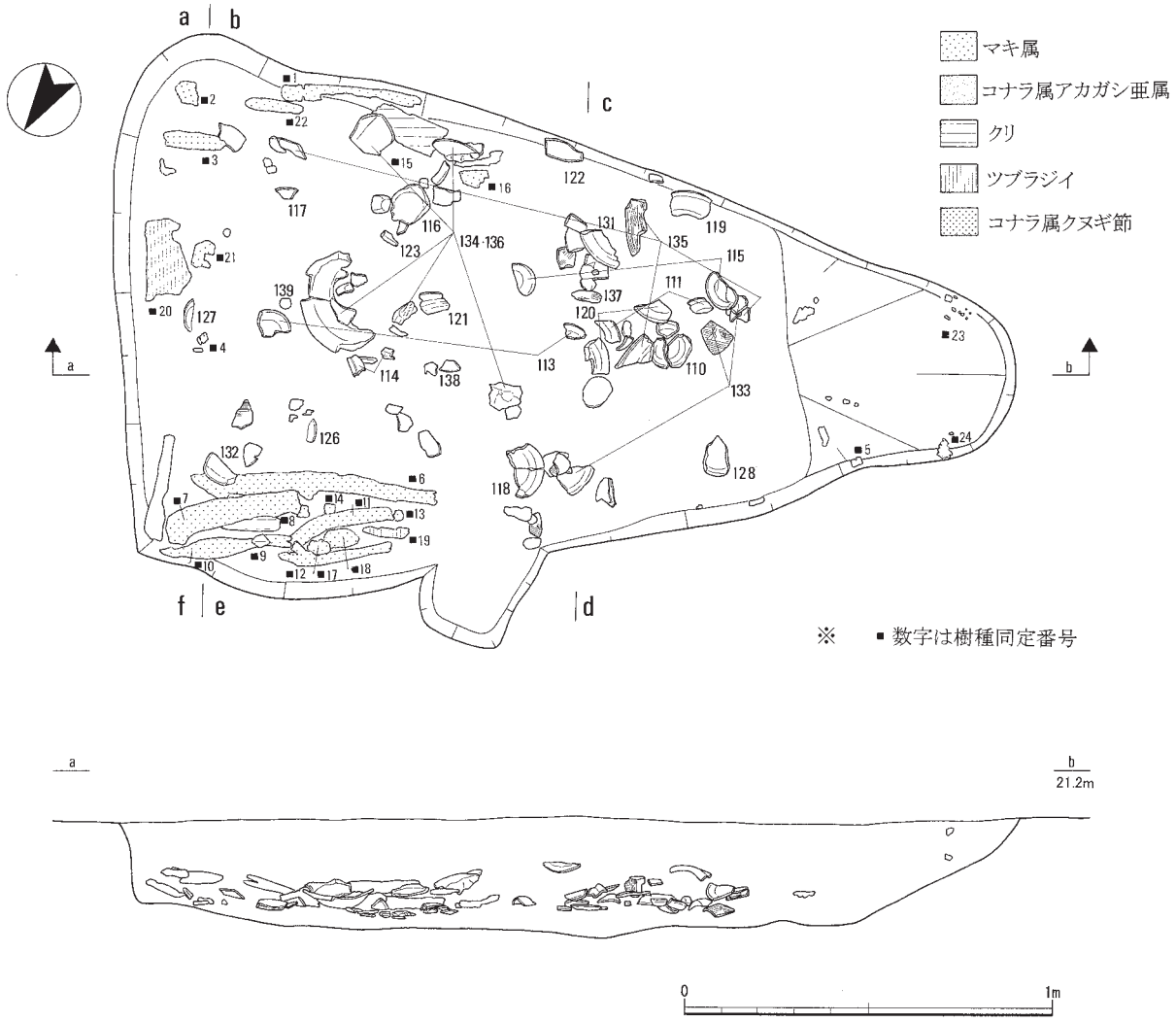
拡張や壁面の補修などは認められなかったことから、焼成に使用された回数は１回あるいはごく少数回と推定される。ただし、土層断面の観察によると、床面の被熱層の下部に炭化物や焼土粒を含む暗褐色土層（９層）が床面ほぼ全面に広がっていた。炭化物や焼土粒も包含している点では床面の作り替えを行っていることも否定できないが、９層下部は凹凸が激しく、焼成による赤変色や硬化は確認できなかったことから整地層と判断した。

木材（第100図・第11表）は、両側壁と奥壁の付

写真　土器111下部で検出した灰

分析名	分析者	試料		センター作業内容	委託時の試料の状態
樹種同定	（株）古環境研究所	土師器焼成坑ＳＦ61	炭化材	試料採取記録	10cm四方に採取後、チャック袋
プラント・オパール分析			灰		フィルムケース チャック袋
			焼土塊		
		土坑ＳＫ45	灰		
		竪穴住居ＳＨ48	炉周辺土壌		

第10表　土師器焼成坑ＳＦ61関連自然科学分析一覧表



第100図　土師器焼成坑ＳＦ61炭化材出土状況図(1:20)

分析番号	地区名	遺構名	地点名	取り上げ番号	形状		計測値	樹種	備考
1	D-b7	SF61	b	w1	板材(板目材)	芯なし	35×6×1.3	マキ属	
2	D-b7	SF61	a	w2	板目材	芯なし	35×4×2	マキ属	
3	D-b7	SF61	a	w3	丸太材	芯なし	7×4×4	マキ属	
4	D-b6	SF61	a	w5	板目材	芯なし	3×2×1	マキ属	
5	D-a7	SF61	d	w7	板目材	芯なし	2×2×1	コナラ属アカガシ亜属	
6	D-a6	SF61	e	w8	半裁材	芯あり	68×5×4	マキ属	
7	D-a6	SF61	e	w10	四分割材	芯あり	48×7×7	マキ属	
8	D-a6	SF61	e	w11	八分割材	芯あり	16×4×2	クリ	
9	D-a6	SF61	e	w12	-	芯なし	8×2×2	クリ	
10	D-a6	SF61	e	w13-1	半裁材	芯あり	32×4×3	マキ属	
11	D-a6	SF61	e	w13-2	丸太材	芯あり	32×5×5	マキ属	
12	D-a6	SF61	e	w14	丸太材	芯あり	30×3×2	マキ属	
13	D-a6	SF61	e	w15	半裁材	芯あり	2×3×2	マキ属	
14	D-a6	SF61	e	w16	板目材	芯なし	4×5×2	マキ属	
15	D-a7	SF61	b	w18	板材(柾目材)	芯なし	20×8×2	クリ	転用材？
16	D-a7	SF61	b	w19	半裁材	芯あり	12×4×1.5	マキ属	
17	D-a6	SF61	e	w20	半裁材	芯なし	6×4×1.5	マキ属	
18	D-a6	SF61	e	w21	四分割材	芯あり	9×4×3	マキ属	
19	D-a6	SF61	e	w22	四分割材	芯あり	12×3×3	ツブラジイ	
20	D-b7	SF61	a	w23	四分割材	芯あり	20×12	ツブラジイ	
21	D-b7	SF61	a	w24	板目材	芯なし	8×5	マキ属	
22	D-b7	SF61	b	w25	丸太材	芯あり	15×3	マキ属	
23	D-a7	SF61	c(焚口付近)	炭ｻﾝﾌﾟﾙ6	板目材	芯なし	3.5×2×1	コナラ属アカガシ亜属	
24	D-a7	SF61	d(焚口付近)	炭ｻﾝﾌﾟﾙ7	板目材	芯なし	2×1.5×1	コナラ属アカガシ亜属 コナラ属クヌギ節	

第11表　土師器焼成坑ＳＦ61出土炭化材一覧表

想定される部位	木本類			草本類(イネ科)	
(▭は検出された植物質資源)	幹	枝	葉	籾殻	稲藁

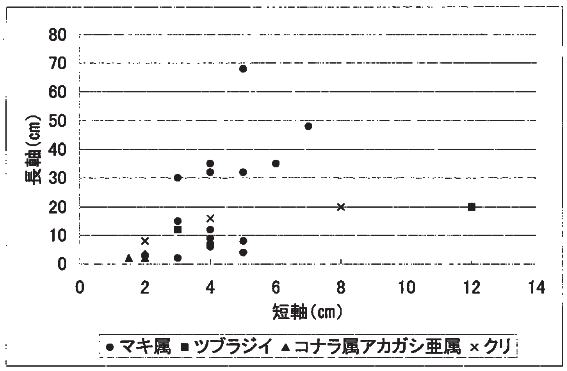
試料の状態(出土状況)	炭化材	灰	焼土塊
復原の手段(分析方法)	樹種同定	プラント・オパール分析	
出土状況の確認	肉眼観察の所見(木取り・圧痕など)		

第12表　土師器焼成にかかる植物質資源と復原手段

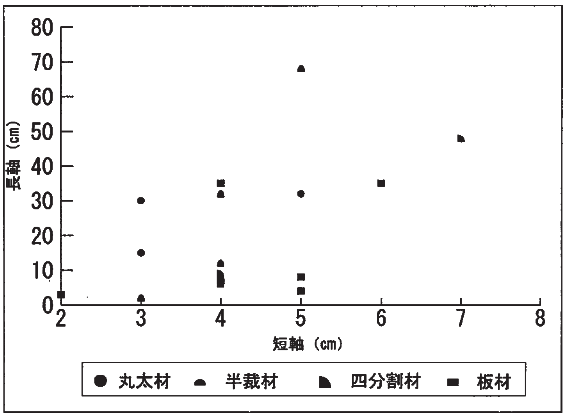
近にはきれいに並べられており、前部には細かな炭化物が多く堆積していた。これらの木材の木取りや形状を計測したところ、樹種同定番号15（クリ材）が板状製品の転用材である可能性が考えられた以外は、丸太材や割材が中心であり自然木に加工を加えて使用している可能性が考えられた。前者のきれいに並べられていた木材の大半はマキ属が使用されており、後者の細かな炭化物となって出土した木材はコナラ属アカガシ亜属が使用されていた。焚き口の木材と燃料薪とされた木材は大きさが異なるだけでなく樹種も異なる木材を使用していることが分かる。第101図には、樹種ごとに計測値の分布を示している。このうち、マキ属については木取りと計測値に相関関係がみられた。第102図によると、径の小さなものについては丸太材であり、径の大きなものは半裁材や四割材が使用されていることが分かる。つまり、径の小さなものについては丸太材のまま使用し、大きなものについては分割して大きさを揃えたものと考えられる。

床面や壁面は、強い被熱によって赤変色し硬化していた。しかし、木材の確認された奥壁部・側壁部付近については赤変色している部分が少なく、壁面が直接被熱を受けていなかったものと考えられる。木材が壁に沿うように並べられていた点は、土器が床面や壁面に直接接するのを防ぎ、温度変化を抑える効果をもたらすためと考えられる。この点から木材は燃料であるだけでなく、同時に構造材としての機能も持ち合わせていたものと捉えられる。

灰は土器の直下で良好な状態で検出できた。この



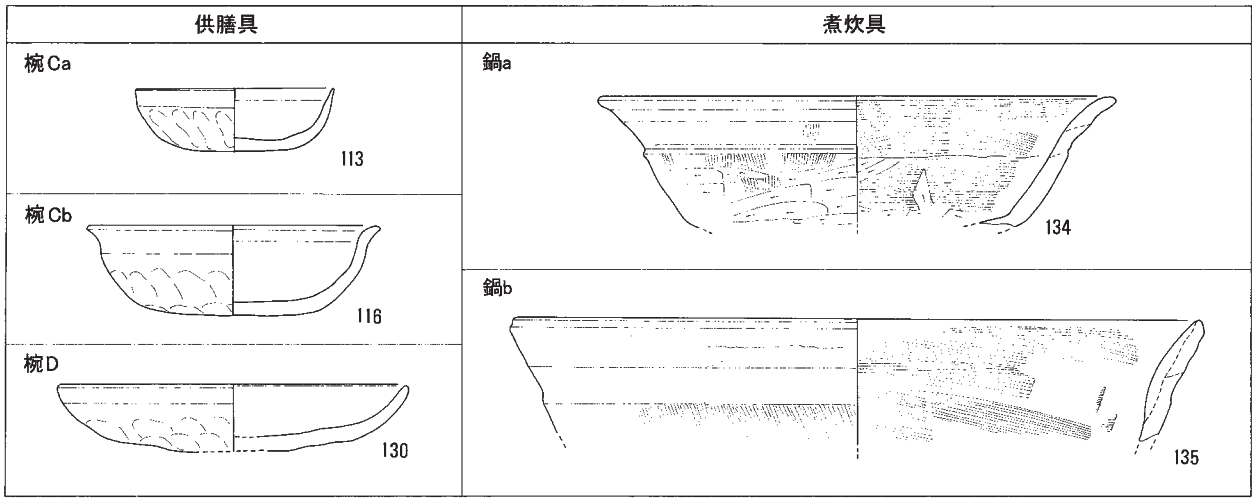
第101図　土師器焼成坑ＳＦ61出土炭化材の計測値分布



第102図　マキ属の計測値分布

点から、出土した土器は焼成終了後の早い段階で廃棄されたものと判断される。また、灰からはイネの穎と機動細胞と籾殻の芒などに由来するとみられる棒状珪酸体が極めて高密度で確認されたことから、稲藁や籾殻に由来することが明らかになった。なお、全く樹木起源のものは確認されなかった。以上の結果から燃料に稲藁や籾殻が使用されており、木本類は幹・枝部を使用しているだけで、葉部は使用されていないことが分かった。

上部構造は製品を取り出す際に破壊されているこ

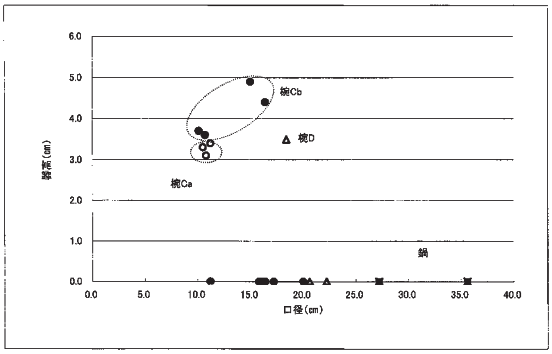


第103図　土師器焼成坑ＳＦ61出土土器の器種分類図

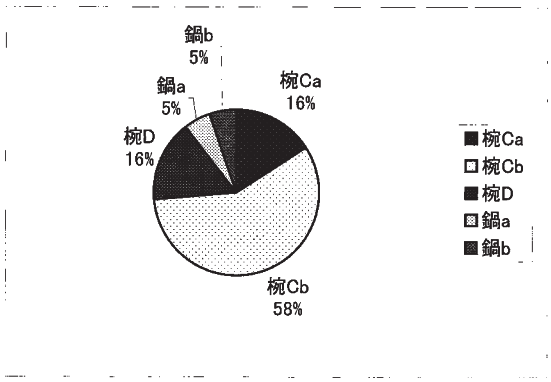
とが推定され、実際に残存していなかったが、埋土から出土した焼土塊が参考になる。本報告で用いる「焼土塊」（巻頭写真図版５）とは砂礫が多く含まれており、粘土とは言い難い粒径の土質で、土師器の胎土とも壁面や基盤層の粘質土とも全く異なっている焼土である。また、焼土塊は砂礫が多く含まれているために壁面や床面が硬化しているのと比較すると脆い。土器と同様の焼け方をしているが、１面のみがよく焼けていることから内外面のあることが分かる（巻頭写真図版５）。また、埋土の中には焼土塊が２層のように多く含まれている部分もあった。

このように土師器焼成坑から土器以外に焼けた土が出土する場合、焼成粘土塊と呼ばれることが多いが、焼成粘土塊は焼成坑の壁面を指す場合[19]や土器類と同様の胎土をもつ窯道具類と推定されている遺物を含む場合もある[20]。しかし、今回遺構として検出された壁面は基盤層を掘りこんでいるだけの構造であり、壁面をなす基盤層の粘質土は肌理が細かく焼成によって硬化している（巻頭写真図版５）ことから、焼土塊は明らかに壁材と異なることが分かる。また、焼土塊に内外面のある点は、被覆材の一部であることを否定できない傍証になると考えられる。土師器焼成坑は壁面の上部が焼けていた点から開放された形態であったと考えられるが、焼土塊の存在からは部分的に被覆材のあったことが分かる。

次に、焼土塊にはイネ科の稈と推定される細長い圧痕がみられたことから、焼成時に稲藁などの植物質のものと接していたことが明らかである。接触していた植物質は灰となって残存している可能性が考



第104図　土師器焼成坑ＳＦ61出土土器の法量分布



第105図　土師器焼成坑ＳＦ61出土土器の器種組成

えられ、上記のようにプラント・オパール分析の結果、稲藁や籾殻に由来することが明らかになった。一方、焼土塊ではタケ亜科が圧倒的に卓越しており、イネについては機動細胞が確認されたものの、穎は全く確認されていない。イネの穎のプラント・オパールが全く検出されなかったことによって、焼土塊には籾殻灰が混和材のように含まれていることはないとみなされる。なお、焼土塊に包含されているプラント・オパールは、焼土塊の土そのものに包含され

ていたプラント・オパールであることから、表面に圧痕として形態を留めていたイネ科植物は灰となり焼失することから分析結果には反映されないと考えられる。したがって、燃料の復原をするには、圧痕の形態そのものを同定するかもしくは灰の内容の分析に帰結すると考えられる。

②土師器焼成坑出土土器

今回検出された土師器焼成坑ＳＦ61から出土した土器は、須恵器片が１点出土している以外は全て土師器であり、須恵器片は甕の体部細片であることから混入品として扱うことができる。

雑然とした出土状況からは焼成時の状況ではなく廃棄された状態と考えられ、破片で出土した土師器が数多く接合していることからは一括性が高い資料と考えられる。

また、出土した土器はひび割れや土器片の剥離状況から焼成時に破損した土器片と推定される破片が圧倒的に多く出土している点から、焼成時に破損した土器片と考えられる（第５章第２節参照）。

これらの点から、本節では西野田遺跡で土師器焼成坑が１基のみしか確認されていないことから、土師器焼成坑ＳＦ61から出土した土器を本遺構で焼成され廃棄された土器と位置づけて、器種組成について考えてみたい。

１　器種組成

供膳具である椀と煮炊具である鍋が出土している。供膳具は淡褐色を呈する粗製土器であり、ヘラミガキや放射状暗文が施文されたいわゆる暗文土師器は細片を含めても出土していない。分類は基本的に第６図（第３章第４節）を踏襲し、更に、形状の把握できる土器について第103図に分類案を示した。また、法量分布は第104図に示した。

椀Ｃ　口縁端部の形態から、椀Ca・Cbの２種類に細分できる。口縁端部のヨコナデの強弱に由来すると考えられる。

椀Caは、体部から口縁部にかけてゆるやかに広がり、口縁端部は内面に面をもつ。ナデや指オサエで仕上げられるために、体部外面の下半部には指オサエ痕が残る。法量は10.5～11.2㎝の１種類である。

椀Cbは、体部から口縁部にかけてゆるやかに広がり、口縁端部は短く外反する。ナデや指オサエで仕上げられるために、体部外面の下半部には指オサエが残る。また、ヘラケズリの施される場合もある。法量による器種分化がみられ、10.1～11.2㎝・15.0～17.2㎝・20.0㎝の３種類がある。

椀Ｄ　底面から口縁部が大きく広がり、口縁端部は内面に弱い面をもつ。椀Caの器高が低く、皿状の形状のものである。ナデや指オサエで仕上げられるために、体部外面の下半部には指オサエ痕が残る。法量は18.4～22.2㎝。

鍋　ゆるやかに開く体部から屈曲して口縁部がつく。口縁部の形態から、鍋ａ・ｂの２種類に細分できる。底面の残存する鍋aは平底であり、形態としては盤に類似するが、粗製である点から煮炊具である鍋に分類した。

鍋ａは口縁端部を丸く収める。体部内外面はハケ後ヘラケズリで仕上げられる。体部は粘土紐状に剥離している部分があることから、平坦な底部に粘土紐を輪積みして成形されていることがわかる。口縁部径は27.2㎝。

鍋ｂは口縁端部に面をもつ。体部内外面はハケで仕上げられる。口縁部径は35.6㎝。

なお、上記の分類にしたがって実測を行った個体数を計測し、その比率を第105図に示した。その他に、接合のできない土師器の細片も出土しているが、粗製の杯椀類および鍋甕類の煮炊具と推定できるハケメやヘラケズリで仕上げられた破片である。したがって、分類を行った器種以外の特殊な器種が組成している可能性は低いと考えられる。

２　供給先

ここでは、特徴的な形状をもつ椀Ｃについて検討したが、現状の西野田遺跡出土資料には胎土や形態といった属性においてＳＦ61出土土器と共通性の高いものは確認できない。

３　時期

広域に流通するために、時期を特定しやすい須恵器が出土していないことから、所属時期を特定することは困難である。このために、椀Ｃ・椀Ｄ・鍋の形態から推定することになる。

具体的には、都城における椀Ｃは飛鳥Ⅴ・平城宮Ⅰ以降に出現する[21]ことから、都城における器種組成

に準拠した場合には７世紀末から８世紀初頭に相当する可能性があり、この場合に他の器種も大きな齟齬はないと推定される。しかし、都城における椀Ｃの口径は13㎝前後であり、ヘラケズリを施さないｅ手法によっており、器種分化しない特徴をもつとされているのに対し、西野田遺跡ＳＦ61出土の椀Ｃは法量が異なる点や器種分化のみられる点さらにヘラケズリで仕上げられているものも存在する特徴があり、これらの点は土師器製作集団の特徴を明確に打ち出す属性と思われる。なかでもヘラケズリを施している点は、在来の手法によっていることが考えられる。また、鍋も都城の器種組成には含まれていない形態のものである。

これらの特徴からは厳密な規制の働いていないことが看取され、都城と地方集落という出土地点の違いが器種組成にも反映されていると考えられる。したがって、器種組成と同様に時期的にも幅をもって考えておく必要もあろう。　（川崎志乃）

４　出土土器の破損状況

（１）破損状況の分類

ＳＦ61から出土した土器について考えていく上では、個々の土器が焼成時の失敗品として廃棄されたものであるのかどうかを判断する必要がある。

また、焼成時の失敗品であるならば、どのような状態で破損している例が多いのかという点は、土器の製作技法や焼成状況等を考える上で、一つの手がかりとなりうるものと思われる。

そこで、こうした考察の前提として、ＳＦ61出土土器全体を観察し、使用時や廃棄後の単純な破断（割れ）とは異なり、焼成時に生じたと思われる破損状況に関する分類・整理を行った。

分類にあたっては、出土した土器の中に焼成時ではなく使用時の二次被熱による破損品や、別の焼成坑での焼成失敗品などの存在により多様な破損状況が存在する可能性を視野に入れておく必要があろう。そこで、こうしたものを取捨選別できる可能性も考え、ＳＦ61において観察できる破損状況全体の中から焼成に伴うと考えられる破損状況の種類を最大限拾い出し、それを客観的に分類することに留意した。

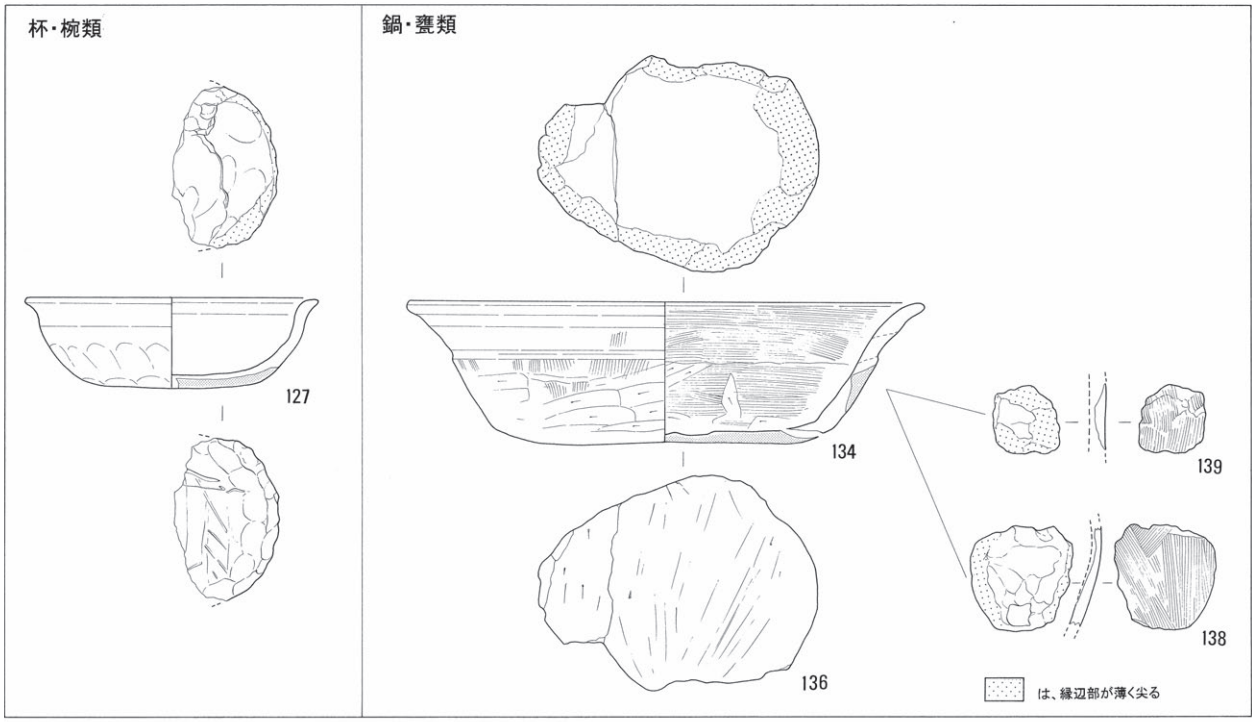
以上のような分類の指針のため、ここで行う分類はこれまでに土器焼成技術研究の上で提示されてきた土器焼成時の破損状況の分類とは異なり、ややＳＦ61に限定的で、かつ網羅的な破損状況の分類となっている。

ひび割れ（①）

ａ：口縁部からひび割れが生じている

・器壁は完全に破断していない

・ひび自体はほぼ器壁の表裏に貫通している



第106図　焼成破裂土器片の破裂パターン

No.	実測番号	グリッド	遺構名	出土状況		取り上げ番号	器種	備考	破損状況分類							
				地点名	内外面				①a	①b	①c	②a	②b	②c	②d	②e
110	203802	D-a7	SF61	c	内	16	椀Cb		○	○						
111	204001	D-a7	SF61 SF61	c c	外 外	13 20	椀Cb	下で灰試料採取				○				
112	204303	D-a7	SF61			東西畦4層	椀Ca		○	○		○				
113	203803	D-a7 D-b7	SF61 SF61	b b	内 内	19 44 南北畦①②4層	椀Ca		○			○		○		
114	203806	D-a7	SF61	b	内・外	41	椀Cb			○		○				
115	203804	D-a7 D-a7	SF61 SF61	c b	内 外	9 29	椀Ca					○			○	
116	203901	D-a7	SF61	b	内	6	椀Cb									○
117	203805	D-b7	SF61	b	内	52	椀Cb								○	
118	203801	D-a7	SF61	e	内	30	椀Cb						○			
119	204006	D-a7	SF61	c	外	1	椀Cb			○						
120	204101	D-a7 D-a7 D-a7	SF61 SF61	c c	外 内	15 18 南北畦①2・4層	椀Cb			○		○	○			
121	204005	D-a7 D-a7	SF61 SF61	b	外	39 南北畦①4層	椀Cb		○	○	○				○	
122	204004	D-a7	SF61	b	内	2	椀Cb		○	○		○				
123	203904	D-a7	SF61	b	内	48	椀Cb								○	
124	204304	D-a7	SF61				杯・椀	層状に剥離							○	
125	204402	D-b7	SF61				杯・椀				○				○	
126	204502	D-a6	SF61	e	外	43	杯椀類(底部)	②eに対応する焼成破裂土器片								○
127	204501	D-b6	SF61	a	内	45	杯椀類(底部)	②eに対応する焼成破裂土器片								
128	204103	D-a7	SF61	d	内	4	椀D					○				○
129	204401	D-a7	SF61				椀Cb				○					
130	204302	D-a7	SF61				椀D			○						
131	204002	D-a7 D-a7	SF61	c	内	24 南北畦①4層	椀D			○			○		○	
132	204003	D-a6 D-a7	SF61	e	内	42	椀D					○			○	
133	203902	D-a7	SF61 SF61 SF61	c c d・e	内 外 内	10 14 32	鍋					○			○	
134・136	204201・02・ 204503・04	D-a7 D-a7 D-a7 D-a7 D-a7 D-a7 D-a7 D-a7	SF61 SF61 SF61 SF61 SF61 SF61 SF61 SF61	b b b・c e e b b	外 内 外 内 － 外 内	3 8 28 35 36 40 50 南北畦①4層	鍋a		○	○		○	○	○	○	
135	204102	D-a7 D-b7	SF61 SF61 SF61 SF61	c c c b	内 外 外 外	5 12 17 51	鍋b					○	○		○	○
137	204504	D-a7	SF61	b・c	外	28	鍋・甕類								○	
138	204503	D-a7	SF61	b	外	38	鍋・甕類	②eに対応する焼成破裂土器片							○	
139	203903	D-b7	SF61	b	外	46	鍋・甕類	②eに対応する焼成破裂土器片								○

第13表　ＳＦ61出土土器観察表

ｂ：破片の破断面からひび割れが生じている

・破断後に生じたひび割れ、もしくは破断に伴うひび割れ

・ひび自体は器壁の表裏に貫通している場合が多いが、そうでない場合もある

ｃ：器壁に細かいひびが入る

・ひび自体は器壁の表面にとどまり、貫通しない

・焼成による器壁の部分的な収縮に伴うものか

破断（②）

ａ：破断面が被熱

・焼成中に破断

・破断後に被熱、色調が赤っぽくなる二次被熱とは異なり破断面の色調が器壁と同系色を呈する

ｂ：破断部を境に接合した破片の色調が異なる

・焼成中に破断

・破断後に破片の飛散などにより窯内の異なる条件下で焼成を受けたか

ｃ：接合する破片同士がひずみによってきちんと接合しない

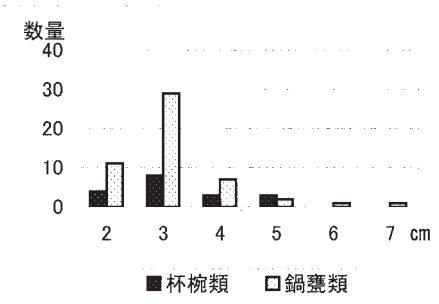
・焼成中に破断

・破断後に破片が焼けひずみを起こしている

ｄ：粘土接合部における破断

・焼成中に破断、破断面は被熱を受ける

・剥離状に割れ、割れ口が斜めになっている



第107図　焼成破裂土器片の数量

・破断方向は水平方向

ｅ：器面が剥離

・焼成中に剥離、剥離面は被熱を受ける

・主に器面がはじけるように円形に剥離、クレーター状になるものも多い

・粘土接合部とあまり関係しない位置で剥離

以上、大きく「ひび割れ（①)」、「破断（②)」の二種類に分類し、その中で細分化を試みたが、このうち確実に焼成時の破損・失敗品と認定できるものは「破断」であろう。「ひび割れ」のうちでもａ・ｃのような破損が認められる個体については、破損しても器種によっては製品として使用に耐えうるため、焼成時の破損によって廃棄されたとは断定できない。ただし、これらの個体には「破断」の破損状況もともに観察されるものも多い。

なお、ＳＦ61から出土した土器各個体の破損状況と分類との対応関係については、観察表（第13表）で示している。　（石井智大）

（２）焼成破裂土器片

前項の破損状況の分類で検討したほかに、弥生土器の研究で分析の進んでいる焼成破裂土器片[22]（巻頭写真図版５）が数多く出土している。焼成破裂土器片は、細片であるために製品として流通する可能性が極めて低いと考えられる遺物であり、土器焼成を裏付ける遺物と考えられる。また、細片であれども土器片が凸レンズ状に破裂し、焼成破裂面も器表面と同じ色調に焼き上がっている特徴から抽出しやすいために破裂状況を把握することにした。

いずれの器種も土器の外面がはじけ飛んで破片となっている共通点があり、確実に土器の内面がはじけ飛んでいる破片は確認されなかった。土器の外面がはじけ飛んでいる破片が多く出土している点からは、焼成時に土器をぎっしりと重ねて焼成していないことが分かる。

また、焼成破裂土器片と対応関係にあるのが、前項の（１）で検討した分類ではクレーター状に器面が剥離している破損状況分類②ｅである。

第106図には焼成破裂土器片の破裂パターンを示し、第107図には焼成破裂土器片の大きさと数量を示した。

杯・椀類では、底部径付近で破裂している個体が多く、その場合、円形ではなく1/2程度が破断しているために半月状になることが多い。また、半径２～３㎝の大きさの小さなものについては円形に弾け飛んでいるものもある。

鍋・甕類では、体部片と底部片がある。体部片は、半径２～３㎝の小さく円形に破裂しているものが圧倒的に多いが、楕円形に破裂しているものもある。楕円形に破裂しているものについては、周囲全体が凸レンズ状に破裂しているのではなく、土器製作時の粘土紐の単位で破断している特徴がある。また、底部全体が円形に弾け飛んでいる事例もある。杯椀類の焼成破裂土器片よりも大きな破片が存在する特徴があるが、この点については器形の大きさが大きいためと考えられる。

以上から、焼成破裂土器片は研究の蓄積のある弥生土器に限らず、時代や器種を越えて土器焼成遺構から出土することが明らかとなった。

５　出土土器の黒斑

土器の焼成技術を知る上では、土器の表面にみられる黒斑も参考になる。今回出土している土器は基本的に失敗品であるために破損しており、土器が完存していないために全体像を把握することは困難である。しかし、土器の破損状況を検討する過程で、破断部を境に色調の異なる破片がみられたことからは、やはり焼成時の位置が変化することによって色調の変化がみられることがわかる。つまり、焼成時の配置と土器の色調は相関関係にあることが分かる。したがって、今回は明瞭な黒斑がみられ、なおかつその部位が明白な土器について検討する。

出土土器は、失敗品といえども明瞭な黒斑のみられる遺物が少なく、２点しか検討できなかった。

底部から体部外面にかけて明瞭な黒斑のみられる椀Cb（118）は、焼成時に底部に熱が回っていなかったために生じたと推定でき、底部に熱の回らない要因は２パターンを想定できる。１つは、床面に接地していたために生じた場合であり、２つめは重ね焼きによって底部から外面が別の土器などに覆われていたために生じた場合である。このうち、後者は焼成破裂土器片の分析によって、ぎっしりと重ねて焼成していないことを把握できたことから、否定できる。したがって、床面に接地していた状態であったことが推測される。また、椀Cb（122）は体部外面に横方向に幅1.3cmの明瞭な棒状の黒斑がみられ、燃料材の直接当たっていることが推測される。

（川崎志乃）

③小結

以上の各属性から明らかになった点を、生産技術・生産場所の特徴・生産体制にわけてまとめることによって、今後の調査につなげることができれば幸いである。

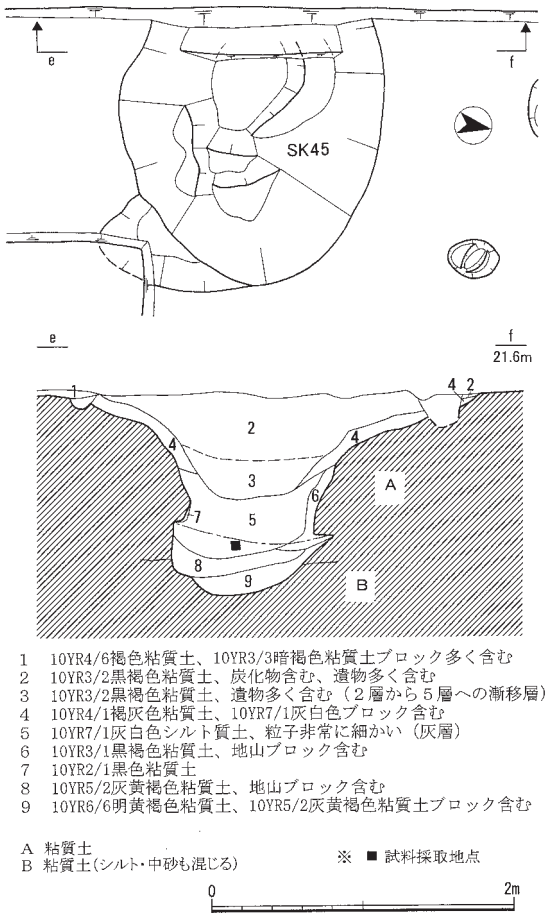
１　生産技術

構造　今回遺構として検出された土師器焼成坑は基盤層を掘りこんで作られている。上部構造は残存していなかったが、壁面の上部が焼けていた点から開放された形態であったと考えられ、焼土塊も存在することから部分的に被覆材のあったことが推定される。また埋土の中には、焼土塊が２層のように多く含まれている部分もあったが、出土量としてはさほど目立つ存在ではない。この点は、焼土塊には砂礫が多く含まれているために壁面や床面が硬化しているのと比較すると脆いことから崩壊していることも推定され、やはり覆い焼きであったと考えられる。

床面は整地されている可能性があり、燃料材でもある木材が両側面や奥壁付近で壁に沿うように並べられていた点は土器が床面や壁面に直接接するのを防ぎ、温度変化を抑える効果をもたらすためと考えられる。

出土した土器からは、焼成破裂土器片が外面に弾け飛んでいたことから、窯詰めはぎっしりと重ね焼きを行っていないと考えられる。

燃料　燃料と推定される遺物は、木材の幹・枝部と稲藁や籾殻起源の灰が出土した。



第108図　土坑ＳＫ45試料採取地点図（1:40）

木材は、出土地点によって樹種と出土状況が異なり、奥壁や側壁付近にきれいに並べられた部分と前部には細かく炭となった状態で出土したものがあり、燃えやすいように工夫されていたと考えられるが、広葉樹の葉部は使用されていなかった。また、一部に加工材からの転用材がみられたが基本的には自然木を必要に応じた大きさに分割し、配置したものとみられる。側壁に沿って床面に並べられていた材はマキ属であり、焚き口付近で炭片となって出土したのはコナラ属アカガシ亜属である。

灰は稲藁や籾殻に由来することが明らかになったが、焼土塊にイネ科の稈と考えられる圧痕がみられた点から稲藁については灰の状態ではなく、生の稲藁のまま燃料材として使用されていると考えられる。籾殻については、焼成前に生の籾殻かそれとも灰であったのかプラント・オパール分析からは復原できないが、参考になるのが土坑ＳＫ45出土の灰である。

土坑ＳＫ45は長軸2.0m、短軸1.8m、深さ1.2mの土坑であり、土師器焼成坑から約15m離れた南東部に位置する。時期的には、８世紀前半の土器が遺構機能の廃絶後に廃棄された状態で出土していることから、機能していた時期は土師器焼成坑の操業時と併行している可能性が高い。壁面に炭を含んだ粘土が貼られていた点は防湿を目的として壁面に加工が施されたものとみられ、内部には灰が堆積していた。灰は土師器焼成坑から出土した灰と同様に、イネの葉部の機動細胞・穎の表皮細胞・籾殻の芒などに由来するとみられる棒状珪酸体が極めて高密度で確認されており、稲藁や籾殻に由来する灰が貯蔵されていたことが明らかになった。焼成坑の埋土に多く含まれていた焼土が含まれていなかった点と焼成破裂土器片が出土していない点から、土器焼成後の灰が貯蔵されているわけでないことは明らかである。また、必ずしも土師器焼成に伴う遺構と限定することはできないが、類をみない遺構であり、貯蔵されていた灰の内容が土師器焼成坑で検出された灰の内容と類似する点から土師器焼成時に土坑の灰が用いられていることは考えられる。

２　生産場所の特徴

土器の破損状況を検討することによって、確実に焼成時の破損・失敗品と認定されるものが「破断」されているものであり、破損していても場合によっては使用に耐えうるものが「ひび割れ」と分類された。しかし、「ひび割れ」の場合にも同時に複数の破損状況が観察されることも多いことから、出土した土器はやはり失敗品として廃棄された土器と捉えられた。このような分析が行われた上で出土した土器を失敗品として位置づけられた点は重要である。

今後は、同様の特徴をもつ土器が土師器焼成坑以外に他の空間で出土していないか検証することによって、土器焼成の場が焼成坑以外に存在するのか、あるいは、流通していないのか把握していく必要もあろう。

また、焼成破裂土器片は研究の蓄積のある弥生土器に限らず、時代や器種を越えて土器焼成遺構から出土することが明らかとなった。焼成破裂土器片は細片であれどもその特徴から抽出しやすいため、今後、土器焼成の場を把握する際の指標の一つとして検討されることがのぞまれる。

３　生産体制

西野田遺跡の発掘調査では8,599㎡の調査が行われているが、現在のところ、土師器焼成坑は１基しか確認されていない。また、土師器焼成坑から出土している土器の属性と共通性の高い土器が遺跡内で確認されてない点からも、大規模に操業しているものとは考えにくい。

しかし、類をみない灰の貯蔵施設があり、土師器焼成坑で燃料として使用されていた灰と共通する内容物であった点からは、計画的に燃料材を確保していると考えられる。この点で、土師器生産は一過性の生産ではなかったと推定する必要がある。

また、西野田遺跡は遺跡南部に嬉野廃寺が隣接しており、嬉野廃寺は瓦の特徴から天武朝以降に創建された可能性が考えられている[23]。今回の西野田遺跡の調査で確認された遺構・遺物が７世紀後半から８世紀前半にかけて集中する点からは、西野田遺跡が嬉野廃寺と関連性の高い遺跡であることが伺われる。したがって、土師器焼成坑から出土した土師器が時期的に７世紀末から８世紀初頭に帰属する可能性が高い点は、やはり歴史的背景を嬉野廃寺との関連で捉える必要があると思われる。

つまり、土師器焼成の背後には寺院の存在があり、寺院の支配下で手工業生産が行われたと考えられる。このような体制下における土師器生産は、土師器そのものの形態は都城の土器の形態を模しているものの、製作技法の視点からみれば在来技法が看取できた点で、土師器生産工人の広域移動は考えがたく、自給自足的な生産体制であったと推察される。

（川崎志乃）

第４節　総　括

最後に、今回の西野田遺跡の調査によって得られた成果の中でも、特に注目される成果と、重要な成果であるが報告の中では十分に触れられなかったもののいくつかについて簡略に述べ、本書の総括に代えたい。

①古代集落の様相

３次にわたる西野田遺跡の調査では、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落遺跡を検出することができた。西野田遺跡の存在する中村川流域では、これまでにも飛鳥時代から奈良時代にかけての遺跡や寺院跡が集中することが注目されてきた。この点については、一志郡衙、斎王群行、聖武天皇行幸など、様々な歴史的背景が絡み合っており、当該地域だけではなく、伊勢地域全体からみても重要な問題として考えていく必要がある。

こうした状況の中で、一つのまとまりのある集落内部を広く調査でき、その構造について一定の知見を得ることができたことは（第８章第２節）、中村川流域の古代遺跡群の内実に近づくための大きな手がかりとなったものと思われる。

ただ、今回の調査では、点在する調査区からの情報によって集落内部の様相をかなり詳しく知ることができたものの、工事によって遺構が破壊される範囲のみを調査対象としたため、未調査である区域も多い。今後もし、新たな工事等に伴う発掘調査を行う必要が生じた場合には、今回の調査成果とあわせて西野田遺跡の古代集落の全体像をより明確にしていくことが課題となろう。

②注目される遺構

遺構としては、まず集落の中心地区で検出された庇付掘立柱建物が注目できる。西野田遺跡ではこの建物が集落の中心的位置をなすようにみえるが（第８章第２節）、他の遺跡での検出例を踏まえた上で、その性格について検討していかなくてはならないであろう。

また、生産活動に関わる遺構として、土師器焼成坑と灰を貯蔵した土坑が特筆される。土師器焼成坑は１基のみの検出ではあるが、内部の遺存状況は良好であり、焼成された器種、薪燃料の樹種や配置など各種の情報を得ることができた（第８章第３節）。焼成されていた土師器は暗文土師器ではなかったが、土師器焼成坑の形態も含め、当該地域における土師器生産の様相について検討する上で重要な情報を提供したといえる。灰を貯蔵していた土坑については、灰を貯蔵していた目的は不明であるが、こうした例が他にもないかどうか、今後の調査にあたって土坑の埋土にも注意しておく必要がある。

③暗文土師器

遺物では、畿内系土師器あるいは畿内産土師器とも呼ばれる、いわゆる暗文土師器の出土が注目される。暗文土師器は西野田遺跡の周辺地域では多量に出土しており、その生産も行われていたと推定されている。また、この地域の暗文土師器は都城へ運ばれている可能性も考えられており、その様相が注目されているところである。西野田遺跡で出土した暗文土師器も、この地域で生産されたと考えられている暗文土師器と似た特徴をもつ。

ただし、西野田遺跡から出土した暗文土師器の量は、堀田遺跡や片野遺跡などの中村川北岸に位置する遺跡にくらべて、やや少ないように思われる。また、調査中の印象ではあるが、西野田遺跡の中でも出土する遺構や地点に偏りがあったように感じられた。今回の西野田遺跡の調査では追求しきれなかった点であるが、こうした地域内あるいは集落内において暗文土師器の量や種類の偏りがある可能性を指摘しておきたい。

④土地利用について

これまで古代の遺構・遺物に関する成果について述べてきたが、通時的にみると、丘陵上で水源となる川も比較的近いという、居住するには立地条件が決して悪くない場所であるにもかかわらず、奈良時代前半に集落が途絶してからは、近世に至るまで再び人が居住した痕跡が薄い。飛鳥時代に集落が形成される以前についても、ごくわずかな縄文時代の遺

物以外は人の営みの痕跡を見いだすことは難しい。現在では畑地として利用されている部分が多いが、古代以降は畑地として利用されてきたのであろうか。

この土地に人が積極的に居住しなかった理由は、発掘調査からは明らかにできていない。しかしながら、長期にわたって人が居住し、現在も一部には民家が広がる近隣の下之庄東方遺跡などとの関わりを考えた時に、当該地域の中での西野田遺跡の存在する丘陵の土地利用に関する特質とも考えられる。

今回の調査で検出された数少ない古代以外の遺構として江戸時代の墓があることは、西野田遺跡が存在する丘陵がこの地域の地理的環境の中でどのように利用されてきたのか、そしてこの土地に対してどのような意識が存在していたのかを知るための、一つの手がかりとなるのではなかろうか。

⑤地域の中における西野田遺跡

以上で述べてきたような成果は、本節で繰り返し触れてきたように、西野田遺跡だけにとどまる問題ではない。西野田遺跡は、古代遺跡の密集が一つの特徴となっている当該地域の一角をなす遺跡であり、西野田遺跡の発掘調査成果が地域の歴史的特質を総合的に考えていく上で果たす意義は、決して小さくないものと思われる。

また、通時的にみれば、西野田遺跡が存在している丘陵が、当該地域における地理的環境あるいは生活環境の一部としてどのように利用されてきたのかという点は、地域の生活史に厚みを加えるための貴重な情報といえよう。

今回の調査成果および本報告が、こうした観点から活用され、当該地域の歴史像を豊かにすることに多少なりとも寄与できれば幸いである。

（石井智大）

註

（１）嬉野町役場『嬉野町史』1981、伊藤裕偉「ふたつの「こおりいち」～古代一志郡家に関する覚書」『斎宮歴史博物館研究紀要』11　斎宮歴史博物館　2002、松阪市『嬉野史』考古編　2006

（２）三重県埋蔵文化財センター『堀田　第３～５次調査』三重県埋蔵文化財調査報告229　2002、三重県埋蔵文化財センター『堀田　第６次調査』三重県埋蔵文化財調査報告261　2005

（３）一志町教育委員会『片野遺跡発掘調査報告』一志町埋蔵文化財調査報告８　1986、一志町教育委員会『片野遺跡Ⅳ』一志町埋蔵文化財調査報告21・23　2002

（４）平生遺跡調査団『平生遺跡発掘調査報告』嬉野町埋蔵文化財調査報告１　1976、三重県埋蔵文化財センター『平生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告85　1994

（５）尾張地域における須恵器編年については、以下の文献を参考にした。

楢崎彰一「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』　名古屋大学文学部　1959、楢崎彰一・斎藤孝正「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』　愛知県教育委員会　1983、齊藤孝正「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一様相―篠岡２号窯出土資料を中心として―」『名古屋大学文学部研究論集』107史学36　名古屋大学文学部　1990、尾野善裕「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅―猿投窯・湖西窯編年の再構築』第５分冊　東海土器研究会　2000

　また、暦年代や都城土器編年との併行関係については以下の文献を参考にした。

金田明大・池田裕英「宮都出土の東海産須恵器」『須恵器生産の出現から消滅―猿投窯・湖西窯編年の再構築』第５分冊　東海土器研究会　2000

（６）第５章参照。

（７）後半期に主軸方向が異なる掘立柱建物が混在していることになる。掘立柱建物の主軸方向の違いは、本報告の中で後半期としてまとめた時期の中においても集落変遷があったことを示すものかもしれない。

（８）松阪市　2006

（９）松阪市　2006、伊藤裕偉　2002

(10) 伊藤裕偉　2002

(11) 山中敏史「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題―氏寺論の再検討―」『地方官衙と寺院―郡衙周辺寺院を中心として―』　奈良文化財研究所　2005

(12) 堀田遺跡の調査では、出土した暗文土師器が飛鳥Ⅲ～平城宮Ⅱ期にかけてのものであり、その中でも飛鳥Ⅳ～平城宮Ⅰ期のものが中心となることが指摘されている（伊藤裕偉2002）。こうした集落の動態は、西野田遺跡とも共通性を持つものであり、堀田遺跡から西野田遺跡にかけての地域に分布する遺跡群が連動して形成されていることを窺わせる。

(13) 三重県教育委員会『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ　下之庄東方遺跡（高畑地区）』　1987、松阪市　2006

(14) 実際に、本書で報告した調査地と松阪市教育委員会による調査区の間には、遺構密度の薄い地区が存在するようである。

(15) 後述のように、被覆材と推定される砂礫を多く含み、焼けている特徴をもつ土の塊を指す。スサ入り状泥土塊（田崎2004）と呼ばれるものであり、焼成粘土塊（窯跡研究会1997）と呼ばれているものの一部であるが、焼成粘土塊は壁材を指す場合や道具類も含むことがある。今回出土した焼土塊は、壁材として検出されたものとは明らかに異なる特徴をもち壁材と区別できる。

(16) 杉山真二「植物珪酸体分析（プラント・オパール分析）」『考古学と植物』同成社　2000

(17) 窯跡研究会『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社　1997

(18) 竹田憲治「土師器焼成坑の立地と形態について」『研究紀要』第10号－特集－三重の生産遺構Ⅱ　三重県埋蔵文化財センター　2001

(19) 田崎博之『土器焼成・石器製作残滓からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究』平成13年～15年度科学研究費補助金〈基盤研究（Ｃ）（２）〉研究成果報告書　2004

(20) 望月精司「古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と土師器焼成技術」『窯跡研究』創刊号　2005

(21) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』1991

(22) 前掲（19）

(23) 竹内英昭「斎宮への道」『長岡京古文化論叢Ⅱ』1992

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
A	ＳＤ１	溝	中近世？	A-g～k19・20	(19.0)	0.7	0.17	土師器小片	ＳＤ２～４と関連か
A	ＳＤ２	溝	中近世？	A-g・h19	(7.1)	0.7	0.1	なし	
A	ＳＤ３	溝	中近世？	A-g～k19・20	16.6	0.9	0.15	土師器小片	ＳＤ２より新しい
A	ＳＤ４	溝	中近世？	A-119・20	(3.1)	0.3	0.17	なし	ＳＤ１～３と埋土似る
A	ＳＫ５	土坑		A-l・m19	(2.7)	1.6	0.08	なし	
ア	ＳＤ６	溝		a14～16	(1.8)	0.2	0.09	土師器小片	撹乱の可能性あり
ア	ＳＫ７	土坑	奈良以降？	b14	(0.7)	0.6	0.06	土師器小片	
ア	ＳＺ８	落ち込み？	奈良？	b14・15	(2.8)	(0.5)	0.1	土師器	ＳＺ９と一連か
ア	ＳＺ９	落ち込み？	奈良？	a・ｂ10～14	(17.6)	(0.95)	0.12	須恵器・土師器	
ア	ＳＫ10	土坑	奈良？	a・b18	0.9	0.7	0.49	土師器小片	別遺構と重複の可能性あり
ア	ＳＫ11	土坑？	奈良？	a・b17	(1.2)	2.4	0.25	須恵器・土師器	
ア	ＳＫ12	土坑	奈良？	a21	(0.26)	(0.26)	0.25	須恵器小片	カクランか
ア	ＳＫ13	土坑	奈良	a・b22	(0.9)	1.0	0.38	須恵器・土師器	
ア	ＳＫ14	土坑	奈良	a23	(0.4)	(0.8)	0.5	須恵器・土師器	ＳＤ16より新しい
ア	ＳＨ15	竪穴住居	飛鳥～奈良	a・b24	4.7	(1.2)	0.25	土師器	貼床・壁周溝を確認
ア	ＳＤ16	溝	奈良	a・b22・23	(1.2)	3.8	0.55	須恵器・土師器・土錘	ＳＨ15より新しい
ア	ＳＤ17	溝	奈良	a・b26	(1.2)	2.75	0.3	土師器	ＳＫ18より新しい
ア	ＳＫ18	土坑	奈良？	a25	(1.2)	(3.9)	0.3	土師器小片	
ア	ＳＨ19	竪穴住居	飛鳥～奈良	a・b28・29	(4.1)	(1.1)	0.25	土師器	竈・貼床・壁周溝を確認
ア	ＳＫ20	土坑	奈良？	a28	0.5	0.4	0.08	土師器	ＳＨ19より新しい
ア	ＳＫ21	土坑		a29	—	0.95	0.16	土師器	ＳＨ19より新しい
ア	ＳＫ22	土坑	奈良？	a28	0.9	0.78	0.5	須恵器・土師器	
ア	ＳＫ23	土坑		a27・28	1.1	(0.5)	0.1		
ア	ＳＨ24	竪穴住居	飛鳥～奈良	a・b26・27	(4.6)	(1.2)	0.17	土師器	貼床・壁周溝を確認
ア	ＳＫ25	土坑	奈良	a24	(0.7)	0.52	0.52	須恵器・土師器	ＳＨ15より新しい 柱穴か
ア	ＳＫ26	土坑		b28・29	(0.8)	1.0	0.34		柱穴の可能性あり

第14表　第１次調査遺構一覧表１

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
ア	ＳＫ27	土坑	奈良？	d6	1.1	0.45	0.11	土師器	
ア	ＳＫ28	土坑		f6	(1.0)	0.7	0.1	なし	
ア	ＳＫ29	土坑	奈良？	a10	(0.6)	(0.6)	0.22	土師器	
ア	ＳＢ30	掘立柱建物		a･b2･3	(3.2)	(1.4)	—	なし	一部検出・側柱？ 抜取り痕あり
B	ＳＺ31	道路遺構	～近世？	B-m～r17～21	21.0	3.2	0.26～0.29	須恵器・土師器・陶器・磁器（加工円盤）	路面相当部硬化・側溝一部確認 調査時ＳＺ101
B	ＳＫ32	土坑	奈良？	B-r18	1.5	1.4	0.39	土師器小片	調査時ＳＫ102
B	ＳＫ33	土坑	奈良？	B-s18	3.4	2.2	0.07	須恵器・土師器	不整方形・四隅にピットあり 調査時ＳＫ103
B	ＳＨ34	竪穴住居	飛鳥	B-p19･20	(2.6)	4.1	0.16	須恵器・土師器	東辺中央に竈を確認 調査時ＳＨ104
B	ＳＨ35	竪穴住居	奈良前半	B-n18･19	(3.4)	(4.2)	0.37	須恵器・土師器	貼床・東辺中央に竈を確認 調査時ＳＨ105
B	ＳＢ36	掘立柱建物		B-f･g18･19	5.8	3.6	—	なし	南北２間×東西４間・側柱、Ｎ５～10°Ｗ 調査時ＳＢ106
B	ＳＢ37	掘立柱建物		B-f･g15･16	3.6	3.6	—	なし	南北２間×東西２間・側柱、Ｎ５°Ｗ 調査時ＳＢ107

※遺構規模の数値で（　）のついたものは、部分的に検出された遺構や、他の遺構・撹乱によって破壊を受けている遺構の、現状で確認できる範囲での計測値である。
※深さについては基本的に各遺構の最深部を計測している。
※調査区名が片仮名のものについては、グリッド設定が当該調査区独自のものとなっている（詳細は第３章第２節参照）。

第15表　第１次調査遺構一覧表２

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長径（m）	幅・短径（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
C	ＳＫ38	土坑	飛鳥～奈良		1.2	(0.3)	0.4		小型台形土坑
C	ＳＫ44	土坑	飛鳥～奈良	C-y12	1.5	0.8	0.24	須恵器	小型台形土坑
C	ＳＫ45	土坑	飛鳥～奈良	C-x10	(1.8)	1.8	1.4	須恵器・土師器・瓦・土錘・鉄製鋤先	稲籾灰貯蔵
C	ＳＫ46	土坑	飛鳥	C-y7･8、D-a7･8	3.4	3.4	0.5	須恵器・土師器	人為的な埋め戻し・中央部に凹み
C	ＳＤ47	溝	奈良？	D-a～c7～9	(10.6)	0.48	0.7		ＳＦ61を切る
C	ＳＨ48	竪穴住居	飛鳥	D-c･d6･7	5.0	4.0	0.08	須恵器・土師器	ＳＢ64を切る
C	ＳＺ49	落ち込み	飛鳥～奈良	C-y7	(2.2)	2.0	0.08		一部に被熱痕・底に凹凸
C	ＳＫ50	土坑	飛鳥～奈良	D-b11	0.9	0.9	0.12	土師器	浅い
C	ＳＫ51	土坑	飛鳥～奈良	D-b13	1.3	0.6	0.22		小型台形土坑
C	ＳＫ52	土坑	飛鳥～奈良	D-a11	(0.7)	0.5	0.32		小型台形土坑？
C	ＳＫ53	土坑	飛鳥～奈良	D-a12	1.1	0.5	0.4		小型台形土坑
C	ＳＫ54	土坑	飛鳥	C-y11･12	1.3	0.7	0.36	須恵器・土師器	小型台形土坑？
C	ＳＫ55	土坑	奈良	C-y12･13	1.2	(0.6)	0.53	須恵器	小型台形土坑
C	ＳＫ56	土坑	飛鳥～奈良	C-x9	1.5	0.6	0.43		小型台形土坑
C	ＳＫ57	土坑	飛鳥～奈良	C-x7	1.4	1.0	0.32		小型台形土坑
C	ＳＫ58	土坑	飛鳥～奈良	C-x8	1.2	0.5	0.38	須恵器	小型台形土坑
C	ＳＫ59	土坑	飛鳥～奈良	C-x8	1.2	0.5	0.42	須恵器	小型台形土坑
C	ＳＫ60	土坑	飛鳥～奈良	D-a9	(1.0)	0.4	0.26		小型台形土坑
C	ＳＦ61	土師器焼成坑	飛鳥～奈良	D-a･b6･7	2.4	1.5	0.38	須恵器・土師器	焼成失敗品多数出土
C	ＳＨ62	竪穴住居	飛鳥～奈良	D-h･i2･3	3.8	3.3	0.07	須恵器・土師器	
C	ＳＢ63	掘立柱建物	飛鳥～奈良	D-d･e11･12	3.4	3.1	—	土師器	側柱
C	ＳＢ64	掘立柱建物	飛鳥	D-c･d6～8	4.9	4.5	—		総柱
C	ＳＢ65	掘立柱建物	飛鳥～奈良	D-d･e2･3	4.2	4.1	—		側柱
C	ＳＫ77	土坑	飛鳥～奈良	D-h3	1.4	1.1	0.29	土師器	ＳＨ62を切る・焼土多量に含む
C	ＳＤ78	溝	飛鳥～奈良	D-a6	(1.8)	0.6	0.12		ＳＤ47と一連？
C	ＳＫ79	土坑	飛鳥～奈良	D-i3	(0.7)	0.7	0.12	土師器	焼土多量に含む

第16表　第２次調査遺構一覧表１

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長径（m）	幅・短径（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
コ	ＳＢ40	掘立柱建物	飛鳥～奈良	A-j･k2	3.9	(0.8)	—	須恵器・土師器	建て替え痕跡あり
コ	ＳＤ66	溝	奈良	A-q2･3	(3.6)	2.5	0.56	須恵器・土師器・土管状土製品・加工礫	一部に被熱痕
コ	ＳＫ67	土坑	飛鳥～奈良	A-o2･3	0.8	0.7	0.28	土師器	不整形・倒木痕？
コ	ＳＫ68	土坑	飛鳥	A-p･q2･3	1.6	0.9	0.28	須恵器	不整形・倒木痕？
コ	ＳＢ69	掘立柱建物	飛鳥～奈良	A-h～k2	4.0	(0.7)	—		建て替え痕跡あり
コ	ＳＫ70	土坑	飛鳥～奈良	B-i･k2･3	(2.6)	(1.9)	0.72	土師器	方形・ＳＫ46に類似？
コ	ＳＫ71	土坑	奈良	B-l･m2･3	3.8	(1.2)	0.35	須恵器･土師器・瓦	
コ	ＳＫ72	土坑	飛鳥	B-p2･3	1.1	1.1	0.18	土師器	
コ	ＳＫ73	土坑	飛鳥～奈良	B-w2	0.7	0.6	0.26	須恵器・土師器	甕口縁埋置
コ	ＳＨ74	竪穴住居	奈良	C-l2･3	(3.0)	(2.7)	0.2	須恵器・土師器	
コ	ＳＢ75	掘立柱建物	飛鳥～奈良	C-j･k2･3	(2.3)	(1.5)	—	土師器	一部検出
コ	ＳＢ76	掘立柱建物	飛鳥～奈良	C-g･h2･3	(5.0)	(1.6)	—	土師器	一部検出・側柱？
コ	ＳＫ80	土坑	飛鳥～奈良	C-c2･3	(2.0)	(1.9)	(0.9)	須恵器・土師器	井戸か？
コ	ＳＫ81	土坑	飛鳥～奈良	B-h･i2･3	5.2	(1.8)	0.32		竪穴住居の可能性あり
コ	ＳＫ82	土坑	飛鳥～奈良	B-i･j2･3	(3.5)	(0.5)	0.36		
コ	ＳＫ83	土坑	飛鳥～奈良	B-j2	(1.2)	(0.5)	0.3		一部に被熱痕
コ	ＳＫ84	土坑	飛鳥～奈良	B-j2･3	3.2	2.5	0.69		
ウ	ＳＫ41	土坑	飛鳥～奈良	—	(1.9)	(0.4)	0.2		
ウ	ＳＫ42	土坑	飛鳥～奈良	—	1.4	0.7	0.4	須恵器・土師器	
エ	ＳＡ39	柱列	飛鳥～奈良	—	(1.7)	—	—	土師器	掘立柱建物か？
エ	ＳＺ43	落ち込み	飛鳥～奈良	—	(0.8)	(0.6)	0.05	土師器	

※遺構規模の数値で（　）のついたものは、部分的に検出された遺構や、他の遺構・撹乱によって破壊を受けている遺構の、現状で確認できる範囲での計測値である。
※深さについては基本的に各遺構の最深部を計測している。
※調査区名が片仮名のものについては、グリッド設定が当該調査区独自のものとなっている（詳細は第３章第２節参照）。

第17表　第２次調査遺構一覧表２

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
F	ＳＨ85	竪穴住居	飛鳥後	D-i・j1・2	4.7	4.2	0.2	須恵器・土師器	貼床・貼床下土坑（ＳＫ101）を確認
シ	ＳＫ86	土坑		a・b5・6	(3.7)	(2.1)	0.25		
シ	ＳＺ87	落ち込み		a・b7・8	(6.1)	(1.9)	0.3	須恵器・土師器	最下層で焼土・炭化物多く含む
G	ＳＫ88	土坑		D-b16	1.3	0.6	0.28	土師器	ＳＫ89より新しい
G	ＳＫ89	土坑		D-b16・17	1.0	0.5	0.19	須恵器・土師器	ＳＫ88より古い
シ	ＳＡ90	柱列	飛鳥後～奈良	a・b3・4	(4.3)	—	—	土師器	
F	ＳＢ91	掘立柱建物	飛鳥後～奈良	D-112	(4.0)	(3.3)	—	須恵器・土師器	
G	ＳＨ92	竪穴住居	奈良？	D-b・c15・16	4.9	4.9	0.04	土師器	北東辺に竈 壁周溝・主柱穴あり
G	ＳＫ93	土坑	奈良	D-b・c16・17	1.6	1.1	0.14	土師器・砥石	ＳＨ92より新しい
G	ＳＫ94	土坑		D-b・c16	0.8	0.7	0.22	土師器	ＳＨ92より新しい
G	ＳＢ95	掘立柱建物		D-d・e14・15	4.8	2.8	—	須恵器・土師器	ＳＨ92より新しい ２間×３間
G	ＳＫ96	土坑	奈良	D-e・f15・16	4.3	2.9	0.13	須恵器・土師器	床面に多くの小穴
G・H	ＳＢ97	掘立柱建物	飛鳥～奈良	D-d～g17・e～g18	4.8	(4.0)	—	須恵器・土師器	２間×３間
G	ＳＫ98	土坑		D-b16	0.9	0.7	0.24	土師器	ＳＨ92より新しい
H	ＳＫ99	土坑	奈良	D-d・e18	2.8	(1.0)	0.18	須恵器・土師器	床面に多くの小穴
H	ＳＫ100	土坑		D-e19	1.7	1.1	0.34	土師器	底面に小穴あり
F	ＳＫ101	土坑	飛鳥後	D-j1・2	1.3	1.2	0.14	須恵器・土師器	ＳＨ85貼床下土坑
H	ＳＫ102	土坑		D-c・d18	1.3	0.6	0.33	土師器	小型台形土坑か？
H	103			D-e18	1.0	0.6	—	土師器	調査当初ＳＫ103 ２個のピットの重複のため、D-e18pit２・pit３に変更
H	ＳＫ104	土坑		D-c19	1.0	0.6	0.26	須恵器・土師器	小型台形土坑か？
H	ＳＫ105	土坑		D-f19・20	(1.5)	1.2	0.62	須恵器・土師器	木根の可能性あり
H	ＳＫ106	土坑		D-b18	0.9	0.5	0.08	須恵器・土師器	撹乱の可能性あり
H	ＳＨ107	竪穴住居		D-f・g18	5.0	—	0.03	須恵器・土師器	東辺に竈？、壁周溝あり
H	ＳＺ108	落ち込み		D-c24	1.2	0.9	0.27	土師器	木根の可能性あり
H	ＳＫ109	土坑	飛鳥～奈良	C-x25	1.0	(0.5)	0.61	須恵器・土師器・丸瓦	礫多量に含む、底ほど大きな礫
H	ＳＺ110	落ち込み		C-w25	2.4	1.6	0.14	須恵器・土師器	木根の可能性あり

第18表　第３次調査遺構一覧表１

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
H	ＳＺ111	落ち込み		H-x2	1.6	1.0	0.07	土師器	
H	ＳＺ112	落ち込み	飛鳥～奈良	H-x3	1.1	0.6	0.03	土師器	竪穴住居の可能性強い
H	ＳＫ113	土坑		D-g18	1.25	(1.0)	0.2	土師器・丸瓦	ＳＨ107貼床下土坑
L	ＳＫ114	土坑	飛鳥末～奈良	B-y20・21、C-a・b20・21	—	—	—	須恵器・土師器	調査区外に延びる
L	ＳＫ115	土坑	飛鳥末～奈良	B-w・x23・24	—	1.7	0.26	須恵器・土師器	調査区外に延びる
L	116			C-e22	4.2	1.7	0.24		調査時ＳＤ116
L	117	撹乱		C-b22	(1.0)	(0.9)	0.04		調査時ＳＺ117
L	ＳＫ118	土坑	飛鳥末～奈良	C-a・b20・21	1.3	1.2	0.61	土師器・炭化材	ＳＫ114内、北壁中心に被熱
L	ＳＢ119	掘立柱建物	飛鳥後～奈良	C-e～g21・22	5.3	3.5	—	土師器	２間以上×３間
J	ＳＨ120	竪穴住居	飛鳥後～奈良	H-r・ｓ1・2	3.3	2.7	0.26	須恵器・土師器・瓦	東辺に竈、壁周溝・主柱穴なし
J	ＳＫ121	土坑	飛鳥後～奈良	H-r1	2.5	(0.6)	0.4	須恵器・土師器	出土遺物多い。 ＳＨ120の廃棄土坑か。
J	ＳＫ122	土坑		H-r1	1.0	0.5	0.3	土師器	ＳＨ120より新しい。
J	ＳＫ123	土坑		H-u2	0.9	0.5	0.11	土師器	
J	ＳＫ124	土坑	奈良？	C-r25	1.7	(0.8)	0.3	土師器	
L	125			C-g23	3.3	2.5	0.12	土師器	調査時ＳＫ125
L	ＳＢ126	掘立柱建物	奈良前	C-h～k23～25	10.0	4.4	—	須恵器・土師器・鉄釘	２間×５間
L	ＳＢ127	掘立柱建物	奈良前	C-e～g25、H-e～h1	(6.7)	(4.5)	—	須恵器・土師器	四面庇、布掘り
L	128			H-e1	—	—	—	土師器	調査時ＳＫ128
L	ＳＫ129	土坑	飛鳥後～奈良	C-j22・23	(1.4)	(1.0)	0.05	須恵器・土師器	
L	ＳＫ130	土坑	飛鳥後～奈良	C-j22・23	1.6	0.9	0.22	須恵器・土師器	
L	ＳＨ131	竪穴住居	飛鳥後～奈良	H-j・k1～3	(2.5)	(2.3)	0.09	須恵器・土師器	貼床下土坑（ＳＫ161）を確認
L	ＳＨ132	竪穴住居	飛鳥後～奈良	C-j・k25、H-j・k1	4.0	(1.1)	0.22	須恵器・土師器	
L	ＳＨ133	竪穴住居	飛鳥後～奈良	H-k5・6、H-e5	(2.5)	(1.2)	0.05	土師器	
L	ＳＫ134	土坑	飛鳥後	C-j・k25,H-j1	5.1	(2.0)	0.24	須恵器・土師器	
L	ＳＢ135	掘立柱建物	奈良	H-k3・4	(4.6)	—	—	土師器	柱穴の規模が１ｍ前後
J	ＳＸ136	土壙墓	江戸後期	C-s・t24	0.9	0.8	0.2	須恵器・土師器・陶器・銭貨（寛永通寶）・人骨	屈葬人骨１体、六文銭（寛永通寶６枚）出土

第19表　第３次調査遺構一覧表２

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
Ｉ・Ｊ	ＳＫ137	土坑		C-s22	0.7	0.6	0.21	土師器	
Ｊ	138			C-s24	—	—	—		掘削途中で撹乱と判断
Ｉ	ＳＨ139	竪穴状遺構	飛鳥後～奈良	C-r･s20～22	7.3	4.1	0.12	須恵器・土師器・土錘	壁周溝・壁柱穴あり 工房的施設か
Ｉ	140			C-q20	1.3	0.7	0.66		調査時ＳＫ140 ＳＢ179の柱穴 C-l20pit１に変更
Ｉ	141			C-q21	0.9	0.7	0.72		調査時ＳＫ141 ＳＢ179の柱穴 C-q21pit２に変更
Ｉ	ＳＫ142	土坑	飛鳥後～奈良	C-t･u21･22	(0.4)	(0.4)	0.3	須恵器・土師器・土錘・刀子	調査時ＳＨ142 北西辺焼土塊
Ｉ	ＳＫ143	土坑	飛鳥～奈良	C-t19･20	5.4	(2.4)	0.08	須恵器・土師器	調査時ＳＨ143
Ｉ	ＳＫ144	土坑		C-s22	1.7	0.8	0.25	土師器	ＳＨ139との新旧関係不明
Ｉ	ＳＫ145	土坑	飛鳥～奈良	C-t20	0.6	0.4	0.4	土師器	ＳＫ143内
Ｉ	ＳＫ146	土坑	飛鳥～奈良		1.3	1.1	0.33	須恵器・土師器	ＳＫ143内
Ｉ	ＳＫ147	土坑	飛鳥～奈良	C-t19	1.4	(0.3)	0.2	土師器	ＳＫ143内
Ｉ	ＳＫ148	土坑		C-u21	0.9	0.7	0.17		ＳＫ142内
Ｉ	ＳＫ149	土坑	飛鳥～奈良	C-u21	1.7	(0.9)	0.23	須恵器・土師器	ＳＫ142内
Ｉ	ＳＫ150	土坑	飛鳥～奈良	C-s･t17	2.3	1.7	0.24	須恵器・土師器・土錘	ＳＢ157より新しい
Ｉ	151			C-s･t17	0.8	0.8	0.6	土錘	調査時ＳＫ151 ＳＢ157の柱穴 C-t27pit３に変更
Ｉ	ＳＫ152	土坑		C-q18	2.4	(0.8)	0.26	須恵器・土師器	スレートが出土しており、撹乱の可能性あり
Ｉ	153			C-q20	1.1	1.0	0.68		調査時ＳＫ153 ＳＢ179の柱穴 C-q20pit２に変更
Ｉ	ＳＫ154	土坑	飛鳥～奈良	C-s17･18	2.5	1.5	0.19	須恵器・土師器	
Ｉ	ＳＨ155	竪穴住居		C-q･r19･20	3.9	(2.3)	0.1	土師器	上層部削平のため、北辺確認できず
Ｉ・Ｋ	ＳＢ156	掘立柱建物	飛鳥～奈良	C-p～r17～19	9.6	5.3	—	須恵器・土師器	３間？×４間
Ｉ	ＳＢ157	掘立柱建物	飛鳥～奈良	C-s･t16･17	4.0	(3.5)	—	土師器・土錘	ＳＫ150より古い ２間×２間以上
Ｉ	ＳＫ158	土坑	奈良	C-s20	1.3	1.3	0.25	土師器	ＳＨ139内 床下土坑の可能性あり
Ｉ	ＳＨ159	竪穴住居		C-s･t21	3.8	—	0.08	須恵器・土師器	撹乱のため北辺確認できず
Ｉ	160	撹乱		C-s･t21	1.3	0.9	0.16	須恵器・土師器	木根の可能性あり 調査時ＳＫ160
Ｌ	ＳＫ161	土坑	飛鳥末～奈良	H-k2	2.0	1.3	0.22		ＳＨ131貼床下土坑
Ｉ	162	撹乱		C-t20･21	1.1	0.9	0.24	土師器	木根の可能性あり 調査時ＳＫ162

第20表　第３次調査遺構一覧表３

地区	遺構名	種類	時代	グリッド	長さ・長軸（m）	幅・短軸（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
セ	ＳＫ163	土坑	飛鳥～奈良	e～g1･2	5.6	(0.7)	0.17	須恵器・土師器	ＳＫ164と最初一連で掘削 新旧関係不明
セ	ＳＫ164	土坑	奈良	f･g1･2	1.5	1.4	0.28	須恵器・土師器	ＳＫ163と最初一連で掘削 新旧関係不明
セ	ＳＫ165	土坑	飛鳥後	i･j1･2	4.1	(1.2)	0.48	須恵器・土師器	円面硯出土 ＳＫ172・181と最初一連で掘削
K	ＳＨ166	竪穴住居	飛鳥後	C-m～o19～21	6.6	6.0	0.21	須恵器・土師器・鉄製品	貼床下土坑（ＳＫ182･183･184）を持つ 主柱穴確認
K	ＳＫ167	土坑	飛鳥末	C-n･o18･19	(3.1)	(2.6)	0.17	須恵器・土師器	
K	ＳＫ168	土坑	飛鳥末～奈良	C-l･m18	(3.5)	(1.5)	0.08	土師器	
セ	ＳＢ169	掘立柱建物	飛鳥～奈良	k･l1･2	7.8	—	—	土師器	２間以上×３間以上
K	170			C-n21	1.3	1.2	0.22	土師器	調査時ＳＫ170
K	ＳＫ171	土坑	飛鳥～奈良	C-n～p22～24	—	—	—		ＳＨ175～177に変更
セ	ＳＫ172	土坑		h･i1･2	(1.3)	(1.2)	0.38	土師器	ＳＫ165・181と最初一連で掘削 ＳＫ181より新しい
セ・L	ＳＢ173	掘立柱建物		c･d1･2	(7.0)	4.3	—	須恵器	２間×４間以上
K	ＳＫ174	土坑	飛鳥末～奈良	C-n･o24･25	(5.2)	(3.0)	0.37	須恵器・土師器・鉄製品	
K	ＳＨ175	竪穴住居	飛鳥後	C-n～p22･23	4.0	(3.2)	0.28	須恵器・土師器	
K	ＳＨ176	竪穴住居	飛鳥末～奈良	C-n･o22･23	4.7	(1.6)	0.1	土師器	
K	ＳＨ177	竪穴住居	飛鳥末～奈良前	C-n･o22～24	(5.8)	(4.5)	0.21	須恵器・土師器	
K	ＳＫ178	土坑	飛鳥末～奈良	C-m･n24	2.6	2.4	0.13	土師器	
I・K	ＳＢ179	掘立柱建物	奈良初	C-o～q19～21	9.6	4.4	—	須恵器・土師器	
K	ＳＫ180	土坑	飛鳥末～奈良	C-l･m24	2.5	1.4	0.13	須恵器・土師器	
セ	ＳＫ181	土坑		i1･2	1.6	(0.7)	0.74		ＳＫ165・172と最初一連で掘削 ＳＫ172より古い
K	ＳＫ182	土坑	飛鳥後	C-m･n20	1.9	1.4	0.16	土師器	ＳＨ166貼床下土坑
K	ＳＫ183	土坑	飛鳥後	C-n20･21	2.4	1.4	0.16	須恵器・土師器	ＳＨ166貼床下土坑
K	ＳＫ184	土坑	飛鳥後	C-n20	1.5	1.2	0.19		ＳＨ166貼床下土坑
K	ＳＢ185	掘立柱建物	奈良前	C-m～o22･23	7.8	4.5	—	須恵器・土師器	
K	ＳＢ186	掘立柱建物	飛鳥末～奈良前	C-l～n18･19	6.9	3.0	—	須恵器・土師器	南側柱列が不均等？
E・C	ＳＢ187	掘立柱建物		D-c2	3.7	3.4	—		２間×２間

※遺構規模の数値で（　）のついたものは、部分的に検出された遺構や、他の遺構・撹乱によって破壊を受けている遺構の、現状で確認できる範囲での計測値である。
※深さについては基本的に各遺構の最深部を計測している。
※調査区名が片仮名のものについては、グリッド設定が当該調査区独自のものとなっている（詳細は第３章第２節参照）。

第21表　第３次調査遺構一覧表４

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
1	B	1006-07	須恵器	壺	SH34	B-p20	10.0	—	—	—	灰白5Y7/1	2/12	
2	B	1006-06	須恵器	杯Ｂ蓋	SH34	B-q20	16.2	—	—	—	灰N4/0	2/12	取り上げ№15
3	B	1006-01	土師器	皿Ａ	SH34	B-p20	21.1	—	—	—	橙5YR6/6	2/12	取り上げ№２ 放射状暗文
4	B	1008-07	土師器	杯Ａ	SH34	B-p20	—	14.0	—	—	橙7.5YR7/6	1/12	放射状暗文
5	B	1004-03	土師器	杯Ａ	SH34	B-q19	20.0	—	—	—	橙5YR6/6	2/12	放射状暗文 竈付近で出土
6	B	1006-02	土師器	杯Ａ	SH34	B-q20	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	放射状暗文
7	B	1006-03	土師器	杯Ａ	SH34	B-q20	14.3	—	3.3	—	にぶい橙7.5YR6/4	2/12	放射状暗文 取り上げ№14
8	B	1006-04	土師器	杯Ｃ	SH34	B-p20	—	—	—	—	にぶい橙5YR6/4	—	放射状暗文 取り上げ№７
9	B	1006-05	土師器	杯Ｃ	SH34	B-p19	12.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	1/12	放射状暗文
10	B	1005-03	土師器	皿Ａ	SH34	B-q19	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	内面に炭化物付着 外面にヘラ記号 竈付近で出土
11	B	1004-02	土師器	薬壺？	SH34	B-q19	16.2	—	—	—	橙7.5YR6/6	1/12	竈付近で出土
12	B	1005-02	土師器	甕	SH34	B-q19	15.7	—	—	—	橙7.5YR6/6	3/12	取り上げ№６
13	B	1005-01	土師器	甕	SH34	B-q19	24.0	—	—	—	明黄褐10YR6/6	2/12	外面に煤付着、ヘラ描き
14	B	1004-01	土師器	把手付鍋	SH34	B-q19	46.0	—	—	—	橙7.5YR7/6	1/12	取り上げ№４
15	B	1009-05	須恵器	杯	SH35	B-n19	12.0	—	—	—	浅黄2.5Y7/4	1/12	
16	B	1009-03	須恵器	高杯	SH35	B-n19	—	10.0	—	—	灰5Y6/1	2/12	
17	B	1009-01	須恵器	壺	SH35	B-n19	18.0	—	—	—	灰5Y6/1	1/12	
18	B	1010-02	土師器	杯Ｇ	SH35	B-n19	12.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	4/12	
19	B	1010-03	土師器	杯Ｇ	SH35	B-n19	11.4	—	—	—	外：浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 7.5YR8/3	9/12	摩滅激しい 取り上げ№２
20	B	1008-02	土師器	皿Ｂ	SH35	B-n19		—	—	—	にぶい橙5YR7/4	—	螺旋状暗文・放射状暗文
21	B	1008-03	土師器	甕	SH35	B-n19	15.0	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	
22	B	1011-01	土師器	甕	SH35	B-n19	15.8	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	4/12	体部外面に煤付着
23	B	1011-02	土師器	甕	SH35	B-n19	14.5	—	16.7	—	外：にぶい黄褐 10YR5/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4	8/12	取り上げ№３
24	B	1013-01	土師器	甕	SH35	B-n19	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/4	—	一部黒変 取り上げ№１ 胴部最大径27.5cm

第22表　第１次調査遺物観察表１

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
25	B	1008-04	須恵器	杯Ａ蓋	SZ31	B-p19	11.8	—	1.3	—	灰黄2.5Y6/2	3/12	
26	B	1008-06	土師器	皿Ｂ	SZ31	B-q19	—	13.4	—	—	橙7.5YR7/6	1/12	
27	B	1009-07	磁器	加工円盤	SZ31	B-q19	—	6.8	—	—		1/12	取り上げ№.１
28	B	1012-05	須恵器	杯Ａ蓋	包	B-o19	13.0	—	—	—	灰5Y6/1	1/12	口径大きくなる可能性あり
29	B	1012-04	須恵器	杯Ｇ	第２層	B-g21	10.5	—	—	—	灰5Y5/1	2/12	
30	B	1012-02	須恵器	杯Ａ	包	B-n21	12.0	—	3.2	—	灰5Y6/1	2/12	
31	B	1012-03	須恵器	杯	撹乱	B-c16	17.0	—	—	—	灰5Y6/1	1/12	
32	B	1012-01	須恵器	練鉢	撹乱	B-n20	15.6	—	—	—	灰白5Y7/1	1/12	
33	B	1013-02	須恵器	加工円盤	表土	B-m17	—	—	—	175.1	灰黄2.5Y6/2 黄灰2.5Y6/1		壺の高台部を使用
34	B	1013-04	土製品	管状土錘	包	B-n21	5.8	2.1	—	18.0	にぶい黄橙 10YR6/3		
35	B	1012-06	銅製品	煙管吸口	第１層	B-p20	7.3	—	—	—			
36	B	1012-07	金属製品	銭貨	包	B-q19	—	—	—	—			寛永通寶
37	B	1007-02	土師器	甕	撹乱	B-n19	15.8	—	—	—	橙7.5YR7/6	11/12	
38	B	1010-01	土師器	甕	包	B-o19	25.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	4/12	
39	ア	1003-05	須恵器	壺？	SD16	a23	18.0	—	—	—	灰Ｎ5/0	1/12	蓋の可能性あり
40	ア	1003-03	須恵器	高杯	SD16	a23	—	—	—	—	灰Ｎ6/0	—	加工あり・加工部分の破断面に煤付着
41	ア	1001-06	土師器	杯Ｂ	SD16	a23	10.8	7.4	3.3	—	浅黄橙10YR8/3	9/12	
42	ア	1001-05	土師器	甕	SD16	a23	18.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	3/12	口縁部外面に煤付着 内面に炭化物付着 摩滅激しく調整不明瞭
43	ア	1001-02	土師器	甕	SD16	a23	23.2	—	—	—	橙5YR6/6 浅黄橙10YR8/3	3/12	
44	ア	1001-01	土師器	甕	SD16	a23	20.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4 断面：暗灰N3/0	3/12	
45	ア	1003-02	土製品	管状土錘	SD16	a23	5.5	1.6	—	14.865	にぶい黄橙 10YR7/4		一部黒斑
46	ア	1002-05	土師器	杯Ａ	SH24	a26	16.0	—	—	—	橙5YR6/6	—	
47	ア	1002-04	土師器	杯Ａ	SH24	b26	19.0	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	摩滅激しく調整不明瞭
48	ア	1002-06	土師器	甕	SH24	a26	19.4	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4 断面：暗灰N3/0	2/12	

第23表　第１次調査遺物観察表２

№.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
49	ア	1003-01	土師器	甕	SD17	b26	18.2	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	2/12	
50	ア	1001-03	土師器	甕	SD17	b26	23.0	—	—	—	明黄褐10YR7/6	1/12	口縁部外面に煤付着
51	ア	1009-04	須恵器	杯Ｂ蓋	SK13	a22	—	—	—	—	灰白7.5Y7/1 灰7.5Y6/1	—	
52	ア	1009-02	須恵器	杯Ａ	SK14	a23	11.0	—	—	—	灰白2.5Y7/1	3/12	
53	ア	1007-04	土師器	皿Ｂ	SK14	a23	—	14.6	—	—	橙5YR6/6	—	螺旋状暗文・放射状暗文
54	ア	1009-06	不明		SK23	a28	—	—	—	—	にぶい褐7.5YR5/3 褐灰10YR4/1	—	
55	ア	1008-05	土師器	杯Ｇ	SK25	a24	10.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
56	ア	1007-03	土師器	杯Ｇ	SH15	a24	13.6	—	4.1	—	橙7.5YR7/6	4/12	
57	ア	1008-01	土師器	皿Ａ	SH15	a24	—	16.8	—	—	黄橙7.5YR7/8	3/12	暗文？
58	ア	1007-01	須恵器	壺	SH15	a24	—	—	—	—	オリーブ黒 7.5Y3/2 灰白5Y7/1	—	外面にあたり痕？
59	ア	1001-04	土師器	甕	SH19	a27	18.4	—	—	—	浅黄橙10YR8/4 橙5YR6/6	1/12	竈北袖中から出土
60	ア	1003-04	須恵器	杯Ｈ蓋	撹乱	ａ８	14.6	—	3.7	—	灰N6/0	2/12	外面天頂部にヘラのあたり痕？
61	ア	1003-06	須恵器	杯Ｂ	西壁第４層	a28	—	11.0	—	—	灰白N7/0	1/12	
62	ア	1013-03	陶器	加工円盤	表土	—	2.5	2.6	0.8	6.14	釉：灰赤10R6/2		擂鉢を加工
63	ア	1002-02	土師器	甕	—	a27	18.6	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	2/12	
64	ア	1002-01	土師器	把手付鍋	表採	—	37.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4 断面：灰N4/0	1/12	
65	範囲確認調査坑	1002-03	土師器	杯Ａ	—	—	22.0	—	5.6	—	外：橙5YR7/6 内：にぶい橙10YR7/3	2/12	螺旋状暗文 竪穴住居内出土遺物

※№.は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。
※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。1001～は第１次調査、2001～は第２次調査、3001～は第３次調査の出土品である。
※胎土・釉薬などの色調は『新版　標準土色帖』に拠る。釉薬の色調などは合致する色名が存在しない場合もあるが、その場合は最も近似すると思われる色名を記している。
※色調欄の「胎」は胎土、「釉」は釉薬の色調を表す。また、「表」は表面、「内」は内面、「外」は外面の色調を表す。
※土器・陶磁器の残存度については、口縁部ないし底部を12分割し、そのうちの残存度を記している。「—」は小片であるなどのため残存度が示せないものである。

第24表　第１次調査遺物観察表３

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
67	C	2015-03	須恵器	杯H	SH48	D-d6	—	—	—	—	灰7.5Y6/1	—	
68	C	2015-04	土師器	甕	SH48	D-d6	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	
69	C	2015-05	土師器	甕？	SH48	D-d7	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	把手のみ
70	C	2011-01	須恵器	杯Ｂ蓋	SH62	D-h3	12.6	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	2/12	貼床内出土
71	C	2012-05	須恵器	杯Ａ？	SH62	D-i3	—	—	—	—	灰5Y5/1	—	
72	C	2012-03	土師器	甕	SH62	D-h3	17.8	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	1/12	
73	C	2013-02	土師器	甕	SH62	D-h3	17.4	—	—	—	橙7.5YR7/6	2/12	
74	C	2013-01	土師器	甕	SH62	D-i3	26.8	—	—	—	明黄褐10YR7/6	1/12	
75	C	2013-03	土師器	竈	SH62	D-h3	32.8	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	1/12	
76	C	2004-04	土師器	甕	SB63	D-d12	13.6	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	1/2	
77	C	2006-03	須恵器	杯Ａ蓋	SK45	C-x9・10	—	—	—	—	黄灰2.5Y6/1	—	
78	C	2006-04	須恵器	杯Ａ？	SK45	C-x9・10	—	—	—	—	内：灰N6/0 外：灰N5/0	—	９層（最下層）出土
79	C	2007-01	須恵器	短頸壺	SK45	C-x9	—	—	—	—	内：黄灰2.5Y6/1 外：灰白5Y7/1	1/12	
80	C	2006-06	須恵器	壺	SK45	C-x9・10	—	—	—	—	灰5Y6/1	—	
81	C	2007-03	土師器	杯C	SK45	C-x9	—	—	3.0	—	内：橙7.5YR7/6 外：にぶい橙7.5YR7/4	—	外面ミガキ
82	C	2010-02	土師器	椀C	SK45	C-x9・10	13.0	—	4.0	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	椀Ｃ？
83	C	2006-05	土師器	杯Ｃ？	SK45	C-x9・10	—	—	—	—	橙5YR5/6	—	内外面ミガキ
84	C	2006-01	土師器	皿Ａ	SK45	C-x9・10	22.7	—	2.8	—	内：にぶい橙5YR6/4 外：橙5YR6/6	2/12	暗文土師器
85	C	2006-02	土師器	杯Ｂ	SK45	C-x9・10	—	12.0	—	—	にぶい橙7.5YR	2/12	
86	C	2007-04	土師器	不明	SK45	C-x9	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	
87	C	2010-01	土師器	甕	SK45	C-x9・10	19.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	4/12	
88	C	2010-03	土師器	甕？	SK45	C-x9	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	—	把手のみ
89	C	2009-02	土師器	甕？	SK45	C-x9	—	—	—	—	内：にぶい黄橙10YR7/4 外：にぶい黄橙10YR7/3	—	把手のみ
90	C	2009-01	土師器	甕	SK45	C-x9	28.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2/12	把手あり
91	C	2008-01	土師器	甑	SK45	C-x9・10	—	—	—	—	にぶい橙10YR7/4	—	
92	C	2007-02	瓦	平瓦	SK45	C-x9	—	—	2.0	—	灰N4/0	—	布目
93	C	2007-05	土製品	管状土錘	SK45	C-x9	5.9	1.8	—	15.23	にぶい橙5YR7/4・褐灰5YR5/1	完形	
94	C	2046-01	金属製品	鋤先	SK45	C-x9・10	—	—	—	—	—	完形	Ｕ字形・鉄製
95	C	2014-03	須恵器	杯Ａ蓋	SK46	C-y8	10.4	—	2.6	—	灰N6/0・灰白5Y7/1	3/12	宝珠つまみ
96	C	2012-02	須恵器	壺？	SK46	C-y7	—	—	—	—	灰7.5Y4/1	1/12	壺蓋の可能性あり

第25表　第２次調査遺物観察表１

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
97	C	2014-04	土師器	高杯	SK46	C-y8	—	12.0	—	—	橙5YR6/6	2/12	
98	C	2014-02	土師器	甕	SK46	C-y8	19.7	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
99	C	2012-01	土師器	杯G	SK77	D-h3	13.2	—	—	—	橙2.5YR7/6	1/12	椀C？
100	C	2011-06	土師器	甕	SK77	D-h3	16.8	—	—	—	明黄褐10YR7/6	1/12	
101	C	2012-04	土師器	杯B蓋	SK79	D-i3	20.6	—	—	—	黄橙10YR8/6	1/12	
102	C	2003-04	須恵器	杯A蓋	SK44	C-y12	—	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	—	
103	C	2011-05	土師器	甕	SK50	D-b11	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/6	—	
104	C	2011-03	須恵器	杯A蓋	SK54	C-y11	11.2	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	1/12	
105	C	2011-04	須恵器	杯A	SK54	C-y11	—	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	—	ヘラ切り無調整
106	C	2010-04	土師器	甕？	SK54	C-y11	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	—	把手のみ
107	C	2011-02	須恵器	杯B	SK55	C-y12	—	10.0	—	—	灰黄2.5Y6/2	2/12	
108	C	2004-02	須恵器	高杯	SK58	C-y8	—	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	2/12	
109	C	2003-02	須恵器	長頸壺	p3	C-y8	11.0	—	—	—	褐灰10YR5/1	4/12	
110	C	2038-02	土師器	椀C	SF61	D-a7	10.1	—	3.7	—	灰白2.5Y8/2	6/12	取り上げNo.16
111	C	2040-01	土師器	椀C	SF61	D-a7	10.7	—	3.6	—	浅黄2.5Y7/3	6/12	取り上げNo.13・20
112	C	2043-03	土師器	椀C	SF61	D-a7	11.0	—	3.1	—	にぶい黄橙10YR7/3	6/12	椀C？
113	C	2038-03	土師器	椀C	SF61	D-a・b7	10.5	—	3.3	—	灰白2.5Y8/2	6/12	取り上げNo.19・44
114	C	2038-06	土師器	椀C	SF61	D-a7	11.5	—	—	—	淡黄橙10YR8/3	3/12	取り上げNo.41
115	C	2038-04	土師器	椀C	SF61	D-a7	11.4	—	3.4	—	淡黄2.5Y8/3	10/12	取り上げNo.９・29
116	C	2039-01	土師器	椀C	SF61	D-a7	15.0	—	4.9	—	灰黄褐10YR5/2	1/12	取り上げNo.６
117	C	2038-05	土師器	椀C	SF61	D-b7	16.2	—	—	—	淡黄橙10YR8/3	1/12	取り上げNo.52
118	C	2038-01	土師器	椀C	SF61	D-a7	15.8	—	—	—	浅黄2.5Y8/3	5/12	取り上げNo.30
119	C	2040-06	土師器	椀C	SF61	D-a・b7	16.4	—	4.4	—	灰白2.5Y8/2・黄灰2.5Y4/1	4/12	取り上げNo.１
120	C	2041-01	土師器	椀C	SF61	D-a7	16.4	—	4.4	—	浅黄橙10YR8/3・黒褐10YR3/2	6/12	取り上げNo.15・18
121	C	2040-05	土師器	椀C	SF61	D-a・b7	16.4	—	4.0	—	淡黄2.5Y8/3・黄灰2.5Y5/1	4/12	取り上げNo.39
122	C	2040-04	土師器	椀C	SF61	D-a・b7	17.2	—	—	—	淡黄2.5Y8/3	3/12	取り上げNo.２
123	C	2039-04	土師器	椀C	SF61	D-a7	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	取り上げNo.48
124	C	2043-04	土師器	椀C	SF61	D-a7	—	—	—	—	黄灰2.5Y6/1	—	
125	C	2044-02	土師器	椀C	SF61	D-b7	—	—	—	—	灰黄褐10YR6/2	—	
126	C	2045-02	土師器	椀C	SF61	D-a6	—	—	—	—	淡黄2.5Y8/3	—	
127	C	2045-01	土師器	椀C	SF61	D-b6	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	

第26表　第２次調査遺物観察表２

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
128	C	2041-03	土師器	椀C	SF61	D-a7	—	—	—	—	灰白10YR8/2	—	取り上げ№.４
129	C	2044-01	土師器	椀C	SF61	D-a7	20.0	—	5.0	—	灰白10YR8/2	2/12	
130	C	2043-02	土師器	椀D	SF61	D-a7	18.4	—	3.5	—	黄灰2.5Y6/1	3/12	
131	C	2040-02	土師器	椀D	SF61	D-a7	20.6	—	—	—	淡黄2.5Y8/3	4/12	取り上げ№.24
132	C	2040-03	土師器	椀D	SF61	D-a7	22.2	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	3/12	取り上げ№.42
133	C	2039-02	土師器	鍋	SF61	D-a7	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	取り上げ№.10・14・32
134	C	2042-01	土師器	鍋	SF61	D-a7	27.2	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/2・褐灰10YR5/1	5/12	取り上げ№.３・８・25・28・35・36・40
135	C	2041-02	土師器	鍋	SF61	D-a7	35.6	—	—	—	浅黄橙10YR8/3・灰黄褐10YR6/2	6/12	取り上げ№.５・12・17・51
136	C	2042-02	土師器	鍋	SF61	D-a7	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	—	取り上げ№.50・焼成剥離破片・134と同一個体か
137	C	2045-04	土師器	鍋？	SF61	D-a7	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	焼成剥離破片
138	C	2045-03	土師器	鍋？	SF61	D-a7	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	焼成剥離破片
139	C	2039-03	土師器	鍋？	SF61	D-b7	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	取り上げ№.46・焼成剥離破片
140	C	2003-01	須恵器	杯B蓋	p1	C-y4	15.0	—	3.3	—	褐灰10YR6/1	8/12	つまみ
141	C	2004-01	土師器	甕	p1	C-y9	15.4	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	4/12	
142	C	2004-03	須恵器	甑	p7	C-y12	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	
143	C	2004-05	土師器	甕	p3	C-y13	19.0	—	—	—	橙7.5YR7/6	1/12	
144	C	2005-03	土師器	高杯	p8	C-y13	—	—	—	—	橙5YR6/6	2/12	
145	C	2005-04	土師器	甑	p10	C-y13	—	14.2	—	—	浅黄橙10YR8/3	1/12	柱痕内出土
146	C	2014-01	須恵器	甕	p2	C-y14	—	—	—	—	灰7.5Y6/1	3/12	
147	C	2004-06	須恵器	高杯	p3	D-a7	10.4	—	—	—	灰10Y5/1	2/12	
148	C	2005-02	土師器	甕	p1	D-a9	13.8	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	2/12	
149	C	2005-05	須恵器	杯B	p5	D-a11	—	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	—	
150	C	2005-01	須恵器	杯H	p1	D-d8	14.0	—	—	—	灰5Y6/1	1/12	
151	C	2003-05	土師器	甕	p3	D-e7	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	
152	C	2003-03	土師器	甕	p2	D-h3	23.8	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	2/12	
153	C	2002-02	須恵器	高杯	包	C-y14	16.0	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	2/12	脚部欠損・透孔なし
154	C	2015-01	土師器	杯G	包	D-i3	11.6	—	3.8	—	浅黄橙10YR8/4	10/12	椀C？
155	C	2015-02	土師器	杯C	包	D-i3	11.6	—	2.9	—	橙5YR6/6	4/12	暗文土師器
156	C	2002-01	土師器	椀C	—	—	18.0	—	3.7	—	内：にぶい黄橙10YR6/3 外：にぶい橙7.5YR6/4	1/12	
157	C	2002-03	石器	剥片	表	—	2.1	1.9	0.8	2.63		完形	赤色チャート

第27表　第２次調査遺物観察表３

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
158	コ	2035-02	須恵器	杯Ｂ	SH74	C-l1・2	—	9.0	—	—	灰白7.5Y7/1	6/12	
159	コ	2035-01	須恵器	長頸壺	SH74	C-l1・2	—	—	—	—	内：淡黄2.5Y8/3 外：黄灰2.5Y5/1	3/12	
160	コ	2037-01	須恵器	甕	SH74	C-l1・2	25.3	—	—	—	浅黄2.5Y7/3	1/12	
161	コ	2035-05	土師器	椀Ｃ	SH74	C-l1・2	9.8	—	3.6	—	浅黄橙7.5YR8/6	12/12	
162	コ	2036-06	土師器	杯Ｇ	SH74	C-l1・2	11.7	7.4	2.8	—	にぶい橙7.5YR7/4	5/12	
163	コ	2035-04	土師器	杯Ｇ	SH74	C-l1・2	12.8	—	3.1	—	浅黄橙7.5YR8/4	4/12	
164	コ	2035-06	土師器	杯Ｇ	SH74	C-l1・2	13.2	—	4/1	—	灰黄褐10YR4/2	1/12	
165	コ	2036-08	土師器	皿Ａ	SH74	C-l1・2	14.8	—	—	—	橙7.5YR7/6	1/12	
166	コ	2035-03	土師器	高杯	SH74	C-l1・2	—	10.7	—	—	橙5YR7/6	12/12	
167	コ	2037-03	土師器	甑	SH74	C-l1・2	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	—	
168	コ	2037-04	土師器	甑	SH74	C-l1・2	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	
169	コ	2037-02	土師器	甕	SH74	C-l1・2	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	
170	コ	2036-05	土師器	甕	SH74	C-l1・2	11.8	—	—	—	淡赤橙2.5YR7/4	3/12	
171	コ	2036-07	土師器	甕	SH74	C-l1・2	12.0	—	—	—	にぶい橙2.5YR7/4	3/12	
172	コ	2019-04	土師器	甕	SH74	C-l2	17.8	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	柱穴出土
173	コ	2036-01	土師器	甕	SH74	C-l1・2	—	—	—	—	内：浅黄2.5Y7/3 外：黄灰2.5Y5/1	2/12	
174	コ	2036-02	土師器	甕	SH74	C-l1・2	20.7	—	—	—	明黄褐10YR7/6	2/12	
175	コ	2036-04	土師器	甕	SH74	C-l1・2	—	—	—	—	内：浅黄橙 7.5YR8/4 外：にぶい橙 5YR7/4	1/12	
176	コ	2036-03	土師器	甕	SH74	C-l1・2	—	—	—	—	内：にぶい橙 7.5YR7/4 外：橙2.5YR7/6	2/12	
177	コ	2020-05	須恵器	杯Ａ	SB40	A-j2	—	3.6	—	—	灰白5Y7/1	4/12	ヘラ切り無調整・杯Ｈ？
178	コ	2020-01	土師器	杯	SB40	A-j2	—	—	—	—	明黄褐10YR7/6	—	皿？
179	コ	2020-03	土師器	杯Ｂ	SB40	A-j2	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	—	皿Ｂ？
180	コ	2019-06	土師器	甕	SB75	C-k2	—	—	—	—	内：黒褐10YR2/3 外：橙5YR7/6	—	
181	コ	2019-05	土師器	甕	SB76	C-g3	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	—	
182	コ	2019-02	土師器	甕	SB76	C-h3	11.4	—	—	—	内：オリーブ黒 5Y3/1 外：淡赤橙 2.5YR7/4	2/12	
183	エ	2001-01	土師器	甕	SA39	—	—	—	—	—	橙5YR7/6	—	
184	ウ	2001-03	須恵器	長頸壺	SK42	—	15.2	—	—	—	灰10Y7/1	2/12	
185	ウ	2001-02	土師器	甕	SK42	—	—	—	—	—	橙5YR7/6	—	
186	コ	2022-06	土師器	甕	SK67	A-p2・3	26.0	—	—	—	明黄褐10YR7/6	1/12	

第28表　第２次調査遺物観察表４

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
187	コ	2022-03	須恵器	杯H	SK68	A-p2・3	—	—	—	—	内：褐灰10YR5/1 外：黄灰2.5Y5/1	—	
188	コ	2024-06	土師器	甕	SK70	B-k2	19.6	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
189	コ	2024-04	須恵器	杯Ｂ蓋	SK71	B-l・m2・3	—	—	—	—	灰白5Y7/1	12/12	つまみのみ
190	コ	2024-02	須恵器	杯Ｂ	SK71	B-l・m2・3	—	9.9	—	—	灰オリーブ5Y6/2	10/12	
191	コ	2024-03	土師器	杯Ａ	SK71	B-l・m2・3	—	12.0	—	—	橙7.5YR7/6	5/12	皿Ａ？
192	コ	2024-01	土師器	甕	SK71	B-l・m2・3	16.0	—	—	—	灰褐7.5YR5/2	3/12	
193	コ	2026-02	瓦	平瓦	SK71	B-l・m2・3	—	—	1.7	—	灰5Y6/1	破片	布目・格子状タタキ
194	コ	2026-01	瓦	平瓦	SK71	B-l・m2・3	—	—	2.0	—	黒7.5Y2/1	破片	布目・縄目タタキ
195	コ	2022-02	土師器	杯G	SK72	B-p2・3	11.8	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	1/12	
196	コ	2021-02	土師器	高杯	SK72	B-p2・3	16.5	10.3	13.0	—	橙7.5YR7/6	12/12	
197	コ	2024-07	須恵器	短頸壺	SK73	B-w2	9.0	—	—	—	内：灰白5Y7/1 外：灰白7.5Y7/1	2/12	
198	コ	2024-05	須恵器	壺	SK73	B-w2	—	—	—	—	内：灰5Y6/1 外：灰5Y5/	—	
199	コ	2025-02	土師器	甕	SK73	B-w2	18.4	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	10/12	取り上げ№２
200	コ	2025-01	土師器	甕	SK73	B-w2	20.2	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	3/12	取り上げ№１
201	コ	2023-01	須恵器	壺	SK80	C-c2・3	—	9.2	—	—	内：灰白2.5Y7/1 外：灰N6/0	3/12	
202	コ	2022-04	土師器	皿Ａ	SK80	C-c2・3	18.0	—	2.2	—	橙5YR7/6	1/12	
203	コ	2023-05	土師器	甕	SK80	C-c2・3	19.6	—	—	—	内：浅黄橙 10YR8/4 外：橙2.5YR7/6	1/12	
204	コ	2022-01	土師器	甕	SK80	C-c2・3	22.5	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	1/12	
205	コ	2023-04	土師器	甕	SK80	C-c2・3	23.1	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
206	コ	2023-02	土師器	甕	SK80	C-c2・3	23.6	—	—	—	内：にぶい褐 7.5YR5/3 外：浅黄橙 10YR8/4	1/12	
207	コ	2023-03	土師器	甕	SK80	C-c2・3	21.4	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/6	2/12	
208	コ	2031-06	須恵器	杯Ｂ蓋	SD66	A-q2・3	—	—	—	—	浅黄2.5Y/3	—	
209	コ	2029-03	須恵器	杯Ｂ蓋	SD66	A-q2	16.2	—	—	—	浅黄2.5Y7/3	2/12	自然釉付着
210	コ	2031-08	須恵器	杯Ｂ蓋	SD66	A-q3	16.8	—	—	—	内：灰5Y6/1 外：灰7.5Y6/1	1/12	
211	コ	2033-02	須恵器	杯Ａ	SD66	A-q3	—	—	—	—	灰白5Y7/1	4/12	底部ヘラケズリ
212	コ	2033-01	須恵器	甕	SD66	A-q2	41.2	—	—	—	灰N5/・灰黄 2.5Y6/2	3/12	波状文
213	コ	2030-01	須恵器	甕	SD66	A-q2・3	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	スス付着・把手あり
214	コ	2029-07	土師器	杯C	SD66	A-q2	—	—	—	—	内：にぶい褐 7.5YR5/3 外：橙5YR6/6	—	暗文土師器
215	コ	2029-05	土師器	杯Ａ	SD66	A-q2	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	暗文土師器

第29表　第２次調査遺物観察表５

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
216	コ	2032-05	土師器	杯A	SD66	A-q2・3	18.0	—	—	—	橙5YR6/6	1/12	暗文土師器
217	コ	2032-06	土師器	杯・皿B蓋	SD66	A-q2	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	1層出土・暗文土師器
218	コ	2030-03	土師器	皿A	SD66	A-q2	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	蓋？
219	コ	2032-04	土師器	皿A	SD66	A-q2	—	—	2.4	—	橙5YR7/6	1/12	1層出土
220	コ	2031-07	土師器	皿A	SD66	A-q3	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	
221	コ	2029-02	土師器	皿A	SD66	A-q2	21.2	—	2.0	—	橙5YR6/6	1/12	蓋？
222	コ	2031-01	土師器	皿A	SD66	A-q2	22.0	—	—	—	橙5YR6/6	1/12	暗文土師器
223	コ	2031-05	土師器	甕	SD66	A-q2	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	
224	コ	2031-02	土師器	甕	SD66	A-q2	—	—	—	—	内：にぶい橙 7.5YR7/4 外：橙2.5YR6/6	—	
225	コ	2030-04	土師器	甕	SD66	A-q2	—	—	—	—	内：浅黄橙 10YR8/3 外：浅黄橙 7.5YR8/3	—	
226	コ	2031-04	土師器	甕	SD66	A-q2	—	—	—	—	内：にぶい黄橙 10YR7/3 外：にぶい褐 7.5YR5/3	—	
227	コ	2031-03	土師器	甕	SD66	A-q3	—	—	—	—	内：にぶい橙 7.5YR7/4 外：橙5YR6/6	—	
228	コ	2032-03	土師器	甕	SD66	A-q2	19.6	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	1層出土
229	コ	2032-02	土師器	甕	SD66	A-q2・3	19.8	—	—	—	内：にぶい橙 7.5YR6/4 外：にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	
230	コ	2029-04	土師器	甕	SD66	A-q2	19.2	—	—	—	橙7.5YR7/6	3/12	
231	コ	2032-01	土師器	甕	SD66	A-q2	22.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	2/12	1層出土
232	コ	2029-01	土師器	甕	SD66	A-q2	27.3	—	—	—	橙7.5YR7/6	1/12	
233	コ	2028-01	土師器	甕	SD66	A-q3	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	5/12	
234	コ	2030-02	土師器	甕	SD66	A-q3	—	—	—	—	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：にぶい黄橙 10YR6/3	—	把手あり
235	コ	2034-01	土製品	土管	SD66	A-q2・3	12.5	12.1	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	12/12	断面方形
236	コ	2027-01	石製品	加工礫	SD66	A-q2・3	20.0	10.9	9.8	2340	—	完形	被熱・砂岩
237	コ	2019-08	土師器	甕	p1	A-j3	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	
238	コ	2019-01	土師器	甕	p2	A-x3	19.5	—	—	—	内：明黄褐 10YR7/6 外：橙2.5YR6/6	3/12	
239	コ	2020-06	須恵器	杯H	p4	A-x3	—	3.4	—	—	灰白5Y7/1	3/12	ヘラ切り無調整
240	コ	2020-04	土師器	高杯	p4	A-x3	—	9.0	—	—	内：にぶい黄褐 10YR5/3 外：浅黄橙 10YR8/4	6/12	低い脚部
241	コ	2019-03	土師器	甕	p1	B-03・p3	—	—	—	—	内：浅黄橙 10YR8/4 外：淡赤橙 2.5YR7/4	—	
242	コ	2019-07	土師器	甕	p1	B-n3	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	

第30表　第２次調査遺物観察表６

№.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	重量（g）	色調	残存度	備考
243	コ	2020-02	土師器	杯A	p1	C-f3	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	
244	ウ	2001-04	須恵器	杯A蓋	包	—	—	—	—	—	灰5Y6/1	1/12	宝珠つまみ
245	ウ	2001-06	土師器	甕	包	—	17.4	—	—	—	橙5YR6/6	2/12	
246	エ	2001-05	土師器	甕	包	—	16.8	—	—	—	橙5YR6/8	2/12	
247	コ	2018-07	須恵器	杯A	表	—	—	9.0	—	—	灰10Y6/1	3/12	
248	コ	2017-04	須恵器	杯H	表	—	11.0	—	4.3	—	灰5Y6/1	9/12	
249	コ	2017-06	須恵器	杯A？	表	—	11.6	—	—	—	灰5Y6/1	1/12	
250	コ	2017-05	須恵器	平瓶	表	—	—	—	—	—	灰白5Y7/1	3/12	体部下半ヘラケズリ
251	コ	2021-01	須恵器	甕	表	—	40.0	—	—	—	褐灰7.5YR6/1	2/12	ＳＤ66付近出土
252	コ	2016-05	土師器	椀C	表	—	11.7	—	4.5	—	にぶい黄橙 10YR7/4	4/12	
253	コ	2017-03	土師器	皿A	表	—	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	
254	コ	2017-02	土師器	杯B	表	—	—	12.0	—	—	橙5YR6/6	2/12	
255	コ	2018-02	土師器	高杯？	表	—	16.0	—	—	—	内：橙7.5YR7/6 外：橙5YR6/6	2/12	
256	コ	2016-04	土師器	高杯	表	—	—	—	—	—	灰白10YR8/2	4/12	脚部
257	コ	2016-02	土師器	甕	表	—	22.0	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	1/12	
258	コ	2016-01	土師器	甕	表	—	20.3	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	2/12	
259	コ	2016-03	土師器	甕	表	—	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	1/12	
260	コ	2018-01	土師器	甕	表	—	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	—	
261	コ	2017-01	土師器	甕	表	—	17.2	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	12/12	
262	コ	2018-04	縄文土器	甕	包	B-k2	—	—	—	—	内：にぶい橙 7.5YR7/4 外：にぶい黄 2.5Y6/3	—	口縁部に突帯二条・馬見塚式併行
263	コ	2018-06	須恵器	杯H蓋	包	—	14.2	—	—	—	明オリーブ灰 2.5GY7/1	2/12	
264	コ	2018-08	須恵器	高杯？	包	—	11.2	—	—	—	灰7.5Y6/1	2/12	
265	コ	2018-03	土師器	杯G	包	C-j2	11.0	—	2.8	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	椀Ｃ？
266	コ	2022-05	土師器	皿B	包	A-p2	—	13.2	—	—	内：橙7.5YR7/6 外：橙5YR7/6	4/12	
267	コ	2018-05	土師器	甕	包	C-h3	19.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/3	2/12	

※№.は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。
※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。1001～は第１次調査、2001～は第２次調査、3001～は第３次調査の出土品である。
※胎土・釉薬などの色調は『新版　標準土色帖』に拠る。釉薬の色調などは合致する色名が存在しない場合もあるが、その場合は最も近似すると思われる色名を記している。
※色調欄の「胎」は胎土、「釉」は釉薬の色調を表す。また、「表」は表面、「内」は内面、「外」は外面の色調を表す。
※土器・陶磁器の残存度については、口縁部ないし底部を12分割し、そのうちの残存度を記している。「—」は小片であるなどのため残存度が示せないものである。
※出土遺構欄に「表」の記載があるものは表土掘削中に出土したもの、「包」の記載があるものは包含層中から出土したもの、「—」の記載があるものは出土位置不明もしくは撹乱内から出土したものである。

第31表　第２次調査遺物観察表７

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
268	G	3043-03	須恵器	杯H蓋	SK96	D-e16	—	—	—	—	灰白5Y7/1	—	
269	G	3043-02	土師器	杯G	SK96	D-e16	11.8	—	3.2	—	浅黄橙10YR8/4	3/12	器面剥離大
270	G	3042-05	土師器	皿A	SK96	D-e16	20.0	—	—	—	明赤褐5YR5/6	3/12	
271	G	3043-01	土師器	甕	SK96	D-e16	20.0	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	3/12	内外面摩滅
272	G	3042-04	土師器	甕	SK96	D-e16	16.4	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	2/12	外面黒変・ケズリ調整
273	G	3043-04	土師器	杯C	SH92	D-c16	11.6	—	—	—	橙7.5YR6/6	2/12	摩滅のため調整不明瞭
274	G	3042-06	土師器	鉢	SH92	D-c15・16	28.5	—	—	—	橙5YR6/6 橙7.5YR6/6	2/12	内面摩滅 竈から出土
275	G	3042-01	土師器	甕	SK93	D-c16	13.0	—	—	—	にぶい黄橙10YR6/4	3/12	
276	G	3042-02	土師器	甕	SK93	D-c16	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	—	体部片 外面にヘラ描き
277	G	3042-03	石製品	砥石	SK93	D-b・c16	5.5	3.8	2.8	49.9		一部欠	
278	H	3043-06	土師器	椀C	SK105	D-f20	15.5	—	—	—	橙7.5YR7/6	3/12	取り上げ№.1
279	G	3043-05	土師器	甕	SK99	D-e18	14.8	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	2/12	
280	H	3044-03	土師器	杯C	SZ112	H-x3	18.0	—	—	—	橙7.5YR6/6	2/12	
281	H	3044-05	土師器	杯C	SZ112	H-x2	15.0	—	—	—	橙5YR6/6	3/12	内面放射状暗文
282	H	3044-06	土師器	皿A	SZ112	H-x3	20.4	—	2.2	—	橙5YR6/8	1/12	取り上げ№.1
283	H	3044-04	土師器	甕	SZ112	H-x2	19.4	—	—	—	橙7.5YR7/6	2/12	
284	H	3044-02	土師器	椀	SK109	C-x25	—	8.0	—	—	橙7.5YR7/6	3/12	
285	H	3044-01	瓦	丸瓦	SK109	C-x25	14.0	—	1.8	—	素:灰白2.5Y8/2 表：暗灰N3/0	—	
286	G	3045-05	土師器	杯G	pit2 SB97	D-d17	13.6	—	—	—	外:橙2.5YR6/6 内:橙5YR6/6	2/12	器面風化
287	G	3045-07	土師器	甕	pit2 SB97	D-d17	14.0	—	—	—	外:橙2.5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR7/4	2/12	
288	H	3056-09	縄文土器	深鉢？	pit1	D-f19	—	—	—	—	灰黄褐10YR4/2	—	大川・大鼻古相か
289	G	3046-01	須恵器	杯H蓋	pit3	D-c16	10.7	—	3.2	—	外:黄灰2.5Y6/1 内:にぶい黄橙2.5Y7/4	ほぼ完存	取り上げ№.1 外面ヘラ記号
290	G	3046-02	須恵器	杯H蓋	pit4	D-c16	11.3	—	3.6	—	灰白5Y7/1	2/12	外面灰かぶり
291	H	3045-03	須恵器	杯AorB蓋	pit1	D-f18	—	—	—	—	外:灰白5Y7/1 内:灰白N7/0	—	つまみ径4.5cm（5/12残）
292	G	3045-01	土師器	杯G	pit1	D-e16	14.5	—	3.6	—	外:にぶい橙5YR7/4 内:橙7.5YR7/6	完存	内外面摩滅 取り上げ№.1
293	G	3045-06	土師器	杯B？	pit2	D-a17	—	15.4	—	—	橙2.5YR8/8	3/12	
294	G	3045-04	土師器	甕	pit1	D-c16	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	—	
295	G	3045-02	土師器	甕	pit1	D-d17	18.8	18.8	—	—	橙2.5YR6/6	2/12	内外面摩滅のため調整不明瞭
296	G	3046-03	須恵器	杯A？	撹乱1	C-w25	11.9	—	4.4	—	灰白7.5Y7/1	2/12	

第32表　第３次調査遺物観察表１

№.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
297	I・J	3048-03	須恵器	杯A蓋	SK142	C-u22	13.8	—	1.6	—	灰白N7/0	3/12	つまみ部欠損か
298	I	3060-02	須恵器	杯A蓋	SK142	C-t21	16.8	—	—	—	灰7.5Y6/1 灰7.5Y4/1	3/12	
299	I	3040-02	須恵器	杯A蓋	SK142	C-t21	15.5	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	1/12	摩滅激しく調整不明瞭
300	I	3049-05	須恵器	杯AorB蓋	SK142	C-t21	—	—	—	—	外:浅黄2.5Y7/3 内:灰白N7/0	—	外面自然釉 キノコ形つまみ つまみ径2.1cm
301	I	3049-03	須恵器	杯AorB蓋	SK142	C-t21	—	—	—	—	灰7.5Y6/1	—	つまみ径2.1cm
302	I	3057-04	須恵器	杯H蓋	SK142	C-u21	—	—	—	—	灰白N7/0	—	外面天頂部ヘラ描き
303	I	3048-01	須恵器	杯B蓋	SK142	C-u21	13.0	—	2.7	—	灰5Y6/1	3/12	
304	I	3039-04	須恵器	杯B蓋	SK142	C-t21	16.0	—	—	—	浅黄2.5Y7/3	2/12	つまみ部欠損
305	I	3060-04	須恵器	杯B蓋	SK142	C-t21	11.8	—	3.4	—	外:灰黄褐10YR5/2 内:にぶい褐 7.5YR6/3	2/12	つまみ径2.4cm
306	I	3060-05	須恵器	杯B蓋	SK142	C-t21	12.7	—	3.3	—	外:灰黄2.5Y6/2 内:明褐灰 7.5YR7/2	2/12	つまみ径2.45cm
307	I	3060-06	須恵器	杯B蓋	SK142	C-t21	14.6	—	3.1	—	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰10Y6/1	4/12	つまみ径3.3cm
308	I	3049-04	須恵器	杯B蓋	SK142	C-t21	14.8	—	2.4	—	灰N5/0	1/12	
309	I	3060-03	須恵器	杯B蓋	SK142	C-t21	17.6	—	—	—	外:黄灰2.5Y6/1 内:灰黄2.5Y7/2	3/12	外面灰かぶり つまみ欠損
310	I	3059-05	須恵器	杯B蓋	SK142	C-u21	19.5	—	2.8	—	外:灰7.5Y5/1 内:灰5Y6/1	4/12	つまみ径2.9cm
311	I	3057-07	須恵器	杯A	SK142	C-t21	15.0	—	—	—	灰5Y6/1・4/1 内:灰白5Y7/1	2/12	
312	I	3057-06	須恵器	杯A	SK142	C-t21	—	7.2	—	—	灰N6/0	6/12	底部外面に粘土付着
313	I	3049-01	須恵器	杯A	SK142	C-t21	—	7.2	—	—	外:灰N4/0 内:灰5Y5/1	12/12	
314	I	3057-05	須恵器	杯A	SK142	C-t21	—	6.8	—	—	灰N5/0	4/12	
315	I	3040-01	須恵器	杯A	SK142	C-t21	10.0	—	3.8	—	灰7.5Y6/1	2/12	
316	I	3057-03	須恵器	杯A	SK142	C-u21	—	10.0	—	—	オリーブ灰 2.5GY5/1	3/12	内面に漆付着
317	I	3048-02	須恵器	杯A	SK142	C-t21	9.6	—	3.1	—	灰N6/0	8/12	
318	I	3047-04	須恵器	杯A	SK142	C-t21	13.0	—	3.7	—	外:灰白7.5Y7/1 内:灰白5Y7/1	2/12	内外面摩滅
319	I	3060-01	須恵器	杯A	SK142	C-u21	10.7	4.2	—	—	灰10Y6/1	3/12	
320	I	3049-02	須恵器	杯B	SK142	C-t21	—	10.6	—	—	灰白N7/0	2/12	
321	I	3039-03	須恵器	杯B	SK142	C-t21	15.4	11.3	3.8	—	外:灰N4/0 内:灰7.5Y6/1	3/12	
322	I	3048-04	須恵器	杯B	SK142	C-u21	18.2	14.0	4.3	—	外:灰10Y6/1 内:にぶい褐 7.5YR6/3	2/12	
323	I	3059-04	須恵器	壺?	SK142	C-u21	—	7.8	—	—	灰白5Y7/1	6/12	内面に自然釉付着
324	I	3047-05	須恵器	高杯	SK142	C-t21	—	—	8.8	—	灰白N7/0	1/12	
325	I	3059-02	須恵器	高杯	SK142	C-u21	—	10.8	—	—	灰白5Y7/1	11/12	取り上げ№.2
326	I	3048-06	須恵器	鉢	SK142	C-t21	19.0	—	—	—	外:灰N4/0 内:灰白5Y7/1	2/12	

第33表　第３次調査遺物観察表２

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
327	I	3057-02	須恵器	甕	SK142	C-t21	22.0	—	—	—	灰5Y6/1	2/12	
328	I	3041-04	須恵器	甕	SK142	C-t21	40.0	—	—	—	外:暗灰N3/0 内:灰N4/0	2/12	
329	I	3049-09	土師器	皿A	SK142	C-t21	—	—	—	—	外:橙5YR6/6 内:暗赤褐5YR5/6	—	内面暗文あり
330	I	3058-02	土師器	皿A	SK142	C-t21	18.4	—	—	—	橙5YR6/6	2/12	内面暗文あり
331	I	3048-05	土師器	皿A	SK142	C-u21	22.6	—	2.0	—	橙5YR6/6	2/12	
332	I	3041-02	土師器	皿A	SK142	C-t21	21.8	—	2.7	—	橙7.5YR7/6	1/12	内面に放射状暗文
333	I	3047-03	土師器	皿A	SK142	C-t21	18.0	—	—	—	橙5YR7/6	2/12	
334	I	3058-03	土師器	杯C	SK142	C-t21	16.0	—	—	—	明赤褐5YR5/6	2/12	内面暗文あり
335	I	3041-01	土師器	杯B	SK142	C-t21	—	12.0	—	—	橙5YR7/8	3/12	外面に赤色顔料？
336	I	3057-08	土師器	円筒状土器	SK142	C-t21	—	—	—	—	橙7.5YR6/6	—	鍔部破片
337	I	3040-03	土師器	甕	SK142	C-t21	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	摩滅激しい 頸部径17.2cm
338	I	3041-03	土師器	甕	SK142	C-t21	26.8	—	—	—	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:にぶい黄橙 10YR7/3	3/12	
339	I	3039-02	土師器	甕	SK142	C-u21	27.2	—	—	—	橙5YR7/6	3/12	
340	I	3039-01	土師器	甕	SK142	C-u21	19.5	—	—	—	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:浅黄橙10YR8/4	1/12	内外面摩滅
341	I	3059-06	土師器	甕	SK142	C-u21	15.6	—	—	—	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:明黄褐10YR7/6	—	摩滅激しく調整不明瞭
342	I	3057-01	土師器	甕	SK142	C-t21	20.8	—	—	—	橙7.5YR6/6	2/12	
343	I	3058-01	土師器	甕	SK142	C-t21	21.0	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	摩滅のため調整不明瞭
344	I	3047-01	土師器	甕	SK142	C-t21	22.0	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/6	2/12	
345	I	3040-04	土師器	甕	SK142	C-t21	—	—	—	—	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:明黄褐10YR7/6	—	内外面摩滅
346	I	3047-02	土師器	甕	SK142	C-t21	22.0	—	—	—	外:浅黄橙 7.5YR8/6 内:浅黄橙10YR8/4	3/12	内外面摩滅
347	I	3059-01	土師器	甕	SK142	C-u21	22.6	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	4/12	摩滅のため調整不明瞭 取り上げNo.1
348	I	3059-03	土師器	甕	SK142	C-u21	21.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	3/12	取り上げNo.4 全体的に摩滅している
349	I	3049-08	土製品	管状土錘	SK142	C-t21	3.4	—	1.7	10.08	灰黄褐10YR5/2	一部欠損	孔径0.4cm
350	I	3049-07	土製品	管状土錘	SK142	C-t21	5.1	—	1.6	12.78	灰白2.5Y8/2	ほぼ完存	孔径0.4cm
351	I	3049-06	土製品	管状土錘	SK142	C-t21	6.0	—	2.0	19.44	浅黄橙10YR8/3 灰N5/0	ほぼ完存	孔径0.5cm
352	J	3065-02	金属製品	刀子	SK142	C-u22	6.3	—	1.2	—		茎・刀身先端欠損	一部に柄木の表装が残る
353	I	3052-01	須恵器	杯B	SH139	C-s20	14.4	10.6	4.3	—	灰10Y5/1	3/12	
354	I	3050-01	須恵器	杯B	SH139	C-s20	14.4	—	4.3	—	灰白5Y8/1	6/12	外面に墨痕？
355	I	3052-02	須恵器	壺	SH139	C-s20	14.1	—	—	—	灰白5Y7/1	3/12	灰かぶり

第34表　第３次調査遺物観察表３

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
356	I	3050-03	土師器	皿A	SH139	C-s20	22.0	—	2.65	—	灰白5Y7/1	2/12	底部外面ヘラ記号
357	I	3052-04	土製品	管状土錘	SH139	C-s20	5.0	—	1.8	13.75	褐灰10YR4/1 明黄褐10YR6/6	ほぼ完存	
358	I	3050-02	土師器	甕	SH139	C-s20	15.7	—	—	—	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	4/12	内外面摩滅
359	I	3052-03	土師器	甕	SH139	C-s21	22.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	3/12	全体的に風化
360	I	3056-03	土師器	甕	pit2 SH139内	C-s20	17.0	—	—	—	橙7.5YR6/6	1/12	摩滅のため調整不明瞭
361	J	3053-03	須恵器	杯H	SH120	H-s1	12.4	—	—	—	灰白7.5Y7/1	1/12	
362	J	3053-02	須恵器	短頸壺	SH120	H-s2	8.0	—	—	—	外:灰白N7/0 内:灰7.5Y6/1	2/12	
363	J	3053-06	土師器	杯G	pit1 SH120内	H-s2	11.5	—	3.4	—	外:橙2.5YR6/6 内:浅黄橙7.5YR8/6	3/12	摩滅のため調整不明瞭
364	J	3053-01	土師器	甕	SH120	H-s2	—	—	—	—	外:浅黄橙7.5YR8/4 内:浅黄橙10YR8/4	—	
365	J	3053-04	石器	敲石？	SH120	H-s1	14.7	3.55	1.6	125.33			砥石の可能性もあるか
366	J	3054-05	須恵器	高杯	SK121	H-r1	—	—	—	—	灰N5/0	—	柱状部3.0cm
367	J	3055-01	須恵器	甕	SK121	H-r1	18.6	—	—	—	外:灰N4/0 内:灰N5/0	1/12	
368	J	3054-02	土師器	杯C	SK121	H-r1	16.0	—	3.5	—	橙2.5YR6/8	2/12	
369	J	3054-03	土師器	杯C	SK121	H-r1	20.6	—	—	—	橙5YR7/6	1/12	摩滅のため調整不明瞭
370	J	3054-04	土師器	高杯	SK121	H-r1	—	—	15.0	—	橙2.5YR6/6	2/12	
371	J	3055-02	土師器	甑？	SK121	H-r1	29.0	—	—	—	橙5YR7/6	2/12	
372	I	3036-05	須恵器	杯A蓋	SK150	C-t17	9.0	—	—	—	灰7.5Y6/1	2/12	つまみ部欠損
373	I	3037-01	須恵器	杯B	SK150	C-t17	14.6	10.2	4.3	—	灰白2.5Y8/1	11/12	
374	I	3036-01	須恵器	壺？	SK150	C-t17	—	16.8	—	—	外:黄灰2.5Y6/1 内:浅黄2.5Y7/3	3/12	高台部歪みあり 内面焼きぶくれあり
375	I	3036-03	土製品	管状土錘	SK150	C-t17	5.7	1.6	—	13.4	黒N2/0	完存	孔径0.5cm
376	I	3036-04	土製品	管状土錘	SK150	C-t17	4.2	0.8	—	2.4	にぶい黄橙10YR7/4 灰N4/0	一部欠	孔径0.3cm
377	I	3036-02	土師器	杯G	SK150	C-s17	11.4	—	3.7	—	浅黄橙7.5YR8/4	8/12	取り上げNo.1 摩滅のため調整不明瞭
378	I	3037-02	土師器	杯G	SK150	C-t17	13.0	—	—	—	橙5YR7/6 浅黄橙7.5YR8/4	3/12	内外面摩滅
379	I	3037-03	土師器	甕	SK150	C-t17	13.9	—	—	—	外:橙2.5YR7/6 内:灰黄褐10YR4/2	4/12	内外面摩滅
380	I	3038-03	須恵器	転用硯か	SK146	C-t20	—	—	—	—	外:灰白2.5Y8/2 内:灰黄2.5Y7/2	—	杯蓋使用 墨付着
381	I	3038-02	土師器	椀C	SK146	C-t20	11.2	—	3.1	—	浅黄橙10YR8/4	9/12	取り上げNo.1
382	I	3038-01	土師器	甕	SK146	C-t20	15.0	—	—	—	外:橙5YR6/6 内:黄橙7.5YR7/8	2/12	内外面摩滅
383	I	3037-05	土師器	杯C	SK154	C-s17・18	—	—	—	—	外:にぶい橙5YR6/4 内:橙5YR6/6	—	
384	I	3037-06	土師器	甕	SK154	C-s17・18	17.9	—	—	—	橙7.5YR7/6	3/12	内外面摩滅

第35表　第３次調査遺物観察表４

№.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
385	J	3053-05	土師器	杯B	SK143	C-t20	—	11.7	—	—	橙5YR7/6	3/12	
386	I	3054-01	土師器	甕	SH159	C-t21	14.0	—	—	—	外:灰褐7.5YR4/2 内:灰褐7.5YR6/2	3/12	摩滅のため調整不明瞭
387	I	3056-06	須恵器	杯A？	pit1 SB156	C-q17	—	5.0	—	—	灰N6/6	完存	
388	I	3056-05	須恵器	杯A	pit2 SB156	C-q19	—	8.8	—	—	灰N6/0	3/12	
389	I	3056-04	土師器	皿A	pit2 SB156	C-q19	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	内面暗文あり
390	I	3056-07	土製品	管状土錘	pit3 SB157	C-t17	4.9	—	0.9	2.68	にぶい橙7.5YR7/4	完存	孔径0.2cm 摩滅激しい
391	I	3056-08	須恵器	杯H	pit3 №.1	C-r17	—	—	—	—	淡黄2.5Y8/3 黄灰2.5Y6/1	—	摩滅のため調整不明瞭 外面に煤付着 受部径13.4cm
392	J	3056-01	土師器	甕	pit1	C-t23	14.2	—	—	—	にぶい黄橙 10YR6/4	3/12	
393	I	3056-02	土師器	甕	pit1	C-q18	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	
394	J	3055-03	瓦質土器		SX136	C-s・t24	21.4	—	—	—	外:灰N4/0 内:灰白2.5Y7/1	2/12	
395	J	3064-01	金属製品	銭貨	SX136	C-t24	—	—	—	—			取り上げ№.1 寛永通寶６枚
396	J	3054-06	陶器	丸椀	SX136	C-s・t24	9.5	4.0	5.8	—	素：淡黄2.5Y8/3 釉：にぶい黄褐 5YR4/3	4/12	鉄釉　　瀬戸・美濃 取り上げ№.12
397	J	3061-03	土師器	把手	撹乱1	C-t24	—	—	—	—	外:浅黄橙 7.5YR8/4 内:浅黄橙10YR8/4	—	
398	I	3037-04	須恵器	杯B蓋	SK160 (撹乱)	C-s21	13.8	—	—	—	外:灰白2.5Y7/1 内:灰N6/0	3/12	
399	I	3051-05	陶器	梅文皿	撹乱	C-s20	11.9	4.5	4.35	—	素：灰白5Y8/2 釉：淡黄7.5Y8/3	4/12	SH139内 瀬戸・美濃
400	I	3051-04	陶器	梅文皿	撹乱	C-s20	10.8	4.0	4.5	—	素：淡黄2.5Y8/3 釉：透明	3/12	SH139内 瀬戸・美濃
401	I	3051-02	陶器	丸椀	撹乱	C-s20	9.0	4.1	5.4	—	素:灰白2.5Y8/2 釉：黒7.5YR2/1	6/12	鉄釉　　瀬戸・美濃 SH139内
402	I	3051-03	陶器	腰錆椀	撹乱	C-s20	9.5	4.7	5.7	—	素：灰白N8/0 釉：灰白7.5Y8/1 黒10YR2/1	6/12	SH139内 施釉　　瀬戸・美濃
403	I	3061-01	陶器	椀	撹乱5	C-s20	—	7.7	—	—	素:淡黄2.5Y8/3 釉:灰白5Y8/2	10/12	内面にトチン痕 削り出し高台 瀬戸・美濃
404	I	3063-01	陶器	擂鉢	撹乱5	C-s20	—	15.0	—	—	外:灰赤10R4/2 内:にぶい赤褐 2.5YR5/3	5/12	
405	I	3051-01	土師器	小皿	撹乱	C-s20	9.3	—	1.4	—	橙5YR6/6	3/12	口縁油煙付着 SH139内
406	I	3061-02	土師器	小皿	包含層	C-t21	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	内面にヘラ描き
407	I	3050-04	土師器	羽釜	撹乱	C-s20	23.5	—	—	—	橙5YR6/6	3/12	SH139内 口縁部外面煤付着 南伊勢系
408	I	3050-05	土師器	茶釜	撹乱4	C-s20	11.4	—	—	—	橙7.5YR7/6	3/12	外面煤付着 SH139内
409	I	3061-04	石器	敲石？	包含層	C-t19	7.9	—	5.4	430			
410	I	3062-02	瓦	平瓦	撹乱3	C-t21	—	—	—	—	凸面:灰N5/0 凹面:灰N4/0		内面に粘土や型のつなぎ痕・紐の痕跡あり
411	I	3062-01	瓦	丸瓦	表土	—	—	—	—	—	凸面:灰N7/0 凹面:灰N6/0		内面に粘土つなぎ痕あり
412	K	3013-01	土師器	杯G	pit1 SB179	C-o22	12.0	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	
413	K	3013-02	土師器	杯G	pit1 SB179	C-o22	—	—	—	—	橙7.5YR6/6	—	

第36表　第３次調査遺物観察表５

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
414	K	3013-04	土師器	甑	pit2 SB179	C-o21	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	
415	K	3013-05	須恵器	杯蓋	pit6 SB179	C-o20	17.2	—	—	—	黄灰2.5Y6/1	2/12	
416	K	3013-06	須恵器	杯H	pit2 SB179	C-p19	10.2	—	—	—	灰7.5Y5/1	2/12	受部径12.2cm
417	K	3013-03	須恵器	杯A	pit1 SB179	C-o22	13.0	—	2.9	—	黄灰2.5Y6/1	2/12	
418	K	3014-04	土師器	杯G	pit2 SB185	C-o22	11.5	—	3.0	—	橙7.5YR7/6	6/12	摩滅のため調整不明瞭
419	K	3014-05	土師器	甕	pit4 SB185	C-p23	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/2	—	
420	K	3014-01	土師器	甕	pit1・pit2 SB185	C-o23	20.5	—	—	—	明黄褐10YR6/6	3/12	
421	K	3014-02	土師器	把手	pit1 SB185	C-n23	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	
422	K	3014-06	土師器	高杯	pit3 SB185	C-o22	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	赤彩 杯部内面暗文あり 基部径4.8cm
423	K	3014-07	土師器	高杯	pit4 SB185	C-p23	—	—	—	—	にぶい黄橙 7.5YR7/4	—	赤彩 杯部内面暗文あり 基部径3.8cm
424	K	3014-03	須恵器	杯	pit2 SB185	C-o23	15.0	—	—	—	灰褐7.5YR6/2	1/12	内面に付着物あり
425	K	3013-07	須恵器	壺	pit2 SB185	C-n22	—	—	—	—	灰5Y3/1	—	
426	K	3015-03	土師器	杯C	pit2 SB186	C-m18	19.0	—	—	—	橙5YR6/6	1/12	径不確実 内面暗文
427	K	3017-02	土師器	杯C	pit SB186	C-m18	17.0	—	—	—	橙5YR6/6	2/12	内面暗文あり 柱痕出土
428	K	3017-04	土師器	杯C	pit1 SB186	C-n18	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	—	内面暗文あり
429	K	3017-01	土師器	杯A	pit1 SB186	C-n18	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	内面暗文あり
430	K	3017-03	土師器	杯A	pit1 SB186	C-m18	—	—	—	—	明赤褐5YR5/6	—	内面暗文あり
431	K	3016-06	土師器	杯	pit SB186	C-n18	—	10.4	—	—	橙5YR6/6	7/12	内外面調整不明瞭
432	K	3017-06	土師器	杯G	pit2 SB186	C-m18	10.6	—	3.4	—	浅黄橙10YR8/3	1/12	摩滅激しく調整不明瞭
433	K	3016-05	土師器	甕	pit1 SB186	C-n18	—	—	—	—	外:橙7.5YR7/6 内:黒褐7.5YR3/1	—	
434	K	3017-05	土師器	甕	pit SB186	C-m18	—	—	—	—	橙5YR7/6	—	全体的に風化
435	K	3015-02	土師器	甕	pit SB186	C-l18	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	—	
436	K	3015-01	土師器	甕	pit SB186	C-m18	20.2	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2/12	内外面摩滅
437	K	3016-01	土師器	甕	pit2 SB186	C-l18	15.8	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	
438	K	3016-04	土師器	杯蓋	pit1 SB186	C-n18	—	—	—	—	明赤褐5YR5/6	—	つまみ径4.0cm
439	K	3016-02	須恵器	杯A蓋	pit2 SB186	C-l18	11.0	—	—	—	外:灰オリーブ 7.5Y6/1 内:灰白5Y7/1	5/12	
440	K	3017-07	須恵器	杯A蓋	pit2 SB186	C-m18	12.0	—	—	—	暗灰黄2.5Y5/2	1/12	
441	K	3016-07	須恵器	杯B蓋	pit SB186	C-m18	17.0	—	—	—	灰5Y6/1	1/12	つまみ部欠損
442	K	3016-03	土製品	管状土錘	pit SB186	C-n18	6.5	—	2.2	29.12	橙7.5YR6/6	完存	孔径0.4cm
443	K	3020-02	土師器	杯	SH166	C-n20	11.8	—	3.4	—	浅黄橙7.5YR8/4	3/12	

第37表　第３次調査遺物観察表６

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
444	K	3020-01	土師器	甕	SH166	C-n20	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	—	
445	K	3020-03	土師器	把手	SH166	C-n21	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	
446	K	3020-07	須恵器	高杯	SH166	C-o20	—	—	—	—	にぶい褐7.5YR6/3	—	
447	K	3020-05	須恵器	杯A	SH166	C-m・n21	11.0	—	—	—	灰10Y5/1	2/12	
448	K	3020-04	須恵器	杯A蓋	SH166	C-n20	10.2	—	—	—	灰白2.5Y7/1	ほぼ完存	外面自然釉
449	K	3020-06	須恵器	杯A蓋	SH166	C-m・n21	9.9	—	—	—	灰5Y6/1	3/12	
	K	3065-01	金属製品	鏃	SH166	C-m・n21	5.3	0.6	0.4	—		茎部	先端部欠失
450	K	3021-01	須恵器	杯A蓋	SH177	C-n23	10.5	—	—	—	灰白5Y7/1	2/12	
451	K	3031-02	土師器	杯C	SK167	C-n・o18	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4 赤褐5YR4/6	—	内面暗文 赤彩
452	K	3031-01	土師器	杯C	SK167	C-n・o18	14.7	—	—	—	明赤褐5YR5/6	1/12	内面暗文 赤彩
453	K	3028-04	土師器	杯？	SK167	C-n・o18	—	8.7	—	—	浅黄橙10YR8/3	ほぼ完存	内外面摩滅
454	K	3029-02	土師器	高杯	SK167	C-n・o18	—	10.2	—	—	浅黄橙10YR8/3	3/12	
455	K	3030-03	土師器	高杯	SK167	C-n18	—	11.7	—	—	橙7.5YR7/6	8/12	外面赤彩
456	K	3030-04	土師器	高杯	SK167	C-n・o18	—	11.9	—	—	浅黄橙10YR8/4	2/12	外面赤彩
457	K	3030-02	土師器	高杯	SK167	C-n・o18	—	11.7	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	4/12	外面赤彩
458	K	3031-03	土師器	高杯	SK167	C-n・o18	29.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/3 赤褐5YR4/6	4/12	杯部内面暗文 赤彩
459	K	3028-05	土師器	甕	SK167	C-n・o18	12.6	—	—	—	外:橙7.5YR7/6 内:浅黄橙 7.5YR8/6	3/12	内外面摩滅
460	K	3028-03	土師器	甕	SK167	C-n・o18	15.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
461	K	3026-02	土師器	甕	SK167	C-n・o18	17.2	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	内面摩滅
462	K	3026-01	土師器	甕	SK167	C-n・o18	19.1	—	—	—	明黄褐10YR7/6	2/12	摩滅激しく調整不明瞭
463	K	3028-02	土師器	甕	SK167	C-n18	19.6	—	—	—	外:にぶい橙 5YR7/4 内:明黄褐10YR7/6	2/12	内外面摩滅
464	K	3027-02	土師器	甕	SK167	C-n・o18	18.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	3/12	内外面摩滅
465	K	3029-01	土師器	甕	SK167	C-n18	32.0	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/6	2/12	
466	K	3027-03	土師器	甕	SK167	C-n・o18	22.0	—	—	—	黄橙10YR8/6	2/12	外面摩滅
467	K	3028-01	土師器	甕	SK167	C-n・o18	21.2	—	—	—	外:浅黄橙 7.5YR8/4 内:浅黄橙10YR8/4	2/12	内外面摩滅
468	K	3027-01	土師器	甕	SK167	C-n・o18	21.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	8/12	内外面摩滅
469	K	3030-01	土師器	甕	SK167	C-n・o18	19.7	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4	6/12	
470	K	3032-01	土師器	甕	SK167	C-n・o18	20.8	—	—	—	橙7.5YR7/6	8/12	
471	K	3026-05	土製品	鞴羽口	SK167	C-n・o18	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4	—	
472	K	3025-05	須恵器	杯H蓋	SK167	C-n18	10.4	—	—	—	灰白5Y7/1	3/12	

第38表　第３次調査遺物観察表７

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
473	K	3026-03	須恵器	杯H蓋	SK167	C-n18	12.2	8.0	3.9	—	灰白2.5Y7/1	3/12	
474	K	3024-03	須恵器	杯H蓋	SK167	C-n・o18	10.4	—	—	—	灰10Y6/1	2/12	
475	K	3025-06	須恵器	杯H蓋	SK167	C-n18	9.0	—	—	—	灰7.5Y6/1	2/12	
476	K	3026-04	須恵器	杯H蓋	SK167	C-n18	11.9	6.6	3.1	—	灰白5Y7/1	1/12	
477	K	3025-03	須恵器	杯A蓋	SK167	C-n・o18	10.0	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	2/12	
478	K	3024-06	須恵器	杯A蓋	SK167	C-n・o18	—	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	—	
479	K	3024-02	須恵器	杯H	SK167	C-n・o18	9.0	—	—	—	灰N4/0	2/12	内外面に炭化物粒付着
480	K	3025-08	須恵器	杯H	SK167	C-n18	8.4	—	—	—	灰N5/0	2/12	
481	K	3025-02	須恵器	杯A	SK167	C-n・o18	10.8	—	—	—	灰N5/0	2/12	
482	K	3025-04	須恵器	壺	SK167	C-n・o18	—	—	—	—	外:灰10Y4/1 内:灰N5/0	—	体部最大径14.8cm
483	K	3024-07	須恵器	壺	SK167	C-n・o18	8.0	—	—	—	外:灰7.5Y4/1 内:浅黄2.5Y7/3	2/12	
484	K	3024-01	須恵器	壺	SK167	C-n・o18	11.0	—	—	—	灰白N4/0	2/12	
485	K	3024-05	須恵器	壺	SK167	C-n・o18	8.8	—	—	—	灰N6/0	3/12	
486	K	3019-07	土師器	高杯	SK170	C-n21	23.8	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	2/12	内外面赤彩 内面暗文あり
487	K	3019-05	土師器	甕	SK170	C-n21	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	
488	K	3019-06	須恵器	杯A	SK170	C-n21	12.0	—	—	—	灰10Y4/1	2/12	
489	K	3021-05	土製品	管状土錘	SK170	C-n21	5.9	—	1.1	16.0	浅黄橙10YR8/3	ほぼ完存	孔径0.4cm
490	K	3019-03	土師器	甕	SK171	C-o22	13.0	—	—	—	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙 10YR7/4	頸部 3/12	
491	K	3018-05	土師器	甕	SK171	C-o23・24	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2	—	摩滅激しく調整不明瞭
492	K	3019-02	土師器	甕	SK171	C-o23・24	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	—	内面摩滅激しい
493	K	3018-08	須恵器	杯H	SK171	C-o23・24	12.2	—	—	—	灰5Y5/1	—	受部径14.0cm
494	K	3019-04	須恵器	杯H蓋	SK171	C-o22	11.5	—	4.1	—	灰5Y5/1	2/12	
495	K	3019-01	須恵器	杯A	SK171	C-n・o22	—	—	—	—	灰7.5Y6/1	—	
496	K	3018-07	須恵器	杯B蓋	SK174	C-o24	—	—	—	—	灰5Y6/1	—	
497	K	3018-03	須恵器	杯B蓋	SK174	C-o24	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR5/3	—	
498	K	3018-02	土師器	甕	SK174	C-o24	20.0	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	
499	K	3018-01	土師器	甕	SK174	C-o24	24.0	—	—	—	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:浅黄橙10YR8/4	2/12	摩滅激しく調整不明瞭
500	K	3018-04	土師器	把手	SK174	C-o24	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	
501	K	3021-04	土師器	把手	SK178	C-n24	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	
502	K	3021-02	須恵器	杯A蓋	SK180	C-m24	—	—	—	—	灰7.5Y6/1	—	

第39表　第３次調査遺物観察表８

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
503	K	3011-03	土師器	杯C	pit2	C-o24	—	—	—	—	明赤褐2.5YR5/6	—	赤彩 内面暗文あり
504	K	3011-04	土師器	杯G	pit2	C-o24	11.6	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/6	3/12	
505	K	3011-05	土師器	椀C	pit2	C-o24	10.4	—	—	—	外:浅黄橙10YR8/3 内:浅黄橙10YR8/4	2/12	
506	K	3011-01	土師器	甕	pit2	C-o24	—	—	—	—	外:淡黄2.5Y8/3 内:浅黄橙10YR8/3	2/12	外面摩滅激しい
507	K	3012-01	土師器	甕	pit2	C-o24	19.0	—	—	—	外:にぶい橙 7.5YR7/3 内:にぶい黄橙 10YR7/2	2/12	外面摩滅
508	K	3011-07	須恵器	杯B蓋	pit2	C-o24	16.9	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	2/12	外面自然釉
509	K	3011-09	土師器	皿	pit1	C-q24	—	—	—	—	外:橙5YR7/8 内:橙7.5YR7/6	—	摩滅激しく調整不明瞭
510	K	3011-02	土師器	杯G	pit2	C-n23	13.8	—	3.7	—	浅黄橙7.5YR8/4	2/12	柱痕出土
511	K	3012-04	土師器	甕	pit3	C-n24	16.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2/12	
512	K	3012-03	土師器	甕	pit2	C-m20	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	
513	K	3012-05	土師器	甕	pit1	C-p19	17.0	—	—	—	外:橙5YR7/6 内:にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	
514	K	3012-02	土師器	甕	pit1	C-l20	16.0	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	1/12	内外面摩滅
515	K	3011-08	須恵器	杯A蓋	pit4	C-n20	12.8	—	2.2	—	灰N5/0	2/12	
516	K	3012-06	須恵器	杯A蓋	pit2	C-p23	11.4	—	2.0	—	外:灰N5/0 内:灰7.5Y6/1	1/12	
517	K	3011-06	須恵器	杯A蓋	pit3	C-n20	—	—	—	—	外:灰N6/0 内:灰白N7/0	—	
518	K	3012-07	須恵器	高杯	pit6	C-n19	—	—	—	—	外:灰N4/0 内:灰白5Y7/1	—	杯部底径10.0cm
	K	3066-02	金属製品	刀子	pit4	C-p18	3.3	1.2	3.0	—		刃部	
519	K	3021-07	埴輪	円筒埴輪	排土	—	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	
520	K	3022-06	須恵器	杯A	包含層	C-n18	11.0	—	4.2	—	灰白2.5Y7/1	2/12	
521	K	3022-05	須恵器	杯A	包含層	C-n18	10.2	—	3.6	—	灰5Y6/1	—	
522	K	3023-01	須恵器	杯B	包含層	C-n18	18.0	—	—	—	灰7.5Y6/1	1/12	
523	K	3023-02	須恵器	杯B	包含層	C-p19	—	—	—	—	灰白N7/0	—	
524	K	3022-02	須恵器	壺	表土	—	—	—	—	—	黄灰2.5Y6/1	体部 2/12	外面自然釉
525	K	3022-04	須恵器	高杯	南壁	—	—	—	—	—	灰N5/0	—	
526	K	3023-04	瓦	平瓦	包含層	C-p23	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	—	
527	K	3023-03	土師器	杯	包含層	C-n18	11.0	—	2.9	—	明黄褐10YR7/6	3/12	
528	K	3022-01	土師器	甕	表土	—	30.0	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	2/12	
529	K	3021-08	土師器	茶釜	撹乱	C-p23	12.0	—	—	—	にぶい黄橙 10YR5/3	—	
530	K	3023-06	土師器	焙烙	撹乱	C-p23	32.0	—	—	—	明赤褐5YR5/6	2/12	
531	セ	3033-03	須恵器	杯A蓋	SK165	i1・2	11.4	—	—	—	灰N5/0	2/12	

第40表　第３次調査遺物観察表９

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
532	セ	3033-02	須恵器	杯A蓋	SK165	i1・2	10.0	—	2.4	—	灰白5Y7/1	3/12	外面自然釉 キノコ形つまみ
533	セ	3033-07	須恵器	杯H	SK165	i1・2	10.6	—	—	—	灰N5/0	3/12	
534	セ	3033-01	須恵器	杯H	SK165	i1・2	10.3	—	3.5	—	灰N5/0	5/12	
535	セ	3033-05	須恵器	杯A	SK165	j1・2	—	8.0	—	—	灰5Y5/1	5/12	
536	セ	3033-06	須恵器	円面硯	SK165	j1・2	15.2	—	—	—	灰N6/0	2/12	使用痕あり
537	セ	3033-04	須恵器	鉢？	SK165	i1・2	29.2	—	—	—	灰7.5Y5/1	1/12	
538	セ	3034-01	土師器	甕	SK165	h・i1・2	16.4	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2/12	内外面摩滅
539	セ	3034-02	土師器	甕	SK165	i1・2	16.0	—	—	—	灰白10YR8/2	1/12	内外面摩滅
540	セ	3034-05	須恵器	杯H蓋	SK164	g1・2	12.6	—	—	—	黄灰2.5Y5/1	2/12	
541	セ	3034-04	土師器	甕	SK164	g1・2	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	1/12	
542	セ	3034-03	土師器	甕	SK164	g1・2	19.8	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	2/12	
543	セ	3034-07	須恵器	杯H	SK163	f1・2	—	—	—	—	灰5Y5/1	1/12	
544	セ	3034-06	土師器	甕	SK163	f1・2	19.8	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	1/12	
545	セ	3035-04	土師器	壺	pit3 SB169	l2	11.6	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2/12	
546	セ	3035-03	土師器	甕	pit2 SB169	l2	14.6	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	2/12	外面煤少量付着 内面黒変
547	セ	3035-02	須恵器	杯H	pit2	f1	—	—	—	—	灰白5Y8/1	1/12	
548	セ	3035-05	須恵器	杯A	包含層	f2	12.6	—	—	—	灰7.5Y5/1	1/12	
549	セ	3035-01	土師器	杯G	pit2	f1	13.0	—	3.5	—	橙7.5YR7/6	2/12	底部木葉痕
550	F	3002-10	土師器	杯G	SH85	D-j2	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	—	
551	F	3003-01	土師器	甕	SH85	D-j2	29.3	—	—	—	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰黄褐10YR5/2	2/12	取り上げ№.2
552	F	3003-02	土師器	甕	SH85	D-j2	16.5	—	16.1	—	褐灰7.5YR6/1	ほぼ完存	竈内取り上げ№.1
553	F	3004-01	土師器	甕	SH85	D-j2	19.2	—	15.1	—	灰白10YR7/1	5/12	竈内取り上げ№.5
554	F	3002-01	須恵器	杯H蓋	SH85	D-j2	—	6.4	—	—	灰5Y6/1	10/12	
555	F	3002-05	須恵器	杯A	SH85 pit1	D-j2	—	—	—	—	灰N5/0	—	
556	F	3003-04	須恵器	杯A蓋	SH85	—	12.3	—	3.0	—	暗灰黄2.5Y5/2	9/12	取り上げ№.1
557	F	3003-03	須恵器	杯B蓋	SH85	D-j1	11.5	—	3.0	—	外:灰10Y6/1 内:灰5Y4/1	完存	取り上げ№.4
558	F	3002-08	須恵器	杯B蓋	SH85	D-j2	13.2	—	2.9	—	釉:オリーブ黄 5Y6/3 素:灰白2.5Y7/1	2/12	つまみ径3.0cm
559	F	3002-02	須恵器	杯H	SK101	D-j2	—	—	—	—	外:灰N5/0 内:灰白2.5Y7/1	—	受部径15.0cm
560	F	3002-03	須恵器	杯H	pit2	D-l2	11.2	—	—	—	灰N5/0	2/12	
561	F	3002-04	須恵器	杯	pit2	D-k1	—	—	—	—	灰N6/0	—	
562	F	3002-06	須恵器	高杯？	pit4	D-k1	—	—	—	—	暗灰N3/0	—	

第41表　第３次調査遺物観察表10

No.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
563	F	3002-07	土師器	甕	pit3	D-j1	20.6	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2/12	
564	F	3002-09	須恵器	高杯	撹乱1	D-j2	—	—	—	—	外:灰黄2.5Y6/2 内:黄灰2.5Y5/1	—	柱状部2.1cm 外面自然釉
565	シ	3001-08	土師器	甕	SZ87	a・b8	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	
566	シ	3001-06	土師器	把手	SZ87	b7	—	—	—	—	橙7.5YR6/6 明赤褐2.5YR5/6	—	
567	シ	3001-07	須恵器	杯	SZ87	b7	—	—	—	—	浅黄2.5Y7/3	—	
568	シ	3001-09	須恵器	蓋	SZ87	a・b8	—	—	—	—	灰5Y5/1	—	
569	シ	3001-05	陶器	小皿	SZ87	a・b8	6.2	—	2.3	—	釉:浅黄2.5Y8/2 素:灰白2.5Y8/2	完存	
570	シ	3001-01	陶器	鉢	SZ87	a・b7	—	—	—	—	外:灰黄2.5Y6/2 内:灰白10YR8/2	—	内面に焼きぶくれ
571	シ	3001-04	陶器	鉢	SZ87	a・b8	—	23.7	—	—	浅黄2.5Y7/3	1/12	
572	シ	3001-02	須恵器	杯蓋	pit1	b3	—	—	—	—	黄灰2.5Y6/1	—	
573	シ	3001-10	須恵器	杯	pit１	a3	—	—	—	—	灰10Y6/1	—	
574	L	3007-02	須恵器	杯H蓋	pit2 SB126	C-h25	15.0	—	—	—	灰5Y6/1	2/12	柱痕出土
575	L	3007-09	瓦	平瓦	pit1 SB126	C-j25	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	柱痕出土
576	L	3007-03	須恵器	杯B蓋	SH131	H-k2	—	—	—	—	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:黄灰2.5Y6/1	—	
577	L	3007-10	土製品	管状土錘	SH131	H-k2	6.4	1.0	—	6.84	浅黄橙10YR8/4	ほぼ完存	孔径0.3cm
578	L	3010-05	土師器	杯G	SK114	B-g21	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	摩滅のため調整不明瞭
579	L	3009-02	土師器	高杯	SK114	C-b21	—	10.3	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	2/12	
580	L	3008-01	土師器	甕	SK114	C-b20	27.1	—	—	—	灰白10YR8/2	2/12	摩滅激しく調整不明瞭 外面煤付着
581	L	3010-07	土師器	甕	SK114	C-b21	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	内面調整不明瞭
582	L	3010-06	土師器	甕	SK114	C-b20	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	
583	L	3009-03	須恵器	高杯	SK114	C-a20	—	—	—	—	暗灰黄2.5Y5/2	—	基部径5.3cm
584	L	3008-02	須恵器	杯H	SK114	C-b21	—	—	—	—	黄灰2.5Y6/1	—	
585	L	3010-04	土師器	甕	SK115	—	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	—	
586	L	3008-05	須恵器	杯A蓋	SK125	C-g23	11.4	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	1/12	
587	L	3010-03	土師器	杯G	SK128	H-e1	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	
588	L	3009-04	土師器	甕	SK128	H-e1	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	—	基部径3.6cm
589	L	3010-02	須恵器		SK128	H-e1	—	—	—	—	黄灰2.5Y4/1	—	
590	H	3008-06	須恵器	杯H蓋	SK128	H-e1	13.5	—	3.3	—	黄灰2.5Y5/1	1/12	工具あたり痕
591	L	3006-01	土師器	高杯	SK130	C-j23	21.2	—	—	—	橙5YR6/6	3/12	
592	L	3005-05	土師器	皿	SK130	C-j23	—	—	—	—	橙5YR6/6	—	摩滅激しく調整不明瞭

第42表　第３次調査遺物観察表11

№.	調査区	実測番号	種別	器種	出土遺構	出土グリッド	口径／長径(cm)	底部径／短径(cm)	器高／厚さ(cm)	重量(g)	色調	残存度	備考
593	L	3005-02	土師器	甕	SK130	C-j23	24.4	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	2/12	摩滅激しく調整不明瞭
594	L	3005-01	土師器	甕	SK130	C-j23	26.0	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	3/12	摩滅激しく調整不明瞭
595	L	3008-04	土師器	皿	SK134	C-j25	14.0	—	—	—	橙5YR6/6	1/12	
596	L	3009-01	土師器	甕	SK134	C-j25	17.4	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	2/12	
597	L	3008-03	須恵器	杯H	SK134	C-j25	13.0	—	—	—	黄灰2.5Y5/1	1/12	受部径14.6cm
598	L	3006-09	土師器	杯	SD116	C-e22	—	—	—	—	赤褐5YR4/6	—	内面暗文赤彩
599	L	3005-03	土師器	甕	SD116	C-l22	11.4	—	—	—	外:にぶい橙5YR6/4 内:浅黄橙10YR8/3	4/12	
600	L	3006-05	須恵器	杯	SD116	C-l21	13.0	—	—	—	灰10Y4/1	1/12	
601	L	3007-04	土師器	杯G	pit1	B-w24	13.0	—	2.5	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	外面黒変
602	L	3007-06	土師器	甕	pit1	C-i22	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	—	
603	L	3007-05	土師器	杯B	pit4	C-j24	—	13.0	—	—	橙5YR6/6	2/12	
604	L	3007-01	須恵器	杯H蓋	pit1	C-e24	13.7	—	3.8	—	灰7.5Y6/1	2/12	
	L	3066-01	金属製品	鋏	pit1	C-j24	8.2	0.9	0.7	—		—	
605	L	3006-08	縄文土器	深鉢	包含層	C-k25	—	—	—	—	赤褐5YR4/6	—	
606	L	3006-07	土師器	椀C	包含層	C-g21	—	—	—	—	黒10YR2/1	—	内外面炭化？
607	L	3005-04	土師器	甕	包含層	C-k25	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	—	
608	L	3006-04	須恵器	杯H	包含層	C-g23	14.0	—	—	—	灰N5/0	1/12	
609	L	3006-02	須恵器	杯H	包含層	H-h1	12.7	—	—	—	灰7.5Y6/1	4/12	
610	L	3006-03	須恵器	杯H	包含層	B-y20	15.5	—	—	—	黄灰2.5Y6/1	1/12	
611	L	3006-06	須恵器	高杯	包含層	C-c27	—	—	—	—	灰5Y6/1	—	
612	L	3005-06	土師器	皿	表土	—	17.2	—	—	—	橙5YR6/8	4/12	
613	L	3005-07	土師器	甕	表土	—	—	—	—	—	にぶい橙5YR6/4	—	

※№.は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。
※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。1001～は第１次調査、2001～は第２次調査、3001～は第３次調査の出土品である。
※胎土・釉薬などの色調は『新版　標準土色帖』に拠る。釉薬の色調などは合致する色名が存在しない場合もあるが、その場合は最も近似すると思われる色名を記している。
※色調欄の「胎」は胎土、「釉」は釉薬の色調を表す。また、「表」は表面、「内」は内面、「外」は外面の色調を表す。
※土器・陶磁器の残存度については、口縁部ないし底部を12分割し、そのうちの残存度を記している。「—」は小片であるなどのため残存度が示せないものである。

第43表　第３次調査遺物観察表12

三重県埋蔵文化財調査報告308

西野田遺跡発掘調査報告
（第１・２・３次調査）

2009年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　株式会社アイブレーン